

新約聖書
ギリシヤ語文典

黒崎幸吉著

底本は、黒崎幸吉記念資料室のものを登戸学寮の寮長先生が快くお貸し下さいました。
著作権については、著者黒崎幸吉のご親族様代表がその使用を承諾して下さいました。
心からの感謝を申し上げます。

底本：第四版（1958年3月30日、永遠の生命社発行）

- ・底本付録の正誤表がPDFに反映されてあります。
- ・正誤表以外にも打ち換えされた箇所があります。
 - ・現代仮名遣いによる表記変更もあります。
- ・構成上、ページ数の変更があります（pp.191-222）。

企画・作成：<https://akirathetentmaker.jimdo.com>

一般公開日：2023年11月29日

* 転写・転載許諾 *

第四版の序

本書は著者主幹の月刊基督教雑誌「永遠の生命」の附録として昭和六年三月より七年十二月に至るまで毎月発行した新約聖書ギリシヤ語講座を合本として昭和七年に初版を発行したものであった。

この講座の目的は聖書を研究しようとする人にその原語に親しませようとするに在り、必ずしもギリシヤ語に熟達させることを目的とはしなかつた。それ故に極めて初歩の程度を目標としたのである。

外国語でもこの種の初歩の文典は多種あり、中には非常に優秀なものもあるけれども、日本の基督者の中には英語又はその他の外国語とギリシヤ語との双方に脳力を使用することを好まない人もあることと思ひ日本語でこれを試みることも無益でないだろうと考えたのであった。

この講座によって研究した人々の中に相当の程度に進歩した人はかなりの数に上ることと信じている。その故は著者に送られた質問その他の通信からこれを知ることが出来たからである。

著者はギリシヤ語の教授には無経験であり、従つて多くの不備の点があつた。それらは第二、第三版で補正した。

今回第四版を発行するに当り、全体に若干の改訂を施し殊に前置詞と文章論の部分にかなりの増補をした。研究者の役に立ち得る事と思ふ。

1958（昭和33）年4月

著 者

目 次

第一部 発音学	5-1
第二部 文法	12-164
第一課 名詞及び冠詞の変化(その一)	12-16
定冠詞の変化及び名詞の第二変化(付, εἰμί の変化)	
第二課 動詞の変化(その一)	17-19
動詞の変化概観及び Present Indicative Active	
第三課 名詞の変化(その二)	19-23
第一変化の女性, 男性名詞	
第四課 動詞の変化(その二)	24-27
Imperfect Indicative Active	
Primary and Secondary Tenses	
及び Accent	
第五課 形容詞の変化(その一)	27-31
母音変化	
第六課 母音の収縮	31-34
第七課 動詞の変化(その三)	35-37
Present Indicative Passive (and Middle)	
第八課 子音の分類及びその音便	37-38
第九課 名詞の変化(その三)	39-42
第三変化(上)(語根が Mute 及び Liquid に終るもの)	
第十課 動詞の変化(その四)	42-46
Imperfect Indicative Passive and Middle	
第十一課 代名詞(その一)	46-50
人称代名詞及び指示代名詞の一部	

第十二課	動詞の変化（その五）	51-55
	Deponent Verbs（付，関係代名詞 ὅς）	
第十三課	名詞の変化（その四）	55-58
	第三変化（中）（語根が Sibilant 及び母音 ι, υ に終るもの）	
第十四課	形容詞の変化（その二）	59-61
	子音変化，混合変化及び不規則変化	
第十五課	動詞の変化（その六）	61-65
	Future Indicative Active and Middle （付，εἶμι 及び数詞 εἶς の変化）	
第十六課	名詞の変化（その五）	65-67
	第三変化（下）（語根が重母音に終るもの及び不規則変化）	
第十七課	動詞の変化（その七）	67-70
	First Aorist Indicative Active and Middle	
第十八課	動詞の変化（その八）	71-74
	Second Aorist Indicative Active and Middle	
第十九課	動詞の変化（その九）	74-77
	First and Second Aorist Indicative Passive 及び Future Passive	
第二十課	動詞の変化（その十）	78-83
	Participle（分詞）の変化及び用法	
第二十一課	形容詞の比較	83-87
第二十二課	数詞	88-92
第二十三課	動詞の変化（その十一）	92-98
	The Subjunctive Mood（接続法），その用法	

第二十四課	動詞の変化（その十二）	98-101
	The Imperative Mood（命令法）	
第二十五課	動詞の変化（その十三）	102-106
	The Infinitive Mood（不定法），その用法	
第二十六課	代名詞（その二）	107-111
	反射代名詞，所有代名詞，指示代名詞の一部， 不定関係代名詞，疑問代名詞及び不定代名詞	
第二十七課	動詞の変化（その十四）	112-117
	Perfect and Pluperfect Tenses	
第二十八課	動詞の変化（その十五）	117-121
	Future and Aorist of Liquid Verbs	
第二十九課	動詞の変化（その十六）	121-126
	Optative Mood（祈願法）及び Contracted Verbs （収縮動詞）	
第三十課	動詞の変化（その十七）	126-130
	μ 動詞の変化（第一種） Present and Imperfect Active	
第三十一課	動詞の変化（その十八）	130-136
	μ 動詞の変化（第一種つづき） Present Middle and Passive, Aorist 及びその他の Tenses	
第三十二課	動詞の変化（その十九）	136-139
	μ 動詞の変化（第二種）	
第三十三課	副詞	139-143
第三十四課	前置詞（その一）	144-147
	格による分類及び一つの格のみを支配する前置詞	
第三十五課	前置詞（その二）	147-155
	前課のつづき及び二つの格を支配する前置詞	

第三十六課 前置詞（その三）	156-160
三つの格を支配する前置詞	
第三十七課 接続詞及び間投詞	160-164
第三部 文章論	165-190
第一. 一致法(Concords)	165-168
第二. 冠詞	169-172
第三. 名詞の格	172-188
第四. 条件文	189-190
付 録	191-222
動詞の種類別変化表	191-195
同上の索引	196
ω 動詞変化表	197-199
μ 動詞変化表	200-201
主要単語集	202-216
索引	217-222

研究者への予備的注意

1. 新約聖書の時代と言語

新約聖書の各書が書かれた時代は区々であるが、その中最も早いものが紀元 50 年頃、最も遅いもので 90~100 年頃であろう（学者によって区々一定しない）。当時の地中海沿岸及び欧州全体はローマ政府の支配の下にあったけれども、紀元前 4, 5 世紀間のギリシャの文明とその Alexander 大帝以後の国家の勢力の伸張の結果、ギリシャ語は当時の世界に広く用いられる様になった。当時のギリシャ語は古典ギリシャ語、所謂 Attic Greek と異なり、通俗ギリシャ語、即ち Koinê Greek であった。そして新約聖書はこの Koinê Greek を以て録されて居るのである。

イエスの当時パレスチナ地方もローマ政府の支配下にあり、ギリシャ語が副語として広く行われて居った。イエスは主としてアラム語で語られた様であるが、ギリシャ語も解されたと思われ、マルコの如き青年は一層ギリシャ語を能くしたらしく、パウロはタルソ生れでギリシャ語及びギリシャの文化に通達し、ルカはギリシャ人であり、ヨハネも永く小アジア地方に住んで居った等の事から、新約聖書は全部ギリシャ語で書かれる事となった。之は当時の全世界に福音を伝える為に最も便利であった。

又当時ユダヤ人は所謂 Diaspora（四散の民）として世界各地に散乱して居り、次第にその母国語を失い、殊に古代ヘブライ語の旧約聖書は彼らに難解となったので、B. C. 第 2 世紀の中頃エジプトのアレキサンドリヤで、70 人のユダヤ人学者が集って旧約聖書のギリシャ訳（略号 LXX）が作られたのであった。之が所謂七十人訳で、新約聖書中の旧約の引用は之によるものが多い程このギリシャ語訳が当時一般に行われる様になった。それ故新約聖書ギリシャ語を学ぶ事は同時に七十人訳の研究にも役立ち得る訳である。

2. 新約聖書ギリシャ語研究の必要

基督者にとって最も必要な事は、聖書の深い研究である事は言うまでもない。勿論今日の聖書研究は歴史的、考古学的、神学的の方面にも多くの力が注がれて居るのであるが、これ等は側面から聖書の理解を助けるだけであって、結局聖書を理解するには聖書そのものに由らなければならない。

然るに普通聖書は各国語に翻訳され、その翻訳に由って読まれて居るのであるが、どんなに優秀な翻訳でも原文の意味を完全に把握する事が出来ないのであるから、一語一語を神の言と信じて、之に従おうとして居る基督者にとって、訳語のみに頼って聖書を研究する事は多くの欠点や、誤解を生ずる事を免れない。即ち

(a) 英語でもその他の国語でも、その辞典を開いて見れば明かである通り、一つの語で二つ以上の意味をもって居るのが多いのであるが、ある国語の一つの語が他の国語の一語に訳される場合、その二つの語のもつ各種の意味が各々皆一致すると云う事は極めて少ない。従って訳語で聖書を読む時、原語のもたない意味が訳語の中にある場合、原語を誤解する事が有り得るので、これは聖書を翻訳によって解釈する事の危険である。

(b) 原文の語勢、含蓄、語調、妙味等は訳文には移し難い。殊に語系の全く異なって居る日本文には到底移し得ない場合が多い。

(c) 「聖書は（新約聖書も同様）凡て神の靈感を受けて書かれたもの」であり（第二テモテ 3:16）、その靈感に最も適当な言葉を選んで表顯されたわけであるから、その正確な内容は訳語からだけでは知る事が出来ない。原語による事が絶対に必要である。

(d) 英・独・仏語で書かれた詳しい註解書は、皆原語及び原文に由って説明して居るので、新約聖書ギリシャ語の知識なしには詳しい註解書を理解する事すら出来ない。

3. 学習の態度

新約聖書ギリシャ語を学習する事は実は中々困難な仕事であって、余程の熱心と勤勉とを必要とするのである。それは英文法などに比べると語尾との変化が非常に多い事が主な原因である。

それ故名詞、形容詞、動詞の変化は十分に暗記する事が必要であって、この労を厭うならばギリシャ語の学習は困難である。それ故学習を非常に効果的ならしめる為には、毎日必ず少しずつでもこの為に関時間を割く事が必要である。

又原語によって聖句を暗唱する事も極めて効果的である。暗唱は語勢や文章の調子等に習熟させるものであって、結局原文の意味を最も的確に会得するのに役立つのであるから本書に於いても、時々適当な聖句を揚げて暗唱に便宜を与えるつもりである。

4. 新約原典のテキスト

19世紀以来、旧新約のギリシャ語原典が数々発見され研究されて居るのであるが、その中に完全に全聖書を含んで居るものは少なく、多くは内容が一部欠けて居ったり、又は単に数頁の断片に過ぎないものがあるのであって、そのまま聖書として用い得るものは少ない。それ故に学者がこれらの材料を詳細に研究して、最も原形に近いと思われる迄に編集したギリシャ語新約聖書が数種発行されて居る。Tischendorf, Weymouth, Wescott-Hort, 及び Nestle 等である。多分今日最も多く用いられて居るのが Nestle であろう。この Nestle はその後も絶えず改訂されて居るので、恐らく最新の学者の意見を最も多く代表して居るであろう。異本の差異を符号を以て示して居るので見易く便利であるから、本書もこのテキストに由る事とする。

5. 参考文典書

英・独語のギリシャ語文典を参考の為に下に掲げる。

A 初級

1. Huddilston; Essentials of New Testament Greek.
2. A. T. Robertson and W. H. Davis; A New Short Grammar of the Greek Testament.
3. H. P. Nunn; The Elements of New Testament Greek.
4. J. H. Moulton; Introduction to the Study of N. T. Greek.
5. White; First Greek Book.
6. Samuel Green; A Brief Introduction to the N. T. Greek.

B 中級

7. A. Kaegi; Griechische Schulgrammatik.
8. Samuel Green; Handbook to the Grammar of the Greek Testament.

C 上級

9. Blass und Debrunner; Neutestamentliche Grammatik.
10. J. H. Moulton; Grammar of N. T. Greek. Vols I. II.
11. A. T. Robertson; A Grammar of New Testament Greek.
12. G. B. Winer; Grammar of New Testament Greek.

等であるがこの中（１）は極めて簡単で要領を得て居るので、最も広く用いられて居り推薦したい。但しやや詳細に入ろうとする人には（８）の Green の Handbook の方を薦めたいと思う。（５）の White は古典ギリシャ語文典であるが、併せて研究しようとする人に参考になるであろう。（９）～（１１）は極めて詳細な学術書。

（１２）は全新約聖書の必要な各節につき文語的解説を与えて居る点で非常に役立つものである。原文は独文であるが英訳がある。

又 Harper and Weidner 著 An Introductory N. T. Greek Method はヨハネ伝を基礎として文典を教える興味ある教科書である。

第一部 発音学

§ 1. アルファベット Alphabet

大文字	小文字	発音の仕方			音質
A	α	Alpha	Ἄλφα	アるファ	a
B	β, β	Bēta	Βῆτα	ベータ	b
Γ	γ	Gamma	Γάμμα	ガムマ	g
Δ	δ	Delta	Δέλτα	デルタ	d
E	ε	Epsīlon	Ἐψιλόν	エプシーロン	ě (短)
Z	ζ, ζ	Zēta	Ζῆτα	ゼータ	z
H	η	Eta	Ἡτα	エータ	ē (長)
Θ	θ, θ	Thēta	Θῆτα	セータ	th (歯)
I	ι	Iota	Ἰῶτα	イオータ	i
K	κ	Kappa	Κάππα	カツパ	k
Λ	λ	Lambda	Λάμβδα	ラムダ	l
M	μ	My	Μῦ	ムヰ	m
N	ν	Ny	Νῦ	ニヰ	n
Ξ	ξ	Xi	Ξῖ	クシー	ks
O	ο	Omīkron	Ὅ-μικρόν	オミクロン	o (短)
Π	π	Pi	Πῖ	ピー	p
P	ρ	Rho	Ῥῶ	ロー	r
Σ	σ, σ	Sigma	Σίγμα	シグマー	s
T	τ	Tau	Ταῦ	タウ	t
Υ	υ	Υpsīlon	ὕ-ψιλόν	ヰプシーロン	u
Φ	φ	Phi	Φῖ	フィー	ph
X	χ	Chi	Χῖ	キー	ch (喉音)
Ψ	ψ	Psi	Ψῖ	プシー	ps
Ω	ω	Omega	Ὺ-μέγα	オーメガ	ō (長)

英語の abc 等二十六文字をアルファベットと云うのは、ギリシャ文字の初の二字アルファとベータとから取ったのである。ギリシャ語は上表の二十四字で、これは読み方、書き方及び順序を全部記憶する事が必要である。

注意 1. 上表中平仮名は、 $\upsilon, \theta, \lambda, \chi$ 等日本語の中に無く従って日本の仮名で正確に表わせない発音を示す為になにに用いる事とした。

注意 2. 英語国民は β ベータをピータ、 ζ ゼータをジータ、 η エーをイー、 θ セータをシータ、 ι イオータをアイオタ、 $\xi, \pi, \phi, \chi, \psi$ 等のイーをアイと発音するが、これは英語の訛りが混合したのである。但し現代のギリシャ語を学ぶのでないのでこの差異は重大ではない。又 θ セータは寧ろてータとする方が理論的であるが便宜上セータとした。

注意 3. σ, ς の二種あり、 σ は文字の中間 ς はその末尾に用いられる。

注意 4. β, θ, ζ はまた δ, θ, ζ とも書く。どちらを使ってもよろしい。

注意 5. μ, ν の ν の音はウを発する口付きでイを発音すると、ほぼ正しい発音となる。

§ 2. 母音 Vowels の発音

(a) **単母音** は $\alpha, \varepsilon, \eta, \iota, o, \upsilon, \omega$ の七字で、その中 η, ω は本質上常に長音でエー、オーの音を有し、

ε, o は本質上常に短音でエ、オの音を有し

α, ι, υ は時には長音、時には短音となる。即ちア、アー; イ、イー; ウ、ウー。 υ はウを発音する口付きでイを発音する時に出る音。

(b) **重母音 Diphthong** はその両母音を各々その本来の音に従って発音し、しかもこの二音が一の母音であるかの如くに発音せらるべきもの (Kaegi, Schulgrammatik 11. Aufl. S2)。それ故に次の如くに発音せらるべきである (但し現代ギリシャ語の発音はこれと異なる)。

() 内の英、独の発音は一種の訛りであるから、これに依る必要はない。

$\alpha\iota$	アイ (英エー)	$\alpha\upsilon$	アウ (英オー、独アウ)
$\varepsilon\iota$	エイ (英、独アイ)	$\varepsilon\upsilon$	エウ (英ユー、独オイ)
$o\iota$	オイ	$o\upsilon$	ウー (一般にウー)

υι ウウイ (英ウアイ) ηυ エウ (英ユー、独オイ)

注意・ει はエイであるが、エは日本語のエよりも広くアに近いから、結局英独の如くアイと発音する人が多い。ευ, ηυ は殆どゆーに近く、ου はウーに近い。

以上の外に α, η, ω 即ちイオタ ι を α, η, ω の下に附加したものがある。これを Iota Subscript (添加イオタ) といい、発音はアー、エー、オー等長母音と同一であるが、精確にアーイ、エーイ、オーイと発音及び記音する学者もある。

§ 3. 子音 Consonants の発音

(a) B の音質は英語の b に等しく、同様に δ=d, ζ=z, κ=k, λ=l, μ=m, ν=n, ξ=x, π=p, ρ=r, σ=s, τ=t であって、極めて簡単にこれを学ぶ事が出来る。上掲 Alphabet の表を参照すべし。

(b) γ=g であるが、唯 γ が γ, κ, χ, ξ の中のいずれかの前にある時は n 音となる。例えば ἄγγελος アンゲロス¹ ἄγκυρα アンキゆうラ²の如し。

(c) θ は歯間に舌端を挟んでタ行音を発音する時の音、即ち英語の th の音である。本講座では**さしすせそ**等でこれを表わす。

(d) λ は舌を上顎につけて軽くらりるれろを発音する。

(e) φ は p と h の中間でプでもなくフでもない、英語の ph の音と考えて大差がない。

(f) χ はドイツ語の ich, Buch の ch の音で、カとハの間とも云うべき発音で喉の奥で発音する。それ故に Χριστός³を“クリスト”と云うも、“キリスト”と云うも、又ギリシヤカトリック教会の如く“ハリストス”と読むも共に正確ではない。本書ではこれに対し平仮名を当て、か行音で“くリストス”等と書く事とする。

(g) ψ は ps でプとスを共に発音する。

¹ angel 天使

² anchor 錨

³ キリスト

§ 4. 音の硬軟 Breathings of the Vowels

一語の初頭が短母音、又は重母音なる場合には必ずその上に (´) か、又は (´) の符号を付ける。(注1) (´) はこれを軟音 Soft Breathing (Spiritus Lenis)と云い、母音の本来の発音のままの発音である事を表示し、(´) は硬音 Rough Breathing (Spiritus Asper)と云い、その前に h 音を加えて発音する。例えば ὄρος⁴はオロス ὄros であるが、ὄράω⁵はホラオーと発音す。υ は語の始めにおいてはいつも硬音である。ὕμεις⁶ フゆーメイス humeis、ἠιοθεσία⁷ フイオセシア hwiotesia の如し。

語首にある ρ はいつでも硬音である。例えば ῥήτωρ (雄弁家) はレートール=rhetōr と強く発音する。語の途中で ρ が二つ重なる時は第一の ρ は軟音、第二の ρ は硬音となる。ἄρρητος (言語に絶せる) アルレートス=arrhētos。但しこの場合前の ρ に´、後の ρ に´を用いる事もある。

注1. これらの符号の位置は母音の上に付ける。重母音 Diphthong の時は第二の母音の上に、大文字の時はその前に置く。

§ 5. 音節 Syllable の性質

音節 Syllable の長短は次の如し。

1. 本来の長音節 (長母音又は重母音を持つ音節)。
2. 位地による長音節 (母音が二つの子音、又は複子音に先立つとき) ἄρ-χή⁸ アール・けー、ὄ-ψομαι⁹ オープソマイ。
3. 性質上の短母音が mute (断音) π, β, φ, κ, γ, χ, τ, δ, θ 及び Liquid (続音) λ, ρ, μ, ν (後に説明すべし) の前にある時は長短何れにても可なり。

⁴ 山

⁵ 見る

⁶ 汝ら

⁷ 養子

⁸ 始め

⁹ 見る

μη	καὶ	ἡμεῖς	τυφλοὶ	ἐσμεν;	εἶπεν	αὐτοῖς
メー	カイ	ヘーメイス	トウフロイ	エスマン	エイペン	アウトイス
mē	kai	hēmeis	tūphloi	esmen?	eipen	autois

ὁ	Ἰησοῦς	εἰ	τυφλοὶ	ἦτε,	οὐκ	ἄν	εἴχετε
ホ	イエスウス	エイ	トウフロイ	エーテ	ウーク	アン	エイケテ
ho	Iēsous;	ei	tūphloi	ēte,	ouk	an	eichete

ἁμαρτιάν	νῦν	δὲ	λέγετε	ὅτι	βλέπομεν	ἢ
ハマルティアン	ヌン	デ	レゲテ	ホティ	ブレポメン	ヘー
hamārtian;	nun	de	legete	hoti	blepomen;	hē

ἁμαρτία	ὑμῶν	μένει.
ハマルティア	ヒムウォン	メネイ.
hamārtia	humōn	menei.

- 問1. 以上の中硬音 Rough Breathing 軟音 Soft Breathing を数え上げよ。
 問2. 以上の中 Grave Accent を数え上げ、その理由を説明せよ。
 問3. Φαρισαῖος は何故に Φαρισαίων となりしや。

§ 7. 従尾語 (Enclitics) と先駆語 (Proclitics)

上掲練習第一の中で不可解な点が二つある筈である。その一はアクセントのない文字があまたあること、その二は τυφλοὶ ἐσμεν の τυφλοὶ のアクセントが文章の途中にあるにも関わらず (§6c) に反して Acute Accent である事である。それは Enclitics と Proclitics の関係による。

(a) **Enclitics 従尾語** とは一音節又は二音節の語で、それに先立つ語に密着して一語の如くに発音せられ、従って自己のアクセントを失い、これを前の語に投げ掛けるものを言う。その主なるものは

μου̐/μοί/με (私の、に、を), σου̐/σοί/σέ (なんじの、に、を), τῖς (ある人), τί (ある物), πού (どこかで), ποτέ (いつか), πώς (何とかして),

ゲ テ (強意の語), 及び^{エイミ}εἰμί (ある), ^{フェーミ}φημί (云う) 等の動詞の直説法現在 (Indicative Present) である。

例 ^{オ ノ マ ス ウ}ὄνομά σου (汝の名), ^{テフアライ エスマン}τυφλοὶ ἔσμεν (我ら盲人なりや)

アクセントの変化は次の規則に従う。

従尾語 Enclitics に先立つ語が

(1) Oxyton 即ち最後の節に (´) がある時は (´) が (˘) に変化せず〔§6(c)に反す〕。^{ソフォス テイス}σοφός τις (ある賢人)

(2) Paroxyton 即ち (´) が最後より二番目の音節にあるときは、一音節の Enclitics はアクセントを失い二音節のものはそれを留保す。

^{ろゴス テイス ろゴイ ティネス}λόγος τις, λόγοι τινές (ある言葉)

(3) Proparoxyton 即ち (´) が最後より三番目の音節にあるときは、これに (´) を追加す。^{アンサ ローボス テイス}ἄνθρωπός τις (ある人)

(4) Perispomenon 即ち (˘) が最後の音節にあるときは不変。

^{アデル フォーン スウ}ἀδελφῶν σου (汝の兄弟たちの)

(5) Properispomenon 即ち (˘) が最後より二番目の音節にあるときは (´) を追加す。^{ドーラ エステイン}δῶρά ἐστιν (それは賜物である)

但し語気を強めるため及び Elision (消去) の後は Enclitic もアクセントを保留する。Elision とは ἀπό, διά, ἐπί, παρά, κατά, μετά, ἀντί, δέ, ἀλλά 等の文字の後に母音を以て始まる文字がある時は、これらの語は最後の母音を失い、これに代えて (´) を取る。

(b) Proclitics **先駆語**は、それ自身にアクセントなく、次に来る語と共に一語の如くに用いられるもの中、冠詞^ホὁ, ^{ヘー}ἡ, ^{ホイ}οἱ, ^{ハイ}αἱ, 前置詞^{エイス}εἰς (into), ^{エン}ἐν (in), ^{エク エクス}ἐκ/ἐξ (out of, from), 及び^{エイ}εἰ (if), ^{ホース}ὡς (as) 等の接続詞等これに属する。

第二部 文法

緒言——前回で発音学は終わった。なお、これ以外の音便による変化、いわゆる Euphony においては後にそれぞれ必要に従って述べる事にする。

ギリシャ文は英独仏語と同じく、名詞・代名詞・冠詞・形容詞・副詞・動詞・前置詞・接続詞・間投詞より成るのであり、これらを順次に学ばなければならないが、ギリシャ語の中で最も困難なのは動詞の変化であるから、これさえ通曉するならば、ギリシャ語の半分以上を終了したものと云う事が出来よう。それ故に動詞をば他の部分に介在せしめて十分に学習し得る様にしなければならない。まず定冠詞の変化、名詞の第二変化、動詞 εἶμι (アル、to be) の変化及び動詞の変化の一部につき述べる事とする。

第一課 名詞及び冠詞の変化 (その一)

§ 8. 名詞の性、数、格

名詞は**性** Gender **数** Number **格** Case に従い各々特有の語尾を持つ。即ち英語の如く簡単ではなく、かなり複雑な変化であるから、正確にこれを暗記しなければならない。

(a) **性**には**男性** Masculine (M と略記す以下同じ)、**女性** Feminine (F)、**中性** Neuter (N) とがあること英独語と同一である。

(b) **数**には**単数** Singular (S) と**複数** Plural (P) とがあり、その他**双数** Dual というものもあるが、これは古典ギリシャ語には用いられたが新約聖書では用いて居ない。

(c) **格**は五つあり。**主格**又は第一格 Nominative (N)、**属格**又は第二格 Genitive (G)、**与格**又は第三格 Dative (D)、**目的格**又は第四格 Accusative (A)、**呼格**又は第五格 Vocative (V)、である。格によって語尾が変化する。

§ 9. 冠詞の変化

名詞の変化を学ぶ前に冠詞の変化を学んでおく事は便利かつ必要である。その故は冠詞の変化は名詞、形容詞、代名詞などの語尾とほぼ同形だからである。

定冠詞 Definite Article (the)はその属する名詞と性、数、格に於て一致する。その変化は次の如くであって、これは充分によく暗記しなければならない。ギリシャ語に不定冠詞はない。

	単 数			複 数		
	男	女	中	男	女	中
N (ガ、ハ)	ὁ	ἡ	τό	οἱ	αἱ	τά
G (ノ)	τοῦ	τῆς	τοῦ	τῶν	τῶν	τῶν
D (ニ)	τῷ	τῇ	τῷ	τοῖς	ταῖς	τοῖς
A (ヲ)	τόν	τήν	τό	τούς	τάς	τά

注意①アクセントに注意。男性、女性の第一格 (ὁ, ἡ, οἱ, αἱ) は Proclitic (§7.b 参照) でアクセントはない。第二格、第三格は皆 Circumflex でその他は Acute である。

②単数の第三格 (τῷ, τῇ, τῷ) は (トーイ、テーイ、トーイ) と同発音する。

§ 10. 次の五つの規則はすべての名詞、形容詞、代名詞の語尾の変化にも適用される重要な規則であるからよく暗記する事が必要である。

1. 中性は第一格と第四格とは常に同一である。
2. 中性の複数第一格、第四格は常に α で終わる。
3. 第三格単数は常に ι で終わる (長母音には Iota Subscript)。
4. 第二格複数 は常に ων で終わる。
5. 男性と中性とは第二格、第三格が常に同一である。

§ 11. 名詞の変化 下の三種あり。

第一変化 即ち A 変化 First or A Declension。語根 Stem が α に終わる語。

第二変化 即ち O 変化 Second or O Declension。語根が o に終わるもの。

第三変化 即ち子音変化 Third or Consonant Declension。語根が主として子音に終わるもの（時には ι, υ, ευ に終わるものもある）。

以上の中第三変化が最も複雑で記憶しにくく、その次が第一変化、第二変化は最も簡単ゆえ、まず第二変化から始める事とする。

§ 1 2. 名詞の第二変化 又は O 変化 Second or O-declension

第二変化に属するものは語根が o に終わる文字で、その中には男性、女性、中性の何れをも含む。そしてその変化は定冠詞の男性 ó の変化と同一であるから冠詞の変化に通じて居れば、第二変化の修得はすこぶる容易である。

		O-declension			
根		λόγο- (1)言 ó	ἄνθρωπο- (2)人 ó	όδο- (3)道 ἦ	δῶρο- (4)賜物 τό
单 数	N	λόγος	ἄνθρωπος	όδός	δῶρον
	G	λόγου	ἀνθρώπου	όδοῦ	δώρου
	D	λόγῳ	ἀνθρώπῳ	όδῳ	δώρῳ
	A	λόγον	ἄνθρωπον	όδόν	δῶρον
	V	λόγε	ἄνθρωπε	όδέ	δῶρον
複 数	N	λόγοι	ἄνθρωποι	όδοί	δῶρα
	G	λόγων	ἀνθρώπων	όδῶν	δώρων
	D	λόγοις	ἀνθρώποις	όδοῖς	δώροις
	A	λόγους	ἀνθρώπους	όδούς	δῶρα
	V	λόγοι	ἄνθρωποι	όδοί	δῶρα

記憶の為の注意

(a) 男性、女性の語尾は ος (複数 oi) 中性の語尾は ον (複数 α)。中性は前掲規則§10.1 により N (第一格) と A (第四格) とが常に同一である。

(b) 上記の変化に冠詞を付けて変化する事を練習すべし。即ち ὁ λόγος, τοῦ λόγου 等、ἡ ὁδός, τῆς ὁδοῦ 等、τὸ δῶρον, τοῦ δώρου 等の如し。男性は冠詞と名詞が一致するので記憶しやすいが、女性はこれが異なるのでよく練習する必要がある。

(c) アクセントは出来るだけ原位置を保つけれども、アクセントの規則 (§6. b) によりて移動することがある。

(d) O 変化に属するものは、主として男性名詞で、中性はこれに次ぎ、女性は少ない。

§ 1 3. 短い文章にも必要な動詞 εἰμί (アル to be) の変化の一部を下に掲げる。充分に記憶すべし。

		Present (現在)	Past (過去)
S (単数)	1 (第一人称)	εἰμί エイミ	ἦν エーン
	2 (第二人称)	εἶ ΕΙ	ἦς (注) エース
	3 (第三人称)	ἐστί エステイ	ἦν エーン
P (複数)	1 (第一人称)	ἐσμέν エスマン	ἦμεν エーメン
	2 (第二人称)	ἐστέ エステ	ἦτε エーテ
	3 (第三人称)	εἰσί(v) エイシ(ン)	ἦσαν エーサン

注 ἦς は又 ἦσθα とも変化する。

O - 変化の単語

ἄγγελος アンゲロス 天使	κόσμος コスモス 宇宙、世界
ἀδελφός アデルフォス 兄弟	λαός らオス 人民、人々
ἄνθρωπος アンスローポス 人	νεκρός ネクロス 死者
ἀπόστολος アポストロス 使徒	νόμος ノモス 律法、規 (のり)
ἄρτος アルトス パン	οὐρανός ウーラノス 天
δοῦλος ドウロス 僕、奴隸	ὀφθαλμός オフさるモス 眼
ἔργον, τό エルゴン 業、働き、行為	ὄχλος オクロス 群衆
θάνατος さナトス 死	τέκνον, τό テクノン 小児
θεός セオス 神	τόπος トポス 場所
θρόνος すロノス 位	υἱός フウイオス 息子
κύριος キュリオス 主	χριστός くリストス基督、受膏者

上掲単語の中に冠詞を略したのはすべて男性で、女性名詞はない。

練習 第二

次の語の意義と数と数を示せ。

(1) ἀδελφοῦ, κόσμον, νεκροῖς, τέκνα (2) ἀποστόλων, δούλους, οὐρανοῖς, κύριε (3) τέκνου, λαῶ, ἄρτον, νόμοι (4) ὁ υἱὸς τοῦ θεοῦ, οἱ ἀπόστολοι(注1) τοῦ κυρίου (5) ἐγώ(注2) εἰμι(注3) ἡ ὁδός. (6) ἀπόστολοί εἰσιν(注3) (7) ἔργα νόμου (8) τέκνα θεοῦ ἐσμεν.(注3) (9) ἄγγελοι κυρίου ἐν(注4) τοῖς οὐρανοῖς ἦσαν (10) ἀδελφὸς ἐν τῇ ὁδῷ ἦν.

次の語をギリシャ語に訳せ(冠詞と共に)。

《1》群衆(単三)、息子(複二)、小児(単四)、僕(単五)。《2》人民(単二)、行為(複四、五)、人間(複四)。《3》死(単三)、位(複一)、律法(複一)、場所(複三)、宇宙(単二)。《4》神の僕ら(複四)。《5》主の律法に(複三)。《6》小児の死。《7》我らは(注6)人間である。《8》神の賜物を(単四)。《9》使徒らは神の僕(冠詞を付せず)である。《10》彼は(注6)この人の兄弟である。(注5) 《11》人よ! 汝は(注6)律法の子なりき。

注1. oi, aiなどはDiphthongで本来長母音であるからἀπόστολοςのアクセント

トは§6.bによればἀποστόλοιとなる訳であるが、名詞の変化については語尾のoi, aiは短母音と同一に取り扱われるものでἀπόστολοιとなる。

注2. 普通の場合は人称代名詞の主語を略すのであるが、ことに意味を強める時には人称代名詞の主語を掲げる。ἐγώは『我(われ)』。

注3. εἰμί, εἰσίν, ἐσμένがアクセントを失った理由、及びἀπόστολοιに更に一つのアクセントを加えた理由は§7.aのEncliticsのためである。

注4. ἐνは前置詞で英語のinに当り、『に』『の中に』等の意。

注5. ギリシャ語では“彼はこの人に(第三格)兄弟なり”との言い表し方を用いる。

注6. 人称代名詞の主格を略す。動詞の形で主語は明らかだから。

第二課 動詞の変化(その一)

Conjugation of Verbs (I)

§ 14. 概論 動詞は人称 Person、数 Number、態 Voice、法 Mood、時 Tense の五重の変化を持つ。英語の場合は多く助動詞の助けを借りて表わすが、ギリシャ語では全部語頭、又は語尾、時には双方の変化による故、非常に複雑である。従って動詞の変化を習得する事は、ギリシャ語を学ぶ上に最も困難な点であるから、十分に努力する事が必要である。

Person : 第一人称、第二人称、第三人称

Number : 単数、複数

Voice : 能動態 Active、受動態 Passive、反動態 (又は中態) Middle

Mood : 直説法 Indicative、接続法 Subjunctive、祈願法 Optative、

命令法 Imperative、不定詞 Infinitive、分詞 Participle

Tense : 現在 Present、未完了過去 Imperfect、未来 Future、不定過去

Aorist、完了現在 Perfect、完了過去 Pluperfect

これら各々の意義、用法、変化などについては、それぞれの場合に詳細説明する事とする。

§ 15. Present Indicative Active (直説法、現在、能動態)

(S) 単数

(P) 複数

第一人称 (1) λύ-ω りゆ - オー (λύ-ο-μι の音便) λύ-ο-μεν りゆ - オメン

第二人称 (2) λύ-εις りゆ - エイス (λύ-ε-ς 同) λύ-ε-τε りゆ - エテ

第三人称 (3) λύ-ει りゆ - エイ (λύ-ε-σι 同) λύ-ουσι りゆ - ウーシ

(λύ-ο-νσι の音便)

Indicative Mood (直説法) は事実、又は意見を断言する話法。

Active Voice (能動態) は主格の働きかけ、又はその存在の態様を示す。

Present Tense (現在形) はその動詞の働き、存在の状態が継続、又は進行しつつある場合、即ち未完了現在の意味に用いる。

上表の複数形 (及び単数形のカッコ内) を見ると動詞は三つの部分から成り立っている事に心付くであろう。

λύ は Stem 即ち **語根** で変化しない部分。

μεν, τε, ουσι 等は **人称語尾** Personal Endings で変化する部分。

ο, ε などは **結合母音** Binding Vowel or Variable Vowel と称して語根と語尾とを結合するもの。そして μ, ν の前には ο を用い、σ, τ の前には ε が用いられる。

アクセントは出来る限り本来の音節に止まる。

単 語

λύω のごとくに変化する動詞の例 (この単語を暗記すべし)。

ἀκούω アクーオー 聞く	ἔχω エコー 持つ
ἀπολύω アポリューオー 解く	θέλω セロー 欲する、望む
ἀποστρέλλω アポステロー 遣わす	κλείω クれいオー 閉じる
βάλλω バロー 投げる	λαμβάνω ラムぱノー 取る
βασιλεύω バジれウオー 支配する	λέγω れゴー 言う
βλέπω ブれポー 見る	μνημονεύω ムネーモ <u>ねう</u> オー 記憶する
γινώσκω ギノースコー 知る	πιστεύω ピステうオー 信ずる
γράφω グラフオー 書く	
δουλεύω ドうれウオー 仕える	

練 習 第 三

次の語を訳出せよ。

- (1) λαμβάνετε, λαμβάνεις, πιστεύεις (2) θέλετε, ἔχομεν, λέγουσι (3) γινώσκεις, ἀκούει, γράφομεν (4) βάλλεις,

βλέπουσι, ἀπολύετε (5) ὁ ἀπόστολος λέγει. (6) οἱ ὀφθαλμοὶ βλέπουσι.
(7) οἱ δούλοι δουλεύουσι. (8) ἔχετε τοὺς λόγους τοῦ θεοῦ. (9) λαμβάνεις
τὸ δῶρον τοῦ ἀδελφοῦ. (10) μνημονεύομεν τὸν νόνον (τοῦ) κυρίου. (11)
λέγετε ὅτι (注1) ἐγὼ εἰμι.

次の語をギリシャ語にせよ。(動詞は直説法、現在、能動態)

《1》解く(三複、二単)、見る(三単、二複)。《2》欲す(一複、三複)、仕える(三複、二単)、閉じる(三単)。《3》言う(三単、一複)、記憶する(一単、三複)、信ずる(一複、一単)。《4》知る(二複、三単)。《5》汝人の子を(注2)信ずるか。《6》主よ(我)信ず。《7》汝神の律法を聞く。《8》我らは天使を天に(注3)見る。《9》キリストは宇宙を支配す。《10》人は神の奴隷なり。

注1. ὅτι は英語の関係代名詞 that に同じ。

注2. “子を”は εἰς (=into) τὸν υἱόν とするか、又は第三格を用いる。

注3. “天に”は“諸天の中に ἐν τοῖς οὐρανοῖς”と云う表頭を用いる。

第三課 名詞の変化(その二)

§ 16. 名詞の第一変化又は A 変化、First or A Declension

既に § 12. において名詞の第二変化、即ち O - 変化を学んだ。その変化の様式は、ほぼ男性定冠詞 ὁ の変化に類して居た事を記憶しておるであろう。今述べんとする第一変化(A - 変化)は、反対にその変化の型は女性定冠詞 ἡ の変化に類して居る。

この変化に属するものは語根が α に終わる**男性**又は**女性名詞**のみで(故に A-変化と云う)中性名詞はこの変化を取らない。

この変化は次の五つの型に区分されるが、大体同様の変化であるから記憶は極めて容易である。

§ 17. 第一変化(A-変化)の女性名詞

		(1)第一格が η を語尾とするもの	(2)語尾は α でその前に ρ 以外の子音あるもの
		γραφή グラフエー 書き物 根 γραφα-	δόξα ドークサ 栄光 根 δοξα-
単 数	N	γραφή グラフエー	δόξα ドークサ
	G	γραφῆς グラフェース	δόξης ドークセース
	D	γραφῆι グラフエー (イ)	δόξειι ドークセー (イ)
	A	γραφῆν グラフエーン	δόξαν ドークサン
	V	γραφῆ グラフエー	δόξα ドークサ
複 数	N	γραφαί グラファイ	δόξαι ドークサイ
	G	γραφῶν グラフォーン	δόξων ドークソーン
	D	γραφαῖς グラファイス	δόξαις ドークサイス
	A	γραφᾶς グラファース	δόξας ドークサース
	V	φραφαί グラファイ	δόξαι ドークサイ

		(3)語尾は α でその前に ρ 又は母音あるもの	
		ἡμέρα ヘーメラー 日 根 ημερα-	οἰκία オイキアー 家 根 οικια-
単 数	N	ἡμέρα ヘーメラー	οἰκία オイキアー
	G	ἡμέρας ヘーメラース	οἰκίας オイキアース
	D	ἡμέρᾳ ヘーメラー (イ)	οἰκίᾳ オイキアー (イ)
	A	ἡμέραν ヘーメラーン	οἰκίαν オイキアン
	V	ἡμέρα ヘーメラー	οἰκία オイキアー
複 数	N	ἡμέραι ヘーメライ	οἰκίαι オイキアイ
	G	ἡμερῶν ヘーメローン	οἰκιῶν オイキオーン
	D	ἡμέραις ヘーメライス	οἰκίαις オイキアイス
	A	ἡμέρας ヘーメラース	οἰκίας オイキアース
	V	ἡμέραι ヘーメライ	οἰκίαι オイキアイ

記憶の為の注意

- (a) 三種とも複数語尾は皆同一だから容易に記憶が出来る。
- (b) 第一種は単数において第一格が η に終わるもので単数全般に η を存続する。

第二種は第一格が α に終わり、その前に ρ 以外の子音があるもので（これを impure α と云う）、第二格、第三格に於て α が η に変化する。

第三種は第一格が α に終わりその前に ρ 又は母音があるもので（これを pure α という）これは単数全般に α を存続する。

- (c) pure の α は多く長音、impure の α は多く短音。
- (d) アクセントは§12.注意 (c) と同じく、出来るだけ原音節に留まる。ただ複数第二格 (G) は常に Circumflex Accent (˘) を持つ。これは α-ων の収縮 (Contraction) したものであるからである。
- (e) 単数第二格、複数第四格の-ας は常に長音である。

以上は女性名詞の第一変化の場合であるから、女性冠詞と共にこれを記憶する様に練習する事が必要である。そして大体に於て冠詞も同様の变化をするのであるから好都合である。この点に於て次の § 1 8. の男性名詞は語尾が女性の冠詞の様に変化し、冠詞は男性であるから、冠詞をつけて練習しないと混雑しやすい。

§ 1 8. 第一変化の男性名詞

		(4)第一格が ας を語尾とするもの	(5)第一格が ης を語尾とするもの
		νεανίας ネアーニアース若者 根 νεανια-	προφήτης プロフェーテース 根 προφητα- 預言者
単 数	N	νεανίας ネアーニアース	προφήτης プロフェーテース
	G	νεανίου ネアーニウー	προφήτου プロフェートゥ
	D	νεανία ネアーニアー (イ)	προφήτην プロフェーテー (イ)
	A	νεανίαν ネアーニアン	προφήτην プロフェーテー
	V	νεανία ネアーニアー	προφήτα プロフェータ
複 数	N	νεανιαί ネアーニアイ	προφήται プロフェータイ
	G	νεανιῶν ネアーニオーン	προφητῶν プロフェートーン
	D	νεανιαίς ネアーニアイス	προφήταις プロフェータイス
	A	νεανίας ネアーニアース	προφήτας プロフェータース
	V	νεανιαί ネアーニアイ	προφήται プロフェータイ

記憶の為の注意

(a) 複数は女性の場合と同一である。即ち第一変化の複数は全部全く同一であるから至って好都合である。

(b) 単数第一格に ς が付き、第二格が ou となる点が男性名詞の変化の特徴である。

(c) 単数第五格は第一格が $\alpha\varsigma$ に終わる語は α になり、 $\tau\eta\varsigma$ に終わる語は $\tau\alpha$ になり、 $\eta\varsigma$ に終わる語は η となる。

(d) § 17.注意 (c) (d) は男性名詞の場合にも適用せられます。

(e) アクセントが最後から二番目の長音節につき、最後の音節が短音節の時は、アクセントは常に (\sim) となる。例 προφήτα, προφήται ($\alpha\iota$ の短音なる事は練習(1)注 1)

単語

(1) γραφή のごとくに変化する女性名詞

ἀρχή	アールけー 初め	παραβολή	パラボれー 譬え話
ἀγάπη	アがペー 愛	ζωή	ゾーエー 生命
δικαιοσύνη	ディカイオスゆネー	συναγωγή	スゆナゴーゲー
	正義		会堂、集会
ειρήνη	エイレーネー 平和	τιμή	ティメー 名誉
ἐντολή	エントれー 誠命	φωνή	フォーネー 声
κεφαλή	ケファれー 頭	ψυχή	プスゆけー 心、魂、生命

(2) δόξα の如くに変化する女性名詞

γλῶσσα	グロースサ 舌	θάλασσα	さらスサ 湖、海
--------	---------	---------	----------

(3) ἡμέρα, οἰκία のごとくに変化する女性名詞

ἀλήθεια	アレーセイアー 真理	ἐπαγγελία	エパンげりアー 約束
ἁμαρτία	ハマルティアー 罪	καρδιά	カルディアー 心
βασιλεία	バジれイアー 王国、国	σοφία	ソフィアー 智慧
ἐκκλησία	エックれーシアー 教会	χώρα	こーラー 地方
ἐξουσία	エクスーシアー 権威	ᾠρα	ホーラー 時

(4) νεανίας の如くに変化する男性名詞

Ἀνδρέας	アンドレアース アンデレ	Ἡσαΐας	エーザイアース イザヤ
---------	--------------	--------	-------------

注意：-ας に終わる固有名詞にしてその前に子音あるものは、第二格は ου と ā ならずとなる。Ἰωνᾶ (マタイ 12:39) Κλωπᾶ (ヨハネ 19:25) Κηφᾶ (第一コリント 1:12) Σατανᾶ (マルコ 1:13) の如し。

(5) προφήτης の如くに変化する男性名詞

κριτής	クリテース	審判者	πολίτης	ポリテース	市民
μαθητής	マセテース	弟子	τελώνης	テローネース	取税人

練習 第四

次の語を訳しその名詞の性、数、格を示せ

(1) οἱ ὀφθαλμοὶ τοῦ τέκνου. (2) ἡ ἐξουσία τῆς βασιλείας. (3) ἐν ἀρχῇ ἦν ὁ λόγος, καὶ ὁ λόγος ἦν πρὸς¹ τὸν θεόν, καὶ θεὸς ἦν ὁ λόγος. (ヨハ 1:1) (4) ἐγὼ εἰμι ἡ ὁδὸς καὶ ἡ ἀλήθεια καὶ ἡ ζωή. (ヨハ 14:6) (5) ὁ Κύριος γινώσκει τὰς καρδίας τῶν ἀνθρώπων. (6) βλέπετε τὴν συναγωγὴν τῶν υἱῶν τῆς ἀμαρτίας. (7) ἔχει τὴν σοφίαν καὶ τὴν ἀγάπην. (8) πιστεύομεν τῇ γραφῇ καὶ τῷ λόγῳ. (9) ἀκούεις τὴν φωνὴν τῶν προφητῶν. (10) ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ δικαιοσύνη καὶ εἰρήνη ἐστίν. (11) πιστεύουσιν τῇ γράφῃ καὶ τῷ λόγῳ. (12) ἀκούω τὸν λόγον τῆς ἐπαγγελίας.

次の語をギリシャ語に訳せ

(1) (汝らは) 名誉を持って居る。(2) 教会は真理(単)の言を(三格又は εἰς+四格)を信ずる。(3) (彼は) 神の国の權威を持つ。(4) 教会の頭はキリストなり。(5) キリストは弟子たちを世に(εἰς τὸν κόσμον)遣わす。(6) (彼は) 人間(複数)の審判者であった。(7) (彼らは) 取税人らの罪を記憶する。(8) 神の家には栄光(複)あり。(9) (彼らは) 会堂にて譬え話を聴く。(10) (私は) 約束(複)の書(複)を書く。(11) 人の声は神の声である。(12) 弟子たちは主の誠命をきいて彼を信ずる。

¹ πρὸς+四格=対して。

第四課 動詞の変化(その二)

§ 19. Imperfect Inductive Active (未完了過去直説法能動態)

Imperfect 未完了過去は行為又は状態が過去に於て進行しつつある事を示す。即ち継続的、習慣的、反復的行為又は状態を表わす。従つて Aorist (完了、未完了を問わず、ただある事実又は行為が過去に於て起こり、又は行われた事を示す) や Perfect (過去に起こつて現在まで結果を留めて居る行為) とは異なつた意味に用いられる。時称の有する意味の微妙な差別を感じ得る様習得すべし。

§ 20. λύω の Imperfect Indicative Active は次の如し

	単数	複数
第一人称	ἔ-λυ-ο-ν	ἔ-λυ-ο-μεν
第二人称	ἔ-λυ-ε-ς	ἔ-λυ-ε-τε
第三人称	ἔ-λυ-ε	ἔ-λυ-ο-ν

注意 1. 結合母音 Variable Vowels は Present Tense の場合と同一で ο, ε である。

注意 2. 人称語尾 Personal Endings は Present Tense と異なつて居る。

注意 3. 各変化とも語の頭に ε が附加せられて居るのを見るであろう。これを Augment (語頭添加) と称する。

注意 4. アクセントは移動する。即ち最後の音節 (Ultima 終音節) が短音節の時はアクセント (´) は最後より三番目の音節 (Antepenult 前々音節) につき、終音節が長音節の時には最後より二番目の音節 (Penult 前音節) につく。但し二音節の動詞で第一音節にアクセントがあり、これが長音節である場合には Circumflex (˘) を取る。

注意 5. 第一人称単数と第三人称複数とは同型である。前後の関係でその何れであるかを判断する。

§ 21. 第一時称 (Primary or Principal Tense) と第二時称 (Secondary or Historical Tense)

直説法の動詞は Tense の種類に従つてこれを第一時称 Primary Tense と第二時称 Secondary Tense とに分かつ。この区別は動詞の変化を学ぶ上に多くの便宜を与えるゆゑ注意を要する。

Primary Tenses 第一時称は、現在 Present、未来 Future、完了現在 Perfect、完了未来 Future Perfect（これは稀である）。

Secondary Tenses 第二時称は、未完了過去 Imperfect、不定過去 Aorist、完了過去 Pluperfect である。

第二時称は Historical Tense 歴史的時称で、過去時の表号である Augment（語頭添加）は凡てこの時称に附加せらるるを常とする。（但し Pluperfect には Syllabic Augment (§ 22 参照)を省略するが多い）。

§ 2 2. Augment（語頭添加）は次の規則に従う。

（1）子音（ρ 以外の）をもって始まる動詞には ε を附加する（これを Syllabic Augment）という。

（2）ρ に始まる動詞には ερ を附加する（但し ρ を繰り返さざる場合あり）。

（3）母音をもって始まる動詞に於ては、母音が長母音に変化する（これを Temporal Augment という）。しかしてその変化の法則は

α, ε は η 又は ει	例	ἄγω は	ἤγον	（導く）
		ἐγείρω	ἤγειρον	（起こす）
		ἔχω	εἶχον	（持つ）
ο は ω		ὁμολογέω	ὠμολόγουν ¹	（告白する）

短音の ι, υ は長音の ι, υ

αι は η	αιτέω	ἤτουν ¹	（求める）
αυ は ηυ	αὐξάνω	ἠῦξανον	（育つ）
οι は ω	οικέω	ῶκουν	（住む）
ευ は不変又は ηυ	εὕρισκω	ἠῦρισκον	（見出す）

その他の Diphthong 重母音や長母音には Augment が付かない。

§ 2 3. 複合動詞の Augment

前置詞と結合せる複合動詞 Compound Verbs の未完了過去

¹ 語尾 ουν は εον の収縮したもので、これについては後述する。（§ 29.参照）

Imperfect Tense における添加語頭 Augment は前置詞と動詞の中間に挿入せられる。この場合前置詞の語尾の母音は脱落し（例外 περί 及び πρό）ἐκ は ἐξ に変化する。

例	ἀποθνήσκω	ἀπέθνησκον	(死する)
	παρακαλέω	παρεκάλουν	(慰める)
	ἐκβάλλω	ἐξέβαλλον	(投げ棄てる)
	ὑπάγω	ὑπήγον	(去る)
但し	περιπατέω	παριεπάτουں	(歩む)
	προπέμπω	προέπεμπον	(送る)

§ 2 4. 動詞のアクセントは次の規則に従う。

(1) アクセントは凡ての動詞に於て出来るだけ語尾から遠ざかる (§5 及び §20.注意 4 参照)。

(2) 語尾の αι, οι は Optative Mood 以外では短音とみなす。

(3) アクセントは Augment よりも上にさかのぼる事はない。

(4) 二つの母音が収縮 (§ 29) する場合、もしその一つにアクセントがある場合には、この収縮母音にアクセントが付く (Acute の場合と Circumflex の場合とあり)。

(5) Infinitive, Participle 及び Verbal Adjective (後述) は以上の規則に従わない。名詞のアクセントの規則 (§ 12.c) による。

単 語

ἀγιάζω	ハギアゾー	聖める	ἐλπίζω	エーるピゾー	望む
ἄγω	アゴー	導く	εὐρίσκω	ヘウリスコー	見出す
βαπτίζω	バプティゾー	バプテスマ を施す	ἐσθίω	エースシオー	食う
διδάσκω	ディダスコー	教える	κρίνω	クリノー	裁く
δοξάζω	ドークサゾー	栄光を帰する	πέμπω	ペムポー	遣わす
ἐγείρω	エゲイロー	起こす、復活 させる	παιδεύω	パイデウオー	叱る、 訓戒する
προφητεύω	プロフェーテウオー	預言する	φεύγω	フェウゴー	逃れる
			χαίρω	カイロー	喜ぶ

練習 第五

次の語を訳せ。

(1) ἠκούετε, ἠγίαζον, ἔκρινες. (2) ἔπεμπον, ἐβάλλομεν, ἤλιπες. (3) ἠγειρον, ἔκραζε, ἐφεύγομεν. (4) ἠσθίετε τὸν ἄρτον τῆς ζωῆς. (5) ἠγες¹ τὰ τέκνα. (6) οἱ ἀπόστολοι ἐβάπτιζον τοὺς μαθητάς. (7) ὁ θεὸς ἔπεμπε τοὺς ἀγγέλους εἰς τὸν κόσμον. (8) ἦγε¹ τοὺς ἀνθρώπους ἀπὸ² τῆς θαλάσσης. (9) οἱ νεανίαί ἔχαιρον. (10) ἐδίδασκες τοὺς ἀδελφοὺς σὺν³ τοῖς δούλοις.

次の動詞の Imperfect を示せ。

(1) 信ずる (三人称複数)、見る (一複)、取る (三複)。 (2) 望む (二単)、食う (二複)、叫ぶ (三単)。 (3) 教える (一単)、叱る (一複)、遣わす (三複)。

次の文章をギリシャ語に訳せ。

(1) (私は) パンを食べて居った。 (2) (彼らは) 神の子を眺めて居った。 (3) 神の子は人の子らを救⁴って居った。 (4) (汝らは) 主の言を聴いて居った。 (5) 預言者たちは弟子たちを教えかつ (καί) 導いて居った。 (6) 天使たちは主を崇めて居った。

第五課 形容詞

§ 25. 形容詞 Adjective は名詞を修飾してその性質、又は状態を規定する場合に用いられる。

¹ アクセントについて § 20. 注意 4 但し書き。

² away from, カラ (遠ざかる事)。

³ 共に、with。

⁴ σώζω

形容詞はその形容する名詞の性、数、格に応じて自己の性、数、格を変化する。従って性、数、格を欠く日本語に比べると、その変化はすこぶる複雑である。

§ 2 6. 形容詞の変化の種類 Declension of the Adjectives

形容詞には三種の変化があり、その変化の形式はそれぞれ何れかの名詞の変化に相当して居る。

(1) 母音変化 Vowel Declension (名詞の母音変化、即ち A-変化及び O-変化に相当するもの)。§ 12 及び § 17 参照。

(2) 子音変化 Consonant Declension (名詞の第三変化、即ち子音変化に相当するもの)。§ 40 参照。

(3) 混合変化 Mixed Declension (名詞の母音変化と子音変化との混合に相当するもの)。

以上の中 (2) (3) は名詞の第三変化を、即ち子音変化を学んで後に述べる事とし、ここではただ (1) の変化につきて述べよう。§ 59、§ 60 参照。

§ 2 7. 形容詞の母音変化。次の三例を暗記せよ。

		ἅγιος 聖き			μικρός 小き		
		男	女	中	男	女	中
単 数	N	ἅγιος	ἁγία	ἅγιον	μικρός	μικρά	μικρόν
	G	ἁγίου	ἁγίας	ἁγίου	μικροῦ	μικρᾶς	μικροῦ
	D	ἁγίῳ	ἁγίᾳ	ἁγίῳ	μικρῷ	μικρᾷ	μικρῷ
	A	ἅγιον	ἅγιαν	ἅγιον	μικρόν	μικράν	μικρόν
	V	ἅγιε	ἁγία	ἅγιον	μικρέ	μικρά	μικρόν
複 数	N	ἅγιοι	ἁγιαί	ἅγια	μικροί	μικραί	μικρά
	G	ἁγίων	ἁγίων	ἁγίων	μικρῶν	μικρῶν	μικρῶν
	D	ἁγίοις	ἁγίαις	ἁγίοις	μικροῖς	μικραῖς	μικροῖς
	A	ἁγίους	ἁγίας	ἅγια	μικρούς	μικράς	μικρά
	V	ἅγιοι	ἁγιαί	ἅγια	μικροί	μικραί	μικρά

	σοφός 賢き					
	単数			複数		
	男	女	中	男	女	中
N	σοφός	σοφή	σοφόν	σοφοί	σοφαί	σοφά
G	σοφοῦ	σοφῆς	σοφοῦ	σοφῶν	σοφῶν	σοφῶν
D	σοφῶ	σοφῆ	σοφοῦ	σοφοῖς	σοφαῖς	σοφοῖς
A	σοφόν	σοφῆν	σοφόν	σοφούς	σοφάς	σοφά
V	σοφέ	σοφή	σοφόν	σοφοί	σοφαί	σοφά

記憶の為の注意

(a) 男性及び中性は単数、複数とも第二変化 (O-変化) の男性及び中性と同一である。

(b) 女性は第一変化の女性名詞の如くに変化する。即ち

1. σοφός の如く男性単数第一格に於て ος の前に ρ 以外の子音あるものは女性に於て語尾 η となり、γραφή の如くに変化する (§17.(1) の場合) σοφή etc.。
2. ἄγιος, μικρός の如く男性単数第一格に於て ος の前に ρ 又は母音あるものは、女性に於て語尾 α となり ἡμέρα, οἰκία の如くに変化する (§ 17.(3) の場合) ἄγια, ἁγίας etc.。
3. ἄγια のアクセントが Penult にある所以は α が長音の為である。

§ 28. 母音変化の形容詞に関してなお次の諸項を記憶する必要がある。

1. 母音変化の形容詞の中には女性も男性も同じく ος の変化によるものがある。例えば ἄδικος (不正なる) は女性も同じく ἄδικος で ἄδικος, -ος, -ον となる。ἀδύνατος, -ος, -ον (不能なる)、ἀκάθαρτος, -ος, -ον (不潔なる)、ἀδίκιμος, -ος, -ον (不合格なる) 等も同様で α の打消しの Prefix がある語は大体この変化を取る。
2. 動詞の Participles (分詞) の中で、ος を語尾とするもの、例えば ἐρχόμενος (来るところの)、ἀπεσταλμένος (遣わされたところの)、

ἀρχόμενος (始めの) 等の如きは σοφός と同様に變化し ἐρχόμενος, -μήνη, -μενον となる。

3. 形容詞を定冠詞と共に用うる時は、その後に来る名詞を省略したのと同じ意味となる。ὁ σοφός (賢人) οἱ ἅγιοι (聖徒たち) の如し。

単 語

母音變化の形容詞

ἀγαθός 善き	κακός 悪しき
ἀγαπητός 愛せらるる	καλός 善き
ἄλλος 他の	μέσος 中央の
αἰώνιος, -ον 永遠の	μόνος 唯一の
δίκαιος 義しき	πιστός 忠信なる、真実なる
ἔσχατος 最後の、終末の	πονηρός 悪しき
ἕτερος 他の (異種の)	πρῶτος 最初の、第一の

練 習 第 六

次の文章の誤りを正せ。

(1) αἱ γραφαὶ τῶν ἀποστόλων ἅγιος εἰσιν. (2) ἕτερος ἄνθρωποι ἐν τῷ ἐσχάτῳ οἰκίᾳ εἰσίν. (3) ἐσμὲν ἐν τῷ πονηρῷ κόσμῳ. (4) ἔχεις τὴν ζωὴν αἰωνίαν. (5) ἡ ἐκκλησία πιστός ἐστίν.

次の語の訳せ。

(1) ὁ πρῶτος ἐστίν ἔσχατος, καὶ ὁ ἔσχατος πρῶτος. (2) ἡ ἐντολή τοῦ αἰωνίου θεοῦ δικαία ἐστίν. (3) ὁ ἀδελφὸς δίκαιος καὶ ἀγαθός ἐστίν. (4) οἱ ἅγιοι βλέπουσιν τὰς ψυχὰς τῶν κακῶν. (5) ὁ θεὸς κρίνει τοὺς πονηροὺς, καὶ τοὺς ἀδίκους.

次の語をギリシャ語に訳せ。

(1) 忠信なる(人々)は悪しき兄弟たちを救う。(2) 永遠の神は義しき審判者である。(3) オー主よ (ὦ κύριε) なんじは善にして義なり。(4) 愛するものよ、我ら今 (νῦν) 神の子たり (第一ヨハネ 3:2)。(5) 教会は主イエス・キリストの (τοῦ Κυρίου Ἰησοῦ Χριστοῦ) 善き誠命(複)と永遠の約束とを聴いた。

第六課 母音の収縮

§ 29. 母音の収縮 **Contraction of Vowels** は本来発音学の問題であるが便宜上ここまで延期した。二つの母音が重複するか、又は一つの母音が重母音と重複する時は、そのところに母音の収縮が行われる。そしてその収縮の結果、大体次の表の如く或いは一つの長母音となり、又は重母音となる(稀に例外あり)。

	α	αι	ε	η	ει	η	ο	ω	οι	φ	ου
α	α	α, αι	α	α	α	α	ω	ω	φ	φ	ω
ε	α, η	η	ει	η	ει	η	ου	ω	οι	φ	ου
ο	ω	φ	ου	ω	οι, ου	φ	ου	ω	οι	φ	ου

この表の使用法は第一母音を左端の縦の行によりて見出し、第二の母音、又は重母音を上段の横の行によりて見出し、前者より横に引く線と後者より縦に引く線とが交わるところが収縮された母音である。例えば α, ο は ω となり ε, αι は η となるがごとし。

上表を一覧すれば大体次の如き傾向を持って居る事を知ることが出来る。

(1) ο 音は最も力強く、これが他の α 音、ε 音、ο 音の前にあるも後にあるも収縮母音は ο 音を帯びる。

(2) α 音はこれに次ぎ α 音又は ε 音に先立つ時のみ収縮母音が α 音となる。

(3) ε 音もほぼ α 音と同様で、α 音又は ε 音に先立つ時のみ収縮母音は、η 又は ει 音となる。例外は εα = α。

これまで学習した中で (イ) 名詞の第二変化 (ロ) 名詞の第一変化 (ハ) 形容詞の母音変化 (ニ) 動詞の Present 及び Imperfect にこの母音の収縮が行われる故、これらについて一言する。但しこの中動詞の変化の中に起こる母音変化は最も重要であり、かつしばしば起こるので注意を要する。その他のものについても一応略述する事にする。

§ 3 1. 名詞の第二変化 (§ 12) の収縮

語幹が ο 又は ε に終わる名詞は語尾の ο 又は α と合して収縮し、εο 又は oo は ου となり εα は α (長音) となる。

例、νό-ος (ό 心) は νόος, νόου, νόω 等と変化せずに νοῦς, νοῦ, νόϕ, νοῦν, νοῦ; νοῖ, νων, νοῖς, νοῦς, νοῖ となり¹、ὀστέον (τό 骨) は ὀστοῦν, ὀστοῦ, ὀστῶ, ὀστοῦν, ὀστοῦν; ὀστᾶ, ὀστῶν, ὀστοῖς, ὀστᾶ, ὀστᾶ となる。

§ 3 1. 名詞の第一変化 (§ 16~18) の収縮

語幹が α 又は ε に終わる名詞は語尾の α 又は ω と合して収縮し、αα は α (長音) となり、εα は ρ の後は α (長音) その他は η となる。

例、μνᾶ (ή, ミナ、貨幣の名) 根 μνα-で μνά-α, μνά-ας 等が収縮して μνᾶ, μνᾶς, μνᾶ, μνᾶν, μνᾶ; μναῖ, μνῶν, μναῖς, μνᾶς, μναῖ となる。συκῆ (ή, イチジク) 根 συκε-は συκέ-α, συκέ-ας 等が収縮して συκῆ, συκῆς, συκῆ, συκῆν, συκῆ; συκαῖ, συκῶν, συκαῖς, συκᾶς, συκαῖ となる。²

§ 30 § 31 に於てアクセントは常に最後の音節に Circumflex を持つ。即ち Perispomena である (但し複合名刺の場合は単数第一格のアクセントを保留する)。

¹ 稀に νοός (G) νοί (D) となる。

² ε-αι は本来 η であるが、女性複数の特徴を保存する為に例外的に αι, αις となる。

§ 3 2. 母音変化の形容詞 (§ 27) の収縮 例 χρυσοῦς (金の)

		男	女	中
単 数	NV	χρυσοῦς ² (ε-ος)	χρυσῆ (ε-η)	χρυσοῦν (ε-ον)
	G	χρυσοῦ (ε-ου)	χρυσῆς (ε-ης)	χρυσοῦ (ε-ου)
	D	χρυσῶ (ε-φ)	χρυσῆ (ε-η)	χρυσῶ (ε-φ)
	A	χρυσοῦν (ε-ον)	χρυσῆν (ε-ην)	χρυσοῦν (ε-ον)
複 数	NV	χρυσοῖ (ε-οι)	χρυσαῖ (ε-αι) ¹	χρυσᾶ (ε-α)
	G	χρυσῶν (ε-ων)	χρυσῶν (ε-ων)	χρυσῶν (ε-ων)
	D	χρυσοῖς (ε-οις)	χρυσαῖς (ε-αις) ¹	χρυσοῖς (ε-οις)
	A	χρυσοῦς (ε-ους)	χρυσᾶς (ε-ας)	χρυσᾶ (ε-α)

なお ἀργυροῦς (ἀργύρε-ος 銀の) ἀπλοῦς (ἀπλό-ος 単純なる) 等もこの変化に属するが、新約聖書にはこの種の文字は多くはない。

§ 3 3. 動詞の Present 及び Imperfect Tenses の収縮

母音の収縮が頻繁に起こるのは動詞の場合である。

第一人称現在に於て αω, εω, οω の語尾を有する動詞は、凡ての Moods の Present 及び Imperfect Tenses に於て、§ 29 に従い語尾の収縮が起こる。次に τιμάω (尊敬する)、φιλέω (愛する)、δουλώω (仕えしむ) の三つの例により、既に学習せる二つの Tenses の Indicative Mood につき、この収縮を示す。

		Present		Imperfect	
単	1	(τιμάω)	τιμῶ	(ἐτίμαον)	ἐτίμων
	2	(τιμάεις)	τιμᾶς	(ἐτίμαες)	ἐτίμας
数	3	(τιμάει)	τιμᾶ	(ἐτίμαε)	ἐτίμα
複	1	(τιμάομεν)	τιμῶμεν	(ἐτιμάομεν)	ἐτιμῶμεν
	2	(τιμάετε)	τιμᾶτε	(ἐτιμάετε)	ἐτιμᾶτε
数	3	(τιμάουσιν)	τιμῶσι(ν)	(ἐτίμαον)	ἐτίμων

¹ ε-αι は本来 η であるが、女性複数の特徴を保存する為に例外的に αι, αις となる。

² 第五格 χρύσεε は収縮せずそのまま。

		Present		Imperfect	
単	1	(φιλέω)	φιλῶ	(ἐφίλειον)	ἐφίλουν
	2	(φιλέεις)	φιλεῖς	(ἐφίλειες)	ἐφίλεις
数	3	(φιλέει)	φιλεῖ	(ἐφίλειε)	ἐφίλει
複	1	(φιλόομεν)	φιλοῦμεν	(ἐφιλόομεν)	ἐφιλοῦμεν
	2	(φιλέετε)	φιλεῖτε	(ἐφιλέετε)	ἐφιλεῖτε
数	3	(φιλόουσι)	φιλοῦσι(v)	(ἐφίλειον)	ἐφίλουν

		Present		Imperfect	
単	1	(δουλόω)	δουλῶ	(ἐδούλοον)	ἐδούλουν
	2	(δουλόεις)	δουλοῖς	(ἐδούλοες)	ἐδούλους
数	3	(δουλόει)	δουλοῖ	(ἐδούλοε)	ἐδούλου
複	1	(δουλόομεν)	δουλοῦμεν	(ἐδουλόομεν)	ἐδουλοῦμεν
	2	(δουλόετε)	δουλοῦτε	(ἐδουλόετε)	ἐδουλοῦτε
数	3	(δουλόουσι)	δουλοῦσι(v)	(ἐδούλοον)	ἐδούλουν

但し ζάω (生きる・生活する)、διψάω (渴く)、πεινάω (飢える)、χράομαι (用いる) の四動詞は τιμάω の如くに変化すべき筈であるが、これらは例外的に α の代わりに η となる。すなわち ζῶ, ζῆς, ζῆ, ζῶμεν, ζῆτε, ζῶσιν; ἐζῶν, ἐζῆς, etc. となる。

第七課 動詞の変化(その三)

§ 3 4. Present Indicative (Passive and Middle)

直説法現在(受動態及び中態)

Passive Voice 受動態は、主格が受け身となりてその動詞の働きを受くる態様をいい、従って他動詞のみが Passive Voice を持つ。

Primary Tenses (第一時称 § 21) の Passive Voice の語尾は次の如くである。

	単 数	複 数
1	-μαι	-μεθα
2	-σαι	-σθε
3	-ται	-νται

英・仏・独語等では助動詞の助けによって受動態を示すのであるが、ギリシャ語では大体語尾の変化によってこれを示す。

上表の語尾の変化は極めて重要で、接続法の Primary Tenses もこれと同一の語尾の変化を持つのである故、これを *μαισαιταιμεθασθενται* と一息につづけて暗記する事は記憶を助ける事が多い。

§ 3 5. λύω の Present Indicative (Passive and Middle)

	単 数	複 数
1	λύομαι	λύόμεθα
2	λύει 又は λύη	λύεσθε
3	λύεται	λύονται

二つの母音の中に σ が入ると σ は脱落する事がある。従って第二人称単数は *λύεσαι* であるが σ を失って *λύει* となり、これが不規則に収縮して *λύει* となる。

§ 36. 受動態の文章に於てその動作を為すものが生物なる時は ὑπό (+ 第二格) を用い、無生物なるとき名詞の第三格を用いる。

例 ὁ ἀπόστολος πέμπεται ὑπὸ τοῦ Κυρίου.

使徒は主から遣わされる。

σωζόμεθα τῷ λόγῳ τοῦ Κυρίου.

彼らは主の言によって救われる。

§ 37. §33 の αω, εω, οω の語尾を有する動詞は、受動態でもその母音を収縮する。例えば φιλέω の Passive Present は φιλοῦμαι, φιλεῖ, φιλεῖται; φιλούμεθα, φιλεῖσθε, φιλοῦνται となる。

単 語

語尾が αω, εω, οω に終わる動詞。

ἀγαπάω 愛する	καλέω 呼ぶ
αἰτέω 請う	λαλέω 語る
ἀκολουθέω 従う	μαρτυρέω 証する
ἐρωτάω 問う	πληρόω 充たす、成就する
ζητέω 熱求する	ποιέω 為す
θεωρέω 観察する	τηρέω 保つ、守る

練 習 第 七

次の語を訳せ。

- (1) λαλοῦμεν, ἐζητοῦν, πληροῦτε. (2) ποιεῖτε, τηρεῖς, ἤτουν. (3) βάλλει, μαρτυροῦμαι, κρίνεται. (4) ἐρωτᾶτε, διδάσκομαι, ἀκούονται. (5) τηροῦμεν τὰς ἐντολὰς τοῦ Κυρίου. (6) πιστεύομεν καὶ σωζόμεθα. (7) ζητε ἐν τῷ πονηρῷ κόσμῳ. (8) οἱ ἄγγελοι πέμπονται ὑπὸ τοῦ θεοῦ εἰς τὸν κόσμον. (9) ἐν τῷ ναῷ λαλεῖ καὶ ἀκούεται. (10) μαρτυροῦμεν ὅτι ζῆ.

次の語をギリシャ語に訳せ。

《1》 聖き弟子達は善き業を為す。《2》 (彼は) 生命の冠 (ὁ στέφανος τῆς ζωῆς) を持って居った。《3》 善き心は義しき行を為す。《4》 真理は預言者たちによりて (διὰ) 証せられた。《5》 聖書 (ἡ γραφή) はキリストによりて成就された。《6》 他の弟子たちは主に従って居った。

第八課 子音の分類及びその音便

§ 38. 子音の分類

子音を次表の如く各々その特徴によって分類する事は、子音の音便を学ぶ上に必要である。この分類及び音便は次に名詞の第三変化を学ぶ際、その他にも必要が起こる故注意すべし。十七字の子音は次の四種類に区別される。

(1) Sibilant (叱音) ς

(2) Liquids (続音) λ, μ, ν, ρ の四つ

(3) Mutes (断音) 次の九つで更に下表の如くに分類する。

	Sharp 清音	Flat 濁音	Aspirate 氣息音
Labials ¹ (唇音)	π	β	ϕ
Palatals ² (口蓋音)	κ	γ	χ
Linguals (舌音)	τ	δ	θ

(4) Double Consonants (複子音) ζ, ξ, ψ の三つ。

§ 39. 子音の音便

1. 断音 (Mutes) と叱音 (すなわち ς) とが合すると複子音となる。

すなわち

¹ 又は Gutturals 喉音

² 又は Dentals 齒音

- (a) 唇音 Labials + ς = ψ 。即ち $\pi\varsigma$, $\beta\varsigma$, $\varphi\varsigma$ は ψ となる。
- (b) 口蓋音 Palatals + ς = ξ 。即ち $\kappa\varsigma$, $\gamma\varsigma$, $\chi\varsigma$ は ξ となる。
- (c) 舌音 Linguals + ς = 舌音脱落。即ち $\tau\varsigma$, $\delta\varsigma$, $\theta\varsigma$ は本来 ζ となる訳であるが、この場合は舌音が脱落して ς のみが残る。
2. 口蓋音 (κ , γ , χ) 又は唇音 (π , β , φ) の後に舌音 (τ , δ , θ) が来る時は後者の性質如何によりて前者もこれと同一の性質に変化する。すなわち後者が清音なる時は前者も清音となり、後者が氣息音なる時は後者も同様氣息音となる。例えば $\gamma\acute{\epsilon}\gamma\rho\alpha\varphi\tau\alpha\iota$ は $\gamma\acute{\epsilon}\gamma\rho\alpha\pi\tau\alpha\iota$ となる。
3. 舌音が二つ重なる時は前者は σ に変化する。
4. (a) μ の前で口蓋音 κ , γ , χ は γ に変化する。
 (b) μ の前で唇音 π , β , φ は μ に変化する。
 (c) μ の前で舌音 τ , δ , θ は σ に変化する。
5. (a) ν は唇音 π , β , φ の前で μ に変化する。
 (b) ν は口蓋音 κ , γ , χ の前で γ に変化する。
 (c) ν は続音 λ , μ , ν , ρ の前で同一の続音となる。
 (d) ν は叱音 σ (ζ を含む) の前で脱落する。
 (e) ν は舌音 + 叱音 $\tau\varsigma$, $\delta\varsigma$, $\theta\varsigma$ の前で舌音と共に脱落して単に ς だけが残る、その前の母音は延長する。
6. 硬音の母音の前では清音なる断音 Sharp Mutes (π , κ , τ) はそれぞれそれに相当する氣息音 Aspirate (φ , χ , θ) に変化する。
7. 語尾は常に ν , ρ , ς , (ξ , ψ) で終わる (但し例外 $\acute{\epsilon}\kappa$, $\omicron\kappa$, $\omicron\chi$)。語尾に他の子音が来ればそれは脱落する。

第九課 名詞の變化(その三)

第三變化(上)

§ 40. 名詞の第三變化又は子音變化 Third or Consonant Declension

この變化に属する名詞の性は男、女、中何れにもわたっており、語根は μ と複子音 (ζ, ξ, ψ) 以外の何れかの子音、又は i, u, eu の母音をもって終わる。語尾の變化は一定して居る。ただ音便による變化が多いので一見この變化は最も複雑であるが、(1) 音便 (2) 語根の発見 (3) 語尾の記憶さえ出来るならば、この變化はこれを記憶するにさほど困難ではない。

§ 41. 語根を見出す方法 前述の如く語根さえ見出せばこの變化は簡単に判明する。これを見出す最も容易なる方法は、単数第二格から語尾 $ος$ を除去する事である。この残りが即ち語根であって、この語根に一定の語尾が加わって第三變化を構成する。

§ 42. 名詞の第三變化の語尾 例 $\alpha\acute{\iota}\omega\nu$ (世代、世) $\sigma\omega\mu\alpha$ (体)

	男性		中性	
	単数	複数	単数	複数
N	\acute{o} $\alpha\acute{\iota}\omega\nu$	$\alpha\acute{\iota}\omega\nu\text{-}\epsilon\varsigma$	$\tau\acute{o}$ $\sigma\omega\mu\alpha$	$\sigma\omega\mu\alpha\tau\text{-}\alpha$
G	$\alpha\acute{\iota}\omega\nu\text{-}\omicron\varsigma$	$\alpha\acute{\iota}\omega\nu\text{-}\omega\nu$	$\sigma\omega\mu\alpha\tau\text{-}\omicron\varsigma$	$\sigma\omega\mu\acute{\alpha}\tau\text{-}\omega\nu$
D	$\alpha\acute{\iota}\omega\nu\text{-}\iota$	$\alpha\acute{\iota}\omega(\nu)\text{-}\sigma\iota$	$\sigma\omega\mu\alpha\tau\text{-}\iota$	$\sigma\omega\mu\alpha(\tau)\text{-}\sigma\iota$
A	$\alpha\acute{\iota}\omega\nu\text{-}\alpha$	$\alpha\acute{\iota}\omega\nu\text{-}\alpha\varsigma$	$\sigma\omega\mu\alpha$	$\sigma\omega\mu\alpha\tau\text{-}\alpha$
V	$\alpha\acute{\iota}\omega\nu$	$\alpha\acute{\iota}\omega\nu\text{-}\epsilon\varsigma$	$\sigma\omega\mu\alpha$	$\sigma\omega\mu\alpha\tau\text{-}\alpha$

語尾の變化は次の規則に従って行われる。

1. 中性名詞の単語第一、第四、第五格は語根に等しい。但し最後の τ は §39.7 によりて脱落する。
2. 男性、女性の単数第一格は語根に ς を加える、そして §39.1 による音便の變化が伴う。但し $\nu, \rho, \varsigma, \omicron\nu\tau$ に終わる語根は更に ς を加うる事を拒み、これに先立つ母音 ϵ, \omicron を η, ω に延長する。

3. 男性、女性の単数第四格は子音に終わる根には α を附し、母音に終わる根には ν を附す。

4. 男性、女性の単数第五格は普通第一格と同一であるが、時には語根と同一の場合もある。

即ち**規則 1**によれば σῶμα の単数第一格は σῶματ の筈だが§39.7によれば τ は脱落して σῶμα となり、αἰών の単数第一格は αἰώνς で§39.5.dによれば αἰώς となる筈であるが、**規則 2**の但し書きにより αἰών となる。又 αἰών の単数第四格は αἰῶν-α であるが πόλις (市) の第四格は πόλιν である (**規則 3**)。又前掲の例の第五格は皆第一格と同一であるが、πατήρ の第五格は πάτερ となる (**規則 4**)。αἰών の複数第三格は αἰῶνσι であるが§39.5.dにより ν が脱落する。これらはそれぞれ記憶しなければならない。

§ 4 3. 続音 (Liquids -λ, -ν, -ρ) に終わる語根の名詞の変化

	根 ποιμην- 牧羊者	根 ἡγεμον- 支配者	根 ῥητορ- 雄弁家	根 πατερ- 父
N	ὁ ποιμήν	ὁ ἡγεμών	ὁ ῥήτωρ	ὁ πατήρ
G	ποιμένος	ἡγεμόνος	ῥήτορος	πατρός
D	ποιμένι	ἡγεμόνι	ῥήτορι	πατρί
A	ποιμένα	ἡγεμόνα	ῥήτορα	πατέρα
V	ποιμήν	ἡγεμόν	ῥήτορ	πάτερ
N	ποιμένες	ἡγεμόνες	ῥήτορες	πατέρες
G	ποιμένων	ἡγεμόνων	ῥητόρων	πατέρων
D	ποιμέ(ν)σι	ἡγεμό(ν)σι	ῥήτορσι(ν)	πατράσι(ν)
A	ποιμένας	ἡγεμόνας	ῥήτορας	πατέρας
V	ποιμένες	ἡγεμόνες	ῥήτορες	πατέρες

注意 1. 単数第一格は多くは語根の母音を延長したものでςを附加しない。但し ἄλας (塩) の場合 (これはλに終わる根を有する唯一の文字) はςを附す (この語の変化は不規則なり)。

注意 2. 上表より単数第五格が第一格と同一の場合と、語根と同一の場合とがある事を見出す。(§ 42.4)。

注意 3. πατήρ の場合には、単数第二、第三格、複数第三格に Syncopation (中間省略) が起こる。ἡ μήτηρ (母) ἡ θυγάτηρ (娘) ὁ γαστήρ (腹) も πατήρ と同様に变化する。ἀνὴρ (人、夫) の場合も同様で、ただνとρとの間にδを挿入し ἀνὴρ, ἀνδρός, ἀνδρί, ἀνδρα, ἄνερ; ἀνδρες, ἀνδρῶν, ἀνδράσι, ἀνδρας, ἀνδρες となる。

§ 4 4. 唇音 (Labials -π, -β, -φ) 又は口蓋音 (Palatals -κ, -γ, -χ) に終わる語根の名詞の変化

	根 Αραβ- アラビヤ人		根 σαρκ- 肉	
	単数	複数	単数	複数
N	ὁ Ἄραψ	Ἄραβες	ἡ σάρξ	σάρκες
G	Ἄραβος	Ἀράβων	σαρκός	σαρκῶν
D	Ἄραβι	Ἄραβι(ν)	σαρκί	σαρξί(ν)
A	Ἄραβα	Ἄραβας	σάρκα	σάρκας
V	Ἄραψ	Ἄραβες	σάρξ	σάρκες

注意 § 39.1.a, b による音便の変化が単数第一格、第五格、複数第三格に起こるだけで、他は変わらない。ὁ φύλαξ (番人) ἡ σάλπιγξ (ラッパ) ὁ κήρυξ (宣伝者) ἡ θρίξ (τριχ-ός) (毛) ἡ φλόξ (炎) 等もこの類である。

§ 4 5. 舌音 (Linguals -τ, -δ, -θ) に終わる語根の名詞の変化

	根 ἐλπίδ- 希望		根 χαρτ- 恩恵		根 ονοματ- 名	
	単	数	単	数	単	数
単 数	N	ἡ ἐλπίς	ἡ χάρις		τὸ ὄνομα	
	G	ἐλπίδος	χάριτος		ὀνόματος	
	D	ἐλπίδι	χάριτι		ὀνόματι	
	A	ἐλπίδα	χάριν		ὄνομα	
	V	ἐλίπῃ	χάρι		ὄνομα	
複 数	N	ἐλπίδες	χάριτες		ὀνόματα	
	G	ἐλπίδων	χαρίτων		ὀνομάτων	
	D	ἐλπίσι(ν)	χαρίσι(ν)		ὀνόμασι(ν)	
	A	ἐλπίδας	χαρίτας		ὀνόματα	
	V	ἐλίπιδες	χάριτες		ὀνόματα	

注意 1. ἐλπίς, χάρις の単数第一格、複数第三格に於て σ の前の δ 及び τ は §39.1.c により脱落する。即ち第一格 ἐλπι(δ)ς, χάρι(τ)ς 第三格 ἐλπι(δ)σι, χάρι(τ)σι となるべき筈のものが、上表の如くに変化する。

注意 2. ἐλπίς 及び χάρις の単数第五格、ὄνομα の第一、第四、第五格が母音で終わって居るのは、§39.7 により δ, τ が脱落したため。

注意 3. χάρις の単数第四格は χάριτα となるべきのに χάριν となって居る。この種の例として ὄ, ἦ, ὄρνις (鳥禽) は ὄρνιθος, ὄρνιθι, ὄρνιν となる。但し χάριτα, ὄρνιθα の形でも用いられる場合あり。

注意 4. ἡ νύξ (根 νυκτ- 夜) τὸ γάλα (根 γαλακτ 乳) の如くに κτ 終わる語根を有する文字も上例の如く変化するが、§39.1.b, c により ἡ νύξ, ὄ νύξ, ταῖς νυξίν, τοῖς γάλαξιν となる。

第十課 動詞の變化(その四)

Imperfect Indicative Passive 及び Middle

直説法未完了過去、受動態及び中態

§ 26. Secondary Tenses (§ 21) の Passive Voice の語尾は次の如くである。

	単 数	複 数
1	-μην	-μεθα
2	-σο	-σθε
3	-το	-ντο

この語尾は直説法第二時称及び祈願法の Passive 及び Middle

Voice の現在、未完了過去、不定過去（これは Middle のみ）及び完了過去の語尾となるのであるから Primary Tense の場合（§ 34 参照）と同じく、この場合 $\mu\eta\nu\sigma\tau\omicron\mu\epsilon\theta\alpha\sigma\theta\epsilon\nu\tau\omicron$ として一息に暗記する事が便利である。この二つの語尾を学習すれば Passive 及び Middle Voice の大部分の語尾を知った事になる。

§ 4 7. λύω の Imperfect Indicative Passive

	単 数		複 数	
1	(έλυ-ό-μην)	έλυόμην	(έλυ-ό-μεθα)	έλυόμεθα
2	(έλύ-ε-σο)	έλύον	(έλύ-ε-σθε)	έλύεσθε
3	(έλύ-ε-το)	έλύετο	(έλύ-ο-ντο)	έλύοντο

注 1. 第二人称単数は έλύεσο となるべきだが Passive Present の場合と同じく、二つの母音の間の σ が脱落して έλύεο となり、これが § 29 の表のごとく収縮して έλύου となる。

注 2. Imperfect Indicative Passive は過去に於て進行、又は継続しつつある受動的状態を示す。

§ 4 8. § 37 と同じく αω, εω, οω の語尾を有する動詞は Imperfect Passive に於てもその母音を収縮する。例えば

		τιμάω	φιλέω	δουλόω
単 数	1	έτιμώμην (μαόμην)	έφιλ-ούμην (εόμην)	έδουλ-ούμην (οόμην)
	2	-ῶ etc.	-οῦ̄ etc.	-ου etc.
	3	-ᾶτο	-εῖτο	-οῦτο
複 数	1	-ῶμεθα	-ούμεθα	-ούμεθα
	2	-ᾶσθε	-εῖσθε	-οῦσθε
	3	-ᾶντο	-οῦντο	-οῦντο

§ 49. 従来既に冠詞、名詞、動詞、形容詞の一部を学び、なお και の如き接続詞や等の如き前置詞の二、三を学んだ。ここになお二、三の多く用いられる語を学ぶことが必要である故、ここにこれを加える。

(1) δέ は軽い反対の意味を表わす接続詞で非常に多く用いられて居り、日本語に一々これを訳する事は出来ない。英語の but よりも弱く、文章の初頭には用いる事が出来ない。

(2) ἀλλά は δέ よりも強い反対を意味する。英語の but。

(3) γάρ は英語の for (何となれば…の故に) に相当する。しかし意味としては軽い方で、訳する必要がない場合もあり、日本訳にはこの語を訳して居ない場合が少なくない。この語も δέ と同じく文章の初頭には用いない。

(4) ὅτι は英語の接続詞 that 及び because に相当し、或いは γάρ よりも更に強く理由を示す場合に用い、或いは単なる接続詞として“…の事を”なる意味をもって二つ文章を接続する場合に用いられる。

(5) οὐ, οὐκ, οὐχ は英語の not に相当する否定の語で οὐ は子音の前、οὐκ は母音の前、οὐχ は硬母音 Rough Breathing の前に用いられる。

単 語

語根が続音に終わるもの

αἰών, ὁ -ῶντος 時代、世	θυγάτηρ, ἡ, -τρός 娘
ἀμπελών, ὁ -ῶντος 葡萄園	μήτηρ, ἡ, -τρός 母
ἀνήρ, ὁ, ἀνδρός 人、夫	πατήρ, ὁ, -τρός 父
ἀστήρ, ὁ, -έρος 星	ποιμὴν, ὁ, -ένος 牧羊者
γαστήρ, ὁ -τρός 腹	ρήτωρ, ὁ, -τορος 雄弁家
ἡγεμών, ὁ, -όνος 支配者	σωτήρ, ὁ -τήρος 救い主

語根が唇音、又は口蓋音に終わるもの

Ἄραβ, ὁ, Ἄραβος	アラビア人	σάρξ, ἡ, κός	肉
θρίξ, ἡ (τριχός)	毛	φλόξ, ἡ, -γός	炎
κήρυξ, ὁ -κος	宣伝者	φύλαξ, ὁ, -κος	番人
σάλπιγξ, ἡ, -γγος	ラッパ		

語根が舌音に終わるもの

αἷμα, τό, -τος	血	ῥήμα, τό, -τος	語
ἐλπίς, ἡ, -δος	希望	σπέρμα, τό, -τος	種、裔
θέλημα, τό, -τος	意思	στόμα, τό, -τος	口
γάλα, τό, -κτος	乳	σῶμα, τό, -τος	体
νύξ, ἡ, -κτός	夜	πνεῦμα, τό, -τος	靈
ὄνομα, τό, -τος	名	χάρις, ἡ, -τος	恩恵

その他の語

κηρύσσω	宣べ伝える	πρόβατον, τό	羊
περιπατέω	歩む		

練 習 第 八

次のギリシャ語を訳せ。

(1) σωζόμεθα γὰρ ἐλπίδι καὶ τῇ χάριτι τοῦ θεοῦ. (2) ἐκάλουν αὐτὸν¹
τὸν σωτήρα τοῦ κόσμου. (3) εἰ μὴ² ἐσθίετε τὴν σάρκα τοῦ υἱοῦ τοῦ
ἀνθρώπου οὐκ ἔχετε ζωὴν ἐν ἑαυτοῖς³. (4) οὗτοι⁴ οἱ λόγοι ἐλαλοῦντο
ὑπὸ τοῦ πατρὸς πρὸς τὴν μητέρα. (5) φωνὴ τῆς σάλπιγγος ἐφώνησεν ἐν
τῇ νυκτί. (6) αἱ δὲ θυγατέρες εἶχον τὰς λαμπάδας. (7) ὁ ῥήτωρ
περιπατεῖ καὶ ἐλάλει ἐν τῷ ὀνόματι τοῦ διδασκάλου.

¹ 彼を

² εἰ μὴ に非ざれば

³ 汝ら自身に

⁴ これらの

(8) οἱ μαθηταὶ εἰσι ποιμένες τῶν προβάτων. (9) ἐσμέν υἱοὶ τῆς ἡμέρας, οὐ τῆς νυκτός. (1 0) ἄνδρες ἀδελφοί,¹ μαθητῆς τοῦ Ζωτῆρός εἰμι.

(1 1) ὁ λόγος τοῦ θεοῦ ἐκηρύσσεται ὑπὸ τῶν ἀποστόλων. (1 2) μετὰ τοῦτο ἐζητοῦντο ὑπὸ τοῦ ὄχλου.

次の語をギリシャ語に訳せ。

《 1 》子供たちは父たち及び母たちと共に (σύν+第三格) 歩いて居る。《 2 》我らはキリストの血と肉の栄えを見る。《 3 》福音の宣べ伝え者は主の意思を宣べ伝えた。《 4 》聖書は弟子たちから愛されて居った。《 5 》若者らはアラビヤ人によって教えられた。《 6 》これらの恩恵と希望の言葉は弟子たちにより主の名に於て語られた。《 7 》主の名は弟子たちによりて崇められて居った。《 8 》人の子らはラッパの音を聞いて居った。《 9 》弟子たちは聖霊に (第二格) 満たされて居った。《 1 0 》我らはアブラハムの裔なり。《 1 1 》汝らは聖霊によりて (ἐν+第三格) バプタイズされた。

第十一課 代名詞

人称代名詞及び指示代名詞の一部

§ 5 0. 人称代名詞 Personal Pronoun は人、又は物の代わりに用いられる代名詞で、その第一人称及び第二人称は次の如し。

		第一人称		第二人称	
単 数	N	ἐγώ	私ハ、ガ	σύ	汝ハ、ガ
	G	ἐμοῦ 又は μου	私ノ	σοῦ 又は σου	汝ノ
	D	ἐμοί 又は μοι	私ニ	σοί 又は σοι	汝ニ
	A	ἐμέ 又は με	私ヲ	σέ 又は σε	汝ヲ
複 数	N	ἡμεῖς	我らハ、ガ	ὕμεῖς	汝等ハ、ガ
	G	ἡμῶν	我らノ	ὕμῶν	汝等ノ
	D	ἡμῖν	我らニ	ὕμῖν	汝等ニ
	A	ἡμᾶς	我らヲ	ὕμᾶς	汝等ヲ

¹ ἄνδρες ἀδελφοί, は“兄弟たちよ”

注1. 第一格は文章に於て普通これを省略し、意を強めんとする時のみこれを用いる。

注2. 単数第二、三、四格には二種あり、第一列はアクセントを保有するもので、特に意味を強める場合に用い、第二列は従尾語 Enclitica (§7.a) として、そのアクセントを前の語に投げかけるものである。

しかしてアクセントを保有する場合は

(a) 反対を示す場合 οὐκ ἐμοί, ἀλλὰ σοί ἀρέσκει¹

(b) ἐπί, πρὸς 等の前置詞の後。

§ 5 1. 人称代名詞の第三称としては形容代名詞 Adjective Pronoun αὐτός の変化を用いる。但し第一格は特に強意に用いられる。

	単 数			複 数		
	男	女	中	男	女	中
N	αὐτός	αὐτή	αὐτό	αὐτοί	αὐταί	αὐτά
G	αὐτοῦ	αὐτῆς	αὐτοῦ	αὐτῶν	αὐτῶν	αὐτῶν
D	αὐτῷ	αὐτῇ	αὐτῷ	αὐτοῖς	αὐταῖς	αὐτοῖς
A	αὐτόν	αὐτήν	αὐτό	αὐτούς	αὐτάς	αὐτά

この変化は定冠詞の変化に一致して居る。

例 πάντα δι' αὐτοῦ ἐγένετο. (ヨハネ 1:3)

万物は彼によって成った。

ὁ δὲ Ἰησοῦς λέγει αὐτοῖς.

イエス彼らに言い給う。

¹ 彼は気に入る。

§ 5 2. αὐτός は前節の如く用いられる外

(1) 名詞の後に来る場合には、英語の himself, herself, itself に相当する意味、即ち彼自身、彼女自身等の意味に用いられる。

例 ὁ βασιλεὺς αὐτός 又は αὐτὸς ὁ βασιλεὺς 王自身

(2) 冠詞と共に名詞に先立ちて用いられる時は“同じ”the same の意味となる。

例 ὁ αὐτὸς βασιλεὺς 同じ王

§ 5 3. 指示代名詞 οὗτος (このもの this) 及び ἐκεῖτος (かのもの that) の変化は次の如くである。

		男	女	中	男	女	中
単 数	N	οὗτος	αὕτη	τοῦτο	ἐκεῖνος	ἐκείνη	ἐκεῖνο
	G	τούτου	ταύτης	τούτου	ἐκεῖνου	ἐκείνης	ἐκεῖνου
	D	τούτῳ	ταύτῃ	τούτῳ	ἐκεῖνῳ	ἐκείνῃ	ἐκεῖνῳ
	A	τούτον	ταύτην	τοῦτο	ἐκεῖνον	ἐκείνην	ἐκεῖνο
複 数	N	οὗτοι	αὗται	ταῦτα	ἐκεῖνοι	ἐκεῖναι	ἐκεῖνα
	G	τούτων	τούτων	τούτων	ἐκεῖνων	ἐκεῖνων	ἐκεῖνων
	D	τούτοις	ταύταις	τούτοις	ἐκεῖνοῖς	ἐκεῖναις	ἐκεῖνοῖς
	A	τούτους	ταύτας	τούτα	ἐκεῖνους	ἐκείνας	ἐκεῖνα

記憶の為の注意

(a) οὗτος は男性、女性の単数第一格に語首の τ が無く、その他は τ で始まる。

(b) οὗτος の第一音節は ου と αυ との二種あるが、第二音節が ο, ου, ω の時は第一音節が ου で第二音節が η 又は α の時は第一音節が αυ となる。

(c) ἐκεῖνος は§27 の形容詞 σοφός の如くに変化する。但し中性単数第一格及び第四格の語尾に ν が無い。

(1) οὗτος, ἐκεῖνος はその形容する名詞と性、数、格に於て一致する。そして常に冠詞を伴う。その用法次の如し。

οὗτος ὁ ἄνθρωπος 又は ὁ ἄνθρωπος οὗτος (この人は)

ἐν ἐκείνῃ τῇ ἡμέρᾳ 又は ἐν τῇ ἡμέρᾳ ἐκείνῃ (かの日には)

τοῦτο τὸ εὐαγγέλιον 又は τὸ εὐαγγέλιον τοῦτο (この福音は、を)

この例の示すが如く、冠詞は常に名詞の上に直接置かれ、決して離れることがない。

(2) なお指示代名詞は人称代名詞第三人称の代わりに用いられる。この場合は“この人”“かの女”等特に強い意味を示す為である。

(3) ταῦτα と ταὐτά とは非常に似て居るが、別の語故、注意して区別する事を要す。前者は οὗτος の中性複数第一格および第四格であり、後者は τὰ αὐτά 即ち αὐτός の中性複数第一格第四格に冠詞を附したものの収縮したものである。

即ち ταῦτα は「これらのもの」であり、ταὐτά は「同じ物」を意味する。聖書の写本により ταὐτά が τὰ αὐτά となって居るものもある。

(4) αὕτη, αὐταί と αὐτή, αὐταί とも混同してはならぬ。前者は οὗτος の女性第一格単数、複数で、後者は αὐτός の女性第一格単数、複数である。Breathings (§4) とアクセント (§5) によりてこれを区別しなければならない。

単 語

ἀναγινώσκω 読む

Ἰωάννης ヨハネ

ἀποθνήσκω 死ぬ

Ἰουδαῖος ユダヤ人

διώκω 迫害する

μετά prep. (+四格) 後に

πείθω 説服する

(+二格) 共に

σπείρω 種蒔く

οὖν それゆえに

ἔρημος, ἡ 荒野、砂漠 εὐθύς, adv. 直ちに
οἰκοδεσπότης, ὁ 家主、家長 καρπός, ὁ 果実
πρεσβύτερος, ὁ 老人

練 習 第 九

次のギリシャ語文を訳せ。

(1) οὗτοι οἱ ἄνθρωποι ἀπέθνησκον ἐν τῇ ἐρήμῳ. (2) οὗτος γὰρ ἦν μαθητῆς Ἰωάννου τοῦ βαπτιστοῦ. (3) αὕτη ἐστὶν ἡ ἀγάπη τοῦ θεοῦ. (4) ἐδόξαζον τὴν σοφίαν καὶ τὴν δικαιοσύνην αὐτοῦ. (5) ἡμεθα [= ἡμεν] ἐν τῇ οἰκίᾳ ἐκείνων τῶν μαθητῶν. (6) ἀνεγίνωσκες αὐτοῖς τὰς γραφὰς ἐν ταῖς ἡμέραις ἐκείναις. (7) αὕτη γὰρ ἦν ἡ ἐντλή αὐτοῦ. (8) ὁ Ἰησοῦς αὐτὸς οὐκ ἐβάπτιζεν ἀλλὰ οἱ μαθηταὶ αὐτοῦ. (9) ἡ ζωὴ μένει ἐν αὐτοῖς. (10) διὰ τοῦτο ἐπέιθου τοῖς λόγοις τῶν κριτῶν.

次の文章をギリシャ語に訳せ。

(1) ユダヤ人らは彼の弟子たちを迫害した。(2) これらの人々は主の福音の種子を蒔く。(3) それらの日の後に取税人は直ちに砂漠の方に赴いた。(4) これらの青年たちは先生自身によって(ὑπό+第二格)教えられて居った。(5) これらの果実は家主から(ὑπὸ τοῦ)老人らに(πρὸς τούς)送られるのを常として居った。(6) 我らは汝らに神の言を教えて居った。(7) 汝らの先生は我らに彼の善き誠命を語って居った。(8) それらの日には善き賜物(ῥε)は我らに送られて居った。(9) この場所で我らの目は天(ῥε)の主を見て居った。(10) それ故にその後(μετὰ ταῦτα)直ちに弟子たちは我らに神の国を宣べ伝えて居った。

第十二課 動詞の變化(その五)

Deponent Verbs 及び

関係代名詞 Relative Pronoun

§ 5 4. Deponent Verbs とは Middle Voice 又は Passive Voice (§ 35) の形でありながら Active Voice の意味を持つものを云う。この名称はラテン語の deponere (放棄する) より来たもので、受動的の意味を捨てて能動的の意味を取った事を示す。

例 ἔρχομαι の Present と Imperfect の變化下の如し。

		Present		Imperfect	
単 数	1	ἔρχομαι	私は来つつある	ἤρχόμην	私は来つつあった
	2	ἔρχη	等々	ἤρχου	等々
	3	ἔρχεται		ἤρχετο	
複 数	1	ἔρχόμεθα		ἤρχόμεθα	
	2	ἔρχεσθε		ἤρχεσθε	
	3	ἔρχονται		ἤρχοντο	

上表により明らかである通り、變化は § 34、§ 46 の Passive Voice の語尾と同一で、意味だけが Active Voice に相当して居る。この種の語は少なくない。

§ 5 5. οἶδα (知る) なる動詞は不規則動詞であるが、Present Tense に於ては、やや規則正しく次の如くに変化する。

	単 数	複 数
1	οἶδα	οἶδαμεν
2	οἶδας	οἶδατε
3	οἶδε(v)	οἶδασι(v)

例 οἶδα ὅτι πιστεύεις.

私は君が信ずる事を知って居る（使徒 26:27）。

οἶδαμεν γὰρ ὅτι ὁ νόμος πνευματικός ἐστίν.

我々は律法は靈なるものと知って居るから（ローマ 7:14）。

οὐκ οἶδατε ὅτι οἱ ἅγιοι τὸν κόσμον κρινούσιν;

君たちは知らぬか、聖徒は世を審くべきものである事を
（I コリント 6:2）。

（注意）；は疑問符号で？に相当する。

§ 5 6. 關係代名詞 Relative Pronoun (ὅς, ἣ, ὅ - 英語の who, which, that 等に相当する) は次の如くに变化する。

	単 数			複 数		
	男	女	中	男	女	中
N	ὅς	ἣ	ὅ	οἷ	αἷ	ἅ
G	οὗ	ἣς	οὔ	ῶν	ῶν	ῶν
D	ᾧ	ἣ	ᾧ	οἷς	αἷς	οἷς
A	ὃν	ἣν	ὃ	οὓς	ἄς	ἅ

(1) 關係代名詞の变化は名詞の第一及び第二变化 (§17, §12) に類似して居り、ただ Rough Breathing と中性単数第一第四格に於て v が無い事が異なっている。又冠詞の变化とも類似して居り、差異は ὁ, ἡ, τό, τά が ὅς, ἣ, ὅ, ἅ なる事及び τ が無い点である。

(2) アクセントは冠詞の場合と同じく第二第三格に於て Circumflex その他は Acute である。

(3) 次の差別に注意すべし。

冠詞 (Proclitics)

關係代名詞 (アクセントあり)

ὁ (男性)

ὅ (中性)

ἡ

ἣ

οἱ

οἷ

αἱ

αἷ

(4) 関係代名詞にはこれに先立つ名詞代名詞あり（これを Antecedent 先行詞と云う）、これを受けて次の節に関係せしめる。而して関係代名詞とその先行詞とは、原則として Number 数及び Gender 性に於て一致し Case において不一致である。Case はその関係代名詞が属する句に於けるその職分如何によりて定まる。

例 ὁ ἀστήρ ὃν εἶδον ἐν τῇ ἀνατολῇ προῆγεν αὐτούς. (マタ 2:9)

東で見た星が彼らに先立って行った。

βλέπω τοὺς ἀνθρώπους οἱ ἔρχονται.

私は来つつある人々を見る。

αὕτη ἐστὶν ἡ γραφὴ ἣν ἔγραφον ὁ ἀπόστολος.

これはその使徒の書いて居った書物である。

(5) 関係代名詞はその先行詞と Gender, Number の差がある場合、又先行詞が一つの節、句等の場合もあり。即ち (a) 句や節が中性の Antecedent となる場合があり、(b) 関係代名詞の性、数が Antecedent の性、数によらずして、その内容によりて定まる場合あり(使徒 15:17、ガラ 4:19、ピリ 2:15、使徒 15:36 等)、(c) 又 Antecedent 以外の文字の性に引き付けられる場合あり、(d) 又第四格たるべき関係代名詞が Antecedent の格(第二、第三格)に引き寄せられる場合等がある。

単 語

Deponent Verbs

ἀπ-έρχομαι 別れる、去る

εἰσ-έρχομαι 入る

ἀπο-κρίνομαι 答える

ἐξ-έρχομαι 出る

ἄρχομαι 始める

ἐργάζομαι 働く、為す

γίνομαι なる become

ἔρχομαι 来る

δέχομαι 受け取る

δι-έρχομαι 通過する

δύναμαι ... し^{あた}能う

その他の単語

ἀγρός, ὁ 畑、野、土地

ἀμαρτωλός, ὁ 罪人

δένδρον, τό 木

σκάνδαλον, τό 躓く物

μένω 留まる、残る

πορεύομαι 行く

προσ-έρχομαι 進む、近づく

προσ-εύχομαι 祈る

νηστεύω 断食する

φρονέω ^{おも} 念う

ὧδε adv. ここで

εἴτε...εἴτε ～か～か

οὔτε...οὔτε 双方とも否定の場合

練習 第十

次のギリシャ語を訳せ。

- (1) ἡρνοῦντο τὸν κύριον τῆς δόξης ὃς τηρεῖ αὐτοὺς μετὰ τῶν μαθητῶν.
(2) κύριε, καλὸν ἐστὶν ἡμᾶς¹ ὧδε εἶναι.² [マタ 17:4] (3) ἀπεκρινόμεν
τοῖς ἀγγέλοις οἱ ἤρχοντο ἀπὸ τῶν οὐρανῶν. (4) οὗτος δέχεται τοὺς
ἀμαρτωλοὺς οἱ ἔρχονται πρὸς αὐτὸν καὶ ἐσθίει μετ' αὐτῶν. (5) τηρεῖτε
τὰς ἀγίας ἐντολάς ἃς δέχεσθε ἀπὸ τῶν διδασκάλων. (6) οὐκ οἶδατε ὅτι
ἀγγέλους κρινοῦμεν; [I コリ 6:3] (7) οἶδα ἄνθρωπον ἐν Χριστῷ — εἴτε ἐν
σώματι οὐκ οἶδα, εἴτε ἐκτὸς³ τοῦ σώματος οὐκ οἶδα, ὁ θεὸς οἶδεν. [II コ
リ 12:2] (8) μετὰ ἐκεῖνας τὰς ἡμέρας ἀπῆρχοντο πρὸς τὸν τόπον, ἐν ᾧ οἱ
νεανίαί ἔμενον μετὰ τῶν προβάτων. (9) διηρχόμεθα οὖν τοὺς ἀγροὺς
αὐτῶν μετὰ τῶν τελωνῶν. (10) οὐ δύναται δένδρον ἀγαθὸν καρποὺς
κακοὺς ποιεῖ.

¹ Infinitive の主語は四格を用いる

² to be, εἰμί の Infinitive

³ 外に

次の文章をギリシャ語に訳せ。

(1) 汝はわが躓き物なり、汝は神のこと (τὰ τοῦ θεοῦ) を念わずかえって人のことを思う (マタ 16:23)。(2) 兄弟たちの愛は彼の心の中に留まって居る。(3) 彼が受け入れた奴隷たちは畑で働いて居る。(4) 私が教えて居った子供等は去りつつある。(5) ヨハネがバプテスマを施した弟子たちは彼と共に留まって居ない。(6) 私がその人々の為にこれを為しつつあるところの人々は奴隷である。(7) 汝らは我をも我が父をも知らず (ヨハ 8:19)。(8) 世は汝らを憎むこと (μισεῖν) 能わねど我を憎む (ヨハ 7:7)。(9) (人々) 来りて彼に言う“何故 (διὰ τί) ヨハネの (Ἰωάννου) 弟子たちとパリサイ人らの (τῶν Φαρισαίων) 弟子たちとは断食して (δέ) 汝の弟子たちは断食せぬか” (マルコ 2:18)。

第十三課 名詞の変化 (その四)

名詞の第三変化 (中)

§ 57. 語根が σ (εσ 及び ασ) に終わる名詞の変化 (なお §40～§45 参照)

この変化に属するものは多く ος を語尾とする中性名詞で、その他若干の ας を語尾とする中性名詞及び女性名詞 ἡ αἰδώς (羞恥) 等がある。

例 τὸ γένος (種族、根 γενεσ-)、τὸ κρέας (肉、根 κρεασ-)

	単 数		複 数	
N	γένος	κρέας	γένη(ε(σ)α)	κρέα(εα(σ)α)
G	γένους(ε(σ)ος)	κρέως(α(σ)ος)	γενῶν(ε(σ)ων)	κρεῶν(εα(σ)ων)
D	γένει(ε(σ)ι)	κρέαι(α(σ)ι)	γένεσ(σ)ι(ν)	κρέασ(σ)ι
A	γένος	κρέας	γένη(ε(σ)α)	κρέα(εα(σ)α)
V	γένος	κρέας	γένη(ε(σ)α)	κρέα(εα(σ)α)

注意 1. 語根が εσ に終わるものは単数第一格に於て語尾が ος に変化する（第四、五格も同様）。

変化 2. 第二、三格において σ が二つの母音の間に入るので脱落し（§35 参照）二つの母音は収縮する。即ち γένεσος は γένεος となり、これが §29 の表により γένους となる。

変化 3. この変化に属する名詞で新約聖書に用いられるものも多くある。これを第二変化の名詞の語尾が ος に終わるものと混同しない様にしなければならない。

§ 5 8. 語根が ι 又は υ に終わる名詞の変化

例 ἡ πόλις（市、郡、根 πολι-）、ὁ ἰχθύς（魚、根 ἰχθυ-）。

	単 数		複 数	
N	πόλις	ἰχθύς	πόλεις	ἰχθύες
G	πόλεως	ἰχθύος	πόλεων	ἰχθύων
D	πόλει	ἰχθύι	πόλεσι	ἰχθύσι
A	πόλιν	ἰχθύν	πόλεις	ἰχῦς(又はύας)
V	πόλι	ἰχθύ	πόλεις	ἰχθύες

注意 1. 語根の終わりの ι は単数の第一、四、五格に於てのみあらわれ、その他の数及び格に於ては ι の前に ε を挿入し、そして ι は脱落した形になって居る。

注意 2. 上記の場合に於て単数第三格と複数第一格に於て語尾の収縮が行われる。

注意 3. πόλις の単数第二格は ος の代わりに ως となる。

注意 4. 第二格の ως も ων も共にアクセントについては短母音として取り扱われる。πόλεως, πόλεων のアクセントに注意して §6b を参照すべし。

注意 5. 動詞より来る女性名詞で σις に終わる語は πόλις の如く変化する。例 λύσις (λύω), κρίσις (κρίνω)。

注意 6. 単数第四格は χάρις の場合と同じく ν に終わり α に終わらない (§45 注意 3 参照)。

注意 7. 語根の終わりの υ は ι の場合と異なり全体にわたりて不変である。

注意 8. 複数第四格は ιχθύς と ιχθύας の二つの形があり新約聖書は主として後者を用いる。

単 語

語根が εσ 又は ασ に終わるもの

ἄνθος, τό 花	μέλος, τό 足
ἔθνος, τό 種族、異邦人 (複)	μέρος, τό 部分
ἔθος, τὸ 習慣 (ethics)	τέλος, τό 終末、目的
εἶδος, τό 外見、見ゆる所	ὄρος, τό 山
ἔλεος, τό 憐憫	πλήθος, τό 群衆
ἔτος, τὸ 一年	σκότος, τό 暗黒

語根が ι 又は υ に終わるもの

ἀνάστασις, ἡ 復活	ὄφις, ὁ 蛇
ἀποκάλυψις, ἡ 顕現、黙示	πῆχυς, ὁ クビト (尺)
γνώσις, ἡ 知識	πίστις, ἡ 信仰
δύναμις, ἡ 能力	παράκλησις, ἡ 慰藉、薦め
θλίψις, ἡ 患難	συνείδησις, ἡ 良心
κρίσις, ἡ 審判、公平	στάσις, ἡ 擾乱、反逆
κτίσις, ἡ 創造、被造物	στάχυς, ὁ 穂

練 習 第 十 一

次のギリシャ語を訳せ。

(1) ἀκούετε τὸ εὐαγγέλιον ὃ κηρύσσω ἐν τοῖς ἔθνεσι. (2) ἐὰν (if) μὴ νίψω¹ σε, οὐκ ἔχεις μέρος μετ' ἐμοῦ. [ヨハ 13:8] (3) ἐποίησέν [1. Aorist] τε² ἐξ ἑνὸς [εἰςの第二格] πᾶν ἔθνος ἀνθρώπων. [使徒 17:26] (4) ἀπὸ τῶν πόλεων εἰς τὰ ὄρη. (5) οὐκ ἔχετε τὴν κρίσιν καὶ τὸ ἔλεος καὶ τὴν πίστιν. [マタ 23:23 参照] (6) ἀλλ' αὕτη ἐστὶν ὑμῶν ἡ ὥρα καὶ ἡ ἐξουσία τοῦ σκότους. [ルカ 22:53] (7) περὶ³ ἀναστάσεως νεκρῶν ἐγὼ κρίνομαι. [使徒 24:21] (8) καὶ τὸ ἔλεος αὐτοῦ εἰς γενεὰς καὶ νεεάς. [ルカ 1:50] (9) τὰ ἔθνη ἐδόξαζον τὸν θεόν. (10) εἰ δοξάζεται ἐν μέλος, συγκαίρει πάντα τὰ μέλη. (11) ἠκολούθει αὐτῷ πολὺ πλῆθος τοῦ λαοῦ καὶ γυναικῶν.

次の文章をギリシャ語に訳せ。

(1) 我は復活なり生命なり [ヨハ 11:25]。 (2) 凡ての造られたものに福音を宣べ伝えよ (κηρύξατε) [マコ 16:15]。 (3) 我らは見ゆる所によらず (οὐ διά+G) 信仰によりて歩むからだ (II コリ 5:7)。

(4) 汝ら皆信仰によってキリスト・イエスにあつて神の子だからである (ガラ 3:26)。 (5) これ汝らの信仰が人の智慧によらず神の能力に頼らん為である (ἵνα ἡ ἐν+D) (I コリ 2:5)。 (6) 命令 (ἡ παραγγελία) の目的は清き心と善き良心と偽りなき (ἀνυπόκριτος) 信仰とより出ざる (ἐκ+G) 愛にある (I テモ 1:5)。 (7) 我ら皆知識あることを知つて居る (I コリ 8:1)。 (8) 何となれば我らの薦めは迷い (πλάνη) から出たのではないから (I テサ 2:3)。 (9) 聖なる霊による我が良心の証しを彼は聞いて居る。 (10) 彼の子は彼に魚を求めて居つた (αἰτέω, ἡτεῖ)、ところが (καὶ) 彼は蛇を与えた。

(11) 彼らは主の慰めについて (ἐπι+D) 心の中に喜んで (χαίρω) 居つた。

¹ νίπτω (洗う) の未来形

² 強意の語

³ 関して

第十四課 形容詞の変化（その二）

§ 59. 形容詞の子音変化。例 ἀληθής（真の）、σώφρων（賢き）

		男、女	中	男、女	中
単 数	N	ἀληθής	ἀληθές	σώφρων	σῶφρον
	G	ἀληθοῦς (έος)	ἀληθοῦς	σώφρονος	σῶφρονος
	D	ἀληθεῖ (εί)	ἀληθεῖ	σώφροσι	σῶφροσι
	A	ἀληθῆ (έα)	ἀληθές	σώφρονα	σῶφρον
	V	ἀληθές	ἀληθές	σῶφρον	σῶφρον
複 数	N	ἀληθεῖς (έες)	ἀληθῆ (έα)	σώφρονες	σῶφρονα
	G	ἀληθῶν (έων)	ἀληθῶν	σωφρόνων	σῶφρόνων
	D	ἀληθέσι (ν)	ἀληθέσι (ν)	σώφροσι	σῶφροσι
	A	ἀληθεῖς (έας)	ἀληθῆ (έα)	σώφρονας	σῶφρονα
	V	ἀληθεῖς (έες)	ἀληθῆ (έα)	σώφρονες	σῶφρονα

この変化の特徴は男性と女性とが同一の変化を為し、而して凡ての変化が名詞の第三変化によって居る点である。

注意 1. この種に属する語の多くは-ης 又は-ης か-ων 又は-on に終わる。

注意 2. 語根が-ης に終わるものでも、その第一格の語尾は § 57 注意 1 に於ける如く ος に変化しない。

§ 60. 形容詞の混合変化

この変化に属する語は女性のみ第一変化 (§ 16～§ 18) に由り、他は第三変化 (§ 57、§ 58) に由るのがその特徴である。

例 ὀξύς (鋭き)

	単 数			複 数		
	男	女	中	男	女	中
N	ὀξύς	ὀξεία	ὀξύ	ὀξεῖς	ὀξεῖαι	ὀξέα
G	ὀξέος	ὀξείας	ὀξέος	ὀξέων	ὀξειῶν	ὀξέων
D	ὀξεῖ	ὀξείᾱ	ὀξεῖ	ὀξέσι(v)	ὀξείαις	ὀξέσι(v)
A	ὀξύν	ὀξεῖαν	ὀξύ	ὀξεῖς	ὀξείας	ὀξέα
V	ὀξύ	ὀξεία	ὀξύ	ὀξεῖς	ὀξεῖαι	ὀξέα

注意 1. 語根の末尾の υ は単数第一、第四、第五格を除き、その他は皆 ε に変ず。

注意 2. 単数第三格の εῖ は収縮して εῖ となり、複数第一、第四、第五格に於て ἐες, ἐας は収縮して εῖς となる。ただ単数第二格の ἐος、中性複数の ἐα は収縮しない。

§ 6 1. 最もしばしば用いられる形容詞 πᾶς (凡ての) もこの変化に属す。

	単 数			複 数		
	男	女	中	男	女	中
N	πᾶς	πᾶσα	πᾶν	πάντες	πᾶσαι	πάντα
G	παντός	πάσης	παντός	πάντων	πασῶν	πάντων
D	παντί	πάσῃ	παντί	πᾶσι	πάσαις	πᾶσι
A	πάντα	πᾶσαν	πᾶν	πάντας	πάσας	πάντα
V	πᾶς	πᾶσα	πᾶν	πάντες	πᾶσαι	πάντα

動詞の Aorist Tense の Participle もこの変化に属する。これは Participle を学ぶ場合に述べる事にする。

§ 6 2. 不規則変化の形容詞

形容詞の中で最もしばしば用いられる πολὺς (多くの) 及び μέγας (大なる) は不規則に変化する。即ち複数に於ては各性とも定冠詞の複数の語尾と同一の語尾を有するけれども、単数に於ては不規則に変化する。即ち

		男	女	中	男	女	中
単 数	N	πολύς	πολλή	πολύ	μέγας	μεγάλη	μέγα
	G	πολλοῦ	πολλῆς	πολλοῦ	μεγάλου	μεγάλης	μεγάλου
	D	πολλῶ	πολλῆ	πολλῶ	μεγάλῳ	μεγάλῃ	μεγάλῳ
	A	πολύν	πολλήν	πολύ	μέγαν	μεγάλην	μέγα
	V	πολύ	πολλή	πολύ	μέγα	μεγάλη	μέγα
複 数	N	πολλοί	πολλαί	πολλά	μεγάλοι	μεγάλοι	μεγάλα
		etc	etc	etc	etc	etc	etc

第十五課 動詞の変化（その六）

Future Indicative Active 及び Middle

§ 6 3. Future Indicative は将来起らんとして居る事柄を示す Tense である。λύω の Future Indicative Active 及び Middle は次表の如し。

	Future Indicative Active	Future Indicative Middle
1	λύ-σ-ω	λύ-σ-ο-μαι
2	λύ-σ-εις	λύ-σ-η
3	λύ-σ-ει	λύ-σ-ε-ται
1	λύ-σ-ο-μεν	λυ-σ-ό-μεθα
2	λύ-σ-ε-τε	λύ-σ-ε-σθε
3	λύ-σ-ου-σι	λύ-σ-ο-νται

注意 1. Middle Voice とは動詞の主語が自分自身に働きかける場合か、又は自分自身の為にある事を為す場合に用いられる Voice を云う。

注意 2. Future Tense の変化は Present Tense の結合母音の前に σ を挿入したもので、極めて容易に記憶が出来る。

Future Tense につき少々複雑をきたす原因は、次に示す音便及び語根に関する変化であって、これには充分注意しなければならない。

(1) σ (+ 結合母音) の前の母音は Future Tense に於て普通延長され α=η ε=η ο=ω υ=υ (長音) となる。

例 τιμά-ω の未来は τιμή-σω、ποιέ-ω の未来は ποιή-σω、δουλόω の未来は δουλώ-σω、νικά-ω の未来は νική-σω

(2) Mute Stems は § 39.1.abc の変化を生ず。即ち

(a) Labials 唇音 π, β, φ + σ (+ 結合母音) = ψ (+ 結合母音)

(b) Palatals 口蓋音 κ, γ, χ + σ (+ 結合母音) = ξ (+ 結合母音)

(c) Linguals 舌音 τ, δ, θ + σ (+ 結合母音) = σ (+ 結合母音)

例 (a) γράφω の未来は γράψω (根 γραπ-)

βλέπω の未来は βλέψω (根 βλεπ-)

νίπτω の未来は νίψω (根 νιβ-)

(b) ἄγω の未来は ἄξω (根 ἄγ-)

ἄρχομαι の未来は ἄρξομαι (根 ἀρχ-)

διώκω の未来は διώξω (根 διωκ-)

(c) σώζω の未来は σώσω (根 σωδ-)

πείθω の未来は πείσω (根 πειθ-)

(3) 上例の中にもある様に動詞の現在形から直ちに動詞根 Verbal Stem を見出し得ないものがあるから注意を要す。即ち

(イ) 動詞の根に τ が加わって現在形を成して居るのがある。

ἀποκαλύπτω 根 καλυπ- 未来 ἀποκαλύψω

κρύπτω 根 κρυπ- 未来 κρύψω

(ロ) 動詞の語根が κ, γ に終わる動詞は現在形に於て σσ に変化して居るのがある。

πράσσω 根 πραγ- 未来 πράξω

κηρύσσω 根 κηρυκ- 未来 κηρύξω

(ハ) 現在形が ζω に終わる動詞は語根が δ (又は γ) に終わるもので Future Tense に於ては σω (又は ξω) となる。

例 ἐλπίζω 根 ἐλπιδ- 未来 ἐλπίσω

κράζω 根 κραγ- 未来 κράξω

(4) 語根が続音 Liquids (λ, μ, ν, ρ) に終わるものの未来形については後にこれを述べる。

§ 6 4. ειμί の Future Indicative は次の如し。

	単 数	複 数
1	ἔσομαι	ἐσόμεθα
2	ἔση (又は ἔσει)	ἔσεσθε
3	ἔσται	ἔσονται

§ 6 5. 形容詞 εἷς (一つ) は次の如くに変化する。

	男	女	中
N	εἷς	μία	ἓν
G	ἐνός	μιάς	ἐνός
D	ἐνί	μιᾶ	ἐνί
A	ἓνα	μίαν	ἓν

εἷς と εἷς, ἓν と ἐν との区別を注意しなければならない。

単 語

形容詞

ἀσθενής, ἐς 弱き、病める

ἄφρων, ον 愚なる

νεκρός, ἄ, ὄν 死にたる

ὕγιής, ἐς 完き、健全なる

μακάριος, α, ον 幸福なる

πραΰς, εἶα, ὑ 柔和なる

動詞

ἀνοίγω 開く

ἀρνέομαι 否む

ἄρχω 支配する

διακονέω 事える

ἐλεέω 憐れむ

ἐνδύω 着る

ἐξαλείφω 消す

その他

ἔμπροσθεν 前に

ἐρωτάω 請う

κατοικέω 住む

κληρονομέω 継ぐ

μισέω 憎む

ὁμολογέω 告白する

φυλάσσω 守る

στῦλος, ὁ 柱

練習第十二

次のギリシャ文を訳せ。

(1) ἡ πίστις σου σώσει σε. (マタ 9:22 参照) (2) τὸν ἕνα μισήσει καὶ τὸν ἕτερον ἀγαπήσει. (3) πέμψω πρὸς αὐτοὺς σοφοὺς καὶ προφήτας, ἀλλ' οὐκ ακούσουσιν αὐτοὺς οἱ υἱοὶ Ἰσραήλ. (4) ἄρξετε¹ τῶν Ἰουδαίων οἱ κατοικοῦσι ἐκείνην τὴν γῆν. (5) μακάριοι οἱ πραεῖς, ὅτι αὐτοὶ κληρονομήσουσιν τὴν γῆν. (6) οὕτω (斯くの如く) καὶ ὁ πατήρ ὁ οὐράνιος ποιήσει ὑμῖν. (7) ὁμολογήσω αὐτοῖς ὅτι οὐ γινώσκω ὑμᾶς. (8) οὕτως ἔσται καὶ ἐν ταῖς ἡμέραις τῆς κρίσεως. (9) ὁ Κύριος ἐλεήσει αὐτοὺς, καὶ ἄξει αὐτοὺς εἰς τὴν γῆν αὐτῶν. (10) ἀνοίξω τὰ βιβλία ἃ ἔστιν ἐν τῇ συναγωγῇ.

¹ ἄρχω は二格を支配する

次の文章をギリシャ語に訳せ。

(1) 我らは、異邦人(複)の土地に住むであろう。(2) 汝らの信仰の力汝らを救わん。(3) 彼らはその日に於て正しく忠信であろう、而して予は彼らを憐れむであろう。(4) 我その名を生命の書より消し落さず、我が父の前にてその名を言い表わさん(黙示 3:5)。(5) 我彼をわが神の聖所の柱とせん、而して彼の上に我が神の都(πόλις)の名を書き表わそう(黙示 3:12)。(6) 我は最後となり汝は最初となるであろう。(7) 憐みと平和とが全地に住むであろう。(8) 我もまた(κάγω=καὶ ἐγώ) 天に在す我が父の前に彼を否むであろう(マタ 10:33) (9) 父の許より汝に送ろうとする真理の御霊は我について証するであろう(ヨハ 14:26 参照)。(10) その日には汝ら我が名によりて(ἐν) 求めん(Middle Voice) 我は汝らの為に父に請う(未来)と云わず(ヨハ 16:26)。

第十六課 名詞の変化(その五)

名詞の第三変化(下)

§ 66. 語根が重母音に終わる名詞の変化

		ὁ βασιλεύς 王 根 βασιλευ-又は βασιλε-	ὁ, ἡ βοῦς 牛 根 βου-又は βο-
単	N	βασιλεύς	βοῦς
	G	βασιλέως	βοός
	D	βασιλεῖ	βοί
数	A	βασιλέα	βοῦν
	V	βασιλεῦ	βοῦ
	N	βασιεῖς	βόες
複	G	βασιλέων	βοῶν
	D	βασιλεῦσι	βουσί
	A	βασιεῖς ἢ ἑας	βοῦς (βόας)
数	V	βασιεῖς	βόες

注意 1. εὐς に終わる語は皆男性名詞なり。

注意 2. βασιλεύς に於てその語根は単数第一、第五格、複数第三格に於て εὐ でその他の格に於ては ε に終わって居る。

注意 3. εἶ, εἷς は母音が収縮したもの。第四格の α も ας も長音である事に注意を要す。

注意 4. βοῦς に於て直ちに子音を伴う時は、根 βου-でその他の場合は βο-となる。

§ 67. 第三変化に属する不規則名詞

不規則の点は多く単数第一格の存して居る。即ち語根より正則に第一格を見出す事が出来ない場合である。それ故にこの種の名詞は第一格と語根とを同時に暗記しなければならない。又複数第三格に於ても σ の前の子音と合して音便の変化が起こる事は勿論である。次に新約聖書に顕われる重なる不規則名詞につき、その必要な格だけを示す。その他の格は語根からこれを造り出す事が出来る。

単数第一格	単数第二格	複数第一格	複数第三格
ὁ ἀνὴρ	ἀνδρ-ός	ἄνδρ-ες	ἀνδράσι
τὸ γόνο 膝	γόνατ-ος	γόνατα	γόνασι
ἡ γυνή 女	γυναικ-ός	γυναῖκες	γυναῖζι
ἡ θρίξ 髪	τριχ-ός	τρίχες	θριζί
ὁ κύων 犬	κυν-ός	κύνες	κυσί
ὁ μάρτυς 証人	μάρτυρ-ος	μάρτυρες	μάρτυσι
τὸ οὖς 耳	ὠτ-ός	ᾠτα	ὠσί
ὁ πούς 足	ποδ-ός	πόδες	ποσί
τὸ ὕδωρ 水	ὔδατ-ος	ὔδατα	ὔδασι
ἡ χεὶρ 手	χειρ-ός	χεῖρες	χερσί

この不規則名詞を暗記すること。

§ 68. 不定変化の名詞

ある少数の名詞は、同一の数及び数に於て二種の変化を持つ。

例えば

(1) Μωσῆς(モーセ)は又 Μωϋσῆςとも記され、第二格は Μωϋσέως、第三格と第四格に於て第一変化と第三変化との二種あり即ち第三格に於て Μωϋσεῖ 及び Μωϋσῆ 第四格に於て Μωϋσέα 及び Μωϋσῆν と変化し、この何れも用いられて居る。

(2) “エルサレム”なる固有名詞もマタイ 2:3 だけに Ἱεροσόλυμα なる女性単数名詞として用いられ、その他は中性複数名詞として Ἱεροσόλυμα, -λύμων, -λύμοις と変化して居る。その他ヘブル語の発音に従い Ἱερουσαλήμ と綴られ、無変化に用いられて居る。

(3) その他 πάσχα(過越)の如くに無変化なる語もあり、又 ἡ κλείς(鍵)の如くに第四格に於て κλεῖν, κλεῖδα, κλείς, κλεῖδας の二種の形を持つものもある。

以上を以て名詞の変化は凡て終わった。なお第一、第二、第三の凡ての変化を自由に反復し得るまでに習熟する事が必要である。

第十七課 動詞の変化(その七)

First Aorist Indicative (Active and Middle)

§ 69. Aorist Tense (不定過去) は Imperfect (未完了過去…過去に於て動作が継続せるかたち) 及び Perfect (完了現在…過去に於て動作が終了し、ただその結果を現在に留めて居るかたち) と異なり、動作の完了、又は継続を問題とせず、ただ過去に於てある事柄が起こり、又はある動作が行われたと云う事実そのものを表示せんとする場合に用いられる Tense であって、ギリシャ語には非常に多く用いられる。

アオリスト Tense は過去に於て一瞬間に起こった行為を示すと解するのは誤解であって、繰り返される行為に於ても用いられて居る例が多い。

(例、I コリ 3:6 の“植え”“水注ぐ”、マタ 3:17 の“悦ぶ”、ロマ 8:30 の“召し”“義とし”“栄光を与う”) 等の如きは絶えず繰り返されて居る行為である。ただアオリストの性質上過去に於て終わってしまい、それが継続されない行為に最も多く用いられる事は自然の結果である。

アオリストには First アオリストと Second アオリストとがあるが、それは形の上の差であって意味に於ては全く同一である。一つの動詞でこの二つの変化を持って居るものは極めて少ない。

§ 70. λύω の First Aorist Indicative (Active and Middle)

		Active	Middle
単 数	1	ἔ-λυ-σα	ἔ-λυ-σά-μην
	2	ἔ-λυ-σα-ς	ἔ-λύ-σω (σα-σο)
	3	ἔ-λυ-σ-ε	ἔ-λύ-σα-το
複 数	1	ἔ-λύ-σα-μεν	ἔ-λυ-σά-μεθα
	2	ἔ-λύ-σα-τε	ἔ-λύ-σα-σθε
	3	ἔ-λυ-σα-ν	ἔ-λύ-σα-ντο

注意 1. Augment は Imperfect と同一で、同一の規則 (§ 22, 23) に従う。

注意 2. この Tense の特徴は σα で、Future は σ があるが α が無い点に於て異なり、又 Augment の無い事でも区別が出来る。

注意 3. 第三人称単数に於てのみ σα が σε になって居る事に注意を要す。

注意 4. 単数第一人称に ν を略してある事の外は Imperfect の人称語尾と全く同一である。

§ 71. 人称語尾の前に σ が来ることは Future の場合と同一で、従って Mute Stem の場合には子音の音便が起こる事 [§63(2)] σ の前の母音が延長する事 [§63(1)] も Future の場合と同一である。又、

母音に始まる動詞の Augment はその母音が延長される事 (§ 22, 23) も Imperfect の場合と同一の規則に従う。

Present	Future	1st Aorist	Present	Future	1st Aorist
ἀνοίγω	ἀνοίξω	ἀνέωξα (不規則)	πείθω	πείσω	ἔπεισα
διώκω	διώξω	ἐδίωξα	ἀγιάζω	ἀγιάσω	ἠγίασα
κηρύσσω	κηρύξω	ἐκήρυξα	ἐλπίζω	ἐλπίσω	ἠλπισα
κράζω	κράξω	ἔκραξα	αἰτέω	αἰτήσω	ἤτησα
βλέπω	βλέψω	ἔβλεψα	θέλω	θελήσω (不規則)	ἠθέλησα (不規則)
γράφω	γράψω	ἔγραψα	καλέω	καλέσω (不規則)	ἐκάλεσα (不規則)
κρύπτω	κρύψω	ἔκρυψα	ἀγαπάω	ἀγαπήσω	ἠγάπησα

以上は何れも新約聖書に於て多く用いられて居る語であるから、この変化に十分に習熟し、一語ごとにその全変化を丁寧に繰り返して暗記する事が必要である。

単 語

語根が重母音に終わる第三変化の名詞

ἀρχιερέυς, ὁ 祭司長

γραμματεύς, ὁ 学者

βασιλεύς, ὁ 王

ιερέυς, ὁ 祭司

その他

ἄφεσις, εως, ἡ 赦し

ἐξομολογέω 告白す、感謝す

ἀργύριον, τό 金銭

θαυμάζω 驚く、怪しむ

βάπτισμα, τό 洗礼

καθαρίζω 潔める

βλασφημία, ἡ 洩神

προορίζω 予定する

λεπρός, ὁ らい病人

ὑπακούω 従う

ληστής, ὁ 盗人

κοινός 汚れたる

ποταμός, ὁ 河

ἴδιος 自身の

τέρας, τος, τό	不思議、奇跡	οὐδείς, οὐδεμία, οὐδέν	no one, nothing
φῶς, τὸ	光	ὡς	如く、として
δικαίω	義とする	ἕως	迄
νήπιος, ὁ	嬰兒	ἄρτι	今

練 習 第 十 三

次のギリシャ文を（動詞の Tense を指摘しつつ）訳せ。

- (1) ἔγραψα ὑμῖν, παιδία, ὅτι γινώσκετε τὸν πατέρα. [I ヨハ 2:13] (2) οἱ λεπροὶ ἐπίστευσαν τῷ λογῷ τοῦ Ἰησοῦ. (3) ἔσωσα τὸ ἀργύριον ἀπὸ τῶν ληστῶν. (4) ἐκαθαρίσαμεν τοὺς διδασκάλους ἡμῶν ἐν τῷ ποταμῷ. (5) οἱ μαθηταὶ ἐθαύμαζον ὅτι μετὰ γυναικὸς ἐλάλει. [ヨハ 4:27] (6) τινὲς [some] τῶν μαθητῶν αὐτοῦ κοιναῖς χερσὶν ἐσθίουσιν τοὺς ἄρτους. [マコ 7:2 参照] (7) αἱ γυναῖκες τοῖς ἰδίοις ἀνδράσιν ὡς τῷ κυρίῳ, ὅτι ἀνήρ ἐστιν κεφαλὴ τῆς γυναικὸς ὡς καὶ ὁ Χριστὸς κεφαλὴ τῆς ἐκκλησίας, αὐτὸς σωτὴρ τοῦ σώματος. [エペ 5:22]

次の文章をギリシャ語に訳せ（……は 1st Aorist）。

- 《1》されど汝らの目は見る故に、汝らの耳は聞く故に幸福である（マタ 13:16）。《2》天地の主なる父よ、われ感謝す、汝これらのことを智き者かしこき者 (ὁ συνेतός) にかくしてこれを嬰兒に顕わし給うた（マタ 11:25）。《3》聖なる使徒たちより聞いた (Imperfect) ところの誠命 (複数) を我らは守った。《4》イエスは盲人の目を開いた。《5》汝ら今まで我が名によりて何をも求めし事なし（ヨハ 16:24）。《6》その頃あらかじめ定めたる者を召し、召したる者を義とし、義としたる者には光榮を得させ給えり（ロマ 8:30）。

第十八課 動詞の變化(その八)

Second Aorist Indicative (Active and Middle)

§ 72. 元来動詞には二種の根がある。その一は Present Stem で Present 又は Imperfect はこの根の變化したもので 1st Aorist もこの根を基礎としたものである。その二は Verbal Stem と云い動詞本来の根であって、根としてこの方が重要である(動詞より転化せる名詞は皆この Verbal Stem による)。而して Second Aorist Tense はこの Verbal Stem の變化したものである。意味に於ては 1st Aorist と異なるところは無い。

βάλλω (投げる) の 2nd Aorist Indicative は次の如くに変化する。
Verbal Stem は βαλ-。

		Active	Middle
単	1	ἔ-βαλ-ο-ν	ἐ-βαλ-ό-μην
	2	ἔ-βαλ-ε-ς	ἐ-βάλ-ου
数	3	ἔ-βαλ-ε	ἐ-βάλ-ε-το
複	1	ἐ-βάλ-ο-μεν	ἐ-βαλ-ό-μεθα
	2	ἐ-βάλ-ε-τε	ἐ-βάλ-ε-σθε
数	3	ἔ-βαλ-ο-ν	ἐ-βάλ-ο-ντο

注意 上表の形は同じ動詞の Imperfect に酷似しておることに心付くであろう。即ち Imperfect に於ては ἔβαλλον, ἔβαλλες, ἔβαλλε, ἐβάλλομεν, ἐβάλλετε, ἔβαλλον で λ が一つ多い。その理由は Imperfect は Present Stem βαλλ の變化でありアオリストは Verbal Stem βαλ-の變化なるが故である。

§ 73. 次に最も多く用いられる 2nd Aorist の例を示す。

Present	訳語	Verbal Stem	2 nd Aorist
ἄγω	導く	ἀγ-	ἤγαγον (不規則)

ἀμαρτάνω	罪を犯す	ἀμαρτ-	ἥμαρτον
ἀποθνήσκω	死ぬ	θαν-	ἀπέθανον
βαίνω	行く	βα-	ἔβην
εὕρισκω	見出す	εὕρ-	εὔρον
ἔρχομαι	来る	έλθ-	εὔρον
γίνομαι	成る	γεν-	ἐγενόμην
λαμβάνω	取る	λαβ-	ἔλαβον
μανθάνω	学ぶ	μαθ-	ἔμαθον
καταλείπω	棄てる	λιπ-	κατέλιπον
παραλαμβάνω	掴む、悟る	λαβ-	παρέλαβον
πίνω	飲む	πι-	ἔπιον
πίπτω	落ちる	πεσ-	ἔπεσον
τίκτω	生む	τεκ-	ἔτεκον
φεύγω	逃げる	φυγ-	ἔφυγον

§ 74. 次に掲ぐる諸動詞の 2nd Aorist 形は新約聖書に多く用いられる語であるが、正確に云えばそれに相当する現在形を持って居らない。ただ辞書では、便宜上、比較的近接せる語の現在形を以てその現在として取り扱って居るに過ぎない。

相当現在形	訳語	Verbal Stem	2nd Aorist
ὄραω	見る	ιδ-	εἶδον
ἔχω	持つ	σεχ-	ἔσχον
ἐσθίω	食う	φαγ-	ἔφαγον
λέγω	言う	ἐπ-	εἶπον
πάσχω	苦しむ	παθ-	ἔπαθον
φέρω	運ぶ、負う	ἐνεγκ-	ἤνεγκον

§ 73, 74 の中の新語は別に単語中に掲げない。

単語

βρῶμα, τό 食べ物	πνευματικός 靈的の
Γαλιλαία, ἡ ガリラヤ	ἀναπίττω 席につく (寄りかかる)
ιμάτιον, τό 上衣	ἐνώπιον 前に
παρθένος, ἡ 乙女	ἐφάπαξ 一度
πόμα, τό 飲物	ὅτε 時に when
συκῆ, ἡ イチジク (の樹)	πάλιν 再び
ἀναβαίνω 上る	ὑποκάτω 下に

練習 第十四

次のギリシャ語を訳せ (2nd Aorist を指摘せよ)。

(1) ὁ γὰρ ἀπέθανεν, τῆ ἁμαρτία ἀπέθανεν ἐφάπαξ. ὁ δὲ ζῆ, ζῆ τῷ θεῷ.
〔ロマ 6:10〕 (2) πάντες τὸ αὐτὸ πνευματικὸν βρῶμα ἔφαγον, καὶ πάντες
τὸ αὐτὸ πνευματικὸν ἔπιον πόμα. [I コリ 10:3-4] (3) ἔγνωμεν¹ ὅτι πολλὰ
ἔμαθον οἱ μαθηταὶ ἀπὸ τῶν ἀποστόλων. (4) διὰ τοῦτο κατέλιπον τὰ
πρόβατα ἐν τοῖς ἀγροῖς καὶ ἔφυγον. (5) εἶδομεν ὅτι οἱ δοῦλοι φέρουσι
τὸ πλοῖον εἰς τὴν θάλασσαν. (6) διὰ τοῦτο ὁ κόσμος οὐ γινώσκει ἡμᾶς,
ὅτι οὐκ ἔγνω αὐτόν. [I ヨハ 3:1] (7) ἡ παρθένος ἔτεκεν υἱόν, καὶ ἐκάλεσεν
αὐτὸν Ἰησοῦν.

次の語をギリシャ語に訳せ (……は 2nd Aorist)。

- (1) 父よ我は天に対し(eis+A)又汝の前に罪を犯した(ルカ 15:21)。
(2) キリスト一度罪(複数)の為に(peri+G)死に給うた。
(3) イエス、ガリラヤに来りて神の福音を宣べ伝えられた
(Imperfect, マコ 1:14 参照)。

¹ γινώσκω 知る。Verbal Stem γνο-、2nd Aorist の変化 : ἔγνων, ἔγνως, ἔγνω; ἔγνωμεν, ἔγνωτε, ἔγνων。

《4》彼らの足を洗い (1st Aorist) 己が上衣を取り再び席についた時、彼らに言われた。《5》イエス、エルサレムに上り給うた (ヨハネ 2:13)。《6》イエス彼に言い給う、われ汝がイチジク (の樹) の下に居るを見たと言ったために信ずるか。《7》彼己の国 (τὰ ἴδια) に来りしに己の民 (οἱ ἴδιοι) は彼を受けなかった (ヨハ 1:11)。

第十九課 動詞の変化 (その九)

First and Second Aorist Passive, Future Passive (Indicative).

§ 75. Present 及び Imperfect に於ては Middle Voice と Passive Voice とが同形ですが、Future とアオリストに於てはこれが異なる。

なお Future の Middle Voice については § 63、1st Aorist の Middle Voice については § 69 参照。

例 λύω の Future 及び First Aorist の Passive

		Future Passive	First Aorist Passive
単 数	1	λυ-θή-σο-μαι	ἐ-λύ-θη-ν
	2	λυ-θή-ση	ἐ-λύ-θη-ς
	3	λυ-θή-σε-ται	ἐ-λύ-θη
複 数	1	λυ-θη-σό-μεθα	ἐ-λύ-θη-μεν
	2	λυ-θή-σε-σθε	ἐ-λύ-θη-τε
	3	λυ-θή-σο-νται	ἐ-λύ-θη-σαν

注意 1. この二つの Tense に特有の目標は θ (本来 θε) である。それ故に動詞の語尾に (語根ではなく) が θη が入って居る場合は、まずこれを Future 又は First Aorist の Passive であると判断する事が出来る。而して Future の場合は θησ-となり Future の特徴たる σ がこれに加わることによりてアオリストと区別される。

注意 2. 人称語尾の変化は First Aorist に於ては § 20 の表に示せる Imperfect Tense の Active の人称語尾とほぼほぼ同一であり、Future の場合は Primary Tense の語尾 (§ 34) に相当す。即ち $\theta\eta$ -と $\theta\eta\sigma$ -さえ忘れずに居れば、この変化は用意にこれを学習することが出来る。

上表の変化につき次の規則に注意を要する。

(1) $\theta\eta$ の直前に来る母音は延長する。例えば $\piοίεω$ は $\acute{\epsilon}\piοιήθην$, $\piοιηθήσομαι$, その他 $\phiανερόω$ は $\acute{\epsilon}\phiανερώθην$ etc., $\gammaεννάω$ は $\acute{\epsilon}\gammaεννήθην$ etc., $\gammaίνομαι$ は $\acute{\epsilon}\gammaενήθην$ etc. となる。

(2) $\theta\eta$ の前に Mute Consonant (又は ζ) が来れば次の如くなる。

$\kappa, \gamma, \chi + \theta\eta = \chi\theta\eta$	例	$\acute{\alpha}\nuοίγω, \acute{\alpha}\nuοιχθήσομαι$
$\pi, \beta, \phi + \theta\eta = \phi\theta\eta$	例	$\acute{\pi}\acute{\epsilon}\mu\pi\omega, \acute{\epsilon}\acute{\pi}\acute{\epsilon}\mu\phi\theta\eta\nu$
$\tau, \delta, \theta, \zeta + \theta\eta = \sigma\theta\eta$	例	$\piείθω, \acute{\epsilon}\piείθισαν$

§ 7 6. Second Aorist Indicative Passive

First Aorist との差は θ が無い事でその他は同一である。

例 $\phiαίνω$ (輝く、見える。Passive では現れる、思われる等の意)

	単 数	複 数
1	$\acute{\epsilon}\phiάνην$	$\acute{\epsilon}\phiάνημεν$
2	$\acute{\epsilon}\phiάνης$	$\acute{\epsilon}\phiάνητε$
3	$\acute{\epsilon}\phiάνη$	$\acute{\epsilon}\phiάνησαν$

即ち人称語尾は First Aorist の場合と同一。但しこの変化は新約聖書に於てはあまり多く用いられて居ない。次の例などがその中の重要な場合である。

- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| 1. γράφω 書く ἐγράφην | 6. στρέφω 回転する ἐστράφην |
| 2. θάπτω 埋葬する ἐτάφην | 7. φθείρω 腐朽する ἐφθάρην |
| 3. κρύπτω 隠す ἐκρύβην | 8. τρέφω 養う ἐτρέφην |
| 4. σπείρω 種蒔く ἐσπάρην | 9. χαίρω 喜ぶ ἐχάρην |
| 5. στέλλω 遣わす ἐστάλην | |

注意 1. 以上の中の多くに共通の現象は、語根が ε, ει, αι 等の場合、これが α に変化する事である。上例の 4～9 の如きその場合である。

注意 2. πτω を以て終わる動詞は、あたかも φω 又は βω を以て終わるかのごとくに扱われる (例 2, 3)。

§ 7 7. 不規則形の Future Passive と First Aorist Passive

Present	Future Passive	1st Aorist Passive
ἀκούω	ἀκουσθήσομαι	ἠκούσθην
βάλλω	βληθήσομαι	ἐβλήθην
ἐγείρω	ἐγερθήσομαι	ἠγέρθην
καλέω	κληθήσομαι	ἐκλήθην
λαμβάνω	ληφθήσομαι	ἐλήφθην
λέγω (根 ἐρ)		ἐρρέθην/ἐρρήθην
ὀράω (根 ὀπ)	ὀφθήσομαι	ὤφθην
φέρω (根 ἐνεγκ)		ἠνέχθην

§ 7 8. Deponent Verbs にもアオリストの形がある。即ち πορεύομαι は ἐπορεύθην (行った)、ἀποκρίνομαι は ἀπεκρίθην (答えた) 等と変化する。

単 語

εὐσέβεια, ἡ 敬虔、信心

σειώ 震える

καταπέτασμα, τό 幕	σταυρώω 十字架に釘付ける
ναός, ὁ 宮	σχίζω 分裂せしむ
μνημεῖον, τό 墓場	φανερῶω 現わす
πέτρα, ἡ 岩	ἐγγύς 近くに
ἀναλαμβάνω 携え上げる	ὅπου そのところに (関係代名詞 where)

練 習 第 十 五

次のギリシャ語を訳せ (Future 及び Aorist Passive を指摘せよ)。

(1) τοῦτο τὸ εὐαγγέλιον κηρυχθήσεται πᾶσι τοῖς ἔθνεσι καὶ πολλοὶ ἀκούσουσιν. (2) ἤχθη ὁ Ἰησοῦς ὑπὸ τοῦ πνεύματος εἰς τὰ ὄρη καὶ ἐπειράσθη ὑπὸ τοῦ διαβόλου. (3) οἱ νεκροὶ ἐγερθήσονται καὶ κριθήσονται ἐν ἡμέρᾳ κρίσεως. (4) καὶ ὅτε ἐξεβλήθη τὸ δαιμόνιον, πολλοὶ ἔλεγον ὅτι ταῦτα τὰ τέρατα οὐκ ἐπράχθη ἐν ταῖς ἡμέραις τῶν πατέρων ἡμῶν. (5) καὶ ἰδοὺ τὸ καταπέτασμα τοῦ ναοῦ ἐσχίσθη. (6) καὶ ἡ γῆ ἐσεισθη καὶ αἱ πέτραι ἐσχίσθησαν. (7) καὶ τὰ μνημεῖα ἀνεόχθησαν καὶ πολλὰ σώματα τῶν ἁγίων ἠγέρθησαν. (5 ~ 7 マタイ 27:51-52)

次の語をギリシャ語に訳せ。

《 1 》そはイエスの十字架に釘付けられ給いし場所は都に (第二格) 近かったからである (ヨハ 19:20)。《 2 》彼らは神より生れたのだ (ヨハ 1:13)。《 3 》敬虔の奥義は大なり、彼は肉にて顕わされ靈にて義とせられ。《 4 》御使たちに見られ、もろもろの国人に (ἔθνεσιν) 伝えられ、《 5 》世に信ぜられ、栄光にありて (携え) 上げられ給うた (3 ~ 5 I テモ 3:16)。《 6 》死ねる者は朽ちぬ者に甦えらせられるであろう (I コリ 15:52)。《 7 》神の国の子らは暗黒の中に投げ出されるであろう (マタ 8:12)。

第二十課 動詞の変化（その十）

Participles（分詞）変化及び用法

§ 79. Participles は Infinitive と共にギリシャ語に於て重要な役目を演じ、非常に多く用いられる。

Participles は動詞と形容詞及び副詞とを兼ねて居るので、従ってこの三品詞の性質を兼ね備えて居る。即ち動詞と同じく Subject 又は Object を持つ事が出来、Tense や Voice に従って変化する。而して他方形容詞と同じく名詞を形容し性、数、格に従って変化し、その形容する名詞と性、数、格に於て一致する。又副詞として動詞を修飾する。

Participles は Infinitive と異なり語尾が性、数、格に従って変化する事形容詞の場合と同一である。而してその変化は形容詞の混合変化 (§ 60) と同じく男性、中性に於て第三変化、女性に於て第一変化に従う。

§ 80. 動詞 εἶμι（有る）の Participle の変化

	単 数			複 数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
N	ὄν	οὔσα	ὄν	ὄντες	οὔσαι	ὄντα
G	ὄντος	οὔσης	ὄντος	όντων	οὔσων	όντων
D	όντι	οὔση	όντι	οὔσι	οὔσαις	οὔσι
A	όντα	οὔσαν	όν	όντας	οὔσας	όντα
V	ὄν	οὔσα	όν	όντες	οὔσαι	όντα

上表を一見すれば形容詞 πᾶς の変化 (§61) と同一であることを発見するであろう。なお根は οντ- であるが、これが §42.1,2 に従って ων となり、οὔσα は ὄντα の ντ が脱落して ο が延長したものであり (§39.5.e 参照)、οὔσι もまた同様 ὄντι が音便によりて変化したのである。

§ 8 1. Participle の語尾は Tense と Voice に従い下の如くに変化する。

		Active	Middle	Passive
Present	男	-ων, -οντος	ό-μενος	同 左
	女	-ουσα	ο-μένη	
	中	-ον	ό-μνον	
Future	男	-σων, -σοντος	-σό-μενος	-θη-σό-μενος
	女	-σουσα	-σο-μήνη	-θη-σο-μένη
	中	-σον	-σό-μενον	-θη-σό-μενον
First Aorist	男	-σας, -σαντος	-σά-μενος	-θείς, -θέντος
	女	-σασα	-σα-μένη	-θεισα
	中	-σαν	-σά-μενον	-θέν
Perfect	男	(語頭重複) -κώς, -κότος	(語頭重複) -μένος	同 左
	女	-κυῖα	-μένη	
	中	-κός	-μένον	

以上の中アクセントはほぼほぼ同一の変化、Middle と Passive も殆ど一定の語尾であるからこの変化は記憶し易い。次にこの各々につきその変化を表示する。

8 2. λύω の Participle Present Active

	単 数			複 数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
N	λύων	λύουσα	λύον	λύοντες	λύουσαι	λύοντα
G	λύοντος	λυούσης	λύοντος	λύόντων	λυουσῶν	λύόντων
D	λύοντι	λυούση	λύοντι	λύουσι	λυούσαις	λύουσι
A	λύοντα	λυούσαν	λύον	λύοντας	λυούσας	λύοντα
V	λύων	λύουσα	λύον	λύοντες	λύουσαι	λύοντα

§ 8 3. Future Participle (Active) の変化は上表に σ を加えただけで λύσων etc. となり他これに従う。

§ 8 4. Future Aorist Participle (Active) λύσας, etc. の変化は πᾶς の変化と全く同一である。(§ 61 参照) 但しアクセントは動詞のアクセントの規則に従う (§ 20 注意 4)。

§ 8 5. Perfect Participle (Active) 即ち λελυκώς, λελυκυῖα, λελυκός の変化は男性及び中性に於て Present Participle と同じく第三変化を取る。但しアクセントは最後の音節に Acute を取る。女性に於ては第一変化により σοφία の如くに変化する。即ち λελυκυῖα, -κυῖας, -κυῖα, -κυῖαν, -κυῖα; -κυῖαι, -κυῖων, -κυῖαις, -κυῖας, -κυῖαι と変化する。アクセントに注意すべし。

§ 8 6. Middle 及び Passive Voice の Participle は (First Aorist Passive を除き) -μενος, -μένη, -μενον の語尾を持ち形容詞 σοφός の如くに変化する故容易にこれを知る事が出来る (§ 27 参照)。

§ 8 7. λύω の First Aorist Passive Participle の変化

	単 数			複 数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
N	λυθείς	λυθείσα	λυθέν	λυθέντες	λυθείσαι	λυθέντα
G	λυθέντος	λυθείσης	λυθέντος	λυθέντων	λυθεισῶν	λυθέντων
D	λυθέντι	λυθείση	λυθέντι	λυθεῖσι	λυθείσαις	λυθεῖσι
A	λυθέντα	λυθείσαν	λυθέν	λυθέντας	λυθείσας	λυθέντα
V	λυθείς	λυθείσα	λυθέν	λυθέντες	λυθείσαι	λυθέντα

§ 8 8. Second Aorist Participle の変化は次の如くである。

Active	βαλῶν	βαλοῦσα	βαλόν (根 βαλοντ-)
			(§ 82 とアクセントのみ異なる)
Middle	βαλόμενος	βαλομένη	βαλόμενον (§ 86 に同じ)
Passive	βαλεῖς	βαλεῖσα	βαλέν (§ 87 に同じ)

§ 89. Participles の用法

(1) **Adjectives** として用いられる。この場合多くは冠詞を伴い、あたかもその後“人”又は“物”なる文字が省略されて居る同様に取
り扱われる。

例 οἱ πιστεύοντες 信ずる人々、信者たち

οὗτός ἐστιν ὁ παρὰ τὴν ὁδὸν σπαρείς. (マタ 13:19)

これは道の傍らに播いた人である。(この例の如く冠詞と
Participle との間に、多くの語が入る場合がある)

(2) **Adverb** として用いられ、他の動詞を修飾する事がある。こ
の場合には次の三つに分れる。(主なる場合のみを示す)

(a) **時の副詞**の如くに用いられる。

例 καὶ ἐξελθὼν εἶδεν πολὺν ὄχλον (マタ 14:14)

彼出でて (出でたる時) 大なる群衆を見た。

ἀκούσας δὲ ὁ Ἰησοῦς ἀνεχώρησεν.....καὶ ἀκούσαντες οἱ ὄχλοι
ἠκολούθησαν αὐτῷ (マタ 14:13)

イエスこれを聞いて…行き給いし群衆聞いて彼に従った。

(何れも聞いた時と見る事が出来る)。

(b) **原因の副詞**として用いられる。

例 ἰδόντες οἱ μαθηταὶ ἐθαύμασαν

弟子たち見て (見たが為に) 驚いた。

καὶ πάντες ἐφοβοῦντο αὐτόν, μὴ πιστεύοντες ὅτι ἐστὶν μαθητῆς.

弟子たる事を信じないので彼を恐れた。 (使徒 9:26)

(c) **同時に起る行為**につき用いられる。

ἀποκριθεὶς εἶπεν αὐτῷ.....

答えて (同時に) 彼に言った云々。

以上三つの場合に於て英独語等では when, because, and 等の語を用い、文章を複雑にして始めてこの Participle の意味を示す事が出来るが、日本語の場合では“……して”と云う便利な訳語があるので Participle を訳するには好都合である。而して實際上時を示すか、原因を示すかは明瞭に分けることが出来ない以上、日本語の訳が最も Participle の意味をよく伝えるものという事が出来る。

単 語

Ἀνανίας	アナニヤ	ἐκψύχω	息絶える
ἐλεήμων	憐みある	θεάομαι	見る
σημεῖον, τὸ	徴（しるし）	πεινάω	餓える
φόβος, ὁ	恐れ	πενθέω	悲しむ
εἰρηνοποιός, ὁ	平和ならしむ者	στρέφω	振り返らす
διψάω	渴く	χορτάζω	飽かす

練 習 十 六

次に揚げる山上の垂訓の一部(マタ 5:1-10)を訳し、Participle の性、数、格と線を引いた動詞の Tense, Voice, Number, Person を示せ。

(1) Ἰδὼν δὲ τοὺς ὄχλους ἀνέβη εἰς τὸ ὄρος. (2) καὶ ἀνοίξας τὸ στόμα αὐτοῦ ἐδίδασκεν τοὺς μαθητὰς αὐτοῦ λέγων, (3) μακάριοι οἱ πρωχοὶ τῷ πνεύματι, ὅτι αὐτῶν ἐστὶν ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν. (4) μακάριοι οἱ πενθοῦντες, ὅτι αὐτοὶ παρακληθήσονται. (5) μακάριοι οἱ πραεῖς, ὅτι αὐτοὶ κληρονομήσουσιν τὴν γῆν. (6) μακάριοι οἱ πεινῶντες καὶ διψῶντες τὴν δικαιοσύνην, ὅτι αὐτοὶ χορτασθήσονται.

(7) μακάριοι οἱ ἐλεήμονες, ὅτι αὐτοὶ ἐλεηθήσονται. (8) μακάριοι οἱ καθαροὶ τῇ καρδίᾳ, ὅτι αὐτοὶ τὸν θεὸν ὄψονται. (9) μακάριοι οἱ εἰρηνοποιοί, ὅτι αὐτοὶ υἱοὶ θεοῦ κληθήσονται. (10) μακάριοι οἱ δεδιωγμένοι¹ ἕνεκεν (の故に) δικαιοσύνης, ὅτι αὐτῶν ἐστὶν ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν.

次の語をギリシャ語に訳せ。線を引いた動詞は Participle にて。

《1》アナニヤこれらの語を聞いて倒れて息絶えた。凡てこれを聞く者の上に大なる恐れが起こった (ἐγένετο) (使徒 5:5)。《2》その兄弟を憎む者は暗黒の中に在り (I ヨハ 2:11)。《3》イエス聞いて怪しみ従う者どもに言い給うた (マタ 8:10)。《4》イエス振り返りて彼らの従い来るを見て (θεάομαι) 彼らに言い給う (ヨハ 1:38)。《5》彼の為し給うた徴を見て多くの人々彼の御名を (εἰς τὸ ὄνομα) 信じた (1st Aorist) (ヨハ 2:23)。《6》我は我を遣わし給うた者の御意を行う。

第二十一課 形容詞の比較

Comparison of the Adjectives

§ 90. 英語の場合と同じくギリシャ語に於ても原級 Positive Degree、比較級 Comparative Degree、最上級 Superlative Degree の三種あり、その意味も英語等と同じく Comparative は一層程度の高いことを示し Superlative は程度の最高であることを示す。

そして英語では Comparative Degree の時は語尾に er を付け、Superlative Degree には est を付けるのと同様に、ギリシャ語に於ては Comparative に -τερος、Superlative に -τατος を付ける。但し、

¹ κ は μ の前に γ になります (§39.4.a)。

ギリシャ語に於てはこれが、又性と数と格によって変化する事は Positive Degree の形容詞と同様である。即ち

	男性	女性	中性
比較級	-τερος	-τέρα	-τερον
最上級	-τατος	-τάτη	-τατον

となる。次に二、三の例を示す。

1. ισχυρός (強き)	ισχυρό-τερος	-τέρα	-τερον
	ισχυρό-τατος	-τάτη	-τατον
2. ἀληθής (真の)	ἀληθές-τερος	-τέρα	-τερον
	ἀληθές-τατος	-τάτη	-τατον
3. σοφός (賢き)	σοφώ-τερος	-τέρα	-τερον
	σοφώ-τατος	-τάτη	-τατον
4. ἄξιος (値する)	ἄξιό-τερος	-τέρα	-τερον
	ἄξιό-τατος	-τάτη	-τατον

注1. 上表によりて明かなる如く、これらの語尾の変化は形容詞の Stem に附く。例えば ἀληθής の Stem は ἀληθές で τερος, τατος はこれに附く。

注2. 最後より二番目の音節が短母音なる時は最後の o は延長して ω となる。上例 3, 4 を 1 と比較せよ。

なお二、三の例を示せば

νέος (新しき) は	νεώτερος	νεωτέρα	νεώτερον
	νεώτατος	νεωτάτη	νεώτατον

となるが、反対に

πονηρός (悪しき) は

	πονηρότερος	πονηροτέρα	πονηρότερον
	πονηρότατος	πονηροτάτη	πονηρότατον

となるのは前者は νε が短音節、後者は νη で長音節だからである。なお長母音でなくとも位置による長音節 (§5. d. 2) の場合も同様である。

注3. 形容詞の Comparative, Superlative の語尾の変化は形容詞の母音変化に従う。即ち Comparative は μικρός, μικρά, μικρόν の如くに変化し (§27)、Superlative は σοφός, σοφή, σοφόν の如くに変化す (§27)。

§ 91. 以上は最も普通の形容詞の比較上の変化であるが、この他になお次の如き形に変化する形容詞がある。

不規則に変化する形容詞にこの主のものが多い。

	男性	女性	中性
Comparative	-ίων	-ίων	-ιον
Superlative	-ιστος	-ίστη	-ιστον

この種の変化にはその Stem も変化する場合がある。

ταχύς (速かなる)	ταχίων	τάχιστος
καλός (善き)	καλλίων	κάλλιστος
αισχρός (恥ずべき)	αισχίων	αἴσχιστος
κακός (悪しき)	κακίων	κάκιστος ¹
μέγας (大なる)	μείζων (=μεγίων)	μέγιστος

§ 92. この変化の Comparative Degree で ων に終わるものは次の如くに変化する。

		男性及び女性	中性
単 数	N	μείζων	μείζων
	G	μείζονος	μείζονος
	D	μείζονι	μείζονι
	A	μείζονα 又は μείζω	μείζον
複 数	N	μείζονες 又は μείζους	μείζονα 又は μείζω
	G	μείζόνων	μείζόνων
	D	μείζονι (ν)	μείζοσι (ν)
	A	μείζονας 又は μείζους	μείζονα (又は) μείζω

¹ 不規則変化を見よ。

上表に示すが如くこの種の Comparative Degree は形容詞の子音変化に従って変化する (§59)、即ち σώφρων の如くに変化する。但し -ονα, -ονες に終わる場合には ν を脱落せしめて οα=ω, οες=ους と変化する場合もある。

§ 9 3. 不規則の比較 Irregular Comparison

次の形容詞はその Comparison に於て不規則に変化する。但しこれらは最も多く用いられる種類の形容詞であるから、十分にこれを暗記する必要がある。英語でも good, better, best とか bad, worse, worst とかの如き最も普通に用いられる語が不規則に変化する事は奇異な現象である。

例	ἀγαρός (善き)	κρείσσων (又は κρείττων)	κράτιστος
		或いは βελτίων	(βέλτιστος)
	κακός (悪しき)	χείρων	(χείριστος)
		或いは ἥσσων (ἥττων)	(ἥκιστος)
	μέγας (大なる)	μείζων	μέγιστος
	μικρός (小さき)	ἐλάσσων	ἐλάχιστος
	πολύς (多くの)	πλείων (πλέων)	πλεῖστος

§ 9 4. 稀には Positive Degree を欠き Comparative 又は Superlative のみが存する場合もある。

例 (前置詞 πρό 前に)	πρότερος	ヨリ以前の	πρῶτος	最初の
	(名詞 ὕψος 高さ)		ὑψιστος	いと高き

§ 9 5. Comparative Degree の形容詞の後には比較されるべき名詞が第二格の形に於て来る場合と、ἤ (=than) を用う場合とがある。この後者の場合に於ては比較されるべき名詞は先行の名詞、又は代名詞と同格となる。

例	σοφώτερός ἐστιν τοῦ υἱοῦ.	彼は <u>その子</u> よりも賢なり
	σοφώτερός ἐστιν ἢ ὁ υἱός.	同上

単語

ἄφρων 愚なる
ικανός 値する (worthy)
καινός 新しき
κενός 空虚なる
κρυπτός 隠れたる

ὀλίγος 僅かの
περισσός 豊かなる
παλαιός 旧き (ふるき)
τέλειος 完全なる
ὕγις 健全なる

練習第十七

次のギリシャ語を訳せ。

(1) ἐγὼ γάρ εἰμι ὁ ἐλάχιστος τῶν ἀποστόλων. [I コリ 15:9]。 (2) νῦν γὰρ ἐγγύτερον ἡμῶν ἢ σωτηρία ἢ ὅτε ἐπιστεύσαμεν. (ロマ 13:11)。 (3) ὁ δὲ μικρότερος ἐν τῇ βασιλείᾳ τῶν οὐρανῶν μείζων αὐτοῦ ἐστίν. [マタ 11:11]。 (4) ἤκουσαν οἱ Φαρισαῖοι ὅτι Ἰησοῦς πλείονας μαθητὰς ποιεῖ καὶ βαπτίζει ἢ Ἰωάννης. [ヨハ 4:1]。 (5) γίνεται τὰ ἔσχατα τοῦ ἀνθρώπου ἐκεῖνου χειρόνα τῶν πρώτων. [マタ 12:45]。

次の語をギリシャ語に訳せ。

《1》 小事に (最少の事に) 忠なる (πιστός) 者は 大事にも (多くの事に πολὺς の中性単数第三格) 忠なり、小事に 不忠なる (不正なる) 者は大事にも不忠なり [ルカ 16:11]。《2》我より後に来る者は我よりも強し [マタ 3:11]。《3》僕はその主人よりも大ならず、遣わさるる者は彼を遣わす者よりも大ならず [ヨハ 13:16]。《4》いと高き所には栄光神にあれ [ルカ 2:14]。《5》生命は糧に優るならずや [マタ 6:25]

第二十二課 数 詞

Numerals

§ 96. 数詞には基数 Cardinal Numbers と、序数 Ordinal Numbers とがある。便宜上ここに Numeral Adverb を加えて次に表を以て示す。

数	符号	Cardinal N.	Ordinal N.	Numeral Adv.
1	α'	εἷς, μία, ἓν	πρῶτος, η, ον	ἅπαξ 一度
2	β'	δύο, δυοί	δεύτερος, α, ον	δίς 二度
3	γ'	τρεις, τρία	τρίτος, η, ον	τρίς 等
4	δ'	τέσσαρες, τέσσαρα	τέταρτος	τετράκις
5	ε'	πέντε	πέμπτος	πεντάκις
6		ἕξ	ἕκτος	ἑξάκις
7	ζ'	ἐπτά	ἑβδομος	ἐπτάκις
8	η'	ὀκτώ	ὄγδοος	ὀκτάκις
9	θ'	ἐννέα	ἕννατος	ἐνάκις
10	ι'	δέκα	δέκατος	δεκάκις
11	ια'	ἑνδέκα	ἐνδέκατος	ἐνδεκάκις
12	ιβ'	δώδεκα ¹	δωδέκατος	
13	ιγ'	τρισκαίδεκα	etc.	etc.
14	ιδ'	τεσσαρεσκαίδεκα ²		
15	ιε'	πεντεκαίδεκα ³		

¹ δεκαδύο (使徒 19:7)

² δεκατέσσαρες (マタ 1:17)

³ δεκαπέντε (ヨハ 11:18)

16	ι*´	έκκαίδεκα		
17	ιζ´	έπτακαίδεκα		
18	ιη´	όκτωκαίδεκα ¹		
19	ιθ´	έννεακαίδεκα		
20	κ´	έικοσι	είκοστός	είκοσάκις
21	κα´	είκοσι και εἷς, μία, έν	είκοστός και προῶτος	είκοσάκις και ἅπαξ
22	κβ´	είκοσι και δύο etc.	είκοστός και δεύτερος etc.	είκοσάκις και δίς etc.
30	λ´	τριακόνα	τριακοστός etc.	τριακοντάκις etc.
40	μ´	τεσσαράκοντα		
50	ν´	πεντήκοντα		
60	ξ´	έξήκοντα		
70	ο´	έβδομήκοντα		
80	π´	όγδοήκοντα		
90	**´	ένενήκοντα		
100	ρ´	έκατόν	έκατοστός	έκατοντάκις
200	σ´	διακόσιοι, -αι, -α etc.	διακοσιοστός etc.	διακοσιάκις etc.
1,000	,α	χίλιοι, -αι, -α	χιλιοστός etc.	χιλιάκις etc.
2,000	,β	δισχίλιοι etc.		
10,000	,ι	μύριοι etc.		

§ 97. εἷς の変化は§65 に既にこれを述べたからここでは τρεῖς と τέσσαρες の変化を示すに止める。δύο は大体変化せず、ただ第三格 δυσί は新約聖書に九回用いられて居る。

¹ (ルカ 13:4, 11) とも云う。

* は Digamma、** は Koppa と云う古き文字を用いる。今はこの文字は消滅した。900 に相当する分は Sampi と云う文字を用いる。

	男性及び女性	中性	男性及び女性	中性
N	τρῆις	τρία	τέσσαρες	τέσσαρα
G		τριῶν		τεσσάρων
D		τρισί		τέσσαρσι
A	τρεῖς	τρία	τέσσαρας	τέσσαρα

§ 98. 5 より 200 までの数は変化しない。200 より以上の百位の数及び凡ての Ordinal Numbers は変化する。その変化は母音変化の形容詞に相当し §27 の σοφός 変化と同一である。

§ 99. 例えば 235 の如く多くの数を数える場合には、種々の云い表わし方があり、何れも差し支えがない。

即ち πέντε καὶ τριάκοντα καὶ διακόσιοι

又は διακόσιοι καὶ τριάκοντα καὶ πέντε

又は διακόσιοι τριάκοντα πέντε

の何れでも差し支えなし。

§ 100. οὐδείς (no one 一人もなし...絶対的) 及び μηδείς (no one 一人もなし...仮定的) は εἷς の複合代名詞で従って εἷς と同一に変化する。

	男性	女性	中性
N	οὐδείς	οὐδεμία	οὐδέν
G	οὐδεινός	οὐδεμιᾶς	οὐδενός
D	οὐδενί	οὐδεμιᾶ	οὐδενί
A	οὐδένα	οὐδεμίαν	οὐδέν

単 語

σάββατον, -ου, τό 週、安息日 καταπαύω 休む

μήν, -ός, ὁ 月
ἔτος, -ους, τό 年
τελευτάω 死ぬ
προσκαλέομαι 招く
πλανάω 欺く、迷わす

ὑποστρέφω 立ち帰る
παιδαγωγός, ὁ 守役、教師
μέρος, τό 分け前
ὡσαύτως 同様に
χοϊκός 地的の

練習第十八

次の語を日本語に訳せ。

(1) ὁ πρῶτος ἄνθρωπος ἐκ γῆς χοϊκός, ὁ δεύτερος ἄνθρωπος ἐξ οὐρανοῦ. [I コリ 15:47]。 (2) ἦσαν δὲ παρ' ἡμῖν ἑπτὰ ἀδελφοί· καὶ ὁ πρῶτος ἐτελεύτησεν. [マタ 22:25]。 (3) ὁμοίως καὶ ὁ δεύτερος καὶ ὁ τρίτος, ἕως τῶν ἑπτὰ. [マタ 22:26]。 (4) καὶ προσκαλεῖται τοὺς δώδεκα καὶ ἤρξατο αὐτοὺς ἀποστέλλειν (Inf.) δύο δύο.¹ [マコ 6:7]。 (5) πάλιν δὲ ἐξελθὼν περὶ δε ἕκτην καὶ ἐνάτην ὥραν ἐποίησεν ὡσαύτως. [マタ 20:5]。 (6) περὶ δὲ τὴν ἐνδεκάτην ἐξελθὼν εὗρεν ἄλλους ἐστῶτας.² [マタ 20:6]。 (7) ἄλλα δὲ ἔπεσεν ἐπὶ τὴν γῆν τὴν καλὴν καὶ ἐδίδου³ καρπὸν, οἱ μὲν ἑκατόν, οἱ δὲ ἐξήκοντα, οἱ δὲ τριάκοντα. [マタ 13:8]。 (8) ἐὰν γὰρ μυρίους παιδαγωγούς ἔχητε ἐν χριστῷ, ἀλλ' οὐ πολλοὺς πατέρας. [I コリ 4:15]。 (9) μία ἡμέρα παρὰ κυρίῳ ὡς χίλια ἔτη καὶ χίλια ἔτη ὡς ἡμέρα μία. [II पेテ 3:8]。

次の語をギリシャ語に訳せ。

(1) これは大にして第一の誠命である [マタ 22:38]。 (2) イエス 四十日四十夜断食して後に (ὕστερον) 飢え給うた [マタ 4:2]。

(3) 幸福なるかな、聖なるかな第一の復活に干る (分け前を持つ)

¹ 二人ずつ

² ἴσημι の perf. part. 立つ処の

³ 与えた

者、この人々に対しては (ἐπὶ τούτων) 第二の死は権威を持たない〔黙示 20:6〕。(4) 彼は神のまたキリストの祭司となるであろう、そして彼と共に千年の間支配するであろう (βασιλεύω)〔黙示 20:6〕。

(5) 七日目に神その凡ての業より (ἀπὸ+Gen) 休息し給うた〔ヘブ 4:4〕。(6) イエス荒野にて四十日のあいだ御霊に導かれ悪魔に試みられ給う〔ルカ 4:1〕。(7) 如何に思うか、君達百匹の羊を持つ人があるとして、若しその一匹がまよったら (Subjunctive) 九十九匹を山に遣わしおき (ἀφήσει) 往って迷って居るものを (τὸ πλανώμενον) 尋ね (ζητέω) ないか〔マタ 18:12〕。

第二十三課 動詞の変化 (その十一)

The Subjunctive Mood (接続法)

§ 101. (1) **Subjunctive Mood** はギリシヤ語に於て非常に多く用いられる語法で、**接続法**又は**仮定法**と称し、目的又は仮定の条件等を言い表す場合に用いられ、従って本質として文章の本体に接続して従属句 Subordinate Clause の中に用いられる。但し § 105(4)のように独立句 Independent Clause に用いる場合もある。

(2) Subjunctive Mood の **Tense** は Present、Aorist 及び Perfect の三つだけである。この中 Perfect は稀に用いられるのみであるから後述することとし、今は専ら Present 及び Aorist について学ぶ事とする。

(3) **接続法**は Active、Middle、Passive の何れにも用いられるが Present 及び Perfect に於ては Middle と Passive とは同形である。

(4) **Present Subjunctive** は継続する性質の動作について用い、**Aorist Subjunctive** は必ずしも過去を意味せず、その動作を結了するものとして考えた場合に用いられる。

§ 102. Active Subjunctive の変化

		Present	1st. Aorist	2nd. Aorist
単	1	λύ-ω	λύ-σω	βάλ-ω
	2	λύ-ης	λύ-σης	βάλ-ης
数	3	λύ-η	λύ-ση	βάλ-η
複	1	λύ-ωμεν	λύ-σωμεν	βάλ-ωμεν
	2	λύ-ητε	λύ-σητε	βάλ-ητε
数	3	λύ-ωσι(ν)	λύ-σωσι(ν)	βάλ-ωσι(ν)

注意 1. 語尾の変化は以上の Tense につき皆同一である。唯一つの差異は 1st. Aorist に於てその特徴たる σ (§ 70) が加わって居る事である。

注意 2. 2nd. Aorist は Present Stem ではなく Verbal Stem (§ 72) を基礎として変化する。

注意 3. 語尾の変化は大体 Indicative Active Present と同一であるが、母音が延長し (ε が η ; ο, ου が ω) ι が Subscript の形を取る。

注意 4. λύω は Indicative Active Present の λύω と全く同形であるから、実際の場合には前後の関係、文章の構造で Subjunctive か Indicative かを区別しなければならない。

§ 103. εἰμί の Subjunctive Active

ῶ, ῆς, ῆ, ῶμεν, ῆτε, ῶσι(ν) と変化する。即ち普通の動詞の Subjunctive Active の語尾で、唯アクセントが異なって居るだけである。尚 § 13, 64, 80 参照。

§ 104. Middle and Passive Subjunctive の変化

		Present	1st. Aorist	2nd. Aorist
Middle Voice	単 数	1	λύ-ωμαι	λύ-σωμαι
		2	λύ-η	λύ-ση
		3	λύ-ηται	λύ-σηται
	複 数	1	λυ-όμεθα	λυ-σόμεθα
		2	λύ-ησθε	λύ-σησθε
		3	λύ-ωνται	λύ-σονται
Passive Voice	単 数	1	Middle Voice と	λυ-θῶ
		2	同形	λυ-θῆς
		3		λυ-θῆ
	複 数	1	Middle Voice と	λυ-θῶμεν
		2	同形	λυ-θῆτε
		3		λυ-θῶσι (v)

注意 1. Present は Middle と Passive が常に同形であり、アオリストは常にこれが異なっている。

注意 2. Middle Voice の語尾は Present Indicative Passive (§ 34, 35) と同一で、その結合母音 (§ 15 注意 4) を延長したものである。

注意 3. 1st. Aorist Passive には θ が附加されるのがその特徴である。なお Indicative Passive の場合を参照すべし (§ 75)。

注意 4. 2nd. Aorist Passive の語尾は εἶμι の Subjunctive Active の変化と同一である。

§ 105. Subjunctive Mood の用法

(1) **目的**又は**計画**を表わす句、即ち Intentional Clauses に用いる。この場合 ἵνα (……せんが為) 又は ὅπως (……する様に) 等の接続詞

と共に用いられる。否定の場合は μή を用いる。

例 τοῦτο δὲ γέγονεν ἵνα πληρωθῆ τὸ ῥηθὲν ὑπὸ κυρίου. (マタ 1:22)

この事は主によりて語られし言の成就せんが為に起った。

καὶ αὐτοὶ οὐκ εἰσηλθον εἰς τὸ πραιτώριον, ἵνα μὴ μιαθῶσιν ἀλλὰ φάγωσιν τὸ πάσχα. (ヨハ 18:28)。彼らは汚穢を受けずに過越を食う為に官邸に入らなかった。

ἀπαγγεῖλατέ¹ μοι, ὅπως κἀγὼ² ἔλθὼν προσκυνήσω αὐτῷ. (マタ 2:8)。

私もまた行きて拝し得る様に我に復命せよ。

なお (ヨハ 1:7) を参照せよ。

(2) “若し……ならば”“若し……に非ずば”等の如く実現の可能性強き**仮定**に於ては ἐάν 又は ἐάν μή と共に Subjunctive Mood を用いる (ἐάν は εἰ ἄν の結合、ἄν は強意的の Particle)。

例 ἐάν ἔχητε πίστιν ὡς κόκκον σινάπεως (マタ 17:20)。

もし芥子種一粒程の信仰を持って居るならば

ἐὰν δὲ καὶ ἀθλήῃ³ τις, οὐ στεφανοῦται⁴ ἐὰν μὴ νομίμως⁵ ἀθλήσῃ.

(II テモ 2:5)。

人もし競うならば規則に従い競うに非ずば冠を与えられない。

(3) ὅς ἄν (誰でも)、ὅταν (= ὅτε ἄν, 何時でも)、ὅπου ἄν (何処でも)、ἕως ἄν (…迄は) 等の後にも Subjunctive Mood が用いられる。(但し ἕως, ἕως οὗ, ἕως ὅτου 等 ἄν なしに用いられる場合もある)。

例 ὅς ἄν πιστεύσῃ εἰς τὸ ὄνομα τοῦ κυρίου σωθήσεται.

主の名を信ずる者は誰でも救われるであろう。

¹ ἀπαγγέλλω の命令形

² καὶ ἐγώ の短縮

³ ἀθλέω (athletic の原語) 競争する

⁴ στεφανόω 冠をいただく

⁵ 律法 (νόμος) に循い

ὅταν οὖν ποιῆς ἐλεημοσύνην, μὴ σαλπίσης ἔμπροσθέν σου. (マタ 6:2)。汝施濟をなす時汝の前にラッパを吹くな。

ἕως ἄν παρέλθῃ ὁ οὐρανὸς καὶ ἡ γῆ, ἰὼτα ἐν ἡ μία κεραία οὐ μὴ παρέλθῃ ἀπὸ τοῦ νόμου. (マタ 5:18)。天と地とが亡びる迄は一つの ι 一つの字画も律法から亡び失せる事は無いであろう。

(4) Subjunctive Mood は次の場合独立句 Independent Clauses に於て用いられる。

(イ) 勸告的命令 Honorary Imperative

例 ἀγαπητοί, ἀγαπῶμεν ἀλλήλους (I ヨハ 4:7)

愛する者よ我ら互に相愛しようではないか。

(ロ) 禁止的命令の場合 (μὴ を用う)

例 μὴ φοβηθῆς (マタ 1:20)。恐るな

μὴ νομίσητε (マタ 5:17)。思うな

μὴ σαλπίσης (マタ 6:2)。ラッパを吹くな

(ハ) 考慮 Deliberation の場合

例 τί ποιῶμεν; (ヨハ 6:28)。我ら何を為したらよからうか。

τί εἶπω ὑμῖν; ἐπαινέσω ὑμᾶς; (I コリ 11:22)。私は君達に何を言おうか、君等を誉むべきだろうか。

(ニ) 強い否定の場合 οὐ μὴ と共に Aorist Subjunctive を用いる。

例 οὐ μὴ εἰσέλθητε εἰς τὴν βασιλείαν τῶν οὐρανῶν. (マタ 5:20)。

君達は天国に入ることは絶対に出来ない。

οὐ μὴ ἐξέλθῃς ἐκεῖθεν ἕως ἄν ἀποδώς τὸν ἔσχατον κοδράντην.

(マタ 5:26)。最後の一厘を償う迄は君はその処を出る事は絶対に出来ない。

単語

ἀλίζω 塩見を付ける
ἀπολύω 解く、離縁する
ἐπιμένω 継続する
δέω 繋ぐ
μοιχάομαι 姦淫する
ἐρῶ 言う
πίνω 飲む

μωραίνω 馬鹿にならせる、味を失わせる
πλεονάζω 増し加わる
αὔριον, ἡ 明日
σίτος, ὁ 穀物
ἀνωθεν 新たに、上より
ἀμήν アーメン

練習第十九

次のギリシャ語を訳せ。

- (1) διδάσκαλε, τί¹ ἀγαθὸν ποιήσω ἵνα σχῶ² ζωὴν αἰώνιον; [マタ 19:16]。
(2) οὐ γὰρ ἀπέστειλεν ὁ θεὸς τὸν υἱὸν εἰς τὸν κόσμον ἵνα κρίνη τὸν κόσμον, ἀλλ' ἵνα σωθῆ ὁ κόσμος δι' αὐτοῦ. [ヨハ 3:17]。(3) ἐὰν δὲ τὸ ἄλλας μωρανθῆ, ἐν τίνι ἀλισθήσεται; [マタ 5:13]。(4) ὁ ἐὰν δέησης ἐπὶ τῆς γῆς ἔσται δεδεμένος ἐν τοῖς οὐρανοῖς. [マタ 16:19]。(5) τί οὖν ἐροῦμεν; ἐπιμένωμεν τῇ ἁμαρτίᾳ, ἵνα ἡ χάρις πλεονάσῃ; [ロマ 6:1]。(6) ἀμὲν ἀμήν λέγω ὑμῖν, ἐὰν τις τὸν ἐμὸν λόγον τηρήσῃ, θάνατον οὐ μὴ θεωρήσῃ εἰς τὸν αἰῶμα. [ヨハ 8:51]。(7) εἰ νεκροὶ οὐκ ἐγείρονται, φάγωμεν καὶ πίωμεν, αὔριον γὰρ ἀποθνήσκομεν. [Iコリ 15:32]。

次の語をギリシャ語に訳せ。

- (1) 自分の生命を救おうと思うものはそれを失う (マタ 16:25)。

¹ What?

² ἔχω の 2nd. Aorist Subjunctive

（２）自分の妻を出して他の女（ἄλλη の四格）を娶る者はこれと姦淫するのだ（マコ 10:11）。（３）真理を行う者は光に来る、その業の頭れん為である（ヨハ 3:21）。（４）子を見て彼を信じる者は皆永遠の生命を持つ事は（ἵνα）これ我が父の御意である（ヨハ 6:40）。

（５）まことに誠に君に云う人もし新に生れずば神の国を見る事（ιδεῖν）が出来ない（ヨハ 3:3）。（６）若し一粒の麦地に落ちて（Participle）死なないならば唯一つにて残る。若し死ねば多くの実を結ぶ（ヨハ 12:24）。（７）そは持てるものは彼に与えられるであろうから（δοθήσεται）（ルカ 8:18）。（８）聖霊を瀆す者は永遠に赦されない（赦免を持たない）（マコ 3:29）。

第二十四課 動詞の変化（その十二）

The Imperative Mood（命令法）

§ 106. Imperative Mood 命令法は命令を言い表す話法であって、否定の場合は μή を用いる。

例 ἀγαπάτε τοὺς ἐχθροὺς ὑμῶν.（マタ 5:44）

汝の敵を愛せよ。

ἐγὼ εἰμι, μὴ φοβεῖσθε.（ヨハ 6:20）

おれだよ、恐れるな。

Imperative Mood の語尾は Tense, Voice に従い、次の如くに変化する。（2nd. Aorist は Verbal Stem + Present の語尾）

		Active	Middle	Passive
Present	単数	2	-ε	-ου Middle と同じ
		3	-έτω	-έσθω
	複数	2	-ετε	-εσθε Middle と同じ
		3	-έτωσαν (又は-όντων)	-έσθωσαν (又は-έσθων)

1st. Aorist	単 数	2	-σον	-σαι	-θητι
		3	-σάτω	-σάσθω	-θήτω
	複 数	2	-σατε	-σασθε	-θητε
		3	-σάτωσαν (又は-σάντων)	-σάσθωσαν (又は-σάσθων)	-θήτωσαν (又は-θέντων)
Perfect	単 数	2	-κε		-σο
		3	(語頭重複) -κέτω	(語頭重複)	-σθω
	複 数	2	-κετε		-σθε
		3	(語頭重複) -κέτωσαν (又は-κόντων)	(語頭重複)	-σθωσαν (又は-σθων)

注意 1. 上表の示す如く第三人称は皆 ω を含む事がその特徴である。

注意 2. Perfect の場合は語首に Reduplication (語首重複) がある事は Participle と同一である。

§ 107. λύω の Imperative Mood

		Active	Middle	Passive	
Present	単 数	2	λύε	λύου	
		3	λύέτω	λύέσθω	
	複 数	2	λύετε	λύεσθε	
		3	λύέτωσαν*	λύέσθωσαν*	
1st. Aorist	単 数	2	λύσον	λύσαι	λύθητι
		3	λυσάτω	λυσάσθω	λuthήτω
	複 数	2	λύσατε	λύσασθε	λύθητε
		3	λυσάτωσαν*	λυσάσθωσαν*	λuthήτωσαν*

Perfect	単	2	λέλυκε	λέλυσο
	数	3	λελυκέτω	λελύσθω
	複	2	λελύκετε	λέλυσθε
	数	3	λελυκέτωσαν*	λελύσθωσαν*

注意 *印を附けたものは、又 § 106 の表の () 内の如くにも変化する。

§ 108. Imperative Mood の意味は、その Tense によりて各々特有の性格を有す。即ち

Present は継続的動作を命令する場合

Aorist は一時的動作を命令する場合

Perfect は一時的動作にして結果の継続するものを命令する場合に用いる。

例 (1) Present

μη κρίνετε. (マタ 7:1) 裁くなかれ (常に)。

πάντοτε χαίρετε, ἀδιαλείπτως προσεύχεσθε, ἐν παντί εὐχαριστεῖτε¹.

(I テサ 5:16-18) 常に喜べ、絶えず祈れ、凡てのこと感謝せよ (継続的に)。

例 (2) Aorist

εἰσελθε² εἰς τὸ ταμιεῖόν σου καὶπρόσευξαι. (マタ 6:6) 密室に入りて祈れ (一時的動作)。

例 (3) Perfect

περίμωσο. (マコ 4:39) 鎮まれ (鎮まって後にその結果は残る動作)。

¹ εὐχαριστετε の収縮せるもの。§ 33。

² 2nd. Aorist Imperative なり。

なお一つの文章の中に Present と Aorist との Imperative を併用して居る場合、この意味の微妙な区別がその中に含まれて居る。

例 ἄρον τὸν κράβατόν σου καὶ περιπάτει¹. (ヨハ 5:8) 床を取り上げよ (一時的) 而して歩め (継続的)

しかしこの両者は必ずしも常にこの明瞭な区別がある訳ではない (マタ 5:16・ヨハ 2:5・I コリ 15:34・ロマ 15:11 等参照)。この場合 Aorist は意味を強める力を持って居る。

§ 109. なお Future Indicative が命令法の代りに用いられる事が多い。殊に禁止命令の場合にはこの形がしばしば用いられる。

例 ἔσεσθε οὖν ὑμεῖς τέλειοι ὡς ὁ πατήρ ὑμῶν ὁ οὐράνιος τέλειός ἐστιν.

(マタ 5:48) 夫故に汝ら天の父の完き如く完くなれ。

οὐ φονεύσεις, οὐ μοιχεύσεις, οὐ κλέψεις, οὐ ψευδομαρτυρήσεις,

(マタ 19:18, 19) 殺すなかれ、姦淫するなかれ、盗むなかれ、偽証するなかれ。

§ 110. Subjunctive Mood が命令の意味に用いられる事については、§ 105. (4) (イ)(ロ)に既に述べた通りである。

§ 111. εἰμί の Imperative は次の如くである。

Present ἴσθι, ἔστω (又は ἦτω) ; ἔστε, ἔστωσαν.

¹ εἰ は εε の Contraction.

第二十五課 動詞の変化（その十三）

The Infinitive（不定詞）

§ 1 1 2. Infinitive は Verbal Noun 即ち動詞が名詞の如くに用いられる語法である。従って動詞と名詞との双方の性質を共有して居る。

(a) 動詞の性質を有するが故に

(1) Subject をもつ。(その格につきては後述す。但し Subject は省略される場合も多い)。

(2) Object をもつ事が出来る (但し他動詞の場合)。

(3) Adverb によりて修飾される事がある。

(4) Tense, Voice によりて変化する。

(b) 名詞の性質を有するが故に

(1) 他の動詞の Subject 又は Object となることが出来る。

(2) 冠詞を取る。

(c) 否定の場合は οὐ 又は μή を取る。

§ 1 3 3. Infinitive の語尾は下の如くに変化する。

	Active	Middle	Passive
Present	-ειν		-εσθαι
Future	-σειν	-σεσθαι	-θήσεσθαι
1st. Aorist	-σαι	-σασθαι	-θήναι
Perfect	(語頭重複) -κέναι	(語頭重複) -σθαι	

注意 1. Active の Present と Future のみは ειν その他は皆 αι で終わる事を記憶して居れば、ある語が Infinitive なりや否やを識別する事が容易である。

注意 2. Present と Perfect とは Middle と Passive とが同形である。

注意 3. θ は Middle 及び Passive に必ず含んで居る。

注意 4. 2nd. Aorist の Infinitive は次の如し。例、τύπτω の Active τυπεῖν, Middle τυπέσθαι, Passive τυπήναι。即ちアクセントが異なり、かつ動詞の Verbal Stem を用いる (§ 72 参照)。

§ 1 1 4. εἰμί の Infinitive は次の如くである。

Present εἶναι, Future ἔσεσθαι

§ 1 1 5. Infinitive が **Subject** として用いられる場合。

これは最も多く用いられる用法で ἐστί 又は無人称動詞、即ち Impersonal Verbs (例えば ἔξεστι“正当である”、ἔδει“必要である”の如き) の Subject として用いられる。

例 ἐμοὶ δὲ μὴ γένοιτο¹ καυχᾶσθαι² (ガラ 6:14)。

誇る事は我に起らざれかし。

ἔξεστι τοῖς σάββασι θεραπεῦσαι; (マタ 12:10)。

安息日に医す事は至当か。

§ 1 1 6. Subject として用いられる Infinitive は同時に、又自己の **Subject** を持つ事が出来る。これを表わす場合は Subject は第四格の名詞、代名詞を用いる。

例 καλόν ἐστιν ἡμᾶς ὧδε εἶναι (マタ 17:4) 我らがここに居る事は結構である。(ἡμᾶς が四格であることに注意せよ、ἡμᾶς は εἶναι の Subject であり、同時に εἶναι は ἐστίν の Subject である)。

§ 1 1 7. Infinitive は Subject 又は前置詞の Object として用いられる場合に冠詞を取る事がある。この場合 Infinitive は中性名詞として取り扱われるが語尾は一切変化しない。

¹ γίνομαι の Optative、第三人称単数 2nd Aorist.

² καυχάομαι の Present Infinitive καυχά-εσθαι の収縮した形。

例 ἐμοὶ γὰρ τὸ ζῆν¹ Χριστὸς καὶ τὸ ἀποθανεῖν² κέρδος (ピリ 1:21)。
そは我に取りて生きる事はキリストであり、死ぬ事も益である。
従って格に於ても種々あり得るのは当然である。

Genitive の例 ἐλπίς πᾶσα τοῦ σώζεσθαι ἡμᾶς (使徒 27:20)。

我らが救わるべき凡ての望み。

Dative の例 ἐν δὲ τῷ καθεύδειν τοὺς ἀνθρώπους (マタ 13:25)。

人々が眠って居る間に。

Accusative の例 ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου παραδίδοται εἰς τὸ σταυρωθῆναι

(マタ 26:2)。人の子は十字架に釘けられる為に付される。

(εἰς τὸ + Infinitive は“……せん為”の意)。

διὰ τὸ μὴ ἔχειν ῥίζαν (マタ 13:6)。根を持たぬ事のゆえに。

(διὰ τὸ + Infinitive = ……の故に)。

尚 μετά, πρό その他の Preposition と共に Infinitive が用いられる。

§ 1 1 8. Infinitive は又“見る”“聞く”“言う”“考える”等の五感、又は心持ちを示す動詞、或いは“欲する”“能う”等の意思、能力を示す動詞の **Object** として用いられる。この場合日本語では“……する事”と訳す事が適當である。

例 οὐδεὶς δύναται δυσὶ κυρίοις δουλεῦν. (マタ 6:24)。

何人も二人の主人に仕える事が出来ない。

φάσκοιτες εἶναι σοφοὶ ἐμωράνθησαν. (ロマ 1:22)。

賢くある事を主張しつつ愚となった。

§ 1 1 9. Infinitive は、又形容詞及び副詞に類似の働きをなし、

¹ ζῆν は ζά-ειν の収縮せるもので ζάω の Present Infinitive.

² ἀποθανεῖν は ἀποθνήσκω の 2nd Aorist Infinitive.

或いは名詞に付随してこれを限定し（例 1）或いは形容詞、又は動詞に付随してその意味を修飾する場合がある（例 2, 3）。

例 1 ὁ ἔχων ᾠτα ἀκούειν ἀκουέτω. (ルカ 14:35)。

聴く耳を持つ者は聴くべし（名詞）。

例 2 οὗ οὐκ εἰμι ἱκανὸς τὰ ὑποδήματα βαστάσαι. (マタ 3:11)。

私はその人の靴の紐を解くに値しない（形容詞）。

例 3 ἤλθομεν προσκυῆσαι αὐτῷ. (マタ 2:2)。

我ら彼を拜せん為に來た（動詞）。

§ 1 2 0. Infinitive の Tense は Participle の場合と同じく

Present は継続せる動作

Future は企画、又は将来の事柄

Aorist は動作を終了せるものとして見る場合

Perfect は完了して後に残る結果をも含む場合に用いられる。

単 語

ἐχθρός, ὁ 敵

κλείω 閉ずる

θησαυρός, ὁ 財宝

μοιχεύω 姦淫する

θύρα, ἡ 戸

νομίζω 思う

στρατιώτης, ὁ 兵士

προσέχω 注意する

ταμειόν, τό 密室 (又は ταμειῖον)

προσεύχομαι 祈る

θεάομαι 視る

τρέχω 走る

θησαυρίζω 貯える

ἤδη 今、既に

καταλαμβάνω 掴む、追いつく

μαμωνᾶς, ὁ マモン、富

練習第二十

(第二十四課及び第二十五課に関する問題)

次のギリシャ語を訳せ (_____ の動詞の Voice, Tense 及び Mood を示せ)

(1) λέγει αὐτῷ ὁ Φίλιππος. ἔρχου καὶ ἴδε. [ヨハ 1:46]。(2) ἔχων ὑπ' ἑμαυτὸν¹ στρατιώτας καὶ λέγω τούτῳ πορεύθητι, καὶ πορεύεται, καὶ ἄλλῳ ἔρχου, καὶ ἔρχεται, καὶ τῷ δούλῳ μου ποιήσον τούτο, καὶ ποιεῖ. [マタ 8:9]。

(3) Ἦκούσατε ὅτι ἐρρέθη ἁγαπήσεις τὸν πλησίον σου καὶ μισήσεις τὸν ἐχθρόν σου. [マタ 5:43]。(4) μὴ νομίσητε ὅτι ἦλθον καταλῦσαι τὸν νόμον ἢ τοὺς προφήτας· οὐκ ἦλθον καταλῦσαι ἀλλὰ πληρῶσαι. [マタ 5:17]。(5) πᾶς ὁ βλέπων γυναῖκα πρὸς τὸ ἐπιθυμῆσαι αὐτήν ἤδη ἐμοίχευσεν αὐτήν ἐν τῇ καρδίᾳ αὐτοῦ. [マタ 5:28]。(6) προσέχετε δὲ τὴν δικαιοσύνην ὑμῶν μὴ ποιεῖν ἔμπροσθεν τῶν ἀνθρώπων πρὸς τὸ θεαθῆναι αὐτοῖς. [マタ 6:1]。

次の語をギリシャ語に訳せ。

《1》(汝ら)悔い改めて福音を信ぜよ (マコ 1:15)。(2)兄弟よ世もし汝らを憎むとも驚くな (Iヨハ 3:13)。(3)汝らの敵を愛せ、而して汝らを迫害する者の為に (ὕπερ) 祈りせよ (マタ 5:44)。

《4》もし汝の右の手汝を躓かせば切って捨てよ (βάλλω ἀπό σου) (マタ 5:30)。(5) (汝) 祈る時偽善者の如くであるな、しかしながら汝の室に入れ、そして汝の父に祈れ (マタ 6:5,6)。(6) 地上に財宝を蓄うるなかれ (マタ 6:19)。(7) (汝らは) 神及びマモンに仕うる事が出来ない (マタ 6:24)。

¹ § 121 を見よ。

第二十六課 代名詞 (その二)

§ 121. Reflexive Pronouns 反射代名詞

Reflexive Pronoun は私、汝、彼自身 (ノ、ニ、ヲ) 等の意味を表わす場合に用い、Personal Pronoun と αὐτός (§ 51, p47) とを結び付けて造る。但し第一格は無い。

(1) Reflexive Pronoun の変化

		単 数		複 数	
G	一	ἐμαυτοῦ, -ῆς	私自身の	ἡμῶν αὐτῶν	我ら自身の
D	人	ἐμαυτῶ, -ῆ	私自身に	ἡμῖν αὐτοῖς, -αῖς	我ら自身に
A	称	ἐμαυτόν, -ήν	私自身を	ἡμᾶς αὐτούς, -άς	我ら自身を
G	二	σεαυτοῦ, -ῆς	汝自身の	ὕμῶν αὐτῶν	汝ら自身の
D	人	σεαυτῶ, -ῆ	汝自身に	ὕμῖν αὐτοῖς, -αῖς	汝ら自身に
A	称	σεαυτόν, -ήν	汝自身を	ὕμᾶς αὐτούς, -άς	汝ら自身を
G	三	ἐαυτοῦ, -ῆς, -οῦ	彼其自身の	ἐαυτῶν, -ῶν, -ῶν	彼ら其ら自身の
D	人	ἐαυτῶ, -ῆ, -ῶ	彼其自身に	ἐαυτοῖς, -αῖς, -οῖς	彼ら其ら自身に
A	称	ἐαυτόν, -ήν, -ό	彼其自身を	ἐαυτούς, -άς, -ά	彼ら其ら自身を

(2) この Reflexive Pronoun は聖書に多く用いられて居るが、文法上は簡単である。但し混合のおそれなき場合は、第三人称を第一第二人称等の代りに用うる事がある。

例 ἀλλὰ καὶ αὐτοὶ τὴν ἀπαρχὴν τοῦ πνεύματος ἔχοντες ἡμεῖς καὶ

αὐτοὶ ἐν ἑαυτοῖς στεναζόμεν (ロマ 8:23) 尚御霊の初歩を有つ

我ら自身も心の中に呻いて居る。尚ピリ 2:12 参照。

(3) 又 ἐαυτοῦ etc. は αὐτοῦ と収縮する事がある。この場合 αὐτοῦ と混同し易い故、注意しなければならない。

§ 1 2 2. Possessive Pronoun 所有代名詞は所有を示す。

		男	女	中	
第一人称	単数	ἐμός	ἐμή	ἐμόν	私の、私のもの
	複数	ἡμέτερος	ἡμέτερα	ἡμέτερον	我らの、我らのもの
第二人称	単数	σός	σῆ	σόν	汝の、汝のもの
	複数	ύμέτερος	ύμέτερα	ύμέτερον	汝らの、汝らのもの

例 λίαν γὰρ ἀντέστη τοῖς ἡμετέροις λόγους. 何となれば彼は甚だしく彼らの言葉に反抗したから (II テモ 4:15)。

以上の各々は形容詞の母音変化 (§ 27) に従って変化する。即ち ἐμός, ἐμοῦ, ἐμῶ, ἐμόν; ἐμοί etc. である。

Possessive Pronoun には第三人称はない。この場合には ἐαυτοῦ (αὐτοῦ) を用いる。

例 υἱὸς αὐτοῦ 彼の息子

υἱὸς ἐαυτοῦ 又は αὐτοῦ 文章の主格たる人、彼自身の息子

§ 1 2 3. Demonstrative Pronoun 指定代名詞

§ 53 に既に οὗτος, ἐκεῖνος について述べた。その他質、量、数等を示す為に次の語が用いられる。その変化は οὗτος と同様である。

質 Quality τοιούτος τοιαύτη τοιούτο such かかる

量 Quantity τοσοῦτος, τοσαύτη τοσοῦτο so great かく大なる

数 Number τοσοῦτοι τοσαῦται τοσαῦτα so many かく多くの

質の例 τῶν γὰρ τοιούτων ἐστὶν ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν.

天国はこの様な人たちのものであるから (マタ 19:14)。

量の例 παρ' οὐδενὶ τοσαύτην πίστιν ἐν τῷ Ἰσραὴλ εὔρον.

イスラエルでは誰にも かく大きい 信仰を私は見出さなかつた (マタ 8:10)。

数の例 ἀλλὰ ταῦτα τί εἰς τοσούτους;

だがこんなものはかく多くの人たちに何になるか (ヨハ 6:9)。

§ 1 2 4. Indefinite Relative Pronoun 不定関係代名詞は § 56 に述べた ὅς, ἣ, ὅ の外にこれに Indefinite Pronoun τις (§ 126 参照) を加えて造る不定関係代名詞 Indefinite Relative Pronoun がある。(英語の whoever, whatever に相当する)。

	単 数			複 数		
	男	女	中	男	女	中
N	ὅστις	ἣτις	ὅ, τι	οἵτινες	αἵτινες	ἅτινα
G	οὗτινος	ἧστινος	οὗτινος	ὄντινων	ὄντινων	ὄντινων
D	ὧτινι	ἧτινι	ὧτινι	οἷστισι	αἷστισι	οἷστισι
A	ὄντινα	ἧντινα	ὅ, τι	οὕστινας	ἄστινας	ἅτινα

注意 中性単数第一格及び第四格を、コンマを以て中絶して居るのは接続詞 ὅτι と区別する為である。

例 πᾶς οὖν ὅστις ὁμολογήσει ἐν ἐμοὶ ἔμπροσθεν τῶν ἀνθρώπων.
…だから人々の前に我について告白する凡ての人は誰でも… (マタ 10:32)。

§ 1 2 5. 質、量、数等を示す為には次の関係代名詞を用いる。

質 Quality οἷος such as かかる

量 Quantity ὅσος so great as かく大なる

数 Number ὅσοι so many as かく多くの

§ 1 2 6. Interrogative Pronoun 及び Indefinite Pronoun.

Interrogative Pronoun 疑問代名詞は τίς, τί であるが、これが Indefinite Pronoun 不定代名詞 τις, τι (any, a certain) と同一の変化である為に混同し易い。これはアクセントにて区別される。

	疑問代名詞 τίς (誰?)		不定代名詞 τις (ある人)	
	単 数	複 数	単 数	複 数
N	τίς τί	τίνες τίνας	τίς τί	τινές τινά
G	τίνος	τίνων	τινός	τινῶν
D	τίνι	τίσι	τινί	τίσι
A	τίνα τί	τίνας τίνα	τινά τί	τινάς τινά

但し不定代名詞は Enclitic であるからアクセントを前の語に投げかける。そしてアクセントを取る場合は疑問代名詞と異なり最後の節にこれを取る。

注意 名詞を修飾する時は不定代名詞は名詞の後に来る。

§ 1 2 7. 質、量、数等を示すに次の疑問代名詞を用いる。

質 Quality ποῖος Of what kind? 如何なる性質の?

量 Quantity πόσος How great? 如何に大なる?

数 Number πόσοι How many? 如何に多くの?

質の例 ἐν ποιᾷ ἐξουσίᾳ ταῦτα ποιεῖς; あなたは如何なる権威を以てこれらの事を為すか (マタ 21:23)。

量の例 εἰ οὖν τὸ φῶς τὸ ἐν σοὶ σκότος ἐστίν, τὸ σκότος πόσον.

もしあなたの内の光が暗いなら、その暗さは如何に大きい事か (マタ 6:23)。

数の例 πόσους ἄρτους ἔχετε; パンを幾つ持って居るか (マタ 15:34)。

単 語

ἄπειμι 離れる、去る

μερίζω 分離する

πάρεμι 居る、現在する

πρόβατον, τό 羊

ἐρημόω 荒廢に帰せしむ

ἔτοιμος 準備して

διαλογίζομαι 思う、論ずる

οὐπω 未だ……ず

μεριμνάω 思い煩う

πῶς 如何にして

練習 第二十一 (A)

次のギリシャ語を訳せ。

- (1) πᾶσα βασιλεία μερισθεῖσα καθ' ἑαυτῆς ἐρημοῦται. [マタ 12:25] (2) ὁ καιρὸς ὁ ἐμὸς οὐπω πάρεστιν, ὁ δὲ καιρὸς ὁ ὑμέτερος πάντοτέ ἐστιν ἔτοιμος. [ヨハ 7:6] (3) τοῦτο λογιζέσθω ὁ τοιοῦτος, ὅτι οἱοί ἐσμεν τῷ λόγῳ δι' ἐπιστολῶν ἀπόντες, τοιοῦτοι καὶ παρόντες τῷ ἔργῳ. [II コリ 10:11] (4) ὅσοι οὖν τέλειοι, τοῦτο φρονῶμεν. [ピリ 3:15] (5) ὅστις δ' ἂν ἀρνήσηταί με ἀρνήσομαι καὶ γὰρ αὐτόν. [マタ 10:33] (6) τινὲς τῶν γραμματέων ἐλθόντες ἀπὸ Ἱεροσολύμων εὔρον τινὰς τῶν μαθητῶν αὐτοῦ ὅτι κοιναῖς χερσὶν ἐσθίουσιν τοὺς ἄρτους. [マコ 7:1,2] (7) τί διαλογίζεσθε ἐν ἑαυτοῖς, ὀλιγόπιστοι, ὅτι ἄρτους οὐκ ἔχετε; [マタ 16:8]

次の語をギリシャ語に訳せ。

- 《1》人もし我に来りてその生命を憎まないならば、我が弟子たる事が出来ない (ルカ 14:26)。《2》我もし我自身につきて (περι+二格) 証するならば、我が証は真ならず (ヨハ 5:31)。《3》罪ある人如何してかかる徴 (複数) を為し得ようか (ヨハ 9:16)。《4》父の持つて居る処のものは皆我がものである (ヨハ 16:15)。《5》神の靈によりて導かれるものは皆神の子である (ロマ 8:14)。《6》どの様に何を言うかと思ひ煩うな (マタ 10:19)。《7》人々は人の子を誰であると (Infinitive) 云うか (マタ 16:13)。

第二十七課 動詞の変化（その十四）

完了現在及び完了過去

Perfect and Pluperfect Tenses

§ 128. **Perfect Tense 完了現在**はある動作が現在に於て既に完了せられて居り、しかもその結果が現在にも残存して居る事を示す Tense である。それ故に先に Aorist の場合にも述べた様に (§ 69) Imperfect 及び Aorist とは下の如くに異なった意味で用いられる。

Imperfect (未完了過去) 過去に於て継続、又は反復する行為。

Aorist (不定過去) 過去に於て一時的に起りし動作、又はある動作をその一時的の相に於て述べたもの。

Perfect (現在完了) 動作は現在は既に完了し、唯その結果のみ現在に残って居る動作。

§ 129. λύω の Indicative Perfect の変化

		Active	Middle and Passive
単 数	1	λέ-λυ-κα	λέ-λυ-μαι
	2	λέ-λυ-κας	λέ-λυ-σαι
	3	λέ-λυ-κε	λέ-λυ-ται
復 数	1	λε-λύ-κα-μεν	λε-λύ-μεθα
	2	λε-λύ-κα-τε	λέ-λυ-σθε
	3	λε-λύ-κα-σι	λέ-λυ-νται

注意 1. Active の語尾は-κα の変化せるもので Aorist の σα の変化に類似して居る。但し第三人称複数に於て καν ではなく κασιν である点に於て Aorist の変化と異なり Primary Tense の特徴を示して居る。(例外的場合ありヨハ 17:7)

注意 2. 語頭の子音に ε を加えてこれを最初に重複せしめて居るのが Perfect Tense の特徴で、これを Reduplication (語頭重複) と云う。その形については次節にこれを詳述する。

注意 3. Middle 及び Passive Voice に於ては、語尾の変化は他の Primary Tenses 即ち Present, Future 等の Middle 及び Passive の変化と同一である。但し直接に語根に付きその中間に結合母音が無いのが特徴である。

§ 130. Reduplication (語頭重複) 及び語尾変化は次の規則に従う。

(1) Perfect 及び Pluperfect Tense の凡ての Mood に皆 Reduplication が付く。

(2) 語頭の子音に ε を加えて作る Reduplication は語頭が一つの子音から成る場合か、又は一つの Mute (断音) と一つの Liquid (続音) の結合せる二つの子音から成る時に限る。例えば λύω は λέλυκα となり γράφω は γέγραφα なり καλέω は κέκληκα となるが如し。

(3) 語頭が Vowel または Diphthong で始まる時は Reduplication を取らずに Temporal Augument (§ 22,23) を取る。

(4) 語頭が二つの子音、又は重子音 Double Consonant (ζ, ξ, ψ) で始まる動詞は Reduplication を取らず単に Syllabic Augument (§ 22) のみを取る。例 στεφανόω (冠を被らす) の Perfect Passive は ἐστεφάνωκα、ξηραίνω (しばむ) の Perfect Passive は ἐξήραμμαι となる。

(5) 語頭が Rough Mute (氣息断音 §38) φ, χ, θ で始まる動詞は、それに相当する Sharp Mute (清断音) π, κ, τ を以て Reduplication を造る。例 φιλέω は πεφίληκα、θεάομαι は τεθέαμαι となる。

(6) Preposition と結び付ける複合動詞の場合は Reduplication は Preposition の後につく。例 ἀπολύω は ἀπολέλυμαι となる。

(7) 語根の最後に短母音がある時は、この短母音はそれぞれ延長される。

次の例をよく研究すれば以上の諸規則を明らかにする事が出来るであろう。

単語	意味	Perfect Active	Perfect Passive
νικάω	打ち勝つ	νε-νίκη-κα	
ἀγαπάω	愛する	ἡ-γάπη-κα	
ἁμαρτάνω	罪を犯す	ἡ-μάρτη-κα	
στέλλω	遣す	ἔ-σταλ-κα	
αἰτέω	求める	ἦ-τη-κα	
ψάλλω	歌う	ἔ-ψαλ-κα	
τελειόω	全うす		τε-τελείω-μαι
γεννάω	生む		γε-γέννη-μαι

§ 131. Perfect Tense の **Subjunctive Mood** は次の如く変化する。

λύω の Perfect Subjunctive

		Active	Passive and Middle
単 数	1	λε-λύ-κω	λε-λυ-μένος ὦ
	2	λε-λύ-κης	λε-λυ-μένος ἦς
	3	λε-λύ-κη	λε-λυ-μένος ἦ
復 数	1	λε-λύ-κωμεν	λε-λυ-μένοι ὦμεν
	2	λε-λύ-κητε	λε-λυ-μένοι ἦτε
	3	λε-λύ-κωσιν	λε-λυ-μένοι ὄσι(v)

注意 1. Perfect Subjunctive Active の語尾は Aorist Subjunctive の語尾 σω, σης, ση, etc. の σ の代わりに κ を入れたものに相当する (§102 参照)。

注意 2. Perfect Middle 及び Passive は Perfect Passive Participle (§ 81) に εἰμί の Subjunctive Present の変化 (§ 103) を結合せしめて作られる。

§ 1 3 2. Participle, Infinitive 及び Imperative Mood の Perfect Tense は、それぞれその個所に於て既に揚げておいた。Participle は § 81, § 85、Imperative は § 106、Infinitive は § 113 を参照すべし。

§ 1 3 3. ある種の動詞はその Perfect Tense を形造るのに κ を用いず語尾を直接に根に接続せしむるものがある。これを **Second Perfect** 又は **Strong Perfect** と云う。

次の例を見よ（これらは皆多く用いられる文字である）

Present		Perfect		Present		Perfect
ἀκούω	聞く	ἀκήκοα		ἔρχομαι	来る	ἐλήλυθα
γίνομαι	成る	γέγονα		κράζω	叫ぶ	κέκραγα
κρύπτω	隠れる	κέκρυφα		πείθω	説明する	πέποιθα
πάσχω	苦しむ	πέπονθα		πράσσω	行う	πέπραχα
γράφω	書く	γέγραφα				

なお λαμβάνω 及び λέγω は不規則に変化し Reduplication の代りに ει を取る。

Present	Perfect Active	Perfect Passive
λαμβάνω	εἴληφα	εἴλημμαι
λέγω	εἴρηκα	εἴρημαι

§ 1 3 4. Pluperfect Tense **過去完了** は Perfect の過去形であって Perfect が Present に対する関係と同一の関係を、Pluperfect はある Past の時に対して持つ。但し新約聖書に於てはこの Tense はあまり多く用いられて居ない。

次に λύω の Indicative の Pluperfect Tense を掲げる。

		Active	Middle + Passive
単	1	(ἐ)-λε-λύ-κειν	(ἐ)-λε-λύ-μην
	2	(ἐ)-λε-λύ-κεις	(ἐ)-λέ-λυ-σο
数	3	(ἐ)-λε-λύ-κει	(ἐ)-λέ-λυ-το
復	1	(ἐ)-λε-λύ-κειμεν	(ἐ)-λε-λύ-μεθα
	2	(ἐ)-λε-λύ-κειτε	(ἐ)-λέ-λυ-σθε
数	3	(ἐ)-λε-λύ-κεισαν	(ἐ)-λέ-λυ-ντο

上表のごとく Pluperfect は Augment と Reduplication とを取るが、新約聖書に於ては一般に Augment を省略して、唯 Reduplication のみを取る。

単語

ἀγγελία, ἡ	音信	ἀδικέω	害を与える
ἀγρός, ὁ	畑	ἀγωνίζομαι	闘う
ἀγών, ὁ	闘い	γεννάω	生む
αἴτημα, τό	願い、希求	παραιτέομαι	免ぜられん事を乞う
δρόμος, ὁ	走程、経歴	τελέω	終わる
θησαυρός, ὁ	宝	ψηλαφάω	触れる
κλίνη, ἡ	臥床	ἄξιος	(形) 値する
ἀναγγέλλω	告げる	ὅμοιος	似たる

練習第二十一 (B)

次のギリシャ語を訳せ (Perfect Tense の動詞を指摘せよ)。

(1) πεπληρώκατε τὴν Ἱερουσαλήμ τῆς διδασχῆς ὑμῶν [使徒 5:28]。(2) τὸν καλὸν ἀγῶνα ἠγώνισμαι, τὸν δρόμον τετέλεκα, τὴν πίστιν τετήρηκα [II テモ 4:7]。(3) ἐλήλυθεν ἡ ὥρα ἵνα δοξασθῇ ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου [ヨハ 12:23]。

(4) καὶ ἀπελθοῦσα εἰς τὸν οἶκον αὐτῆς εὗρεν τὸ παιδίον βεβλημένον ἐπὶ τὴν κλίνην καὶ τὸ δαιμόνιον ἐξεληλυθός [マコ 7:30]。 (5) πειρασμός ὑμᾶς οὐκ εἴληφεν εἰ μὴ ἄνθρωπινος [I コリ 10:13]。 (6) ὁ ἦν ἀπ' ἀρχῆς, ὁ ἀκηκόαμεν, ὁ ἐωράκαμεν τοῖς ὀφθαλμοῖς ἡμῶν, ὁ ἔθεασάμεθα καὶ αἱ χεῖρες ἡμῶν ἐψηλάφησαν, [I ヨハ 1:1] (7) Ἰουδαίους οὐδὲν ἠδίκηκα. εἰ μὲν οὖν ἀδικῶ καὶ ἄξιον θανάτου πέπραχά τι, οὐ παραιτοῦμαι τὸ ἀποθανεῖν [使徒 25:10, 11]。

次の語をギリシャ語に訳せ (——は Perfect Tense)。

(1) 我ら信じ且つ知つて居る汝は神の聖者である事を(ヨハ 6:69)。
(2) 我々は求めた願いを得た事を知つて居る (I ヨハ 5:15)。(3)
) 私はこれらの事を君たちに語つたこれ私の喜びが汝らに在り、又汝らの喜びが満されん為である (ヨハ 15:11)。(4) 父みずから君たちを愛し (φιλέω) て居られる、そは君等が私を愛し、又私が父から出て来た (Aorist) 事を信じたからである (ヨハ 16:27)。(5) 預言者によりて言われたる言 (τὸ ῥηθέν) の成就せんが為にこの事が起つた (マタ 21:4)。(6) 我らが彼から聞いて君等に告げる音信は是である (I ヨハ 1:5)。(7) 神の国は畑に隠された宝に似て居る (マタ 13:44)。(8) 我今日汝を生んだ (へブ 1:5)。

第二十八課 動詞の変化 (その十五)

流音動詞の未来及び不定過去

Future and Aorist of Liquid Verbs

§ 135. 根が Liquids (流音 § 38) 即ち λ, μ, ν, ρ で終わる動詞を **Liquid Verbs** と称す。この種の動詞は Future 及び Aorist に於て特種の変化をする。

例 μένω の Future 及び Aorist

		Future		Aorist Active
		Active	Middle	
単 数	1	μενῶ	μενοῦμαι	ἔμεινα
	2	μενεῖς	μενή	ἔμεινας
	3	μενεῖ	μενεῖται	ἔμεινε
復 数	1	μενοῦμεν	μενούμεθα	ἐμείναμεν
	2	μενεῖτε	μενεῖσθε	ἐμείνατε
	3	μενοῦσι	μενοῦνται	ἐμείναν

1. μενῶ, μενεῖς etc. と Present の μένω, μένεις etc. とはアクセントによりて区別する事が出来る。

2. μενῶ は μεν-έ-(σ)-ω の収縮 μενεῖς は μεν-έ-(σ)-εις の収縮 μενοῦμαι は μεν-έ-(σ)-ο-μαι の収縮その他も同様である。

3. Aorist に於ては根 μεν が延長して μειν となり σ を附加せず直接に α, ας, ε を語尾とする。

以上の他なお下の諸動詞の変化を注意すべし。

現在	根	Future	Aorist	訳語
ἀγγέλλω	ἀγγελ	ἀγγελῶ	ἤγγειλα	告げる
αἴρω	ἀρ	ἀρῶ	ἤρα	持上げる
ἀποθνήσκω	θαν	ἀποθανοῦμαι	ἀπέθανον	死ぬ
ἀποκτείνω	κτεν	ἀποκτενῶ	ἀπέκτεινα	殺す
ἀποστέλλω	στελ	ἀποστελῶ	ἀπέστειλα	遣す
βάλλω	βαλ	βαλῶ	ἔβαλον	投げる
ἐγείρω	ἐγερ	ἐγερῶ	ἤγειρα	起す
κρίνω	κριν	κρινῶ	ἔκρινα	審く
ὀφείλω	ὀφελ	ὀφελῶ	ὄφελον	…すべき筈
σπείρω	σπερ	σπερῶ	ἔσπειρα	種蒔く
φθείρω	φθερ	φθερῶ	ἔφθειρα	破壊する・腐朽する

§ 1 3 6. 以上の諸例によりて次の事を知る事が出来る。

- (1) Liquid Verbs はその Future に於て他の ω 動詞の場合と異なり σ を取らず、Verbal Stem に直接に ω を附加せる形を取る。
- (2) これらの諸動詞の Present Stem は Verbal Stem よりも長く、Verbal Stem が Short Stem が Short Vowel を持って居る時でも Present Stem に於て、それが或は延長され或は重母音に変化する。
- (3) Verbal Stem が λ に終わる動詞は Present Stem は λλ となります。στέλλω, στελ の如し (但し ὀφείλω は例外)。
- (4) Aorist の場合でも普通の Aorist の特徴たる σ が無く -α, -ας, -ε, -αμεν, -ατε, -αν の語尾となる。
- (5) Aorist の場合は Stem の母音は Present の場合と同じく延長する。即ち ε が ει, ι が ι (長音) となる。

§ 1 3 7. Liquid Verbs は以上の外 Perfect Active の場合に ν や μ が κ の前に来る事が出来ないので、種々の便宜手段を取って居る。例えば

- (1) κρίνω の Perfect Active は κέκρι(ν)κα で ν を脱落し
- (2) φαίνω の Perfect Active は πέφην(κ)α で κ を脱落し
- (3) μένω の Perfect Active は μεμένηκα で η を挿入す。

Liquid Verbs の Perfect Passive の場合は

- (1) κέκρι(ν)μαι で ν が脱落し
- (2) πέφα(ν)σμαι で ν が σ に変化し
- (3) μεμένημαι となり η が挿入される。

§ 1 3 8. Future 及び Aorist の Imperative, Infinitive, Participle 等も上と同じ方法に従って変化する。

単語

ἐκλεκτός, ὁ 選民	κατακρίνω 罪に定める
ναός, ὁ 宮	κλίνω 臥床する
περιστερά, ἡ 鳩	μέλλω まさに……せんとする
ζυγός, ὁ 軛 (くびき)	μυαίνω 汚す
ἀπαγγέλλω 告げる	σκανδαλίζω 躓かす
καταβαίνω 降る	ἐπεὶ もし然らば
γεννάω 生む	τότε その時

練習第二十二

次のギリシャ語を訳せ(——線の動詞の Tense を示せ)。

(1) καὶ ἀπήγγειλαν ὅσα πρὸς αὐτοὺς οἱ ἀρχιερεῖς καὶ οἱ πρεσβύτεροι εἶπαν. [使徒 4:23]。(2) ἀπαγγεῶ τὸ ὄνομά σου τοῖς ἀδελφοῖς μου, ἐν μέσῳ ἐκκλησίας ὑμνήσω σε. [へブ 2:12]。(3) καὶ ἐμαρτύρησεν Ἰωάννης λέγων ὅτι τεθέαμαι τὸ πνεῦμα καταβαῖνον ὡς περιστερὰν ἐξ οὐρανοῦ, καὶ ἔμεινεν ἐπ' αὐτὸν. [ヨハ 1:32]。(4) μείνατε ἐν τῇ ἀγάπῃ τῇ ἐμῇ. ἐὰν τὰς ἐντολάς μου τηρήσητε, μενεῖτε ἐν τῇ ἀγάπῃ μου [ヨハ 15:9, 10]。(5) ἄνδρες Νινευῖται κατακρινούσιν αὐτήν. [ルカ 11:32]。(6) οὐκ εἰσῆλθον εἰς τὸ πραιτώριον ἵνα μὴ μιανθῶσιν. [ヨハ 18:28]。

次のギリシャ語を訳せ(——は Aorist、……は Future)。

(1) 果期 (ὁ καιρὸς τῶν καρπῶν) 近づいた時彼は彼の僕どもを農夫の許に遣わした(マタ 21:34)。(2) 汝が我を世に遣わした如く我もまた彼らを世に遣した(ヨハ 17:18)。(3) その時彼は使者たちを遣しその選民を集るであろう(マコ 13:27)。(4) 我が軛を取れそして我に学べ(マタ 11:29)。(5) もし然らば神は如何にして世を審くべきか(ロマ 3:6)。

《6》汝この宮を毀て（壊して、λύω の Aorist Imperative）我は三日の中にこれを建てる（起す）であろう（ヨハ 2:19）。《7》人若し神の宮を毀つなら（Indicative Present of φθειρώ）神かれを毀ち給うであろう（1 コリ 3:17）。

第二十九課 動詞の変化（その十六）

（祈願法） Optative Mood 及び

（収縮動詞） Contracted Verbs

§ 139. 最後に Optative Mood（祈願法）につき一言しなければならぬ。但しこの Mood はあまり多くは用いられて居ない。

λύω の Optative Mood

		(1) Present		(2) Future		
		Act.	Mid. & Pass.	Act.	Mid.	Pass.
単 数	1	λύ-οιμι	λύ-οίμην	λύ-σοιμι	λυ-σοίμην	λυ-θησοίμην
	2	λύ-οις	λύ-οιο	λύ-σοις	λύ-σοιο	λυ-θήσοιο
	3	λύ-οι	λύ-οιτο	λύ-σοι	λύ-σοιτο	λυ-θήσοτο
復 数	1	λύ-οιμεν	λυ-οίμεθα	λύ-σοιμεν	λυ-σοίμεθα	λυ-θησοίμεθα
	2	λύ-οιτε	λύ-οισθε	λύ-σοιτε	λύ-σοισθε	λυ-θήσοισθε
	3	λύ-οιεν	λύ-οιντο	λύ-σοιεν	λύ-σοιντο	λυ-θήσοιντο

		(3) アオリスト		
		Active	Middle	Passive
単 数	1	λύ-σαιμι	λυσαιμην	λυ-θείην
	2	λύ-σαις	λύσαιο	λυ-θείης
	3	λύ-σαι	λύσαιτο	λυ-θείη
復 数	1	λύ-σαιμεν	λυ-σαιμέθα	λυ-θείημεν
	2	λύ-σαιτε	λύ-σαισθε	λυ-θείητε
	3	λύ-σαιεν	λύ-σαιντο	λυ-θείεν*

* λυθείσαν の Contraction.

		(4) Perfect	
		Active	Middle & Passive
単 数	1	λελύ-κοιμι	λελυμένος εἶην
	2	λελύ-κοις	λελυμένος εἶης
	3	λελύ-κοι	λελυμένος εἶη
復 数	1	λελύκοιμεν	λελυμένοι εἶημεν
	2	λελύκοιτε	λελυμένοι εἶητε
	3	λελύκοιεν	λελυμένοι εἶησαν

§ 140. 上表より明らかである如く Perfect の Middle 及び Passive Voice は Perfect Participle に εἰμί の Optative Present を併用したものであって、Subjunctive Perfect (§ 131) の場合に類似して居る。即ちこの変化により我らは同時に εἰμί の Optative Present の変化をも学習した訳である。なお εἶημεν, εἶητε, εἶησαν は又は εἶμεν, εἶτε, εἶεν とも変化する。

§ 141. Optative Mood の用法

(1) 独立の文章に於て祈願を表わす場合

μη γένοιτο. (ルカ 20:16 その他) かかる事有らざれかし。

χαρίς ὑμῖν καὶ εἰρήνη πληθυνθείη (II ペテ 1:2) 願わくは恩恵と平安と汝らに増し加えられん事を。

(2) ἄν を加えて能力の意味を持つ場合

εὐξαίμην ἄν τῷ θεῷ (使徒 26:29) 神に祈り得ん事を。

§ 142. Contracted Verbs

既に § 33 に於て αω, εω, οω の語尾を有する動詞の収縮に於て Indicative の Present 及び Imperfect に於てのみ説明した。その当時は他の Mood を知らなかったのでこれ以上に説明し得なかった。今は他の Mood をも学習したから、この各々の Mood を復習する上にも、再び改めて τιμάω, φιλέω, δοθλόω の三語につき他の諸 Mood に於ける Present 及び Imperfect の収縮を学ばなければならぬ。

§ 29 の表にある二つ以上の母音の収縮を参照しながら下の変化を研究すべし。

(1) Indicative Present, Middle and Passive

-ομαι	τι-μ-ῶμαι	φιλ-οῦμαι	δουλ-οῦμαι
-η, -ει	-ᾶ	-ῆ, εῖ	-οῖ
-εται	-ᾶται	-εῖται	-οῦται
-όμεθα	-όμεθα	-ούμεθα	-οόμεθα
-εσθε	-ᾶσθε	-εῖσθε	-οῦσθε
-ονται	-ῶνται	-οῦνται	-οῦνται

Active Present については § 33 に既にこれを述べた故ここにこれを繰り返さない。τιῶμαι は τιμάομαι の収縮、その他もみな同様に凡て母音の収縮の規則に従って収縮が行われ、アクセントは収縮せらるべき二つの母音の中の前者に Acute Accent がある時は収縮された母音又は重母音は Circumflex を取り、若し後者に Acute Accent があるときは（上表第一人称複数の如く）収縮せられし母音は Acute Accent を取る。即ち ᾶ は ῶ, εῖ は οῖ となるが、ᾶ は ῶ, εῖ は οῖ となる。

(2) Indicative Imperfect Middle and Passive

-όμεν	ἐτιμ-όμεν	ἐφιλ-ούμεν	ἐδουλ-ούμεν
-ου	-ῶ	-οῦ	-οῦ
-ετο	-ᾶτο	-εῖτο	-οῦτο
-όμεθα	-όμεθα	-ούμεθα	-οόμεθα
-εσθε	-ᾶσθε	-εῖσθε	-οῦσθε
-οντο	-ῶντο	-οῦντο	-οῦντο

(3) Subjective Present

Active			
-ω	τιμ-ῶ	φιλ-ῶ	δουλ-ῶ
-ης	-ᾶς	-ῆς	-οῖς
-η	-ᾶ	-ῆ	-οῖ
-ωμεν	-ῶμεν	-ῶμεν	-ῶμεν
-ητε	-ᾶτε	-ῆτε	-οῖτε
-ωσι(ν)	-ῶσι	-ῶσι	-οῖσι

Middle and Passive			
-ωμαι	τιμ-ῶμαι	φιλ-ῶμαι	δουλ-ῶμαι
-ηται	-ᾶ	-ῆ	-οῖ
-ώμεθα	-ᾶται	-ῆται	-ῶται
-ησθε	-ώμεθα	-ώμεθα	-ώμεθα
-ωνται	-ᾶσθε	-ῆσθε	-ῶσθε
	-ῶνται	-ῶνται	-ῶνται

τιμάω の Subj. Pres. Pass. は Ind. Pres. Pass. と同形である。

(4) Imperative Present

Active の語尾は ε, -έτω; -ετε, έτωσαν で Passive 及び Middle の語尾は ου, -έσθω; -εσθε, -έσθωσαν で ου の外は凡て ε で始まる。而して αε = α, εε = ει, οε = ου であり αου = ω, εου 及び οου = ου であるので、この収縮は比較的簡単である。但し第三人称複数 は Passive に於て -έσθωσαν の代りに -έσθων を用いる事もある。

(5) Infinitive Present

Active に於て τιμάειν, etc. は τιμᾶν, φιλεῖν, δουλοῦν となり Middle 及び Passive に於て τιμάεσθαι, etc. は τιμᾶσθαι, φιλεῖσθαι, δουλοῦσθαι となる。

(6) Participle Present

Active は男性に於て -ω が α, ε, ο と収縮して何れも ω となり女性及び中性に於て ου 及び ο は α と収縮して ω; ε 又は ο と収縮して ου となる。例えば女性 は τιμῶσα, φιλοῦσα, δουλοῦσα となり、Passive 及び Middle に於て -όμενος, -ομένη, -όμενον は σ と合して ὄμενος, etc. となり ε 又は ο と収縮して ούμενος, etc. となる。

(7) Optative Present

Optative は Active も Middle 及び Passive も共に -οιμι, -οι 等皆 οι を以って始まって居る故、αοι = ω, εοι = οι, οοι = οι で簡単にその収縮を知る事が出来る。

以上の外凡ての Mood の凡ての Tense は普通の規則に従って変化する。

単 語

ἀγαλλιάω	大いに喜ぶ	νοέω	思う
βοάω	叫ぶ	οικοδομέω	建てる
δικαίω	義とする	ὁμοίω	似て居る
ἀγνοέω	知らずに居る	ὠφελέω	益する
γαμέω	結婚する	ἀρνίον, τὸ	小羊
γρηγορέω	目を覚ます	ὧδε	ここに
ἐνεργέω	働く、力を与える	γάμος, ὁ	婚礼の席
εὐλογέω	祝福する	κοινωνία, ἡ	交わり
καταλύω	毀つ (こぼつ)	τοῦναντίον = τὸ ἐναντίον	反対に
καταράομαι	呪う	εὐλογία, ἡ	祝福
ζηλώω	熱心になる	τοτήριον, τὸ	杯
ζητέω	熱心に求める		

練習第二十三

次のギリシャ語を訳せ (——線の動詞の Mood, Tense, Voice を示せ)。

- (1) χαίρωμεν καὶ ἀγαλλιῶμεν, ὅτι ἦλθεν ὁ γάμος τοῦ ἀρνίου [黙示 19:7]。
 (2) εἰ δέ τις ἀγνοεῖ, ἀγνοεῖτε. Ὡστε, ἀδελφοί μου, ζηλοῦτε τὸ προφητεύειν. [I コリ 14:38]。(3) τοῦναντίον δὲ εὐλογοῦντες, ὅτι εἰς τοῦτο ἐκλήθητε ἵνα εὐλογίαν κληρονομήσητε [I ペテ 3:9]。(4) τεθνήκασιν γὰρ οἱ ζητοῦντες τὴν ψυχὴν τοῦ παιδίου [マタ 2:20]。(5) καὶ γὰρ ὁ πατὴρ

τοιούτους ζητεῖ τοὺς προσκυνοῦντας αὐτόν'〔ヨハ 4:23〕。(6) πᾶς οὖν ὅστις ἀκούει μου τοὺς λόγους τούτους καὶ ποιεῖ αὐτούς, ὁμοιωθήσεται ἀνδρὶ φρονίμῳ, ὅστις ὠκοδόμησεν αὐτοῦ τὴν οἰκίαν ἐπὶ τὴν πέτραν〔マタ 7:24〕。

(7) θεωρεῖτε ὅτι οὐκ ὠφελεῖτε οὐδέν. ἴδε ὁ κόσμος ὀπίσω αὐτοῦ ἀπῆλθεν.〔ヨハ 12:19〕。(8) εὐλογεῖτε τοὺς διώκοντας, εὐλογεῖτε καὶ μὴ καταρᾶσθε.〔ロマ 12:14〕。(9) θεὸς γάρ ἐστιν ὁ ἐνεργῶν ἐν ὑμῖν καὶ τὸ θέλειν καὶ τὸ ἐνεργεῖν ὑπὲρ τῆς εὐδοκίας.〔ピリ 2:13〕。

次の語をギリシャ語に訳せ。

(1) 信ずる者は皆この人によりて義とせられる〔使徒 13:39〕。

(2) それ復活の時は人々は娶らず嫁がず (嫁ぐ γαμίζω の Middle) 天にある御使たちの如し〔マタ 22:30〕。(3) 汝らここに止まれ(μένω の Aorist Imperative) そして我と共に目をさまし居れ〔マタ 26:38〕。

(4) 我らが祝する祝福の杯はキリストの血の交りではないか〔I コリ 10:16〕。(5) 宮を毀ちて三日にてこれを建てる者よ汝自身を救え〔マタ 27:40〕。(6) まず神の国とその義とを求めよ〔マタ 6:33〕。

(7) 私がパンの事について言わなかったのを何故悟らないのか〔マタ 16:11〕。

第三十課 動詞の変化 (その十七)

μ 動詞の変化 (第一種)

(1) Active Present and Imperfect

§ 143. 以上十数回にわたって述べた動詞の変化は、所謂 ω-動詞、即ち第一人称単数の場合 ω を語尾とする動詞で、動詞の大部分を含む種類であるが、この他に、動詞の中には第一人称単数の語尾が -μ に終わる少数の動詞がある。これを -μ 動詞と云い、その変化

について次にこれを述べる。

μ 動詞に属するものは、数に於て遥かに ω 動詞より少いのであるが、その中にしばしば用いらるる語がかなりあるので、数の割合に重要な役目を演じて居る。例えば、ἀφίημι (= ἀπό ἴημι 赦す)、δείκνυμι (示す)、δίδωμι (与える)、ἵστημι (置く、立つ)、ὄμνθμι (誓う)、τίθημι (置く)、φημί (言う) 等は最も普通に用いらるる文字であり尚これに ἀνά, κατά, ἐξ, σύν, ἐπί 等の前置詞を加えて用いらるる場合も多い。例えば ἀν-ίστημι (立ち上がる)、ἀπ-όλλυμι (失う、壊滅する)、ἀπο-δίδωμι (償う)、παρα-δίδωμι (付す)、ἀνθ-ίστημι (拒む)、ἀφ-ίστημι (離れる、墮落する) 等の如きこれである。これに二種ありまず第一種から始める。

§ 144. μ 動詞は Present, Imperfect 及び 2nd Aorist に於てのみ ω 動詞と異なる変化を示す。

Present (及び Imperfect) Active の変化

		δίδωμι (根 δο)	τίθημι (根 θε)	ἵστημι (根 στα)
Indicative	Present	δί-δω-μι	τί-θη-μι	ἵ-στη-μι
		δί-δω-ς	τί-θη-ς	ἵ-στη-ς
		δί-δω-σι	τί-θη-σι	ἵ-στη-σι
		δί-δο-μεν	τί-θε-μεν	ἵ-στα-μεν
		δί-δο-τε	τί-θε-τε	ἵ-στα-τε
		δι-δό-ᾱσι	τι-θέ-ᾱσι	ἵ-στᾱ-σι
Indicative	Imperfect	ἐ-δί-δου-ν ¹	ἐ-τί-θη-ν	ἵ-στη-ν (ἵは長音)
		ἐ-δί-δου-ς	ἐ-τί-θη-ς (又は θεις)	ἵ-στη-ς
		ἐ-δί-δου	ἐ-τί-θη (又は θει)	ἵ-στη
		ἐ-δί-δο-μεν	ἐ-τί-θε-μεν	ἵ-στα-μεν
		ἐ-δί-δο-τε	ἐ-τί-θε-τε	ἵ-στα-τε
		ἐ-δί-δο-σαν	ἐ-τί-θε-σαν	ἵ-στα-σαν

¹ ἐδίδων, ἐδίδως, ἐδίδω と変化する。

Subjunctive	δι-δῶ (-δό-ω) δι-δῶς δι-δῶ δι-δῶ-μεν δι-δῶ-τε δι-δῶ-σι(ν)	τι-τῶ (-έ-ω) τι-θῆς τι-θῆ τι-θῶ-μεν τι-θῆ-τε τι-θῶ-σι(ν)	ἰ-στῶ (-στα-ω) ἰ-στῆς ἰ-στῆ ἰ-στῶ-μεν ἰ-στῆ-τε ἰ-στῶ-σι(ν)
Optative	δι-δοίη-ν δι-δοίη-ς δι-δοίη δι-δοῖ-μεν ¹ δι-δοῖ-τε δι-δοῖ-εν	τι-θείη-ν τι-θείη-ς τι-θείη τι-θεῖ-μεν (脚注1) τι-θεῖ-τε τι-θεῖ-εν	ἰ-σταίη-ν ἰ-σταίη-ς ἰ-σταίη ἰ-σταῖ-μεν (脚注1) ἰ-σταῖ-τε ἰ-σταῖ-εν
Imperative	δί-δου δι-δό-τω δί-δο-τε δι-δό-ντων	τί-θει τι-θέ-τω τί-θε-τε τι-θέ-ντων	ἴ-στη ἰ-στά-τω ἴ-στα-τε ἰ-στά-ντων
Infjn.	δι-δό-ναι	τι-θέ-ναι	ἰ-στά-ναι
Participle	δι-δούς(-ντος) δι-δοῦσα(-σης) δι-δόν(-ντος)	τι-θείς (-θέντος) τι-θείσα (-θείσης) τι-θέν (-θέντος)	ἰ-στάς (-ντος) ἰ-στάσα (-σης) ἰ-στάν (-ντος)

§ 145. 上表により μι 動詞の Present (Imperfect)の変化は、次の如き特徴を持って居る事がわかる。

(1) δι-, τι-, ι-の如き ιを含む Reduplication を持つ事 (但し ἴστημι の ἴは σιの σが脱落して長音となったもの)。

(2) Present の Singular に於て母音 ο, ε, αが ω又は ηに延長して居る事。

¹ η-μεν, η-τε, η-σαν とも変化す。

(3) 結合母音 ο, ε を欠き、語尾から直接に語根に連なって居る事。

(4) Present の第三人称複数 は -ουσι でなく ᾶσι に終わる事。

(5) Imperfect の第三人称複数 は -v ではなく -σαν に終わる事。

§ 146. Present, Imperfect, 2nd Aorist の Active, Middle 及び Passive を除けるその他の Tense に於ては ω 動詞の場合に於て述べたのと同様の規則に従って変化する。例えば

Future Active は δώσω, θήσω, στήσω

1st. Aor. Active は ἔδωκα, ἔθηκα, ἔστηκα (κα は例外)

Perfect Active は δέδωκα, τέθεικα, ἔστηκα

Pluperfect Active は (ἐ)δεδώκειν, (ἐ)τεθείκειν, εἰστήκειν 又は ἔστήκειν
その他も同様である。

単語

δόμα, τὸ 贈り物

καίω 燃やす

μόδιος, ὁ 升

ὄφις, ὁ 蛇

περύγιον, τὸ 縁、頂

練習 第二十四

次のギリシャ語を訳し、——線の動詞の変化を示せ。

(1) Αἰτεῖτε, καὶ δοθήσεται ὑμῖν. ζητεῖτε, καὶ εὐρήσετε. [マタ 7:7]。

(2) ἢ καὶ ἰχθὺν αἰτήσῃ, μὴ ὄφιν ἐπιδώσει αὐτῷ; εἰ οὖν ὑμεῖς πονηροὶ ὄντες οἴδατε δόματα ἀγαθὰ διδόναι τοῖς τέκνοις ὑμῶν, πόσῳ μᾶλλον ὁ πατὴρ ὑμῶν

ὁ ἐν τοῖς οὐρανοῖς δώσει ἀγαθὰ τοῖς αἰτοῦσιν αὐτόν [マタ 7:10-11]。 (3) καὶ ἔστησεν αὐτόν ὁ διάβολος ἐπὶ τὸ περύγιον τοῦ ἱεροῦ。 [マタ 4:5]。 (4) οὐδὲ καίουσιν λύχνον καὶ τιθέασιν αὐτόν ὑπὸ τὸν μόδιον。 [マタ 5:15]。 (5) καὶ εὐχαρισήσας ἔκλασεν καὶ ἐδίδου τοῖς μαθηταῖς, οἱ δὲ μαθηταὶ τοῖς ὄχλοις。 [マタ 15:36]。 (6) ἰδοὺ ἡ μήτηρ καὶ οἱ ἀδελφοὶ αὐτοῦ εἰστήκεισαν ἕξω ζητοῦντες αὐτῷ λαλῆσαι。 [マタ 12:46]。 (7) ἐν ποίᾳ ἐξουσία ταῦτα ποιεῖς; καὶ τίς σοι ἔδωκεν τὴν ἐξουσίαν ταύτην; [マタ 21:23]。 (8) τινὲς δὲ τῶν ἐκεῖ ἔστηκότων ἀκούσαντες ἔλεγον ὅτι Ἥλιαν φωνεῖ οὗτος。 [マタ 27:47]。 (9) καὶ ἔθηκεν τὸ σῶμα αὐτοῦ ἐν τῷ καινῷ αὐτοῦ μνημεῖῳ [マタ 27:60]。 (10) ὁ ποιμὴν ὁ καλὸς τὴν ψυχὴν αὐτοῦ τίθησιν ὑπὲρ τῶν προβάτων。 [ヨハ 10:11]。

第三十一課 動詞の変化 (その十八)

μὲν 動詞の変化 (続き)

(2) 2nd Aorist Active

§ 147. δίδωμι, τίθημι, ἵστημι の三動詞の 2nd Aorist Active の変化は下の如くである。

Indicative	_____	_____	_____	ἔδομεν	-οτε	-οσαν
	_____	_____	_____	ἔθεμεν	-ετε	-εσαν
	ἔστην	-ης	-η	-ημεν	-ητε	-ησαν
Subjunctive	δῶ	-ῶς	-ῶ	-ῶμεν	-ῶτε	-ῶσι(ν)
	θῶ	-ῆς	-ῆ	-ῶμεν	-ῆτε	-ῶσι(ν)
	στῶ	-ῆς	-ῆ	-ῶμεν	-ῆτε	-ῶσι(ν)

Optative	δοίην	-ης	-η	-ημεν	-ητε	-εν
	θείην	-ης	-η	-ημεν	-ητε	-εν
	σταίην	-ης	-η	-ημεν	-ητε	-εν
Imperative	δός		-ότω		-ότε	-ότωσαν
	θές		-έτω		-έτε	-έτωσαν
	σῆθι		-ήτω		-ήτε	-ήτωσαν
Infinitive			δοῦναι			
			θεῖναι			
			σῆναι			
Participle	δούς (-όντος)	δοῦσα (-ούσης)	δόν (-όντος)			
	θείς (-έντος)	θεῖσα (-είσης)	θέν (-έντος)			
	στάς (-άντος)	στάσα (-άσης)	σάν (-άντος)			

§ 148. なお μ 動詞の 2nd Aorist については、次の事柄を注意しなければならない。

(1) δίδωμι 及び τίθημι の Indicative 2nd Aorist に於てその単数形は用いられず、その代りに 1st Aorist を用い、ἴστημι は双方用いられる。而して 1st Aorist は下の如くに變化する。

1st Aorist Indicative Active

(δίδωμι) ἔδωκα -κας -κε -καμεν -κατε -καν

(τίθημι) ἔθηκα -κας -κε -καμεν -κατε -καν

(ἴστημι) ἔστησα -σας -σε -σαμεν -σατε -σαν

(2) この場合 ἴστημι の 3rd Person Plural は 1st Aorist と 2nd Aorist と同形であり、而して意味の上に差異を生ずるので注意を要す。この事は後に § 152, 153 に於てこれを述べる。

(3) Subjunctive Mood は δό-ω, δό-ης, etc. が収縮して δῶ, δῶς, etc. となり、その他も同様である。但し δῶ, δῶς, δῶ の代りに δάω, δάης, δάη

の形も希に用いられる。

(4) ἴστημι の 2nd Person Singular Imperative は Present の場合も同様語尾は τι の代りに θι で終わる。

(5) Imperative の 3rd Person Plural は δότωσαν, θέτωσαν, στήτωσαν の代りに δόντων, θέντων, σάνων と変化する。

(6) ἴστημι は 1st 及び 2nd Aorist に於て Soft Breathing (§4) を取る。その他は Rough Breathing を取る。

(3) Middle and Passive Present

§ 149. Present (及び Imperfect) の Middle 及び Passive は次の如くに変化する。

Ind. Pres.	δίδομαι	-σαι	-ται	-μεθα	-σθε	-νται
	τίθεμαι	-σαι	-ται	-μεθα	-σθε	-νται
	ἴσταμαι	-σαι	-ται	-μεθα	-σθε	-νται
Ind. Impf.	ἐδιδόμην	-σο	-το	-μεθα	-σθε	-ντο
	ἐτιθέμην	-σο	-το	-μεθα	-σθε	-ντο
	ἰστάμην	-σο	-το	-μεθα	-σθε	-ντο
Subj. Pres.	δίδομαι	-ῶ	-ῶται	-ώμεθα	-ῶσθε	-ῶνται
	τιθῶμαι	-ῆ	-ῆται	-ώμεθα	-ῆσθε	-ῶνται
	ἰσῶμαι	-ῆ	-ῆται	-ώμεθα	-ῆσθε	-ῶνται
Opt. Pres.	δίδοίμην	-οῖο	-οῖτο	-οίμεθα	-οῖσθε	-οῖντο
	τιθείμην	-εῖο	-εῖτο	-είμεθα	-εῖσθε	-εῖντο
	ἰσταίμην	-αῖο	-αῖτο	-αίμεθα	-αῖσθε	-αῖντο
Imper. Pres.		δίδοσο	-σθω		-σθε	-σθωσαν
		τίθεσο	-σθω		-σθε	-σθωσαν
		ἴστασο	-σθω		-σθε	-σθωσαν

Infinitive Pres.	δίδοσθαι τίθεσαι ἴστασθαι		
Participle Pres.	διδόμενος τιθέμενος ιστάμενος	διδομένη τιθεμένη ἴσταμένη	διδόμενον τιθέμενον ιστάμενον

これらの三つの動詞はその語根の母音 *ο*, *ε*, *α* を保存する外は皆同一の変化を持つ。而していずれも皆 Active の場合と同じく一種の Reduplication を持って居る。なお Imperative Present 第二人称単数は *δίδου*, *τίθου*, *ἴστω* ともなる。

(4) 2nd Aorist Middle

§ 150. 2nd Aorist Middle は次の如くに変化する。但し ἴστημι の Middle Voice は 2nd Aorist の形に於て用いられて居ない。1st Aorist としてのみ用いられて居る。それ故次の表にはこれを省く。

Ind.	ἐδόμην -ου -οτο ἐθέμην -ου -ετο	-όμεθα -έμεθα	-οσθε -εσθε	-οντο -εντο	
Subj.	δῶμαι -ῶ θῶμαι ἦ	-ῶται -ῆται	-όμεθα -όμεθα	-ῶσθε -ῆσθε	-ῶνται -ῶνται
Opt.	δοίμην -οῖο θείμην -εῖο	-οῖτο -εῖτο	-οίμεθα -είμεθα	-οῖσθε -εῖσθε	-οῖντο -εῖντο
Imp.	δοῦ (-οσο) θοῦ (-εσο)	-όσθω -έσθω		-όσθε -έσθε	-όσθωσαν -έσθωσαν
Inf.	δόσθαι θέσθαι				
Part.	δόμενος θέμενος	δομένη θεμένη	δόμενον θέμενον		

(5) その他の Tenses

§ 151. μι 動詞のその他の Tenses は ω 動詞と同一の変化を取る。

(§ 146 に掲げたものと重複するが便宜上ここに再録する)。

(1) Active Indicative.

Future	δώσω	θήσω	στήσω
1st Aorist	ἔδωκα	ἔθηκα	ἔστησα
Perfect	δέδωκα	τέθεικα	ἔστηκα
Pluperfect	(ἐ)δεδώκειν	(ἐ)τεθείκειν	εἰστήκειν 又は ἐστήκειν

(2) Passive Indicative.

Future	δοθήσομαι	τεθήσομαι*	σταθήσομαι
1st Aorist	ἐδόθην	ἐτέθην	ἐστάθην
Perfect	δέδομαι	τέθειμαι*	ἔσταμαι

その他の Mood に於ても同様に ω 動詞の規則に従って変化する。但し ἴστημι の Perfect Participle は ἐστηκώς であるべき筈のものを収縮して ἐστός, (-ῶτος) ἐστῶσα (-ώσης) ἐστός (-ῶτος) となり、同様に Perfect Infinitive も ἐστηκέσθαι の代りに ἐστάναι となる事がある。

§ 152. ἴστημι は Tense によってその意味が異なる。これは非常に重要で且つ紛らわしいからよく注意しなければならない。即ち

(1) **Active Voice** の場合 **Present, Imperfect, Future** 及び **1st Aorist** に於て ἴστημι は **他動詞** であって“立たしめる”又は“置く”の意味となり、**Perfect** 及び **Pluperfect** に於ては **自動詞** で形は Perfect, Pluperfect でも意味は Present 及び Imperfect の如くに用いられ、従って“立って居る”又は“立って居った”との意味となる。

* θεθήσομαι, ἐτέθην となるべきを θ が重複するため、これを τ と代えたのである。

Future 及び 1st Passive 他の Mood に於てもこの点同様である。

又 2nd Aorist 形に於ても **自動詞** で“立って居った”との意味となる。

(2) Passive Voice に於ては“立たしめられる”“置かれる”等の意味となり、従って結局これも“立って居る”との意味となる。

(3) 1st Aorist と 2nd Aorist とが第三人称複数に於て全く同形となるので、他動的意味か自動的意味かによりてその変化の何れに属するかを決定しなければならない。

例 οὐς ἔστησαν ἐνώπιον τῶν ἀποστόλων. [使 6:6]。

彼らを使徒たちの前に置いた (他動的故に 1st Aorist)。

οἱ δὲ βασιτάζοντες ἔστησαν. [ルカ 7:14]。

担いだ人々は立ち止まれり (自動的故に 2nd Aorist)。

練 習 第 二 十 五

次の諸形につき Person, Number, Tense, Mood, Voice を示せ。

(1) δίδωμι.

δώσω, δός, δῶτε, δίδοναι, δώσει, δόντα, ἔδωκεν, δότε, δοθήσεται, ἐδίδου,
δέδοται, δοῦναι, δοθῆναι, ἐδόθη, ἐδώκατε, δούς, ἔδωκα, ἔδωκεν, ἐδίδουν,
δοθεῖσα, δῶς, δώσομεν, δώην, δῶμεν, δοθῆ, δώσουσιν, δίδοτε, ἔδωκας,
διδόμενον, δόθεντος, δοθείσης, δῶ, δοθεῖσαν, δίδοντα, ἐδώκαμεν, δῶη.

(2) τίθημι.

τιθέασιν, θήσω, θῶ, τιθώ, ἔθηκεν, τιθῆ, θῶμεν, ἐτίθεσαν, ἔθηκαν, ἔθηκεν,
τιθείς, τίθεντες, τέθειται, ἔθεντο, θεῖναι, τίθησιν, θέσθε, θήσει, θέντος, θέτε,

θείς, ἐτέθη, τεθείκατε, θῆ, ἔθετο, ἐτίθουν (=ἐτίθεσαν), ἔθου, τιθέναι, ἐτέθησαν, τέθεικα, θεῖναι, τιθέτω, ἐτίθει, θέμενος, τεθήναι, τεθῶσιν.

(3) ἴστημι.

ἐστάθη, ἔστησεν, ἐστῶτες, σταθήσεται, εἰστήκεισαν, ἐστήκασιν, ἐστάτων, ἐστῶτας, ἐστήκατε, ἐστός,¹ στήσει, ἐστηκότων, σταθήναι, στήναι, στήσητε, σταθήσεσθε, ἐστήκοτα, ἔστη, σῆσα, ἐστάναι, ἔστησα, ἐστάθησαν, σήσω, εἰστήκει, σταθέντες, στήσης, σῆστος, σταθείς, στήσαντες, ἐστῶτα, σταθέντα, στάθητε, σήσαι, ἐστάθη, ἔστησαν.

第三十二課 動詞の変化 (その十九)

μ 動詞の変化 (第二種)

§ 153. δίδωμι, τίθημι, ἴστημι 及びこれに類似の諸動詞の外に μ 動詞には他の一群の動詞がある。それは-νυμι (又は根が母音に終わるときには-ννυμι) で終わる動詞であって、それらの諸動詞には 2nd Aorist が無く、又その変化は Present と Imperfect に於ても ω 動詞の変化による場合と μ 動詞の変化による場合との混合である。次に δείκνυμι (示す) と ζώννυμι (帯する) との例を示す。表中*印を付してある部分は ω 変化による部分であたかも δεικνύω 又は ζωννύω を原形とするが如くに見え、また Present 及び Imperfect 以外の Tense に於ては全部 ω 動詞の変化によるのであって、この場合は δείκω 又は ζώω なる動詞の変化に等しい事となる。

§ 154. δείκνυμι (根 δεικ-) 及び ζώννυμι (根 ζο-) の変化

(1) Active Voice.

Ind. Pre. δείκνυμι -νυς -νυσι(ν) -νυμεν -νυτε -νύασι(ν)

 ζώννυμι -νυς -νυσι(ν) -νυμεν -νυτε -νύασι(ν)

(又は *δεικνύω -εις, -ει, ζωννύω, -εις, -ει)

¹ ἐστός の Neuter の単数四格。

Impf.	ἐδείκνυν -νυς -νυ, -νυμεν -νυτε -νυσαν ἐζώννυν -νυς -νυ, -νυμεν -νυτε -νυσαν (又は*ἐδείκνυον -νυες -νυε, ἐζώννυον -νυες -νυε)
Sub. Pres.	*δεικνύω -ης -η, ζωννύω -ης -η
Opt. Pres.	*δεικνούοιμι -οις -οι, ζωννούοιμι -οις -οι
Impr. Pres.	δείκνυ (又は-νυθι) -νύτω -νυτε -νύτωσαν ζώννυ (又は-νυθι) -νύτω -νυτε -νύτωσαν
Inf. Pres.	δεικνύειν 又は*δεικνύειν, ζωννύειν 又は*ζωννύειν
Part. Pres.	δεικνύς -ῶσα -ύν 又は*δεικνύων etc. ζωννύς -ῶσα -ύν 又は*ζωννύων etc.

(2) Middle 及び Passive Voices の Present 及び Imperfect に於ては δεικνυ-, ζωννυ-を Stem とする ω 動詞の変化と同一であるが、但し結合母音 ο, ε を欠き、語尾の変化が直接に Stem に付く。

§ 155. 次に μ 動詞の変化に属する数種の動詞を掲げる。

(1) ἴσθημι に類するもの: ὀνίνημι (利益を与える、ピレ 20)、πίμπρημι (腫れる、《受》使徒 28:6)、χρή (宜しきにかなう、ヤコ 3:10)、δύναμαι (能う)、φημί (云う、第三人称単数は φησί(v)、同複数は φασί(v)、Imperfect は ἔφην で第三人称単数は ἔφη)、ἐπίσταμαι (確信する、知る)、κρέμαμαι (懸ける)

(2) τίθημι に類するもの: κάθημαι (座る κατά+ἤμαι)、κειμαι (横たわる)

(3) δείκνυμι に類するもの: μίγνυμι (混ぜる)、ὄλλυμι (破壊する)、ἀπόλλυμι (破壊する、滅ぼす)、ὄμνυμι (誓う)、ρήγνυμι (破る)、πήγνυμι (結ぶ)

(4) ζώννυμι に類するもの: ἀμφιέννυμι (衣類を繕う)、κορέννυμι (満足さす)、σβέννυμι (消す)、ρόννυμι (力付ける)、στρώννυμι (散らす)

§ 156. δύναμαι の変化の重なるもの。

Ind. Pres. -μαι -σαι (又は δύνῃ) -ται etc.

Imp. ἐδυνάμην (又は ἠδυνάμην) etc.

Future δυνήσομαι -ση -σεται etc.

Subj. Pres. δύνωμαι etc.

Opt. Pres. δυναίμην etc.

Inf. Pres. δύνασθαι etc.

Part. Pres. δυνάμενος etc.

1st Aor. ἐδυνήθην (又は ἠδυνήθην)

§ 157. ἀφίημι の変化の重なるもの。

ἀφίημι は ἀπό + ἵημι の合併したもので、離れ去る、放免する事より
転じて罪を赦すの意となり新約聖書にしばしば用いられて居る。

Active.

Ind. Pres. ἀφίημι -ίης (又は-εῖς) -ίησι(ν) -ίεμεν -ίετε -ίουσιν

Imp. ἤφιον -ιες -ιε (Augument を Preposition が取る Plural なし)

Fut. ἀφήσω (ἀφέω の Future の如き形)

1st Aor. ἀφήκα Perf. ἀφείκα Plur. ἀφείκειν

2nd Aor. 単数なし 複数 ἀφείμεν -εῖτε -εῖσαν

Subj. Pres. ἀφιῶ -ιῆς -ιῆ etc.

2nd. Aor. ἀφῶ -ῆς -ῆ etc.

Opt. Pres. ἀφείην -ης -η etc.

2nd Aor. ἀφείην -ης -η etc.

Inf. Pres. ἀφιέναι

2nd Aor. ἀφείναι

Part. Pres. ἀφιεῖς -εῖσα -έν

2nd Aor. ἀφείς -εῖσα -έν.

Middle 及び **Passive** については、ほぼほぼ ω 動詞と同一の変化をする。詳細は大きい辞典又は文典によらなければならない。

第三十三課 副 詞

Adverbs

§ 158. 形容詞より来るもの

副詞の大部分は形容詞の複数第二格の語尾-ων を-ως に変化して形造られる。この-ως は英語の-ly に相当して居るものと見る事が出来る。例えば

形容詞	複数第二格	副詞	
δίκαιος	δικαίων	δικαίως	正しく
πᾶς	πάντων	πάντως	全く
ἀληθής	ἀληθῶν	ἀληθῶς	真に

Participle もまた形容詞の働きをするので (§ 79, p.78) この種の副詞形を取る場合がある。

ὄν	ὄντων	ὄντως	誠に、実際に
----	-------	-------	--------

形容詞より来る副詞は往々二つの形を取る事がある。

ταχύ	又は ταχέως	速かに
εὐθύς	又は εὐθέως	直ちに

§ 159. 副詞の比較 Comparison

形容詞より来る副詞は形容詞と同じく、原級 Positive のほかに比較級 Comparative 最上級 Superlative の変化を持つ。その形は Comparative は中性単数第四格の形を取り Superlative は中性複数第四格の形を取る。例えば

ταχύ	速やかに	ἀληθῶς	誠に
τάχιον	より速かに	ἀληθέστερον	より誠に
τάχιστα	最も速かに	ἀληθέστατα	最も誠に

中には Comparative にして-ως の語尾を取るものもある。
περισσότερως (より豊かに) の如きはその一例である。

次の諸副詞は不規則に変化する。但し副詞の比較級及び最上級は新約聖書に多く用いられて居ない。用例の無い部分は () に入れてこれを示す。

原級	比較級	最上級
εὖ 良く	βέλτιον, κρείσσον	(βέλτιστα)
καλῶς 良く、麗しく	κάλλιον	(κάλλιστα)
κακῶς 悪しく	ἥσσον, ἥττον	(ἥκιστα)
(μάλα)甚だしく	μᾶλλον	μάλιστα
πολύ 多く	πλεῖον, πλέον	(πλεῖστα)
ἐγγύς 近く	ἐγγύτερον	(ἐγγιστα)
(ἄγχι)近く	ἄσσον	(ἄγγιστα)

§ 160. その他の副詞

(I) 名詞形容詞より来るもの 一定の格が固定して副詞として用いられて居る。

1. 第二格: αὐτοῦ (その処に)

2. 第三格: ἰδίᾳ (私かに、個人的に), πεζῆ (陸路で), Iota Subscript を略す場合あり πάντη (到る処), εἰκῆ (理由なしに)

3. 第四格: ἀκμήν (なお), περὰν (向かい側に); 中性第四格の形容詞にして冠詞を伴えるもの、τὸ λοιπόν (追白、その他), τὰ πολλά (大体、大部分); その他形容詞の使用せられざるに至れるものより転化せるもの σήμερον (今日), αὔριον (明日), ἐχθές (昨日) 等もこの部類に属す。

(II) 代名詞より来るもの

代名詞の各種類 (§ § 53-56, § § 121-127 参照) は又それぞれ相当する副詞を持って居る。次表によりその相互の関係をも明らかにする事が出来る。

	指示	関係	疑問	不定
時	τότε その時	ὅτε…の時に	πότε 何時？	ποτε
場所	αὐτοῦ ここに	οὗ…の処に	ποῦ 何処？	ある時に
	ᾧδε ここに			που
	ἐκεῖ そこに			ある処に
	ἐνθάδε 此方に			
状態	ἐντεῦθεν ここから	ἔθεν …の処から	πόθεν 何処から？	
	οὕτω(ς) 斯くの如く	ὡς …の如く	πῶς 如何に？	πω(ς) 如何にして

注意 1. 不定詞副詞と疑問副詞との差は前者が Enclitic である点に存す。(§ 7. a 参照)

注意 2. ὁπότε, ὅπου, ὅπως 等も Dependent Interrogative Adverbs として関係代名詞の如くに用いられる。

(III) 数詞より来るもの

§ 96 の表に示せる如く -ις, -κις, -ακις の語尾を取る場合は数詞は副詞として用いられて居る。δίς, τρίς, τετράκις, etc. で、ἅπαξ (一度) は例外的の形である。その他 πολλάκις (数多度) ὁσάκις (その度毎に) 等も同様である。

(IV) 動詞より来るもの

δεῦρο (複数は δεῦτε) 等は古い動詞の変形で“此方に来い”と云う命令の場合に普通用いられる。ἐλληνιστί (ギリシヤ語にて) ἐβραϊστί (ヘブル語にて) 等は ἐλληνίζω (ギリシヤ人らしく振舞う) ἐβραΐζω (ヘブル人らしく振舞う) より来た副詞である。

(V) 前置詞より来るもの

ἀνά より ἄνω (上方に) κατά より κάτω (下方に)、ἐν より ἔσω (内に) ἐκ より ἔξω (外に) 等が造られる。更にこれにθενを加えると“から”、“より”等の意味となる。ἄνωθεν (上より) ἔξωθεν (外より)。

(VI) 副詞が前置詞の如くに用いられる場合もある。この種のものは前置詞の一種と見るべきもので、名詞を支配して居る。例えば ἅμα(一処に)、ἄνευ(外に)、ἄχρι(ς)又は μέχρι(ς)(…迄)、ἐνεκα 又は ἐνεκεν(…の為に)、ἐνώπιον(前に、面前に)、ἕως(…迄)、πλήν(…を除いては)、χωρίς(以外は)等これである。ἅμα は第三格その他は皆第二格を支配す。

(VII) 否定副詞 οὐ(οὐκ, οὐχ)と μή である。

οὐ は子音の前 οὐκ は母音の前 οὐχ は Aspirated Vowel の前に用いられる。

οὐ と μή との差は (1) οὐ 絶対的否定に用い、μή はある条件を含める否定を意味する。(2) 疑問文に於て οὐ(οὐχί)は肯定的返答を期待する場合、μή は否定的返答を期待する場合に用いられる

尚 οὐπω(未だ…ならず)、μήποτε(如何なる場合も…ならず、恐らくは)、μήτι;(…なりや然らず)等の複合詞として用いられる。

単 語

ἀκρασία, ἡ	不節制	σπλάγχνα, τά	あわれみ、心情
ἀρπαγή, ἡ	貪欲	τροφή, ἡ	食物
ἔνδυμα, το	衣物	γέμω	充つる
ἐορτή, ἡ	祭	πλανάω	迷わす
ἐταῖρος, ὁ	友	πρωί	早朝
μάχη, ἡ	争闘	φανερῶς	あらわに
παροψίς, ἡ	皿	ᾧδε	ここに

練習第二十六

次のギリシャ語を訳せ。

(1) μήποτε ἀληθῶς ἔγνωσαν οἱ ἄρχοντες ὅτι οὗτός ἐστιν ὁ χριστός; (ヨハネ 7:26)。(2) καὶ ἐὰν γένηται εὐρεῖν αὐτό, ἀμὴν λέγω ὑμῖν ὅτι χαίρει ἐπ' αὐτῷ μᾶλλον ἢ ἐπὶ τοῖς ἐνενήκοντα ἐννέα τοῖς μὴ πεπλανημένοις。(マタ 18:13)。(3) οὐχὶ ἡ ψυχὴ πλεῖον ἐστὶν τῆς τροφῆς καὶ τὸ σῶμα τοῦ ἐνδύματος;(マタ 6:25) (4) ἰδοὺ ἡ μήτηρ καὶ οἱ ἀδελφοὶ αὐτοῦ εἰστήκεισαν ἔξω ζητοῦντες αὐτῷ λαλῆσαι。(マタ 12:46)。(5) καθαρίζετε τὸ ἔσωθεν τοῦ ποτηρίου καὶ τῆς παροψίδος, ἔσωθεν δὲ γέμουσιν ἐξ ἀρπαγῆς καὶ ἀκρασίας。(マタ 23:25)。(6) καὶ τὰ σπλάγχνα αὐτοῦ περισσοτέρως εἰς ὑμᾶς ἐστὶν。(II コリ 7:15)。(7) τῇ δὲ μιᾷ τῶν σαββάτων Μαρία ἡ Μαγδαλὴ ἔρχεται πρώτῃ σκοτίας ἔτι οὔσης εἰς τὸ μνημεῖον。(ヨハ 20:1)。

次の語をギリシャ語に訳せ。

《1》 実に彼は神の子であった(マタ 27:54)。(2) 之によってユダヤ人いよいよイエスを殺そうと求む(ヨハ 5:18)。(3) 外には分争内には恐れがあった(II コリ 7:5)。(4) 正しい事のために迫害された者は福である(マタ 5:10)。(5) 如何に何を言おうと思ひ煩うな(マタ 10:19)。(6) 友よ、何で婚礼服をつけないで、ここに入ったのか(マタ 22:12)。(7) その時彼もまた祭に上った、あらわにはなく潜びやかに(ヨハ 7:10)。(8) 多くの偽預言者が起って多くの人を欺くであろう(マタ 24:11)。(9) 汝らを憎む者に良くしてやりなさい(ルカ 6:27)。

第三十四課 前置詞 (その一)

Prepositions

§ 161. 前置詞は名詞又は代名詞の置かれこれと合して形容詞句又は副詞句として用いられる。そして各の前置詞は名詞又は代名詞の一定の格を支配する。本来名詞代名詞の格はそれ自身の意味を持ち前置詞の助けなしに用いられて居たのであったが、後に至って前置詞を以ってこれを助勢する様になった。こうして名詞代名詞の格の本来の意味に前置詞の意味が加わって種々複雑なる意味を示して居る。

大体としてギリシャ語においては、**第二格**はそのものから起る運動 (Motion From, 即ち Whence? に対する答) を意味し、**第三格**はそのものに止まる運動 (Rest At, 即ち Where? に対する答) を意味し、**第四格**はそのものに向かう運動 (Motion Towards, 即ち Whither? に対する答) を意味して居る。

これに前置詞本来の意味を加味する事によって、与えられた前置詞句の意味を知る事が出来る。

§ 162. 前置詞をその支配する格によって分類すれば下の如くである。

(I) 一つの格のみを支配するもの

ἀντί, ἀπό, ἐκ (ἐξ) πρό——**Genitive** のみ

ἐν, σύν——**Dative** のみ

ἀνά, εἰς——**Accusative** のみ

(II) 二つの格を支配するもの

διά, κατά, μετά, περί, ὑπέρ, ὑπό——**Genitive** 及び **Accusative** を支配す

(III) 三つの格を支配するもの

ἐπί, παρά, πρὸς——**Genitive, Dative, Accusative** を支配す

§ 163. **Genitive** のみを支配する Prepositions

(1) ἀντί 元来**反対の状態**を意味する語で、転じて**代わりに** (instead of, for) の意味ともなる。Antipathy, Antinomy, Antichrist 等が皆この反対又は対立の意味を含んで居るのはこの為である。

ὀφθαλμὸν ἀντί ὀφθαλμοῦ (マタ 5:38) 目に対して目を。

μὴ ἀντί ἰχθύς ὄφιν αὐτῷ ἐπιδίσει; (ルカ 11:11)

魚の代りに彼に蛇を与えようか。(否)

(2) ἀπό (a) あるものの外面を起点として更に**より遠ざかる運動**を示す前置詞である。

ρῦσαι ἡμᾶς ἀπὸ τοῦ πονηροῦ. (マタ 6:13)

我らを悪しき者から救ってください。

ἀπὸ τῆς ὥρας ἐκείνης (マタ 9:22) その時より。

(b) 以上の意味より転化して**起源、原因、理由**等をも意味する。

μάθετε ἀπ' ἐμοῦ (マタ 11:29) 我より学べ

ἀπὸ τοῦ φόβου ἐκραζᾶν (マタ 14:26) 恐れのため叫んだ。

Οὐαὶ τῷ κόσμῳ ἀπὸ τῶν σκανδάλων (マタ 18:7)

この世は躓きの故に禍である。

(c) 又同様に**分離**の意味にも用いられ“……の一部分”を意味する場合もある。

ἐνέγκατε ἀπὸ τῶν ὀψαρίων. (ヨハ 21:10)

肴の中の一部分を持って来なさい。

(d) 又 ἀπό は時、場所を示す副詞と共に用いられることがある。

その意味は“より”又は“から”と訳すべきである。

例 ἀπὸ τότε, ἀπ' ἄνωθεν, ἀπ' ἄρτι etc.

その時から、上から、今より

(3) ἐκ, ἐξ あるものの内部より外部に向って為される運動を示す前置詞で eis の反対である。従って

(a) **場所**に関しては“...より外に向かって”out of の意味となる。

ἐκ τῶν μνημείων ἐξερχόμενοι. (マタ 8:28)

墓から外に出て来て

(b) **時**に関しては“…の時以来”from を意味する。

ἐκ τούτου (ヨハ 6:66) この時以来

ἐξ ἐτῶν ὀκτώ (使徒 9:33) 八年以来

(c) 転化して次の如き場合にも用いられる。

出身 : γυνή ἐξ τῆς Σαμαρείας (ヨハ 4:7) サマリヤ出身の女。

Ἑβραῖος ἐξ Ἑβραίων (ピリ 3:5) ヘブル人より出でたヘブル人。

原因、理由 : ἐαυτοῖς ποιήσατε φίλους ἐκ τοῦ μαμωνᾶ τῆς ἀδικίας

(ルカ 16:9) 不義の財宝によって自身に友を造れ。

ὁ δίκαιος ἐκ πίστεως ζήσεται (ガラ 3:11)

義人は信仰によって生きるであろう。

材料 : στέφανος ἐξ ἀκανθῶν (マタイ 27:29) 棘の冠。

所属階級 : οἱ ἐκ πίστεως. (ガラ 3:9) 信仰による者。

οἱ ἐκ περιτομῆς. (テト 1:10) 割礼の者

動機 : ἐκ πολλῆς θλίψεως ἔγραψα. (II コリ 2:4)

多くの患難に動かされて之を書いた。

(4) **πρό** 前に

(a) **場所** : 人又は場所に関して用いる

φύλακες πρὸ τῆς θύρας. (使徒 12:6) 戸の前の番人。

πρὸ προσώπου σου (マタ 11:10) 汝の顔の前に。

(b) **時** : πρὸ καταβολῆς κόσμου (ヨハ 17:24) 世の創の前に。

(c) 転じて**優先**の意味にも用いられる。

πρὸ πάντων (ヤコ 5:12 等) 何よりもまず。

練習第二十七

(1) ὥσπερ ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου οὐκ ἦλθεν διακονηθῆναι, ἀλλὰ διακονῆσαι καὶ δοῦναι τὴν ψυχὴν αὐτοῦ ἀντί πολλῶν. (マタ 20:28)。 (2) μηδενὶ κακὸν ἀντί κακοῦ ἀποδιδόντες (ロマ 12:17)。 (3) ἰδοὺ μάγοι ἀπὸ ἀνατολῶν παρεγένοντο εἰς Ἱεροσόλυμα. (マタ 2:1)。 (4) Αὐτὸς δὲ ὁ Ἰωάννης εἶχεν τὸ ἔνδυμα αὐτοῦ ἀπὸ τριχῶν¹ καμήλου². (マタ 3:4) (5) Ἀπὸ τότε ἤρξατο Ἰησοῦς Χριστὸς δεικνύμειν τοῖς μαθηταῖς αὐτοῦ. (マタ 16:21)。 (6) ἐξ Αἰγύπτου ἐκάλεσα τὸν υἱόν μου. (マタ 2:15)。 (7) λέγω γὰρ ὑμῖν ὅτι δύναται ὁ θεὸς ἐκ τῶν λίθων τούτων ἐγεῖραι τέκνα τῷ Ἀβραάμ (マタ 3:9)。 (8) ἡ γὰρ παράκλησις ἡμῶν οὐκ ἐκ πλάνης³ οὐδὲ ἐξ ἀκαθαρσίας οὐδὲ ἐν δόλῳ. (I テサ 2:3)。

第三十五課 前置詞 (その二)

§ 164. Dative のみを支配する Prepositions

(1) ἐν

(a) **場所、時**等を示す名詞と共に用いて、…の中に、の内に、の間に等を意味する。但しあるものの中に止まっている形を表わす点で εἰς と異なって居る。

ἐν Βηθλέεμ (マタ 2:1) ベツレヘム (の内に) に

ἐν τῇ ἀγορᾷ (マタ 20:3) 市場 (の中) に

ἐν ἡμέρᾳ κρίσεως (マタ 10:15) 審判の日に

(b) あるものを を携えて、を着て、を帯びて等の意味に用いる。

¹ 毛

² 駱駝 (らくだ)

³ 欺き

ἐν ῥάβδῳ ἔλθω πρὸς ὑμᾶς; (I コリ 4:21)

我むちを携えて汝らに行こうか。

μὴ ἐν ζύμῃ παλαιᾷ.....ἀλλ' ἐν ἄζύμοις (I コリ 5:8)

古きパン種を用いずに種なしパンを用いて

ἵνα στρατεύῃ ἐν αὐταῖς (I テモ 1:18)

かれら (預言) によりて (を以って) 戦わんが為

従って使用する道具 Instrument の意味にも用いられる事があり、この場合英語の With (を以って) に相当する。

(c) 心がある状態にある場合、に在りて、によりて、をもて

ἐν ἁμαρτία, ἐν πίστει, ἐν σοφία, ἐν ἀγάπῃ, ἐν πνεύματι, ἐν Χριστῷ Ἰησοῦ.

(d) 上記の場合の一変態として ἐν がある種類の名詞を伴う場合は**副詞**の如き句を形成することがある。

ἐν δυνάμει 力をもて、即ち力強く

ἐν τάχει 速力をもて、即ち速やかに

ἐν κρυπτῷ 隠密をもて、即ち密かに

(e) …の力によつての意味となり転じて**警告**等にも用いられる。

ἐν τῷ ἄρχοντι τῶν δαιμονίων ἐκβάλλει τὰ δαιμόνια. (マタ 9:34)

彼は悪魔の首 (の力) によりて悪鬼を追い出すのだ。

μήτε ἐν τῷ οὐρανῷ……μήτε ἐν τῇ γῇ (マタ 5:34, 35)

天を指して……地を指して

(2) σύν

(a) と共に英語の With, Together with に相当する。

Πέτρος καὶ οἱ σὺν αὐτῷ (ルカ 8:45) ペテロ及び彼と共なる者。

(b) 従って基督者とその苦痛、歓喜、十字架、死、復活等をキリストと共にする事を言い表す場合にこの前置詞が非常に多く用いられ、又動詞と結合して用いられる (例 ロマ 6:6, 8 エベ 2:5, 6 コロ 2:18, 19 ロマ 8:28 I コリ 5:11)。

(c) …の外の意味に転化する事がある。

ἀλλάγε καὶ σὺν πᾶσιν τούτοις (ルカ 24:21)

しかのみならず (しかしながら) これらの事の外に・事と共に

§ 165. Accusative のみを支配する Prepositions

(1) ἀνά

本来は上方の意味であるが、新約聖書では、この意味に用いられるのは多く動詞と結合した場合 (例 ἀνακράζω 声を揚げる ἀναβλέπω 見上げる ἀναβάλλω 投げ上げる) で普通は次の如き意味に熟語として用いられる。

(a) ἀνὰ μέσον …の中に、…の間に

例 マタ 13:25、黙示 7:17、I コリ 6:5

(b) ἀνὰ μέρος 順次に 例 I コリ 14:27

(c) **数詞**と共に用いられる場合はずつの意味となる。

ἔλαβον ἀνὰ δηνάριον (マタ 20:9) 彼ら一デナリずつを受けた。

ἀπέτελεν αὐτοὺς ἀνὰ δύο (ルカ 10:1) 彼らを二人ずつ派遣した。

尚 路 9:14 約 2:6 黙 4:8, 21:21

(2) εἰς

ἐκ の反対で外部より内部に進入する (又は進入せんとする) 運動を表わす。それが又転じて種々の意味に用いられる。

(a) ある**場所、状態**等、の中に入ることを意味する。

πέμψας αὐτοὺς εἰς Βηθλέεμ (マタ 2:8)

彼らをベツレヘムの (村の) 中に遣わして。

ἀνέβη εἰς τὸ ὄρος (マタ 5:1) 山の中に登って行った。

μὴ εἰσενέγκης ἡμᾶς εἰς πειρασμόν (マタ 6:13)

我らを誘惑に引き入れるな。

(b) …の処まで、即ち将に中に入らんとする気持ちを含む。

ἔρχεται εἰς τὸ μνημεῖον (ヨハ 11:38) 墓の処まで来た。

尚 マタ 17:27 ヨハ 20:1, 3, 4

(c) 人間の**関係**を云う場合は…に対して時には…に反対して
τὸ αὐτὸ εἰς ἀλλήλους φρονοῦντες (ロマ 12:16)

互いに対して同じ心となって。

λόγος εἰς τὸν υἱὸν τοῦ ἀνθρώπου (ルカ 12:10)

人の子に叛ける言。

(d) の為にと訳すべき場合、即ちある**結果**を指す時。

εἰς μαρτύριαν αὐτοῖς (マタ 8:4, 10:18)

彼らに対する証しの為に。

παραδίδοται εἰς τὸ σταυρωθῆναι (マタ 26:2)

十字架に釘けられんが為に付された。

尚 I コリ 11:24 II コリ 2:12 等。

(e) 一の状態より他の状態となる事又はそれと認められる事。

ἔσονται…εἰς σάρκα μίαν (マタ 19:5 等) 一体となるであろう。

ἐλογίσθη αὐτῷ εἰς δικαιοσύνην (ロマ 4:3 等) 義と認められた。

尚 マコ 10:8 I コリ 6:16 エペ 5:31 マタ 21:42 使徒 19:27

ロマ 2:26; 9:8; 4:3,5; 9:22 ガラ 3:6

(f) **時**に関して持ちうる場合は…迄、…の期間。

εἰς τὸν αἰῶνα (マタ 21:19 その他) 何時迄も。

εἰς ἡμέραν Χριστοῦ (ピリ 1:10) キリストの日迄。

尚 ルカ 1:50 ヨハ 6:51, 58 ロマ 1:25 II コリ 11:31 ガラ 1:5

黙 9:15 その他参照。

(g) 中に入る事と入ってその中に留まる事の二つの観念を兼ねた
場合にも用いられる。

ὁ εἰς τὸν ἀγρὸν ὢν (マコ 13:16) 畑に行ってその処に居る者。

ἀποθανεῖν εἰς Ἱερουσαλήμ (使徒 21:13)

エルサレムに入ってその処で死ぬこと。

尚 使徒 8:40 ヘブル 11:9 等参照すべし。

§ 166. Genitive と Accusative を支配する Prepositions

(1) διὰ

(イ) **Genitive** と共に用いる場合。

(a) 場所に関連して…を経て、…を通過して行く等の意味。

ἔδει δὲ αὐτὸν διέρχεσθαι διὰ τῆς Ζαμαρείας (ヨハ 4:4)

サマリヤを通過する事が彼に必要であった。

σωθήσεται ὡς διὰ τοῦ πυρός (I コリ 3:15)

火を通過するが如くにして救われるであろう。

(b) **媒介者、媒介物、行為の器**たるべき人、又は物について用いられる場合は…によりて、を通して

τὸ ῥηθὲν ὑπὸ Κυρίου διὰ τοῦ προφήτου (マタ 1:22)

預言者を通して主から語られた語

(ὑπόについては《6のイ》参照)

διὰ θελήματος θεοῦ (エペ 1:1) 神の御旨により。

σεσωσμένοι διὰ τῆς πίστεως (エペ 2:8) 信仰により救われたる。

尚 Π テサ 2:2 Π コリ 5:10 ロマ 2:16, 5:1 ガラ 1:1 エペ 1:5
ピリ 1:11 テト 3:6 参照。

(c) **時**に関しては期間中又は期間経過後を意味する。

δι' ὅλης τῆς νυκτός (ルカ 5:5) 一晩中

διὰ τριῶν ἡμερῶν (マタ 26:61) 三日の後

尚 ヘブル 2:15 使徒 5:19, 16:9, 17:10, 23:31 ガラ 2:1 その他。

(ロ) **Accusative** と共に用いる場合。(イ) の場合が行為の器を示すに対しこの場合は行為の**理由**を示し…の故にの意味となる。

διὰ τὸ ὄνομά μου (マタ 10:22) 我が名の故に。

διὰ τὴν πολλὴν ἀγάπην αὐτοῦ (エペ 2:4) その大いなる愛の故に。

尚 マタ 24:12 ヨハ 6:57 ヘブ 5:12 参照。又ロマ 12:3 と 15:15
とを比較せよ。

(2) κατά

(イ) **Genitive** と共に用いる場合。

(a) **場所**に関しては下って 下に

ώρμησε κατά τοῦ κρημνοῦ (マタ 8:32) 崖を駆け下った。

κατὰ κεφαλῆς ἔχων (I コリ 11:4) 頭から下に (何かを) 持つ (頭
か
ら被る事)。

尚 マコ 5:13 使徒 27:14 II コリ 8:2 等参照。

(b) 反して 反対しての意味に用いる場合が多い。

εἴ τι ἔχετε κατὰ τινος (マコ 11:25)。

汝らもし誰かに反対な何事かがあるならば。

ὁς γὰρ οὐκ ἔστιν καθ' ἡμῶν, ὑπὲρ ἡμῶν ἐστιν (マコ 9:40)

我らに反かないものは我らの味方である。

(c) …に誓って。

ἐξορκίζω σε κατὰ τοῦ θεοῦ (マタ 26:63)

神に誓って汝に命ずる。

尚 ヘブ 6:13-16 I コリ 15:15 参照。

(d) ルカは次の (ロ) の (a) と同様の場合に **Genitive** を用いて居る場合がある。ルカ 4:14, 23:5 使徒 9:31, 42; 10:37

(ロ) **Accusative** と共に用いる場合。

(a) 単数又は複数の名詞と共に用いてその全体を通じて又は一つ一つ全体の意味に用いられる。

καθ' ὅλην τὴν πόλιν (ルカ 8:39) 全市を通じて、町中に。

κατὰ τὰς χώρας τῆς Ἰουδαίας (使徒 8:1) ユダヤの諸地方全体に。

(b) 対面して、前に。

κατὰ πρόσωπον πάντων τῶν λαῶν (ルカ 2:31)

凡ての民の顔の前に。

尚 ガラ 2:11, 3:1 使徒 2:10 等参照。

(c) **時**の名詞と共に用いて…頃 …に及んで。

κατὰ τὸ μεσονύκτιον (使徒 16:25) 真夜中頃。

κατὰ καιρὸν (ロマ 5:6) 時に及んで。

(d) ある標準に相応しく に従い。

κατὰ τὴν πίστιν ὑμῶν γενηθήτω (マタ 9:29)

汝らの信仰の如くなれかし。

τὰ κατὰ τὸν νόμον Κυρίου (ルカ 2:39)

主の律法に従える事ども。

(e) 次の如き熟語として**副詞的**に用いられる。

κατ' ἰδίαν 独りで (マタ 14:13, 23; 17:1; 20:17 等)。

κατ' ἑαυτὸν 自分で (使徒 28:16 ヤコ 2:17 等)。

(3) μετά

(イ) **Genitive** と共に用いる場合。

(a) **人**については共に、一処に。但し場所的に見た共存の意味。

σύν の如く協同の意味はない。

Ἐμμανουήλ……μεθ' ἡμῶν ὁ θεός (マタ 1:23)

イマヌエル……神我らと共に在す。

μετὰ γυναικὸς ἐλάλει (ヨハ 4:27)

彼は女と語って居った。

(b) ある物を持ちて又はある心の状態を以ての如き用法。

μετὰ τῶν λαμπάδων αὐτῶν (マタ 25:4) 彼らのランプを持って。

εἰσελθοῦσα μετὰ σπουδῆς (マコ 6:25)

急いで (急ぎを以て) 入って来て。

(c) **愛**、**慈悲**の行為の**目的**たる人について用いられる。この場合は…に対してと訳す事が適當である。

ὁ ποιήσας τὸ ἔλεος μετ' αὐτοῦ (ルカ 10:37)

彼に対して憐憫を行った者。

尚 使徒 14:27, 15:4 I ヨハ 4:17

(ロ) **Accusative** と共に用いる場合。

時については後に、**場所**については後ろにの意味となる。

μετὰ δύο ἡμέρας (マタ 26:2) 二日の後。

μετὰ τὸ δεύτερον καταπέτασμα (ヘブ 9:3) 第二の幕の後ろに。

(4) περί

(イ) **Genitive** と共に用いる場合、について。

περὶ τῆς βασιλείας τοῦ θεοῦ (使徒 8:12) 神の国について。

προσεύχεσθε περὶ ἡμῶν (I テサ 5:25) 我らにについて祈れ。

尚 マタ 6:28 ルカ 2:18 ロマ 8:3 ヘブ 10:6, 18, 26 等参照。

(ロ) **Accusative** と共に用いる場合。

(a) **場所**については回りに、周りの。

ἰδὼν…ὄχλους περὶ αὐτόν (マタ 8:18)

彼の回りの群衆を見て。

οἱ περὶ Παῦλον (使徒 13:13) パウロを取り巻いて居る連中。

尚 マタ 3:4, 18:6 黙 15:6 参照。

(b) **時**については頃。

περὶ τρίτην ὥραν (マタ 20:3) ほぼ第三時頃。

(c) **思想**についてはに関して、について。

περιεσπᾶτο περὶ πολλὴν διακονίαν (ルカ 10:40)

多くの奉仕にについて忙殺されて居った。

(5) ὑπέρ

(イ) **Genitive** と共に用いる場合。

(a) **人**についてはの為に、に代りて、又は味方になって (保護せんが為に上を覆う如き心持ちの場合)。

ὑπὲρ πάντων ἀπέθανεν (II コリ 5:14) 凡てに代わって死んだ。

ὅς γὰρ οὐκ ἔστιν καθ' ἡμῶν ὑπὲρ ἡμῶν ἔστιν (マル 9:40)

我らに反かないものは我らの味方である。

(b) **物事**については…の為に

ὑπὲρ τῆς δόξης τοῦ θεοῦ (ヨハ 11:4) 神の栄光の為に。

ἀπέθανεν ὑπὲρ τῶν ἁμαρτιῶν ἡμῶν (I コリ 15:3)

彼は我らが罪の為に死んだ。(罪を除かん為に)

(c) 一般に (a) (b) より軽い意味で に就いて。

ὑπὲρ τῆς παρουσίας τοῦ Κυρίου (II テサ 2:1)。

主の来り給う事については。

(ロ) **Accusative** と共に用いられる場合 …より以上に。

οὐκ ἔστι μαθητὴς ὑπὲρ τὸν διδάσκαλον (マタ 10:24)

弟子はその師より以上にあらず。

(6) ὑπό

(イ) **Genitive** と共に用いる場合。 **行為者**を意味する。 …によって。

ἀνήθη ὑπὸ τοῦ πνεύματος πειρασθῆναι ὑπὸ τοῦ διαβόλου(マタ 4:1)

悪魔によって試されん為に御霊によって導かれた。

(ロ) **Accusative** と共に用いる場合。

(a) ある **場所** 又はある **物 (有形無形)** の下に。

τιθέασιν αὐτὸν ὑπὸ τὸν μύδιον (マタ 5:15)

彼らはそれを升の下に置いた。

οὐ γάρ ἐστε ὑπὸ νόμον ἀλλ' ὑπὸ χάριν (ロマ 6:14)

汝らは律法の下にあらず恩恵の下にあるから。

(b) 非常に相接近して居る意味に於て用いられる。但し新約聖書では唯時に関して (しかも唯一回のみ) この用法がある。

ὑπὸ τὸν ὄρθρον (使徒 5:21) 曙に近く即ち早朝。

第三十六課 前置詞 (その三)

§ 167. **Genitive, Dative** 及び **Accusative** を支配する前置詞は ἐπί, παρά, πρός の三つである。

(1) ἐπί

(イ) **Genitive** と共に用いる場合。

(a) 上に、場所・人・物事の何れにも用いられる。

ἐπὶ τῆς γῆς (マタ 6:10) 地の上に。

ἐπὶ τῆς χρείας ταύτης (使徒 6:3) この仕事の上に (上を監督して)。

ἐπὶ τῶν ἀσθενούντων (ヨハ 6:2) 病める者の上に (憐れみて)。

尚 ルカ 8:13 ヨハ 19:19 使徒 12:21, 25:6 ロマ 9:5。

(b) ……の面前に

κρίνεσθαι ἐπὶ τῶν ἀδίκων καὶ οὐχὶ ἐπὶ τῶν ἁγίων (I コリ 6:1)

聖き者の前ではなく不義なる者の前にて裁かれる事。

(c) ……に基づき

ἐπὶ στόματος δύο μαρτύρων καὶ τριῶν (II コリ 13:1)

二、三人の証人の口に基づき。

ἐπ’ ἀληθείας διδάσκεις. (マコ 12:14) 真理に基づきて教ふ。

(d) ……の時

ἐπὶ Κλαυδίου (使徒 11:28) クラウドエオの時。

ἐπὶ τῶν προσευχῶν μου (ロマ 1:10) 我が祈りの時。

ἐπ’ ἐσχάτων τῶν χρόνων (I ペテ 1:20) 終わりの時。

(ロ) **Dative** と共に用いる場合。

(a) 上に、物又は事柄について用いる。

οὐκ ἀφεθήσεται λίθος ἐπὶ λίθῳ. (ルカ 21:6)

石の上に石は残されないであろう。

(b) ……に基づき……に由り即ちある事柄の基礎たる事を示す。

οὐκ ἐπ’ ἄρτω μόνῳ ζήσεται. (マタ 4:4)

人はパンのみに由りて生きない。

ἐπὶ τῷ ῥηματί σου χαλάσω τὸ δίκτυον. (ルカ 5:5)

汝の語に基づき網を下すであろう。

尚 使徒 11:19 ロマ 8:20 I テサ 4:7 ロマ 5:12。

(c) その上に、これに加えるに

ἐπὶ πᾶσι τούτοις (ルカ 16:26) それら凡ての外に。

(ハ) **Accusative** と共に用いる場合。

(a) 上に (運動の意味を含む) 又監督支配の意味あり。

ῥηκοδόμησεν ἐπὶ τὴν πέτραν. (マタ 7:24)

彼は岩の上に建てた。

βασιλεύσει ἐπὶ τὸν οἶκον Ἰακώβ. (ルカ 1:33)

彼はヤコブの家の上に支配するであろう。

(b) 対して—決意を含む如き場合。

ἐρχομένους ἐπὶ τὸ βάπτισμα (マタ 3:7)

バプテスマを受けんとて来れる者共を。

συνήχθη ὄχλος πολὺς ἐπ’ αὐτόν. (マコ 5:21)

大なる群衆彼の許に集まった (押し寄せて)

(c) 対して、関して

πεποιθῶς ἐπὶ πάντας ὑμᾶς (II コリ 2:3)

汝ら凡てに対して信頼して。

σπλαγχνίζομαι ἐπὶ τὸν ὄχλον. (マタ 15:32) 我は群衆を憐れむ。

(d) 迄、数及び量に関して用いる。

ἐπὶ σταδίους δώδεκα χιλιάδων (黙 21:16)

一万二千スタディアまでも。

ἐπὶ πλεῖον (使徒 4:17) この上までも。

(e) 間、時間に関して。

ἐπὶ τὴν αὐριον (ルカ 10:35) 翌日の中に。

ὄφθη ἐπὶ ἡμέρας πλείους. (使徒 13:31)

多くの日の間顕れ給うた。

(2) παρά

(イ) **Genitive** と共に用いる場合。

この場合は人についてのみ用いられ、から よりの意で、あるものの側より離れ来る心持ちを示す。

δεξιόμενος παρ' Ἐπαφροδίτου τὰ παρ' ὑμῶν (ピリ 4:18)

汝らからの便りをエパフロデイトから受け取った。

παρὰ τοῦ πατρὸς ἐξῆλθον. (ヨハ 16:27)

我は父の側より出て来た。

(ロ) **Dative** と共に用いる場合。あるものの側に留まる形。

(a) 共に、傍らに

ξενίζεται παρὰ τινι Σίμωνι. (使徒 10:6)

シモンと云う者の処に泊まった。

εἰστήκεισαν δὲ παρὰ ᾧ σταυρῷ. (ヨハ 19:25)

彼らは十字架の傍らに立った。

(b) ……に於ては、から見て

παρὰ ἀνθρώποις... ἀδύνατον, παρὰ δὲ θεῷ πάντα δυνατά. (マタ 19:26)

人に於ては不可能であるが、神に於ては万事可能である。

δίκαιοι παρὰ τῷ θεῷ (ロマ 2:13) 神から見て義し。

(ハ) **Accusative** と共に用いる場合。

(a) 傍らに、側に

ἔπεσε παρὰ τὴν ὁδόν. (マタ 13:4) 道の傍らに落ちた。

(b) 反対に

παρὰ φύσιν (ロマ 1:26) 自然性に反して。

παρ' ἐλπίδα (ロマ 4:18)

望みに反して、望むべくもあらぬ時に。

(c) 優れる、以上の

ἀμαρτωλοὶ παρὰ πάντας (ルカ 13:2) 凡てにまされる罪人。

尚 ロマ 14:5 ヘブル 9:23 1:4, 3:3, 11:4, 12:24 ルカ 3:13 参照。

(3) πρός

(イ) **Genitive** と共に用いて…の方に導く意。

πρὸς τῆς ὑμετέρας σωτηρίας (使徒 27:34) 汝らの救のために。

(ロ) **Dative** と共に用いる場合、近くに留まる形。

πρὸς τῇ θύρᾳ ἔξω (ヨハ 18:16) 戸の近くに、外の方に。

(ハ) **Accsative** と共に用いる場合。

(a) 方に、向かって

δεῦτε πρὸς με. (マタ 11:28) 我の方に来れ。

πρόσωπον πρὸς πρόσωπον (I コリ 13:12) 顔と顔と相對して。

(b) 共に (向かい合った貌《かたち》で)

οὐχὶ πᾶσαι πρὸς ἡμᾶς εἰσι; (マタ 13:56)

彼らは我らと共に居るではないか。

ὁ λόγος ἦν πρὸς τὸν θεόν. (ヨハ 1:1) 言は神と共にあった。

(c) 対して (心の方向)

μακροθυμεῖτε πρὸς πάντας (I テサ 5:14) 凡てに対して寛容なれ。

πρὸς τὴν σκληροκαρδίαν ὑμῶν (マタ 19:8)

汝らの心のつれなき事に対して (為されたのだ)。

尚 ルカ 12:47 ロマ 8:18

(d) 為に (心の目的)

πρὸς τὸ θεαθῆναι αὐτοῖς (マタ 6:1) 彼らに見られんが為に。

以上によって明らかであるとおおり、ἐπί の場合の (イ) (a)、(ロ) (a)、(ハ) (a) の如き、又 παρά の場合の (ロ) (a)、(ハ) (a) の如き日本語では皆同じような訳語になって居るが、これには Genitive, Dative, Accusative 特有の意味上の差異があり、 (§161, p.144 参照) これによって文章の微妙な気持ちが味わえるのである。

第三十七課 接続詞及び間投詞

Conjunction and Interjection

§ 168. **Conjunction** は (1) 結合 (2) 比較 (3) 分離 (4) 反対 (5) 条件 (6) 理由 (7) 推論 (8) 結果等を示す場合に用いられる。

(1) **結合** Annexation

καί 及び τε で英語の And 又は Also に相当し、τε...καί と相併用して …と…の双方、又は …のみならず…もの如き 意味に用いられる。そして時には καί…τε 或いは τε…τε の形を以て用いられる事もある。

(2) **比較** Comparison

ὡς 如く as ; ὡσπερ あたかも…の如く just as ; καθὼς 様に、これは一般に οὕτως (その様に) と相関連して用いられる。

(3) **分離** Disjunction

ἢ 或いは Or ; ἢ…ἢ …か又は…か Either…or ; ἢτοι…ἢ 同上 ; εἴτε…εἴτε …であるか又は…であるか 彼であろうが是れであろうが Whether…whether。

(4) 反対 Antithesis

ἀλλά 及び δέ で双方とも しかしながら But の意味である。δέ は寧ろ軽い意味に用いられる。δέ を用いる場合にこれに相對する前文に μέν を用いる場合がある。μέν…δέ 一方に、…他方に…を意味する。

ἐγὼ μὲν ὑμᾶς βαπτίζω…ὁ δὲ ὀπίσω μου ἐρχόμενος… (マタ 3:11)
一方に我汝らに洗礼を施して居るが、他方に我が後に来るものがある。

(5) 条件 Condition

εἰ もし……ならば、これと ἄν とが合併して εἰάν=If となり Subjunctive Mood の動詞と共に用いられる (§105 (2), p.95 参照)。

(6) 理由 Reason

—ὅτι 何となれば……の故に Because; γάρ 同上 For; διότι……の故に Because; ἐπεὶ……の故に Since 等であって、殊に γάρ は極めてしばしば用いられ、軽い意味に用いられて居るので、日本語の聖書にはこれが正確に訳されて居る場合は少ない。それ故に原文によりてこの意味の脈絡を明らかにしなければならない。

(7) 推論 Inference

—οὖν されば Therefore; τοίνυν されば Then; ἄμα それ故に Consequently; διό それによりて Wherefore; τοιγαροῦν 従って Accordingly 等である。

(8) 結果・目的 Result, Purpose

—ἵνα…せんが為に In order that; ὡς, ὅπως…せんが為に So that; ὥστε する様に So that.

§ 169. Interjection 問投詞は、喜怒哀樂の情の突発せる際に発する音を記録したものである。ὦ, ἔαなどは苦痛又は恐怖を示す問投

詞で、オー、アー等の意味であり οὐά は嘲笑または憎悪を示すヤーイと云う如き意味、οὐαί は嘆息を示し禍害なるかなと訳され、往々 Dative Case を支配する事がある。οὐαὶ ὑμῖν 汝ら禍害なるかな。

ἴδε は Imperative Form であるが、往々間投詞の如くに用いられる。殊に Imperative Form である ἴδου 見よは一層しばしば用いられて居る。

§ 170. 以上の外にギリシャ語には単に意を強める為の Participles (不変化語) があり、これ等は非常にしばしば用いられるが日本語に訳しにくい文字である。主なるものは γέ (Enclitic) 実際、δή 確かに、さて等で、之に更に意を強める為に πέρ 真に very, verily や τοι 確かに Certainly 等が結合して εἶγε 若し少なくとも……ならば、εἴπερ 若し実際……ならば、ἐπειδήπερ 実際……なる故に、μέντοι しかしながら However 等の意味に用いられる。

その他 εἰ 及び ἦ は単に疑問を表わす為に用いられる事がある。

単 語

ἀποβαίνω 出る、外に降りる	δίκτυον, τό 網
βασανίζω 苦しめる	δῶμα, τό 屋根
διαφημίζω 言い広める	ζυγός, ὁ 軛 (くびき)、首木
ἐκχέω = ἐκχύννω 注ぐ	λίμνη, ἡ 湖
ὁράω 慎む、見る	ὄρια, τά 地方
πλύνω 洗う	πλήρωμα, τό 満盈 (まんえい)
δέομαι 祈願する	πλοῖον, τὸ 舟
ἀλεεύς, ὁ 漁夫	ταμεῖον, τὸ 室
δέησις, ἡ 祈願	μεστός 一杯なる

練習第二十八

次のギリシャ語を訳せ。——線の詞の意味を明らかにせよ。¹

(1) ἀνθ' ὧν ὅσα ἐν τῇ σκοτίᾳ εἶπατε ἐν τῷ φωτὶ ἀκουσθήσεται, καὶ ὁ πρὸς τὸ οὐ̄ς ἐλαλήσατε ἐν τοῖς ταμείοις κηρυχθήσεται ἐπὶ τῶν δωματίων. (ルカ 12:3)。(2) τοῦτο τὸ ποτήριον ἢ καινὴ διαθήκη ἐν τῷ αἵματί μου, τὸ ὑπὲρ ὑμῶν ἐκχυννόμενον. (ルカ 22:20) (3) ὑμῖν ἐχαρίσθη τὸ ὑπὲρ χριστοῦ οὐ μόνον τὸ εἰς αὐτὸν πιστεῦειν ἀλλὰ καὶ τὸ ὑπὲρ αὐτοῦ πάσκειν. (ε' 1:29)。

(4) δικαιοθέντες οὖν ἐκ πίστεως εἰρήνην ἔχομεν πρὸς τὸν θεὸν διὰ τοῦ Κυρίου ἡμῶν Ἰησοῦ Χριστοῦ. (ロマ 5:1)。(5) εὐχαριστῶ τῷ θεῷ μου ἐπὶ πάσῃ τῇ μνηίᾳ ὑμῶν μετὰ χαρᾶς τὴν δέησιν ποιούμενος, ἐπὶ τῇ κοινωνίᾳ ὑμῶν εἰς τὸ εὐαγγέλιον ἀπὸ τῆς πρώτης ἡμέρας ἄχρι τοῦ νῦν. (ε' 1:3)。

(6) τὸ σάββατον διὰ τὸν ἄνθρωπον ἐγένετο, καὶ οὐχ ὁ ἄνθρωπος διὰ τὸ σάββατον. (マコ 2:27)。(7) καὶ αὐτός ἦν ἐστὼς παρὰ τὴν λίμνην Γεννησαρέτ, καὶ εἶδεν πλοῖα δύο ἐστῶτα παρὰ τὴν λίμνην, οἱ δὲ ἄλεῖς ἀπ' αὐτῶν ἀποβάντες ἔπλυνον τὰ δίκτυα. (ルカ 5:1, 2)。(8) πολλῶ οὖν μᾶλλον δικαιοθέντες νῦν ἐν τῷ αἵματι αὐτοῦ σωθησόμεθα δι' αὐτοῦ ἀπὸ τῆς ὀργῆς.

(ロマ 5:9)。(9) τί οὖν ἐροῦμεν; εἰ ὁ θεὸς ὑπὲρ ἡμῶν, τίς καθ' ἡμῶν; (ロマ 8:31)。(10) ἦλθεν εἰς τὴν θάλασσαν τῆς Γαλιλαίας ἀνὰ μέσον τῶν ὀρίων Δεκαπόλεως (マコ 7:31)。

¹ この練習は第三十五課以後前文に関係あり。主として Green の Introduction によった。

(1 1) ὥσπερ ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου οὐκ ἦλθεν διακονηθῆαι, ἀλλὰ διακονῆσαι καὶ δοῦναι τὴν ψυχὴν αὐτοῦ λύτρον ἀντι πολλῶν. (マタ 20:28)。

(1 2) καθὼς γὰρ ἐγένετο ὁ Ἰωῆς τοῖς Νινευίταις σημεῖον, οὕτως ἔσται καὶ ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου τῇ γενεᾷ ταύτῃ, (ルカ 11:30)。(1 3) Οὐαὶ ὑμῖν, γραμματεῖς καὶ Φαρισαῖοι ὑποκριταί, ὑμεῖς ἔξωθεν μὲν φαίνεσθε τοῖς ἀνθρώποις δίκαιοι, ἔσωθεν δὲ ἐστε μεστοὶ ὑποκρίσεως καὶ ἀνομίας. (マタ 23:27,28)。(1 4) ὁ δὲ ἐξεληθὼν ἤρξατο κηρύσσειν πολλὰ καὶ διαφημίζειν τὸν λόγον, ὥστε μεκέτι αὐτὸν δύνασθαι φανερωῶς εἰς πόλιν εἰσελθεῖν. (マコ 1:45)

次の語をギリシヤ語に訳せ。

(1) 誰も人に対し(τινί)悪をもて悪に報いぬよう慎め(Iテサ 5:15)。
(2) 弟子はその師に勝らない(マタ 10:24)。(3) 汝ら我がために主に祈願せよ(使徒 8:24)。(4) 我らは皆その満ちたる(満盈の)中から受けて恩恵に恩恵を加えられる¹(ヨハ 1:16)。(5) 夜の四時²頃海の上を歩み彼らの許に來り給う(マコ 6:48)。(6) 汝ら我が名のために凡ての人に憎まるるものとなろう(マタ 10:22)。(7) 万のもの彼により彼のために造られた(コロ 1:16)。(8) この世の子らは己が時代のことには(εἰς)光の子らよりも³伶俐である(ルカ 16:8)。(9) 我が軛を取って我より学べ(マタ 11:29)。(10) 時來らないのに我らを苦しめようとてここに來り給うたのか(マタ 8:29)。

¹ この場合 ἀντί が用いられて居り、恩恵が代わる代わるやって来る如き意味である。

² τετάρτη φυλακή.

³ ὑπέρ + Acc. を用う。己よりも意味が強い。

文章論 Syntax

第一 一致法 Concorde

§ 171. 主語と述語との一致 εἶμι を以って結合せられる主語と補語（即ち Complement）とは、その格に於て一致する（尚 γίνομαι, ὑπάρχω, καλοῦμαι 等の不完全動詞にして補語を要するものも同様である）。

(1) この種の結合動詞 Coupla は省略される場合がある。但しこの省略により意味が不明とならない場合に限られる。

例：μακάριοι οἱ εἰρηνοποιοί (マタ 5:9)

平和を作り出す者は幸福である。

πιστὸς ὁ λόγος (II テモ 2:11) 御言は真実である。

尚 ヘブル 13:8 ロマ 7:7 等

(2) 主語が人称代名詞であれば通常省略される。それは動詞の変化が人称及び数を示して居るので特に主語としての人称代名詞を掲げる必要が無いからである。即ち

μακάριοί ἐστε ὅταν ὀνειδίσωσιν ὑμᾶς καὶ διώξωσιν…… (マタ 5:11)

(彼らが) 汝らを憎み且つ迫害する時 (汝らは) 幸福である。

但し特に主語となるべきものを強調する必要がある場合は人称代名詞を用いる。

ἐγὼ δὲ λέγω ὑμῖν. (マタ 5:34)

だが私は君達に言う (イエス自身の特別な信念を明示する為)

尚 ヨハ 1:42 マコ 6:45 其他参照。

§ 172. 主語と動詞との一致 数と人称に於て一致する。

(1) 例外として中性の複数第一格は、多くは単数の動詞を取る。

ἵνα φανερωθῆι τὰ ἔργα τοῦ θεοῦ (ヨハ 9:3)

神の御業 (複) の顕わされん (単三人称) ため
ἐξεχύθη πάντα τὰ σπλάγχνα αὐτοῦ. (使徒 1:18)

彼の腸 (複) は皆注ぎ出された (三人称単数)

(2) 上述の場合動詞は単数と複数とが混用される場合もある。

τὰ πρόβατα αὐτῷ ἀκολουεῖ, ὅτι οἶδασιν τὴν φωνὴν αὐτοῦ. (ヨハ 10:4)

羊 (複) は彼に従ってゆく (三人称単数)、それ故は羊は彼の声を知って居る (三人称複数) から。

かかる混同の原因は主語を集合名詞的に考える場合と、その個々のものに注意を払う場合との差異であろう。

(3) 主語が生物を意味する集合名詞 (単数) である場合動詞は複数を取る事があり、又は双方混同される事もある。

ὁ δὲ πλεῖστος ὄχλος ἔστρωσαν ἑαυτῶν τὰ ἱμάτια ἐν τῇ ὁδῷ. (マタ 21:8)

併し多くの群衆 (単数) は彼らの着物を徒に撒布した (三人称複数)。

又混用される場合もある。

ἠκολούθει δὲ αὐτῷ ὄχλος πολὺς, ὅτι ἐώρων τὰ σημεῖα ἃ ἐποίει… (ヨハ 6:2)

多くの群衆 (単数) は彼に従った (三人称単数)。それは彼が為した徴を彼らは見た (三人称複数) からである。

(4) 接続詞によりて結合されたる二つ以上の主語がある場合、動詞は一般に複数となる。若し主語の人称が異なって居る場合には自分に近い人称の動詞を取る (即ち私と汝と云う場合は動詞は第一人称複数を取るが如し)。

ἐγὼ καὶ ὁ πατήρ ἐν ἑσμεν. (ヨハ 10:30)

我と父とは一つである (一人称複数)。

ἢ μόνος ἐγὼ καὶ Βαρναβᾶς οὐκ ἔχομεν ἐξουσίαν μὴ ἐργάζεσθαι; (I
コリ 9:6)

我とバルナバだけが働かずに居る権を持たないのか (第一
人称複数)。使徒 3:1

但し時には動詞が最も重要と考えられて居る主語に一致する事がある。

σωθήσῃ σὺ καὶ ὁ οἶκός σου (使徒 16:31)

汝及び汝の家は救われるであろう (三人称単数)

κατέβη αὐτὸς καὶ οἱ μαθηταὶ αὐτοῦ (ヨハ 2:12)

彼とその弟子たちは下って往った (三人称単数)

§ 173. 形容詞、代名詞、分詞とそれと関係ある名詞の性、数、格は一致する。但し

(1) 時には主語の性の如何に関わらず、述語が中性を取る場合がある。

καὶ ταῦτα τινες ἦτε (I コリ 6:11)

汝らの或る者たちはこの様な者であった (中性、尚 7:19 参照)。

(2) 人、物等の名詞を省略しても意味が明らかである場合にはこれを省略する。

§ 174. 関係代名詞と先行詞との関係〔§ 56 (4) 及び (5)〕
関係代名詞の性数格は普通は一致するのであるが時々、先行詞以外の語又は先行詞の内容等に引き寄せられる事がある。これを Attraction と云う。

(1) 関係代名詞の性は時としてその先行詞の性によらずに、却ってその述語の性に引きよせられることがある。

ἔσω τῆς αὐλῆς, ὃ ἐστὶν πραιτώριον (マコ 15:16)

総督の官邸 (中性) である 処 (中性) 邸宅 (女性) の中

τὴν μάχαιραν τοῦ πνεύματος, ὃ ἐστὶν ῥῆμα θεοῦ (エペ 6:17)

神の言 (中性) である処 (中性) 御霊の劍 (女性) を
(尚 ガラ 3:16 コロ 1:27 等用例多し)

(2) 関係代名詞の格は本来ならば他の格であるべき場合に、先行詞の第二格や第三格に引き寄せられる事がある。

ὁς δ' ἂν πίη ἐκ τοῦ ὕδατος οὗ ἐγὼ δώσω αὐτῷ, (ヨハ 4:14)

私が彼に与えようとする処の (四格の代わりに二格) 水 (二格) から飲む者は

ἐπὶ πᾶσιν οἷς ἤκουσαν… (ルカ 2:20)

聞いた処の (三格、本来四格であるべきもの) 凡て (三格) について (その他 使徒 1:1 2:22 等)

(3) 先行詞が指示代名詞である場合には、これが省略せられる事が往々ある。

καὶ νῦν ὃν ἔχεις οὐκ ἔστιν σοῦ ἀνὴρ. (ヨハ 4:18)

そして君が今持って居る処の人は (省略) 君の夫ではない。

ὅς δὲ ὀλίγον ἀφίεται, ὀλίγον ἀγαπᾷ (ルカ 7:47)

少し赦される処の人は (省略) 少しく愛する

(尚 マタ 10:27 ヘブ 5:8)

(4) 往々逆に先行詞が関係代名詞の格に引き寄せられる事がある。

ὃν ἐγὼ ἀπεκεφάλισα Ἰωάννην, οὗτος ἠγέρθη. = Ἰωάννης, ὃν …-λιστα, οὗτος ἠγέρθη (マコ 6:16)

我が首を切った処のヨハネは甦った。

(尚 ロマ 6:17 ルカ 12:48 使徒 21:16 等々)

第二 冠 詞 Article

§ 175. 冠詞は本来指示代名詞で次の如き用法がある。

(1) 之に従う名詞を省略する事によりて恰も指示代名詞の如き形に於て用いられる。

ὁ μὲν…ὁ δε, οἱ μὲν…οἱ δε、及びその変化はこの例である。

(マタ 13:23, マコ 12:5, 使徒 14:4, 17:32)

また単独にも用いられる。

οἱ δὲ εἶπον (マタ 2:5) 彼らは云った

ὁ δὲ ἐδιώπα (マコ 14:61) 彼は黙した。

(2) 名詞のみならず形容詞、分詞、又は副詞と共に用いられる事がある。

(イ) 形容詞の場合

ὁ ἅγιος 聖徒, τὸ ἅγιον 聖なるもの

περιάγετε τὴν θάλασσαν καὶ τὴν ξηράν. (マタ 23:15)

汝らは海や渇いた(地)を廻り歩く

(尚 マコ 1:24, マタ 1:22, 5:15)

(ロ) 分詞の場合

τὸ ῥηθέν 語られた事

ὁ ἀπεστάλμενος 遣された者、等々

(ハ) 副詞の場合

τὸ νῦν 今ある者 τὰ ἄνω 上にあるもの

οἱ ἔξω 外なる者、等々

以上の場合には後に来るべき名詞が省略された場合と考えられる。

(3) Infinitive は中性名詞として取り扱われ、中性の冠詞を取る事がある。

τὸ καθίσει ἐκ δεξιῶν (マタ 20:23)

右手に坐する事

μετὰ τὸ ἐγεθῆναι (マコ 14:28)

甦えられされる事の後

ἐμοὶ τὸ ζῆν Χριστὸς καὶ τὸ ἀποθανεῖν κέρδος (ピリ 1:21)

我に取りて生きる事はキリスト…死ぬ事は益である。

(尚 多くの用例あり)

(4) 次の如き場合一の句 Phrase 又は文章 Sentence 全体が中性冠詞を取る事がある。

(イ) 引用句の場合

τὸ οὐ φονεύσεις, οὐ μοιχεύσεις, (マタ 19:18)

殺すな、姦淫するな、という事

(尚、ルカ 22:37, ロマ 13:9, 使徒 4:21, エペ 4:9, ヘブ 12:27)

(ロ) 疑問又は困難等の場合

τὸ τίς ἂν εἶν μείζων αὐτῶν. (ルカ 9:46)

誰が彼らの中でヨリ大であるかの問題

τὸ γὰρ τί προσευξώμεθα καθὸ δεῖ οὐκ οἶδαμεν (ロマ 8:26)

何を祈るべき様に祈ろうかと云う事を我らは知らない。

(尚、ルカ 1:62, 22:4 等)

§ 176. 冠詞の意味は其の形容すべき語を特定のもの (definite) とするにあり。即ち特に指定せるものを意味する。従って

(1) 通則としては主語は冠詞を取り述語は冠詞を取らない (マタ 13:39, ヨハ 1:1, 3:6, 17:17, I ヨハ 4:8, マタ 5:5, ロマ 7:7)。

(2) 述語も冠詞を取る場合は主語と述語とが全然同一物である事を示す (ヨハ 1:4, II コリ 3:17, I ヨハ 3:4)。

(3) 他の関係より特定される場合は冠詞は省略される (マタ 1:1, I テサ 4:15)。

(4) 単数名詞に冠詞を付して其の種族全体を示すことがある (マタ 12:35, 15:11, 18:17, ルカ 10:7, II コリ 12:12, ガラ 4:1, ヤコ 5:6 等)。

(5) 抽象名詞はそれが人格化されし場合 (I コリ 13:4, 11:4, 使徒 28:4)、個人個人の全体を示す場合 (例 ἡ περιτομή 割礼、即ち割礼あるもの) 特別な観念として取り扱われる場合 (マタ 5:6, I コリ 10:14, I ヨハ 4:10) 等は冠詞を取る。

(6) 固有名詞、又は θεός, Κύριος, Ἰησοῦς, Χριστός 等は或いは冠詞は取り或いは之を省略して其の用法は確定的規則によりて支配されない。

(7) 形容詞 πᾶς (§ 61) は単数において冠詞なしに用いる場合は 各々皆 Every を意味し (ルカ 4:13、II コリ 4:2、エペ 3:15、II テモ 3:16) 冠詞と共に用いる場合は 全体皆 All を意味す (ルカ 2:10、I コリ 13:2、マタ 7:8、ヘブ 9:21、ヨハ 5:22)。

(イ) 冠詞を取らない場合の例としては

συντελέσας πάντα πειρασμὸν ὁ διάβολος ἀπέστη ἀπ' αὐτοῦ ἄχρι καιροῦ. (ルカ 4:13)

悪魔は試練を一つ一つ皆終えたので暫く彼から離れた。

πάντα γραφή θεόπνευστος (II テモ 3:16)

聖書は一々皆神の感動に由る。

(ロ) 冠詞を取る場合の例として

ἐν αὐτῷ ἐκτίσθη τὰ πάντα (コロ 1:16)

万物は彼によって創造された。

(その他 I テモ 6:13、ヘブ 2:8 等)

(8) 第一格が第五格の代りに用いられる場合は冠詞を取る (マタ 11:26 ルカ 8:54 ヨハ 19:3、20:28 ヘブ 1:8)。

§ 177. 冠詞の位置及びその省略

(1) 冠詞とその形容すべき語との間には他の語又は句が介在する事がある。

μὴ συσχηματιζόμενοι ταῖς πρότερον ἐν τῇ ἀγνοίᾳ ὑμῶν ἐπιθυμίαις
(I ペテ 1:14)

始めの無智の時の欲望に同化しないで

ὁ ἐν ἐλαχίστῳ ἄδικος (ルカ 16:10) 最も少ない事に不正な者
(2) 冠詞はしばしば名詞の後に繰り返され其の名詞を形容する他の語と共に用いられる。

δοξάσωσιν τὸν πατέρα ὑμῶν τὸν ἐν τοῖς οὐρανοῖς (マタ 5:16)

天に在す汝らの父を崇めるであろう。

καὶ σώσει (μὲ) εἰς τὴν βασιλείαν αὐτοῦ τὴν ἐπουράνιον.(II テモ 4:18)

そして私を天の国に救い入れるであろう。

尚、名詞に冠詞が無い場合も同様である。

εἰρήνην τὴν ἐμὴν δίδωμι ὑμῖν. (ヨハ 14:27)

我が平和を汝らに与える。

ἔθην τὰ μὴ διώκοντα (ロマ 9:30)

追い求めなかった異邦人 (その他 I テモ 5:3、ヤコ 1:25、
ヨハ 14:27、ロマ 9:30)。

(3) 多数の名詞を列挙する場合、その各の上に冠詞があれば各々を別々に取り扱う事を示し (ルカ 12:11、ヤコ 3:11、II テサ 1:8、ヘブ 11:20)、最初の語のみ冠詞を取る場合は全体を一団として取り扱うことを示す (エペ 3:18、コロ 2:22、II ペテ 1:10、マタ 17:1、テト 2:13)。

(4) 冠詞を取らない語は不定なる場合を意味す (マタ 12:41, 42、ルカ 2:12、使徒 1:7, 17:23, 26:27、ロマ 2:14、I コリ 3:10, 14:4 等)。

第三 名 詞 の 格

第一格 Nominative

§ 178. 主語の格であるが但し次の如き特別の用法がある。

(1) 文章の構成から離れて独立し、注意を喚起し又は意を強める場合之を Suspended Nominative と称す。遊離せる主格の意味である。

πάν ῥῆμα ἄργον ὁ λαλήσουσιν οἱ ἄνθρωποι, ἀποδώσουσιν περὶ αὐτοῦ
λόγον ἐν ἡμέρᾳ κρίσεως (マタ 12:36)

人々が語るであろう処の凡ての無益な言葉（主格）、人々は
審判の日にその言葉について言い開きをするであろう。

ὁ πιστεύων εἰς ἐμέ, …ποταμοὶ ἐκ τῆς κοιλίας αὐτοῦ ῥέουσιν
ὕδατος ζῶντος. (ヨハ 7:38)

我を信ずる者（主格）その人の（第二格）腹から生ける水の
流れが湧き出てるであろう。

（尚使徒 7:40、ルカ 12:10、黙 2:26 参照）

（2）ιδού（視よ）なる動詞の後、人名を掲ぐる場合及び黙 1:4 の
如き場合は意味を強める為の第一格が用いられる。

（イ）ιδούの後

ιδού, φωνὴ ἐκ τῶν οὐρανῶν (マタ 3:17)

見よ天より声（あり、第一格）。

（ロ）ὄνομα なる語を用いて人名を表わす場合

Νικόδημος ὄνομα αὐτοῦ (ヨハ 3:1)

その名はニコデモ（文章の他の部分から独立す）

（外に使徒 13:6、ルカ 24:13 等）

（ハ）黙 1:4 の場合——之は黙示録独特の構文で現在分詞を名詞
として用い、しかも第一格を用いておる。（1）の場合に近い。

ἀπὸ ὃ ὦν καὶ ὃ ἦν καὶ ὃ ἐρχόμενος (黙 1:4)

昔在し、今在し、後来り給う者より、(ἀπό は普通二格を
支配す。尚マタ 3:17)

（3）第五格 Vocative の代りに用いらるる事がある。

πατήρ, ὁ πατήρ. 然り父よ（マタ 11:26、Vocative は πάτηρ である
べきもの）。

χαῖρε ὁ βασιλεύς=χαῖρε βασιλεῦ (ヨハ 19:3) 国王万歳。

(其の他ヨハ 20:28、ヘブ 1:8, 9; 10:7)

第二格 Genitive

§ 179. 第二格は“何処から”Whence の間に答えて、あるものを起点としてそれから此方にの意味を持つ格である。従って次の如き数種の意味に用いられる事となる。

一の語が第二格として用いられて居る場合以下の諸種の用法の何れに属するかは、前後の関係に由って決するのであって、従って場合によっては聖書の解釈上の説が別れる結果となる事がある。

I 起源又は原因 Genitive of Origin

(a) 起源又は主導者を示す場合

μνημονεύοντες ὑμῶν τοῦ ἔργου τῆς πίστεως καὶ τοῦ κόπου τῆς ἀγάπης καὶ τῆς ὑπομονῆς τῆς ἐλπίδος,

信仰から出る行為、愛から来る労苦、望みによって起される忍耐を思い出して (テサ前 1:3)

κινδύνοι ποταμῶν 河の難 (II コリ 11:26)

δικαισύνη πίστεως 信仰による義 (ロマ 4:13 等々)

ἡ πίστις τῆς ἐνεργείας τοῦ θεοῦ 神の働きによって起された信仰 (コロ 2:12)、その他多くの用例あり。

(b) 聴く、味わう、触れる、の如き五感の感覚を表わす動詞の後にも二格を用いる。

ἀκούω の例

ἐάν τις μου ἀκουσῇ τῶν ῥημάτων

もし人我の言葉をきくならば (ヨハ 12:47)

ὁ θεὸς ἁμαρτωλῶν οὐκ ἀκούει.

神は罪人らに聞き給わない (ヨハ 9:31)。

ὑμῶν ἀκούειν μᾶλλον ἢ τοῦ θεοῦ

神に聴くよりも寧ろ君達に聴く事は… (使徒 4:19)

その他マタ 7:24, 17:5, ルカ 6:47, 10:16, 16:29 等多くあり。

但し ἀκούω は Accusative を支配する場合があります (マタ 7:24 とルカ 6:47 とを比較せよ) 此の両者の差異は僅少な心理的の差異と見るべきであろう。即ち Genitive 支配の場合は「聴いて心に感ずる」方面を強調して居り、Accusative の支配の場合は「聴く」と云う感覚に重きを置くと見るべきであろう。尚ヨハ 6:45 参照。

γεύομαι (味わう) の例

οὐ μὴ γεύσωνται τοῦ θανάτου (マタ 16:28、マコ 9:1、ルカ 9:27)

死を味わわないであろう。

οὐδεὶς γέυσεται μου τοῦ δείπνου (ルカ 14:24)

誰も私の晚餐を味わわないであろう。

θιγγάνω (触れる) の例

ἵνα μὴ ὁ ὀλοθρεύων τὰ πρωτότοκα θίγη αὐτῶν (ヘブル 11:28)

長子たちを滅ぼす者が彼らに触れない様に。

ἄπτομαι (触れる) の例

τίς μου ἤψατο τῶν ἱματίων (マコ 5:30、ルカ 8:44 等々)

誰が私の衣に触れたか

ἤψατο τῶν ὀφθαλμῶν αὐτῶν (マタ 9:29、尚マコ 6:56 参照)

彼は彼らの目に触った

(c) 熱望、配慮、軽侮、記憶、忘失、呪詛、非難等を表わす詞の後

ἐπιθυμέω (熱望する)

καλοῦ ἔργου ἐπιθυμεῖ 善き業を求めよ (I テモ 3:1、使徒 20:33)

但し Accusative 支配の場合もあり (マタ 5:28)

ἐπιμέλομαι (心配する)

ἐπιμελήθητι αὐτοῦ (ルカ 10:35) 彼を世話して下さい

尚 I テモ 3:5

その他 μιμνήσκομαι (記憶する 使徒 11:16) ὀλιγορέω (軽視する
ヘブル 12:5) καταφρονέω (軽蔑する マタ 6:24) μνημονεύω (記
憶する ルカ 17:32、その他ヨハ 15:20 16:21 コロ 4:18 その他)
ἐκλανθάνομαι (忘れる ヘブ 12:5) ἐπιλανθάνομαι (忘れる ヘブ
6:10) ἐγκαλέω (非難する 使徒 19:40) κατηγορέω (訴える マタ
12:10 マル 3:2)

(d) 豊満、欠乏、需要等を示す詞の後

πλήρης (充滿せる) πληρώω (充たす)

πλήρης πνεύματος ἁγίου 聖靈に充たされて (ルカ 4:1, 5:12, 使徒
11:24, 6:5,8; ヨハ 1:14)

πεπληρώκατε τὴν Ἱερουσαλήμ τῆς διδαχῆς ὑμῶν (使徒 5:28)

エルサレムを汝らの教を以て充たした

その他 λείπομαι (欠ける、ヤコ 1:5, 2:15) ὑστερέω (欠ける、ロマ
3:23) περισσεύομαι (豊富である、ルカ 15:17) γεμίζω (満たす、
ヨハ 2:7)、μεστός (充ちたる、マタ 23:28、ロマ 1:29, 15:14、ヤコ
3:17)

II 分離又は除去 Genitive of Separation and Ablation

(a) 移動、差別、妨害等を表わす詞の後、但し前置詞を挿入する
場合多し。

ἀπηλλοτριωμένοι τῆς πολιτείας τοῦ Ἰσραὴλ καὶ ξένοι τῶν διαθηκῶν
(エペ 2:12) イスラエルの民籍から遠ざける契約とは無関係であり
(其他 κωλύω 禁ずる、使徒 27:43、παύομαι 止む I ペテ 4:1 等)

(b) 比較の目的として、比較を示す動詞又は比較級の形容詞の後
に用いられる。

例えば διαφέρω (異なる、優る) の後には名詞の第二格が用いら
れ (マタ 6:26, 10:31, 12:12, ルカ 12:24, I コリ 15:41, ガラ 4:1)、
又 μείζων (ヨリ大なる、ヨリ勝れる マタ 11:11, マコ 12:31,

ヨハ 4:12) πλεῖον (優れる マタ 6:25, 12:41, マル 12:43, ヨハ 21:15) χείρων (より悪き マタ 27:64, I テモ 5:8, ヘブ 10:29) 其の他形容詞の比較級の後には此の格を用いる。

但し ἢ (…より Than) を用いる場合は二つの比較される語は同格となる。

III 所有 Genitive of Possession (Subjective Genitive)

(a) 所有所属を示す場合、之は最も普通の用法で一々例示する必要はない (ロマ 1:1)。

(b) 親属関係を示す語は、第二格の前に略される場合があり、此の場合是らの語を補充して訳す必要がある。

Ἰάκωβον τὸν τοῦ Ζεβεδαίου (ゼベダイの子ヤコブを、その他 ヨハ 6:71, 21:15-17 等多数)、Ἰωσήφ, τοῦ Ἡλὶ τοῦ Ματθαίου (ヨセフ、その父はエリ その父はマタテ……ルカ 3:24-38) Μαρία ἡ Ἰακώβου ヤコブの母マリヤ 尚マコ 15:40, 16:1)、ἐκ τῆς τοῦ Οὐρίου ウリヤの妻から マタ 1:6、尚ルカ 24:10, ヨハ 19:25)、ὕπὸ τῶν Χλόης クロエの家の者から、ἀπὸ τοῦ ἀρχισυναγώγου 会堂の司の家から

(c) 属性を示す場合。此の場合は一見 I (a) の場合即ち起因原因等を意味する第二格に類似して居る様であるが、此の場合の第二格の語は之に関連せる語の内容を部分的に限定する作用をなす点で I (a) と異なって居る。

例 πάθη ἀτιμίας 恥ずべき情熱 (ロマ 1:26) は情熱には種々ありその中「恥ずべき」性質を有するものの意味であり、δικαιώματα σαρκός 肉の規定 (ヘブ 9:10) は規定に多くの種類や性格がある中で「肉に関する」又は「肉肉的」の規定である事を意味して居る。

(d) 同格の名詞の意味に用いる場合、文法的同格ではなく意味に於ける同一性を示す、第二格によって支配される語の性格を第

二格の語が限定する作用を為す点に於て(c)に類似して居る。

例、πόλεις Σοδόμων καὶ Γομόρρας ソドムとゴモラの町々 (II ペテ 2:6) は同一物を指して居るけれども亦町々なる一般動詞をソドムとゴモラとに限定する事となる。περὶ τοῦ ναοῦ τοῦ σώματος αὐτοῦ 彼の体なる宮について (ヨハ 2:21) は宮なる名詞を彼の体として限定して居るけれども此の処で言う宮は彼の軀そのものである。その他 σημεῖον περιτομῆς 割礼の印 (ロマ 4:11)、οἰκία τοῦ σκηνῶν 幕屋なる家 (II コリ 5:1)、ἄρραβὼν τοῦ πνεύματος 聖霊の保証 (II コリ 5:5) 等も此の種類に属する。

IV 部分 Genitive of Partition

(a) 全体の一部を示す場合

例えば ἐκλεκτοῖς παρεπιδήμοις διασπορᾶς 「離散の民の内の選ばれた寄留者に」 (I ペテ 1:1) は Diaspora 即ち離散の民に属する部分を第二格で示して居る。又 τὰ πρόβατα τὰ ἀπολωλότα οἴκου Ἰσραήλ, イスラエルの家の迷える羊 (マタ 15:24) も同様の部分を示す。此の種の第二格の用法は多く次の如き場合に起る。

(イ) 分離形容詞と共に

πολλοὺς τῶν Φαρισαίων καὶ Ζαδοκαίων,

パリサイ人とサドカイ人との多くを (マタ 3:7)

γυναικῶν…καὶ ἀνδρῶν οὐκ ὀλίγοι

婦人や…男子の少なからぬ人々 (使徒 17:12)

δώσω σοι ἕως ἡμίσεος τῆς βασιλείας μου

我が国の半分迄を汝に与えよう (マコ 6:23)

τὸ περισσεῦον τῶν κλασμάτων Παν屑の余り (マタ 14:20)

(ロ) 代名詞と共に

τινὲς δὲ τῶν Φαρισαίων εἶπαν

パリサイ人の中の或る者たちは言った (ルカ 6:2)

τίς δὲ ἐξ ὑμῶν μεριμνῶν… 汝らの中誰か思い煩って…(マタ 6:27)

τίς ἄνθρωπος ἐξ ὑμῶν 汝らの中何人か (ルカ 15:4)

(ハ) 数詞と共に (基数、序数、否定数)

ποιήσόν με ὡς ἓνα τῶν μισθίων σου.

汝の雇人の一人の様に私をして下さい (ルカ 15:9)

ἀποστέλλει δύο τῶν μαθητῶν αὐτοῦ

彼の弟子たちの中の二人を遣わす (マコ 11:1)

τὸ τρίτον τῆς γῆς, τῆς θαλάσσης, τῶν πλοίων……

地、海、船の三分の一 (黙示 8:7-9)

τῶν δὲ λοιπῶν οὐδεὶς ἐτόλμα

他の人々の中誰も…敢てしなかった (使徒 5:13)

是らの場合前置詞 ἐκ を用いる事が多い。

(b) 与る、達する、把握する等の意味の動詞の目的として

(イ) 与る Partake の意味の語と共に

ὁ μετέχων γάλακτος 乳に与る者 (ヘブ 5:13)

μετελάμβανον τροφῆς 食事を共にした (使徒 2:46)

τὰ παιδιά κεκοινώνηκεν αἵματος καὶ σαρκός

子らは血と肉と共に与って居った (ヘブ 2:14)

是らの動詞は三格を支配する事が多い。

(ロ) 把握する、達成する意味の語と共に

ἵνα καὶ αὐτοὶ σωτηρίας τύχωσιν

彼らもまた救を獲得する様に (II テモ 2:10)

ἐκράτησεν τῆς χειρὸς αὐτῆς 彼女の手を取った (マタ 9:25)

是らの動詞は四格を支配する事が多い。但しその場合全部を把握する意味となる。(尚 ルカ 20:35、8:54、マタ 6:24、14:31)

(c) 時又は数の副詞の後

(イ) ὁψὲ δὲ σαββάτων 安息日の終わり頃に (マタ 28:1)

ἅπαξ τοῦ ἐνιαυτοῦ, 一年に一度 (ヘブ 9:7)

(ロ) それ自身副詞のごとくに用いらるる場合

νυκτός, ἡμέρας καὶ νυκτός, τοῦ λοιποῦ の如し。

V 目的 Genitive of Object ある感情又は行動の目的や関係を表わす場合は目的の第二格と呼ばれて居る。

(a) 目的物を表わす第二格、この場合「対する」と訳するのが最も適当であろう。

例 ἐν τῇ προσερχῇ τοῦ θεοῦ 神に対する 祈に於いて (ルカ 6:12)

ὁ ζῆλος τοῦ οἴκου σου 汝の家に対する 熱心 (ヨハ 2:17)

ἔδωκεν αὐτοῖς ἐξουσίαν πνευμάτων ἀκαθάρτων

穢れた靈に対する 権威を彼らに与えた (マタ 10:1)

其他 ὀνειδισμόν τοῦ χριστοῦ キリスト に対する 非難 (ヘブ 11:26)、

εὐργεσία ἀνθρώπου ἀσθενοῦς 弱き人に対する 善業 (使徒 4:9)、

διὰ συνείδησιν θεοῦ 神に対する 良心により (I ペテ 2:19)、

ἔχουσιν 彼らは神 に対する 熱心をもつ (ロマ 10:2)、

ἀγγέλων 天使に対する 礼拝 (コロ 2:18)

(b) 目的の第二格 Objective Genitive は時には上掲 III の所有の第二格 Possessive Genitive と区別し難い場合があり、解釈が分かれ終局的結論を出し難い場合が多くある。

例えば ἀγάπη (τοῦ) θεοῦ は「神が人を愛する愛」である場合 (Possessive Genitive 又は Subjective Genitive) もあり、「人が神を愛する愛」である場合 (Objective Genitive) もある。ヨハ 5:42、I ヨハ 2:5 は後者に属し、ロマ 8:35, 39、エペ 3:19、II コリ 5:14 等は前者の例であるが、いずれか不明なものも少なくない。

VI 関係 Genitive of Relation

(a) 種々の意味に於ける関係をなし、関する又はのと訳すべきもの

βάπτισμα μετανοίας (マコ 1:4) 悔い改めのバプテスマ

ἀνάστασις ζωῆς, ἀνάστασις κρίσεως. (ヨハ 5:29)

生命への甦り、審判への甦り。

εἰς δικαίωσιν ζωῆς (ロマ 5:18)

生命にまで義とされる事となる。

(其他ヨハ 7:35、ロマ 7:2、8:36、エペ 4:16、ヘブ 5:13、ヤコ 1:13)

(b) 価する、適する等の形容語の後

οὐκ ἀξιόους κρίνετε ἑαυτοὺς τῆς αἰωνίου ζωῆς (使徒 13:46)

自らを永遠の生命に相応しからぬものと決定した。

ἄξιός ὁ ἐργάτης τῆς τροφῆς αὐτοῦ (マタ 10:10)

働き人はその食を得るに値して居る。

(其他マタ 3:8、I コリ 6:2、ロマ 16:2、ルカ 23:15、使徒 23:29)

(c) 代価、対価、罰金等について

οὐχὶ δύο στρούθια ἀσσαρίου πωλεῖται; (マタ 10:29)

二羽の雀は一アッサリオンで売られて居るではないか。

ἠδύνατο γὰρ τοῦτο τὸ μύρον πραθῆναι ἐπάνω δηνარიῶν τριακοσίων καὶ
… (マコ 14:5)

此の香油は三百デナリ以上に売り…する事が出来たから

(尚、マタ 10:29、黙示 6:6)

VII 絶対 Genitive Absolute

従属節に於て Participle が第二格に於て独立句的に用いられる場合の主格たる名詞は Genitive となる。此の絶対二格は分詞の二格を伴って、時・理由・条件等の意味となる。

Γαλλίωνος ἀνθυπάτου ὄντος (使徒 18:12)

ガリオが総督であった時

ταῦτα αὐτοῦ ἐνθυμηθέντος (マタ 1:20)

彼がこのことを思いめぐらして居た時

μνηστευθείσης τῆς μητρὸς αὐτοῦ Μαρίας (マタ 1:18)

彼の母マリヤが婚約して居った時

(尚、マタ 2:1, 13、17:9、ヘブ 4:1)

第三格 Dative

§ 180. 原則として運動の止まる点を意味するのであるが、次の様な種々の用法がある。

I 関連 Dative of Association

英独語等で書かれた文法書には (a) 交際 Intercourse、仲間 Companionship 等を意味する動詞の後で (b) 類似 Likeness、適応 Fitness、均等 Equality 及び是らと反対の形容詞、動詞、分詞の後に用いられる事を述べて居るけれども、日本の場合は是らの凡ては「…に」を以って言い表される場合であるから、特にかかる分類をする必要はない。

(a) 例えば ἀκολουθέω (従う)、κολλάομαι (愛着する)、ὀμιλέω (対話する)、δέομαι (縛られる)、ἐγγίζω (近づく)、παρομοιάζω (似る)、ὀμοιώω (似せる)、ἔοικα (似る)、λέγω, φημί (...に云う)、ἀφίημι (...に罪を赦す)、ἀρέσκω (...に気に入る)、δουλεύω (仕える)、πιστεύω (...に信頼する)等の動詞 ἄξιος(値する)、ἀπειθής(...に不従順なる)、ἀρκετόν (充分なる)等の形容詞

其の他「…に」を目的にもつ語は概ね第三格の名詞代名詞を伴うものと見て差し支えが無い。

(b) 「何某の為に」「何某にとっては」等と訳される場合、かかる

名詞は第三格の形をとる。之を Ethical Dative 倫理的第三格と云う。

τί ἡμῖν καὶ σοὶ; (マコ 1:24) 我らと汝とに何の関係があるか。

ἐμοὶ γὰρ τὸ ζῆν Χριστός. (ピリ 1:21)

我にとっては生きるはキリストである。

(c) 所有を示す場合、「…が…をもつ」と云わずに「…に…がある」という表現をなし、第三格を用いる事が多い。

ἐὰν γένηται τι ἀνθρώπῳ ἑκατὸν πρόβατα, (マタ 18:12)

「もしある人に百匹の羊があった場合」

Οὐκ ἔστιν σοι μερίς οὐδὲ κληρὸς (使徒 8:21)

汝には分前も相続分も無い一無関係だ。

II 伝達 Dative of Transmission

(a) 「…に与える」又は「…に与えられる」等の場合、「に」を伴って訳される名詞代名詞は伝達の第三格である。

μὴ δῶτε τὸ ἅγιον τοῖς κυσί (マタ 7:6)

犬に聖物を与えるな。

ὕμῖν ἐστὶν ἡ ἐπαγγελία (使徒 2:39)

約束は汝らのものである。

αἰτεῖτε, καὶ δοθήσεται ὑμῖν (マタ 7:7)

求めよさらば汝らに与えられるであろう。

(b) 「…を助ける」「…に仕える」等の動詞には第三格の名詞代名詞を伴う、日本語では第四格を多く用いる。

διηκόνουν αὐτοῖς ἐκ τῶν ὑπαρχόντων αὐταῖς. (ルカ 8:3)

彼らの持って居る物(之は I (c) の所有の Dative) の中から彼らに仕えた。

κύριε, βοήθει μοι (マタ 15:25)

主よ私を助けて下さい (μέ でない事に注意すべし、独逸語の Hilfe mir の如し)

(c) 通信、報告、命令等を与える場合、与えられる者は第三格を取る。即ち「…に」言う (λέγω, λαλέω)、手紙を書く (ἔγραφα)、福音を宣伝える (εὐαγγελίζω)、命令する (ἐντέλλομαι) 等は第三格を支配する。

(d) 「…に」服従、信頼、説服、訴願を為す等の場合、第三格を用いる。πιστεύω (信頼する)、ὕπακούω (従う)、πειθομαι (説服される)、δεόμαι (歎願する)、προσκυνέω (祈願する) 等の如し、但し προσκυνέω は四格を支配する場合もある。

(e) 尊敬、憤怒、苦悩等の感情の対象となるものは三格を用いる。

μη μεριμνᾶτε τῆ ψυχῆ (マタ 6:25) 生命の為に思い煩うな。

παῖς ὁ ὀργιζόμενος τῷ ἀδελφῷ αὐτοῦ (マタ 5:22)

凡てその兄弟に対して怒る者は…

III 関係 Dative of Reference

ある人又は物に対して何事かが為される場合それが其の人又は物に対し益であると然らざるとを論ぜず、其の人又は物は第三格を取る。日本語に訳す場合は「…の為に」又は「…に対して」となる。

μη θησαυρίζετε ὑμῖν θησαυρούς ἐπὶ τῆς γῆς (マタ 6:19)

汝らの為に財宝を地上に積むな。

(尚マタ 6:20、17:4、22:24、25:9,11,34,41、ロマ 14:6-8)

οὐκ ἐψεύσω ἀνθρώποις ἀλλὰ τῷ θεῷ. (使徒 5:4)

人々に対してではなく神に対して侮ったのだ。

(尚ロマ 6:20、I コリ 3:1 二回、ガラ 6:14 二回、マタ 3:16、ロマ 6:2、

II コリ 5:13、ヤコ 3:18、ヘブ 4:9 等)

IV 其の他の場合

(a) 心の状態 (…を以て) の意に用いられるもの

ἵνα τὸν Ἰησοῦν δόλῳ κρατήσωσιν (マタ 26:4)

イエスを謀計を以て捕えようと

εἰ ἐγὼ χάρτι μετέχω, (I コリ 10:30)

もし我感謝を以て食に与るならば

εἴτε προφάσει, εἴτε ἀληθείᾳ Χριστὸς καταγγέλεται (ピリ 1:18) 見えを以てにせよ 眞実を以てにせよキリストが宣伝えられて居る。

(尚 使徒 15:1、II コリ 3:18、エペ 5:19、ロマ 4:20、8:26、12:10、II ペテ 1:3)

(b) 道具、材料 (…を以ての意) に用いられるもの

πᾶς γὰρ πυρὶ ἀλισθήσεται (マコ 9:49)

人は皆火で塩づけられなければならない。

τὸ δὲ ἄχυρον κατακαύσει πυρὶ ἀσβέστῳ (マタ 3:12)

彼は消えない火で殻をば焼き尽すであろう。

(尚 使徒 12:2、エペ 5:26、コロ 3:16、II テサ 2:8、ヘブ 1:3)

(c) 原因、動機 (…によりの意) に用いられる場合

οὐ διεκρίθη τῇ ἀπιστίᾳ ἀλλ' ἐνεδυναμώθη τῇ πίστει (ロマ 4:20)

不信仰に因って疑わず、反って信仰に因って強くされた。

ἵνα μὴ τῷ σταυρῷ τοῦ Χριστοῦ διώκονται (ガラ 6:12)

キリストの十字架の故に迫害されない様に (尚 I ペテ 4:12)

(d) 道具、機械の意より転じて行為者を意味する場合があり此の場合動詞は受動態を用いる。普通は ὑπό+Gen.の形を以て表わす場合もある。

οὐδὲν ἄξιον θανάτου ἐστὶ πεπραγμένον αὐτῷ. (ルカ 23:15)

死に値する何事も彼によつては行われなかった。

φοβοῦμαι…μὴ…κἀγὼ εὔρεθῶ ὑμῶν οἷον οὐ θέλετε (II コリ 12:20)

私も君達によつて、君達の欲する様なものでないと思われはしないかしらと恐れる。

(e) ある性質につきその範囲を限定する場合は三格を用いる。

μακάριοι οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι (マタ 5:3)

靈に於て貧しいものは幸福である。

ἀδύνατος τοῖς ποσίν (使徒 14:8) 足が弱い人

ἵνα ἡ ἅγια καὶ σώματι καὶ πνεύματι (I コリ 7:34)

彼女が身体に於ても靈に於ても聖くある様に

ἡμεθα τέκνα φύσει ὀργῆς (エペ 2:3)

我々は自然性に於て怒りの子であった。

(f) 時の表示

(1) 長い期間についても、(2) 時の一点についても三格を用いる事がある。

(1) πολλοῖς γὰρ χρόνοις συνηπάκει αὐτόν. (ルカ 8:29)

多くの時の間彼を捉えた。

τεσσαράκοντα καὶ ἕξ ἔτεσιν οἰκοδομήθη ὁ ναὸς οὗτος. (ヨハ 2:20)

四十六年もかかって此の宮は建てられて居る。

(2) τῇ τρίτῃ ἡμέρᾳ ἐγερθήσεται (マタ 20:19)

第三日に甦えるであろう。

ἐξεστὶν τῷ σαββάτῳ θεραπεῦσαι; (ルカ 14:3)

安息日に癒すのは正しいか。

この三格の代りに ἐν+三格の形を取ることが多い。

第 四 格 Accusative

§ 181. 動詞の運動が向けられる目的物の格であって従って他動詞の目的としてその意味を完成する為に用いられる格である。

(a) 二重の目的語即ち Accusative を伴う動詞は少なくない。日本語では何某に何者を“求める”“教える”“着せる”“脱がせる”“油注ぐ”等と云い、物には第四格人間には第三格を用いるけれどもギリシヤ語の場合双方とも第四格を用いる。

ὄν αἰτήσῃ ὁ υἱὸς αὐτοῦ ἄρτον (マタ 7:9)

其人に(四格 ὄν) その子がパンを(四格 ἄρτον) 求める処の(人)
ἐκεῖνος ὑμᾶς διδάξει πάντα (ヨハ 14:26)

其の人は汝らに 凡てを教えるであろう。双方とも第四格を取る事に注意すべし。

ἐνδιδύσκουσιν αὐτὸν πορφύραν (マル 15:17)

彼らは彼に紫の衣を着せた。

尚、之を受動態にした場合も“物”には四格を用いる。

ἐνεδιδύσκετο πορφύραν καὶ βύσσον, (ルカ 16:19)

彼は紫の衣(四格)と細布(四格)とを着せられた。

其の他同種の例はあるが凡てが此の形を取るのではなく、人間の四格の代りに前置の παρά+格、ἀπό+格の形を取る場合もあり又物の四格の代りに三格を用いる場合もある。

ἔχρισεν αὐτὸν ὁ θεὸς πνεύματι ἁγίῳ (使徒 10:38)

(尚へづ 1:9、使徒 28:20、II テサ 2:15、I テモ 6:5)

(b) Accusative cum Infinitive 不定詞の主語としての四格。

不定詞が主語を要する場合その主語は Accusative の形を取る。之を訳す場合は第一格の如くして訳さなければならない。但し日本語では四格のままに訳し得る場合がある。

Οἱ λέγουσιν αὐτὸν ζῆν (ルカ 24:23)

其の人々は彼が生きて居ると云う。(其の人々は彼を生きて居ると云う)とも訳し得る。

νομίζοντες αὐτὸν τεθνηκέναι (使徒 14:19)

彼が死んだ事と思って。(彼を死んだと思って)とも訳し得る。

不定詞が冠詞を取る様な場合でもその不定詞の主語は同様に第四格を取る。

πρὸ τοῦ ἐγγίσει αὐτόν. (使徒 23:15) 彼が近づく前に

ἐν τῷ σπείρειν αὐτόν. (マタ 13:4) 彼が種をまく時

μετὰ τὸ ἐγερθῆναι με. (マタ 26:32) 私が復活した後

不定詞の格の変化は不定詞の主語たる代名詞に影響せず代名詞は何時も四格を取る。

(c) 時間距離等を示す為に Accusative を用いる。

1. 距離

ἀπεστάσθη ἀπ' αὐτῶν ὡσεὶ λίθου βολήν. (ルカ 22:41)

石を投げる程の距離を彼らから離れて立った。

τὸ δὲ πλοῖον ἤδη σταδίους πολλὰς ἀπὸ τῆς γῆς ἀπεῖχεν. (マタ 14:24)

舟は既に多くのスタディオスも陸から離れていた。

2. 時の継続

τί ὧδε ἐστήκατε ὅλην τὴν ἡμέραν; (マタ 20:6)

何故終日 (四格) ここに立って居るか。

τοσαῦτα ἔτη δουλεύω σοι (ルカ 15:29)

私は是れだけの年月をあなたに仕えて居った。

(尚 ヨハ 1:39、2:12、5:5、11:6、使徒 13:21 等)

3. 時の一点

ἐχθὲς ὥραν ἑβδόμην ἀφῆκεν αὐτὸν ὁ πυρετός (ヨハ 4:52)

昨日第七時に熱が彼を離れた。

此の種の場合 περί + Acc. の形を用いる事が多い。

第四 条件文 Conditional Sentence

§ 182. 条件文は Protasis (前提) と Apodosis (結論) とより成って居る。そして前提が (1) 事実であるか (2) 可能又は不確実であるか (3) 実現不可能な事であるか (4) 条件が充たされないかに由って次の四種の形が生ずる。

I 条件が事実である場合は前提に於て *ei*, *If* を Indicative と共に用い、結論は Indicative 又は Imperative を用いる。

例 *ei* υἱὸς εἶ τοῦ θεοῦ, εἰπέ… (マタ 4:3)

もし事実汝が神の子なら…に云え。

ei Ἀβραὰμ ἐξ ἔργων ἐδικαιώθη, ἔχει καύχημα, (ロマ 4:2)

もしアブラハムが行為に由って義とされたのならば (之を事実と仮定して言う)、誇るべきところがある。

尚此の種の例は多数あり、前提と結論に種々の Tense があることは勿論である。

ei ἐμὲ ἐδίωξαν, καὶ ὑμᾶς διώξουσιν. (ヨハ 15:20) 彼らが我を迫害したのだから君たちをも迫害するだろう (Aorist Future)

II 前提が単に可能であるか又は実現不確かである場合には前提たる条件節に *ἐάν*=*ei* ἄν を Subjunctive の動詞と共に、結論に Indicative 又は Imperative を用いる。

例 *ἐάν* ἔχητε πίστιν ὡς κόκκον σινάπεως, εἰρήνη τῷ ὄρει τούτῳ. (マタ 17:20) 若し君たちが辛子種のような信仰を持って居るなら (不確実な仮定) 此の山に…と云え。

ἐάν δὲ καὶ ἀθλή τις, οὐ στεφανοῦται ἐάν μὴ νομίμως ἀθλήσῃ, (II テモ 2:5) 人が競技に出るならばもし規則に従って争わなかったら冠を与えられない。

III 実現が全く深く不確実で単なる想像に過ぎない場合は条件文に *ei* と共に Optative の動詞を用い、帰結文はその場合場合による。

例 εἰ καὶ πάσχετε διὰ δικαιοσύνην, μακάριοι. (I ペテ 3:14)

もし義の故に苦しむならば幸福である。

οὓς ἔδει ἐπὶ σοῦ παρεῖναι καὶ κατηγορεῖν εἴ τι ἔχοιεν πρὸς ἐμέ (使徒 24:19) もし彼らが我に対して何か(責むべき点)を有って居るならば閣下の前に出て訴えるべきであった。

IV 条件が充されないものである場合は前提文も結文も Indicative を用い、前提文には εἰ を、結尾文には ἄν を用いる。

(a) Imperfect を ἄν と共に Apodosis に用いる時は現在の意味となる。

例 οὗτος εἰ ἦν προφήτης, ἐγίνωσκεν ἄν τις καὶ ποταπὴ ἢ γυνή. (ルカ 7:39) 此の人はもし預言者であったなら此の女が誰で何処から来たかを知って居るであろう。

εἰ γὰρ ἐπιστεύετε Μωϋσεῖ., ἐπιστεύτε ἄν ἐμοί (ヨハ 5:46)

もし君がモーセを信じたならば私をも信じたであろう。

(b) Aorist を ἄν と共に用いる場合、過去を指して居り、事実と反対である事を示す。時としては Pluperfect を用い同じ意味で一層強意的に用いられる。

例 εἰ ἠγαπᾶτέ με, ἐχάρητε ἄν. (ヨハ 14:28)

もし汝が私を愛したなら、おまえは喜んだであろう。

εἰ γὰρ ἐγνώσαν, οὐκ ἄν τὸν κύριον τῆς δόξης ἐσταύρωσαν. (I コリ 2:8)

もし彼らが知って居ったら栄光の主を十字架に釘けなかったであろう。

εἰ ἐγνώκειτέ με, καὶ τὸν πατέρα μου ἄν ᾔειπτε. (ヨハ 14:7)

もし君が私を知って居ったら私の父をも知って居ったであろう。

(完)

動詞の種類別変化表

動詞はその変化の形により、大体次表の如き種類に分類することが出来る。而して動詞の諸々の変化の基本を為すものは、Present, Future, Aorist, Perfect Active, Perfect Passive 及び Aorist Passive の六つであって、次表はその第一人称単数形である。これを恰も英独語の動詞の変化を go, went, gone とか gehen, ging, gegangen などと暗記する様に暗記すれば、他の変化が凡て明白となる。欠陥の部分は新約聖書に用例のないもの。(分)は分詞。(2)は 2nd Future 又は 2nd Aorist。

次表は動詞を次の十種に区別してある。

- I. Verbal Stem と Present Stem (§ 72., p.71) とが同一なるもの。
- II. 長母音又は Diphthong ει ευ を持つ Mute Stem で 2nd Aorist に於て短母音 ι, υ となるもの。
- III. Verbal Stem に τ を加えて Present Stem を造るもの。
- IV. κ, γ, χ に終る Verbal Stem が Present Stem に於て σ に変化するもの。
- V. Verbal Stem が δ, γ 又は γγ に終り Present Stem が ζω に変化するもの。
- VI. Verbal Stem が λ, μ, ν, ρ の Liquid に終るもの。
- VII. Verbal Stem に ν 又は αν を加えて Present Stem を形成するもの。
- VIII. Verbal Stem に σκ 又は ισκ を加えて Present Stem を形成するもの。
- IX. μι 動詞。
- X. 不完全動詞。

Present	意味	Future	Aorist	Perf. Act.	Perf. Pass.	Aor. Pass.
(1) Verbal Stem と Present Stem とが同一なるもの						
1. ἄγω	導く	ἄξω	ἤγαγον(2)(ἤξα)	—	—	ἤχθην
2. ἀκούω	聞く	ἀκούσω ἀκούσομαι	ἤκουσα	ἀκήκοα(2)	—	ἤκουσθην
3. ἀνοίγω	開く	ἀνοιξω (ἀνέφξα)(ἠνέφξα)	ἤνοιξα	ἀνέφγα(2)	—	ἠνοιχθην (ἀνεῶχθην)(ἠνεῶχθην)
4. ἄρχομαι	始める	ἄρξομαι	ἤρξάμην	—	—	—
5. βλέπω	見る	βλέψω	ἔβλεψα	—	—	—
6. βούλομαι	欲する	—	—	—	—	ἐβουλήθην(ἠβουλήθην)
7. γράφω	書く	γράψω	ἔγραψα	γέγραφα(2)	γέγραμμαι	ἐγράφη(2)
8. δέχομαι	受取る	δέξομαι	ἐδέξάμην	—	δέδεγμαι	—
9. διδάσκω	教える	διδάξω	ἐδίδαξα	—	—	ἐδιδάχθην
10. δύναμαι	能う	δυνήσομαι	—	—	—	ἠδυνήθην(ἐδυνήθην)
11. θέλω	欲する	θελήσω	ἠθέλησα	—	—	—
12. πείθω	説服する	πέισω	ἔπεισα	πέποιθα(2)	πέπεισμαι	ἐπέισθην
13. πέμπω	遣す	πέμψω	ἔπεμψα	(πέπομφα)	(πέπεμμαι)	ἐπέμφθην
14. πιστεύω	信ずる	πισεύσω	ἐπίστευσα	πεπίστευκα	πεπίστευμαι	ἐπιστεύθην
15. στρέφω	向き返す	στρέψω	ἔστρεψα	—	ἔστραμμαι	ἐστράφη(2)
16. τρέφω	養う	—	ἔθρεψα	—	τέθραμμαι	ἐτράφη(2)
17. ἀγαπάω	愛する	ἀγαπήσω	ἠγάπησα	ἠγάπηκα	—	—
18. ζάω	生きる	ζήσω ζήσομαι	ἔζησα	—	—	—
19. ποιέω*	為す/造る		ποιήσω	ἐποίησα	πεποίηκα	πεποίημαι
20. δέω	結ぶ/縛る	δήσω	ἔδησα	δέδεκα	δέδεμαι	ἐδέθην
21. δοκέω	思う	—	ἔδοξα	—	—	—
22. καλέω	呼ぶ	καλέσω	ἐκάληκα	κέκληκα	κέκλημαι	ἐκλήθην

* εω の動詞は概ね此の如く変化する。

Present	意味	Future	Aorist	Perf. Act.	Perf. Pass.	Aor. Pass.
23.	πληρόω 充たす	πληρώσω	ἐπλήρωσα	πεπλήρωκα	πεπλήρωμαι	ἐπληρώθην
24.	τελέω 終える	τελέσω	ἐτέλεσα	τετέλεκα	τετέλεσμαι	ἐτελέσθην

(II) 長母音又は Diphthong εἰ εὐ を持つ Mute Stem、2nd Aor. のみ ι, υ となるもの

25.	φεύγω 逃げる	φεύξομαι	ἔφυγον(2)	—	—	—
26.	καταλείπω 棄てる	καταλείψω	κατέλιπον(2)	—	—	κατελείφθην (κατέλειψα)

(III) Verbal Stem に τ を加えて Present Stem を作るもの

27.	ἀποκαλύπτω 啓示する	ἀποκαλύψω	ἀπεκάλυψα	—	—	ἀπεκαλύφθην
28.	ἐκκόπτω 切り捨てる	ἐκόψω	(ἐξέκοψα)	—	—	ἐξεκόπην(2)
29.	θάπτω 埋葬する	—	ἔθαψα	—	—	ἐτάφην(2)
30.	κρύπτω 隠す/隠れる	κρύψω	ἔκρυψα	κέκυφα(2)	κέκρυμμαι	ἐκρύφθην/ἐκρύβην(2)
31.	πίπτω 落ちる	πεσοῦμαι	ἔπεσα	πέπτωκα	—	—
			ἔπεσον(2)			
32.	ρίπτω 投げる	—	ἔρριψα	—	ἔρριμμαι	—
33.	τίκτω 生む	τέξομαι	ἔτεκον(2)	—	—	ἐτέχθην

(IV) κ, γ, χ に終わる Verbal Stem が Present Stem に於いて σσ に変化するもの

34.	κηρύσσω 宣べ伝える	κηρύξω	ἐκήρυξα	(κεκήρυχα)	(κεκήρυγμαί)	ἐκηρύχθην
35.	πράσσω 行ふ	πράξω	ἔπραξα	πέπραχα	πέπραγμαί	(ἐπράχθην)

(V) Verbal Stem が δ, γ 又は γγ に終わり Present が ζω に終わるもの

36.	βαπτίζω 洗礼する	βαπτίσω	ἐβάπτισα	—	βεβάπτισμαι	ἐβαπτίσθην
37.	ἐγγίζω 近づく	ἐγγίσω	ἤγγισα	ἤγγικα	—	—
38.	σώζω 救う	σώσω	ἔσωτα	σέσωκα	σέσωσμαι	ἐσώθην
39.	κράζω 叫ぶ	κράξω	ἔκραξα	(κέκραγα)	—	—

ζω 動詞は概ね 36-39 の如く変化す Future は ζω が σω となり γω は ξω となる。

(VI) Verbal Stem が λ, μ, ν, ρ の Liquid に終わるもの

40.	ἀγγέλλω 宣べる	ἀγγελῶ	ἤγγειλα	(ἤγγελκα)	(ἤγγελμαι)	(ἤγγέλθην)
41.	βάλλω 投げる	βαλῶ	ἔβαλν(2)	βέβληκα	βέβλημαι	ἐβλήθην
42.	στέλλω 遣す	στελῶ	ἔστειλα	ἔσταλκα	ἔσταλμαι	ἐστάλην(2)

40-42 の如く λ に終わる Verbal Stem は Present に於いて λλ となる。

Present 意味	Future	Aorist	Perf. Act.	Perf. Pass.	Aor. Pass.
43. αἶρω 取り去る	ἀρῶ	ἔρα	ἔρακα	ἔραμαι	ἔρηθη
44. κερδαίνω 得る	κερδήσω (κερδανῶ)	ἐκέρδησα (ἐκέρδανα)	—	—	—
45. φαίνω 現す	φανοῦμαι φανῶ	ἔφην(2) ἐφάνην(2)	(πέφραγκα) (πέφρηνα)	(πέφρασμαι)	ἐφάνθη
46. χαίρω 喜ぶ	χαρήσομαι(2)	—	—	—	ἐχάρην(2)
47. ἀποκτείνω 殺す	ἀποκτεινῶ	ἀπέκτεινα	—	—	ἀπεκτάνην
48. γίνομαι 成る	γενήσομαι	ἐγενόμην(2)	γένονα(2)	γεγένημαι	ἐγενήθη
49. ἐγείρω 起す	ἐγερῶ	ἤγειρα	ἐγήγερα	(ἐγήγερα)	ἠγέρθη
50. κρίνω 審く	κρινῶ	ἔκρινα	κέκρικα	κέκριμαι	ἐκρίθη
51. σπείρω 蒔く	(σπερῶ)	ἔσπειρα	—	ἐσπαρμαι	ἐσπαρήν(2)
52. φθείρω 腐らす	φθερῶ	ἔφθειρα	—	—	ἐφθάρην(2)

43-52 の Verbal Stem の母音が Present に於て延長す。iv の Present Stem の場合は ι は長音。

(VII) Verbal Stem に ν, α ν を加えて Present Stem を形成するもの

53. ἁμαρτάνω 罪を犯す	ἁμαρτήσω	ἠμάρτησα ἠμαρτον(2)	ἠμάρτηκα	—	—
54. αὐξάνω 成長する	αὐξήσω	ἠύξησα	—	—	ἠύξηθη
55. βαίνω 行く	βήσομαι	ἔβην(2)	βέβηκα	—	—
56. πίνω 飲む	πίομαι	ἔπιον(2)	πέπωκα	—	—
57. λαμβάνω 取る	λήψομαι	ἔλαβον(2)	εἴληφα(2)	εἴλημμαι	(ἐλήφθη)

Perfect に於て λε のかわりに ει を附加す。

58. μανθάνω 学ぶ	(μαθήσομαι)	ἔμαθον(2)	μεμάθηκα	—	—
59. τυγχάνω 起る	(τεύξομαι)	ἔτυχον(2)	τέτευχα(2) 又は τέτυχε, τετύκηκα	—	τέτυχα

(VIII) Verbal Stem に σ κ 又は ι σ κ を加えて Present Stem を形成するもの

60. ἀποθνήσκω 死ぬ	ἀποθανοῦμαι	ἀπέθανον(2)	—	—	—
61. ἀρέσκω 喜ばす	ἀρέσω	ἤρεσα	—	—	—
62. γινώσκω 知る	γνώσομαι	ἔγνων(2)	ἔγνωκα	ἔγνωσμαι	ἐγνώσθη
63. εὐρίσκω 見出す	εὐρήσω	εὗρησα εὕρον(2)	εὗρηκα	—	εὐρέθη
64. μμνήσκω 思い出す	—	—	—	μémνημαι	ἐμνήσθη

Present 意味 Future Aorist Perf. Act. Perf. Pass. Aor. Pass.

(IX) μ ι 動詞

65. ἀπόλλυμι 亡ぼす	ἀπολέσω ἀπολῶ	ἀπόλεσα ἀπωλόμην(2) ἀπόλωλα(2)	(ἀπολώλεκα) —	— —	— —
	*ἀπόλλυμι の変化と見ることを得。				
66. ἀφήμι 赦す	ἀφήσω	ἀφήκα	—	ἀφείπονται (3pers.pl)	ἀφέθην
67. δείκνυμι 示す	δείξω	ἔδειξα	—	—	ἐδείχθην
68. ὄμνυμι 誓う	(ὄμοῦμαι)	ὄμοσα	(ὄμώμοκα)	—	—
69. δίδωμι 与える	δώσω	ἔδωκα	δέδωκα	δέδομαι	ἐδόθην
70. ζώννυμι 帯する	ζώσω	ἔζωσα	—	ἔζωσμένος (分)	—
71. ἵστημι 立たせる	στήσω	ἔστησα ἔστην(2) § 152 参照	ἔστηκα	(ἔσταμαι)	ἐστάθην
72. ῥήγνυμι 破る	ρήξω	ἔρρηξα	—	—	—
73. τίθημι 置く	θήσω	ἔθηκα	τέθεικα	τέθειμαι	ἐτέθην
		ἔθέμην(2)			
74. εἰμί ある	ἔσομαι	(Imp. ἦν)	—	—	—
75. φημί 言う	—	(Imp. ἔφην)	—	—	—

(X) 不完全動詞 変化の各部が同一語根より来らざるもの

76. αἰρέω 取る	αἰρήσω ἔλω	εἴλον(2) εἰλόμην(2)	ἤρηκα	(ἤρημαι)	ἠρέθην
77. ἔρχομαι 来る	ἐλεύσομαι	ἦλθον(2)	ἐλήλυθα(2)	—	—
78. ἐσθίω 食う	φάγομαι	ἔφαγον(2)	—	—	—
79. ἔχω 持つ	ἔξω	ἔσχον(2)	ἔσχηκα (Imp. εἶχον)	—	—
80. λέγω 言う	λέξω	(ἔλεξα)	—	(λέλεγμαι)	(ἐλέχθην)
	ἔρω	εἶπον(2)	εἶρηκα	εἶρημαι	ἐρρέθην
81. ὁράω 見る	ὄψομαι	εἶδον(2)	ἑώρακα ἑώρακα	—	ὠφθην
82. πάσχω 苦しむ	—	ἔπαθον(2)	πέπονθα(2)	—	—
83. φέρω 運ぶ	οἴσω	ἤνεγκον(2) ἤνεγκα	ἐνήνοχα(2)	—	ἠνέχθην

(索引) 動詞変化表

17. αγαπάω	41. βάλλω	28. ἐκκόπτω	57. λαμβάνω	51. σπείρω
40. ἀγγέλλω	36. βαπτίζω	77. ἔρχομαι	80. λέγω	42. στέλλω
1. ἄγω	5. βλέπω	78. ἐσθίω	58. μανθάνω	15. στρέφω
76. αἰρέω	6. βούλομαι	63. εὐρίσκω	64. μιμνήσκω	38. σάζω
43. αἶρω	48. γίνομαι	79. ἔχω	68. ὄμνυμι	24. τελέω
2. ἀκούω	62. γινώσκω	18. ζάω	81. ὁράω	73. τίθημι
53. ἀμαρτάνω	7. γράφω	70. ζώννυμι	82. πάσχω	33. τίκτω
3. ἀνοίγω	67. δαίκνυμι	29. θάπτω	12. πείθω	16. τρέφω
60. ἀποθνήσκω	8. δέχομαι	11. θέλω	13. πέμπω	59. τυγχάνω
27. ἀποκαλύπτω	20. δέω	71. ἴστημι	56. πίνω	45. φαίνω
47. ἀποκτείνω	9. διδάσκω	22. καλέω	31. πίπτω	83. φέρω
65. ἀπολλύω	69. δίδωμι	26. καταλείπω	14. πιστεύω	25. φεύγω
61. ἀρέσκω	21. δοκέω	44. κερδαίνω	23. πληρόω	75. φημί
4. ἄρχομαι	10. δύναμαι	34. κηρύσσω	19. ποιέω	52. φθείρω
54. αὐξάνω	37. ἐγγίζω	39. κράζω	35. πράσσω	46. χαίρω
66. ἀφήμι	49. ἐγείρω	50. κρίνω	72. ῥήγνυμι	
55. βαίνω	74. εἰμί	30. κρύπτω	32. ῥίπτω	

(数字は 191 - 198 頁の変化表の動詞の番号)

ω - 動 詞 変 化 表 (I)

能動態

Active Voice

		現 在	未 来	不定過去	完了現在	備 考
直 説 法	第 一 次 時 称	λύ-ω λύ-εις λύ-ει λύ-ο-μεν λύ-ε-τε λύ-ουσι(v)	λύ-σω λύ-σεις λύ-σει λύ-σοι-μεν λύ-σε-τε λύ-σουσι(v)		λέ-λυ-κα λέ-λυ-κας λέ-λυ-κε λέ-λυ-κα-μεν λε-λύ-κα-τε λε-λύ-κα-σι(v)	現在と未来とは類似の人称語尾を有するけれども完了現在には之と異なり、不定過去の語尾に類似する。
	第 二 次 時 称 <small>(未完了過去)</small>	ἔ-λυ-ον ἔ-λυ-ες ἔ-λυ-ε ἔ-λύ-ο-μεν ἔ-λύ-ε-τε ἔ-λυ-ον		ἔ-λυ-σα ἔ-λυ-σας ἔ-λυ-σε ἔ-λύ-σα-μεν ἔ-λύ-σα-τε ἔ-λυ-σαν	ἔ-λε-λύ-κει-ν ἔ-λε-λύ-κει-ς ἔ-λε-λύ-κει ἔ-λε-λύ-κει-μεν ἔ-λε-λύ-κει-τε ἔ-λε-λύ-κει-σ-αν	1.第二次時称の特徴は加張 Augment ἐを有する事である。尚 \$22 参照。 2.完了過去に於てはἐを省略する事あり。 3.第二不定過去の語尾は未完了過去の語尾に等し(此の表には之を略す)。
接 続 法		λύ-ω λύ-ης λύ-η λύ-ω-μεν λύ-η-τε λύ-ω-σι(v)		λύ-σω λύ-σης λύ-ση λύ-σω-μεν λύ-ση-τε λύ-σω-σι(v)	λε-λύ-κω λε-λύ-κης λε-λύ-κη λε-λύ-κω-μεν λε-λύ-κη-τε λε-λύ-κω-σι(v)	時称の特徴を示すσ, κ等の子音を除けば語尾は皆同一であり記憶に容易である。
祈 願 法		λύ-οι-μι λύ-οις λύ-οι λύ-οι-μεν λύ-οι-τε λύ-οι-εν	λύ-σοι-μι λύ-σοις λύ-σοι λύ-σοι-μεν λύ-σοι-τε λύ-σοι-ε-ν	λύ-σαι-μι λύ-σαις λύ-σαι λύ-σαι-μεν λύ-σαι-τε λύ-σαιε-ν	λε-λύ-κοι-μι λε-λύ-κοις λε-λύ-κοι λε-λύ-κοι-μεν λε-λύ-κοι-τε λε-λύ-κοι-εν	οι, σοι, σοι, κοιの四種の変化を学習すれば其他の語尾は皆同一である。
命 令 法		λῶ-ε λυ-έ-τω λύ-ε-τε λυ-ό-ντων		λῶ-σον λυ-σάτω λύ-σα-τε λυ-σά-ντων	λέ-λυ-κε λε-λυ-κέτω λε-λυ-κετε λε-λυ-κόντων	λυόντωνは又 λυέσσαν, λυσάντωνは又 λυσάσσαν, λελυόντωνは又 λελυέσσαν なる形を有す。
不 定 詞		λύ-ειν	λύ-σειν	λῶ-σαι	λε-λυ-κέ-ναι	λῶσαιは祈願法不定過去第三人称単数との間にアクセントの差あるのみ
分 詞		男 λύ-ων, 単 -οντος etc. 女 λύ-ουσα, -ούσης etc. 中 λῶ-ον, -οντος etc. 男 λύ-οντες, 複 -όν-των etc. 女 λύ-ουσαι, -ουσῶν etc. 中 λύ-οντα, -όν-των etc.	男 λύ-σων, 単 -σοντος etc. 女 λύ-σουσα, -σούσης etc. 中 λῶ-σον, -σοντος etc. 男 λύ-σοντες, 複 -σόντων etc. 女 λύ-σουσαι, -σουσῶν etc. 中 λύ-σοντα, -σόντων etc.	男 λύ-σας, 単 -σαντος etc. 女 λύ-σασα, -σάσης etc. 中 λῶ-σαν, -σαντος etc. 男 λύ-σαντες, 複 -σάντων etc. 女 λύ-σασαι, -σασῶν etc. 中 λύ-σαντα, -σάντων etc.	男 λε-λυ-κός, 単 -κότος etc. 女 λε-λυ-κυῖα, -κυῖας etc. 中 λε-λυ-κός, -κότος etc. 男 λε-λυ-κότες, 複 -κότων etc. 女 λε-λυ-κυῖαι, -κυῖῶν etc. 中 λε-λυ-κότα, -κότων etc.	分詞は性数格によりて変化する。多く πᾶςの如き変化をなす。
		現在形の変化は凡ての他の変化の基礎故之を充分に習得しなければならぬ。	1. 現在形の人称語尾にσを加えたるものが未来形の人称語尾となる。故に現在形を習得すれば未来形は自ら習得が出来る。 2. 接続法には未来形なし。	不定過去の特徴は何れも-σαを人称語尾に加うる点に存す。	完了形の特徴は語頭反覆 Reduplication (語頭の子音にεを加えて之を反覆する事)及びκを加うる点に存す。この二つの特徴よりそれが完了形である事を知る。尚、第二完了現在 2nd Perfect はκを含まず。	

ω - 動 詞 変 化 表 (II)

中間態

Middle Voice

		現在	未来	不定過去	完了現在	備考
直説法	第一次時称	λύ-ο-μαι λύ-η(ει) λύ-ε-ται λυ-ό-μεθα λύ-ε-σθε λύ-ο-νται	λύ-σο-μαι λύ-ση(σει) λύ-σε-ται λυ-ό-μεθα λύ-σε-σθε λύ-σο-νται		λέ-λυ-μαι λέ-λυ-σαι λέ-λυ-ται λε-λύ-μεθα λέ-λυ-σθε λέ-λυ-νται	1.人称語尾は凡て μαι, σαι, ται, μεθα, σθε, νται に一致す。 2.現在形未來形第二人称単数は λύ-ε-σαι, λύ-ε-σαι が λύ-η, λύ-ση と異なる。 3.ο, ε, ε, ο, ε, ο は結合母音なり。
	第二次時称	ἐ-λυ-ό-μην ἐ-λύ-ου(εσο) ἐ-λύ-ε-το ἐ-λυ-ό-μεθα ἐ-λύ-ε-σθε ἐ-λύ-ο-ντο		ἐ-λυ-σά-μην ἐ-λύ-σω(σασο) ἐ-λύ-σα-το ἐ-λυ-σά-μεθα ἐ-λύ-σα-σθε ἐ-λύ-σα-ντο	ἐ-λε-λύ-μην ἐ-λέ-λυ-σο ἐ-λέ-λυ-το ἐ-λε-λύ-μεθα ἐ-λέ-λυ-σθε ἐ-λέ-λυ-ντο	1.人称語尾は凡て μην, σο, το, μεθα, σθε, ντο に一致する。之に時称による必要の変化を与ふるを以て足る。 2.第二人称単数における不規則の如くに見ゆる変化は母音の取除。
接続法		λύ-ω-μαι λύ-η λύ-η-ται λυ-ώ-μεθα λύ-η-σθε λύ-ω-νται		λύ-σω-μαι λύ-ση λύ-ση-ται λυ-σῶ-μεθα λύ-ση-σθε λύ-σω-νται	λε-λυ-μένος ᾧ λε-λυ-μένος ἧς λε-λυ-μένος ἧ λε-λυ-μένοι ᾧμεν λε-λυ-μένοι ἦτε λε-λυ-μένοι ᾧσιν	1.第一次時称と同じ人称語尾を有す。 2.第一次時称の結合母音を延長したものが結合母音となる。 3.完了形は分詞に εἰμι の接続法を添加せるもの。
祈願法		λυ-οί-μην λύ-οι-ο λύ-οι-το λυ-οί-μεθα λύ-οι-σθε λύ-οι-ντο	λυ-σοί-μην λύ-σοι-ο λύ-σοι-το λυ-σοί-μεθα λύ-σοι-σθε λύ-σοι-ντο	λυ-σαί-μην λύ-σαι-ο λύ-σαι-το λυ-σαί-μεθα λύ-σαι-σθε λύ-σαι-ντο	λε-λυ-μένος εἶην λε-λυ-μένος εἶης λε-λυ-μένος εἶη λε-λυ-μένοι εἶημεν λε-λυ-μένοι εἶητε λε-λυ-μένοι εἶησαν	1.第二次時称と同じ人称語尾を有す。 2.第一次時称の結合母音に必要な変化を与えて造る。 3.完了形は分詞に εἰμι の祈願法を添加せるもの。
命令法		λύ-ου λυ-έ-σθω λύ-ε-σθε λυ-έ-σθων		λύ-σαι λυ-σά-σθω λύ-σα-σθων λυ-σά-σθων	λέ-λυ-σο λε-λύ-σθω λέ-λυ-σθε λε-λύ-σθων	1.σαι, σθω, σθε, σθων が人称語尾となる。但し σο は現在および不定過去二、単において異なる。 2.σθων は σθουσαν の形を取ることあり。 3.λύσαι は能動態不定過去不定詞と同型。
不定詞		λύ-ε-σθαι	λύ-σε-σθαι	λύ-σα-σθαι	λε-λύ-σθαι	中間体の不定詞は σθαι なる人称語尾を取る。
分詞		男 λυ-ό-μενος, -ου etc. 女 λυ-ο-μένη, -νης etc. 中 λυ-ό-μενον, -ου etc. 男 λυ-ό-μενοι, -ων etc. 女 λυ-ό-μεναι, -ων etc. 中 λυ-ό-μενα, -ων etc.	男 λυ-σό-μενος, -ου etc. 女 λυ-σο-μένη, -νης etc. 中 λυ-σό-μενον, -ου etc. 男 λυ-σό-μενοι, -ων etc. 女 λυ-σό-μεναι, -ων etc. 中 λυ-σό-μενα, -ων etc.	男 λυ-σά-μενος, -ου etc. 女 λυ-σα-μένη, -νης etc. 中 λυ-σά-μενον, -ου etc. 男 λυ-σά-μενοι, -ων etc. 女 λυ-σά-μεναι, -ων etc. 中 λυ-σά-μενα, -ων etc.	男 λε-λυ-μένος, -ου etc. 女 λε-λυ-μένη, -νης etc. 中 λε-λυ-μένον, -ου etc. 男 λε-λυ-μένοι, -ων etc. 女 λε-λυ-μέναι, -ων etc. 中 λε-λυ-μένα, -ων etc.	1. μενος, μόνη, μενον を基調とする変化で之に各時称の特徴たる変化を与えれば異なる時称の分詞を得。 2. -μένος, -μένον は完了形に於いてのみ最後に第二音節にアクセントを取る。
		現在形は凡ての中間態の変化の基礎となる事能動態の場合と同じ。	1. σ が未来形の人称語尾の特徴なる事能動態に同じ。 2. 接続法に未来形なし。	σα がこの時称の特徴たる事は能動態の場合と同じ。	語頭重複が此の時称の特徴をなす事能動態の場合に同じ。	

ω - 動 詞 変 化 表 (III)

受動態

Passive Voice

		現 在	未 来	不定過去	完了現在	備 考
直 説 法	第 一 次 時 称	中 間 態 と 全 く 同 一 の 変 化 を な す	λυ-θή-σο-μαι λυ-θή-ση λυ-θή-σε-ται λυ-θή-σό-μεθα λυ-θή-σε-σθηε λυ-θή-σο-νται		中 間 態 と 全 く 同 一 の 変 化 を な す	μαι, σαι, ται, μεθα, σθε, νται の語尾は 一貫して居る。
	第 二 次 時 称			ἐ-λύ-θη-ν ἐ-λύ-θη-ς ἐ-λύ-θη ἐ-λύ-θη-μεν ἐ-λύ-θη-τε ἐ-λύ-θη-σαν		不定過去に於て 人称語尾は直説 法完了過去と同 一の例外的形を 取る。
接 続 法			λυ-θῶ(θή-ω) λυ-θής λυ-θήη λυ-θῶ-μεν λυ-θή-τε λυ-θῶ-σιν	不定過去に於て は能動態と同一 の人称語尾を取 る。其他は中間態 と同一なり。θῶ, θής etc はθή-ω, θή -ης etc の合約なり。		
祈 願 法	λυ-θη-σοι-μην λυ-θή-σοι-ο λυ-θή-σοι-το λυ-θη-σοι-μεθα λυ-θή-σοι-σθηε λυ-θή-σοι-ντο		λυ-θειη-ν λυ-θειη-ς λυ-θειη λυ-θειη-μεν λυ-θειη-τε λυ-θειη-σαν	不定過去に於て εἰμι の祈願法と同 一の人称語尾を 取る事に注意す べし。		
命 令 法			λύ-θη-τι λυ-θή-τω λύ-θη-τε λυ-θέ-ντων	不定過去の命令 法は特別の形を 取る。λυ-θέντων は 又 λυ-θή-τωσαν と も変化する。		
不 定 詞	λυ-θή-σε-σθαι		λυ-θη-ναι	不定過去の不定 詞の語尾は能動 態の完了現在不 定詞と同じく νάι の語尾を取る。		
分 詞	男 λυ-θη-σό-μενος, -ου 単女 λυ-θη-σο-μένη, -ης 中 λυ-θη-σό-μενον, -ου 男 λυ-θη-σό-μενοι, -ων 複女 λυ-θη-σό-μεναι, -ων 中 λυ-θη-σό-μενα, -ων		男 λυ-θείς, -θεντός etc 単女 λυ-θείσα, -θείσης etc 中 λυ-θέν, -θέντος etc 男 λυ-θέντες, -θέντων etc 複女 λυ-θείσαι, -θεισῶν etc 中 λυ-θέντα, -θέντων etc	未来と不定過去 に於てのみ特徴 ある変化をなす。		
	受動相と中間態とは現在形(及び完了形)に於て同一であるから、この二者の区別は前後の関係によりて定められなければならないが、時々困難が生ずる。	1.受動態特有の変化は未来と不定過去に於て之を見よ。 2.受動態の特徴は-θη-である。この特徴は未来形と不定過去にのみ現れる。	不定過去に於て受動態の特徴たる-θη-が支配し、不定過去の特徴たる-σα-は姿を現さない。	現在形欄の注意を見よ。		

-μι 動詞 変化表 (I)

現在及び未完了過去

		能動態			中間態及び受動態		
		根 δο-	根 θε-	根 στα	δίδωμι	τίθημι	ἵστημι
直説法	現在	δί-δω-μι δί-δω-ς δί-δω-σι δί-δο-μεν δί-δο-τε δί-δό-ασι	τί-θη-μι τί-θη-ς τί-θη-σι τί-θη-μεν τί-θη-τε τι-θέ-ασι	ἵ-στη-μι ἵ-στη-ς ἵ-στη-σι ἵ-στα-μεν ἵ-στα-τε ἵ-στᾶ-σι	δί-δο-μαι δί-δο-σαι δί-δο-ται δι-δό-μεθα δί-δο-σθε δί-δο-νται	τί-θε-μαι τί-θε-σαι τί-θε-ται τι-θέ-μεθα τί-θε-σθε τί-θε-νται	ἵ-στα-μαι ἵ-στα-σαι ἵ-στα-ται ἱ-στά-μεθα ἵ-στα-σθε ἵ-στα-νται
	未完了過去	ἐ-δί-δουν ἐ-δί-δους ἐ-δί-δου ἐ-δί-δο-μεν ἐ-δί-δο-τε ἐ-δί-δο-σαν	ἐ-τί-θη-ν ἐ-τί-θης/ἐτίθεις ἐ-τί-θη/ἐτίθει ἐ-τί-θε-μεν ἐ-τί-θε-τε ἐ-τί-θε-σαν	ἵ-στη-ν ἵ-στη-ς ἵ-στη ἵ-στα-μεν ἵ-στα-τε ἵ-στα-σαν	ἐ-δί-δό-μην ἐ-δί-δο-σο ἐ-δί-δο-το ἐ-δί-δό-μεθα ἐ-δί-δο-σθε ἐ-δί-δο-ντο	ἐ-τι-θέ-μην ἐ-τί-θε-σο ἐ-τί-θε-το ἐ-τι-θέ-μεθα ἐ-τί-θε-σθε ἐ-τί-θέντο	ἱ-στά-μην ἵ-στα-σο ἵ-στα-το ἱ-στά-μεθα ἵ-στα-σθε ἵ-στα-ντο
接続法		δί-δῶ δι-δῶ-ς δι-δῶ δι-δῶ-μεν δι-δῶ-τε δι-δῶ-σι(v)	τι-θῶ τι-θῆς τι-θῆ τι-θῶ-μεν τι-θῆ-τε τι-θῶ-σι(v)	ἱ-στῶ ἱ-στῆς ἱ-στῆ ἱ-στῶ-μεν ἱ-στῆ-τε ἱ-στῶ-σι(v)	δί-δῶ-μαι δι-δῶ δι-δῶ-ται δι-δῶ-μεθα δι-δῶ-σθε δι-δῶ-νται	τι-θῶ-μαι τι-θῆ τι-θῆ-ται τι-θῶ-μεθα τι-θῆ-σθε τι-θῶ-νται	ἱ-στῶ-μαι ἱ-στῆ ἱ-στῆ-ται ἱ-στῶ-μεθα ἱ-στῆ-σθε ἱ-στῶ-νται
	祈願法	δι-δοίη-ν δι-δοίη-ς δι-δοίη δι-δοίη-μεν δι-δοίη-τε δι-δοίη-εν	τι-θειή-ν τι-θειή-ς τι-θειή τι-θειή-μεν τι-θειή-τε τι-θειή-εν	ἱ-σταίη-ν ἱ-σταίη-ς ἱ-σταίη ἱ-σταίη-μεν ἱ-σταίη-τε ἱ-σταίη-εν	δι-δοί-μην δι-δοί-ο δι-δοίτο δι-δοί-μεθα δι-δοί-σθε δι-δοί-ντο	τι-θειή-μην τι-θειή-ο τι-θειή-το τι-θειή-μεθα τι-θειή-σθε τι-θειή-ντο	ἱ-σταί-μην ἱ-σταί-ο ἱ-σταί-το ἱ-σταί-μεθα ἱ-σταί-σθε ἱ-σταί-ντο
命令法	2	δί-δου	τί-θει	ἵ-στη	δί-δο-σο	τί-θε-σο	ἵ-στα-σο
	3	δί-δόθτω	τι-θέ-τω	ἱ-στά-τω	δι-δό-σθω	τι-θέ-σθω	ἱ-στά-σθω
不定詞	2	δί-δο-τε	τί-θε-τε	ἵ-στα-τε	δί-δο-σθε	τί-θε-σθε	ἵ-στα-σθε
	3	δι-δό-ντων①	τι-θέ-ντων①	ἱ-στά-ντων①	δι-δό-σθων②	τι-θέ-σθων②	ἱ-στά-σθων②
分詞	男	δί-δούς	τι-θείς	ἱ-στάς	δι-δό-μενος	τι-θέ-μενος	ἱ-στά-μενος
	女中	δι-δοῦσα δι-δόν	τι-θείσα τι-θέν	ἱ-στάσα ἱ-στάν	δι-δό-μένη δι-δό-μενον	τι-θε-μένη τι-θέ-μενον	ἱ-στα-μένη ἱ-στά-μενον

註 ① ντωνの代りに τωσαν、② σθωνの代りに σθωσαν を用うることあり。

注意：-ω 動詞の変化と異なる点は

- (1) δι-τι- (θι を弱めたもの) ἱ- (σι の σ が脱落したもの) 等の特殊の Reduplication があること。
- (2) Ind. Act. Present 単数において ο, ε, α が延長して ω, η, η となること。
- (3) 結合母音 ο, ε を欠くこと。
- (4) Ind. Act. Present Singular の語尾は -μῖ, -ς, -σι となること。
- (5) Pres. 及び Impf. Ind. において第三人称複数の語尾が異なる。その他は母音の収縮があるのみで、ほぼ ω 動詞と同一である。尚-νυμι 又は-νυμι に終る動詞はほぼこれと同一の変化であるが、場合により-ω 動詞の如くにも変化し双方併用す。但し 2nd. Aorist を欠く。

-μι 動詞 変化表 (II)

第二不定過去

		能動態			中間態		ἵσθημι は 2nd Aorist を欠き 1st Aorist のみ用いられる。
		δο-	θε-	στα-	δίδομι	τίθημι	
直説法		(ἐ-δω-κα) ^① (ἐ-δω-κα-ς) (ἐ-δω-κε) ἐ-δο-μεν ἐ-δο-τε ἐ-δο-σαν	(ἐ-θη-κα) ^① (ἐ-θη-κα-ς) (ἐ-θη-κε) ἐ-θε-μεν ἐ-θε-τε ἐ-θε-σαν	ἐ-στη-ν ἐ-στη-ς (ἐ-θη-κε) ἐ-στη-μεν ἐ-στη-τε ἐ-στη-σαν	ἐ-δδ-μην ἐ-δδο ἐ-δο-το ἐ-δδ-μεθα ἐ-δδο-σθε ἐ-δδο-ντο	ἐ-θέ-μην ἐ-θου ἐ-θε-το ἐ-θέ-μεθα ἐ-θε-σθε ἐ-θε-ντο	
	接続法	δῶ δῶς δῶ δῶ-μεν δῶ-τε δῶ-σι(v)	θῶ θῶς θῶ θῶ-μεν θῶ-τε θῶ-σι(v)	στῶ στῆς στῆ στῶ-μεν στῆ-τε στῶ-σι(v)	δῶ-μαι δῶ δῶ-ται δῶ-μεθα δῶ-σθε δῶ-νται	θῶ-μαι θῆ θῆ-ται θῶ-μεθα θῆ-σθε θῶ-νται	
祈願法		δοίη-ν δοίη-ς δοίη δοίη-μεν ^② δοίη-τε δοίη-σαν	θείη-ν θείη-ς θείη θείη-μεν ^② θείη-τε θείη-σαν	σταίη-ν σταίη-ς σταίη σταίη-μεν ^② σταίη-τε σταίη-σαν	δοί-μην δοί-ο δοί-το δοί-μεθα δοί-σθε δοί-ντο	θεί-μην θεί-ο θεί-το θεί-μεθα θεί-σθε θεί-ντο	
	命令法	δός-ς δός-τω δός-τε δός-τωσαν ^③	θές-ς θές-τω θές-τε θές-τωσαν ^③	στή-θι στή-τω στή-τε στή-τωσαν ^③	δός δός-θω δός-σθε δός-σθωσαν ^③	θός θές-θω θές-σθε θές-σθωσαν ^③	
不定詞		δοῦναι	θεῖναι	στήναι	δόςθαι	θέςθαι	
分詞	M	δούς(-όντος)	θείς(-έντος)	στάς(-άντος)	δός-μενος(νου)	θές-μενος(νου)	
	F	δούσα(ούσης)	θεῖσα(-είσης)	στάσα(-άσης)	δός-μένη(νης)	θές-μένη(νης)	
	N	δόν(-όντος)	θέν(-έντος)	σάν(-άντος)	δός-μενον(νου)	θές-μενον(νου)	

註 ① 2nd Aor. Ind.の単数において δίδωμι と τίθημι とは 1st Aor.の形を用う。②又は δοῖ-μεν, δοῖ-τε, δοῖ-εν; θεῖ-μεν, θεῖ-τε, θεῖ-εν; σταῖ-εν, σταῖ-τε, σταῖ-εν と変化す。③-τωσαν の代りに-ντων、σθωσαν の代りに-σθωνを用うることあり。

注意：二三の特例を除き大体において Present Tense よりその Reduplication 即ち δι-, τι-, i-を除きたるものと同一なり。

その他の Tenses

直説法

	能動態			中間態及び受動態		
	動詞	動詞	動詞	動詞	動詞	動詞
未来	δώσω	θήσω	στήσω	δοθήσομαι	τεθήσομαι	σταθήσομαι
I 不定過去	ἔδωκα	ἔθηκα	ἔστησα	ἐδόθην	ἐτέθην	ἐστάθην
完了現在	δέδωκα	τέθεικα	ἔστηκα	δέδομαι	τέθειμαι	ἔσταμαι
完了過去	δεδώκειν	τεθεικείν	ἔστηκειν*	δεδόμην	τεθείμην	ἔστάμην

その他の Mood においても大体ω 動詞の如くに変化す。* (又は εἰστήκειν)

主 要 単 語 集

五十回以上用いらるる 動 詞

ἀγαπάω 愛す
ἄγω 導く
αἶρω 持上げる、負う
αἰτέω 求める
ἀκολουθέω 従う
ἀκούω 聞く
ἀναβαίνω 昇る、上る
ἀν-ίστημι 立上る、上げる
ἀνοίγω 開く
ἀπ-έρχομαι 去り行く
ἀπο-θνήσκω 死ぬ
ἀπο-κρίνομαι 答える
ἀπο-κτείνω 殺す
ἀπ-όλλυμι 亡ぶる、死ぬ
ἀπο-λύω 解放す
ἀπο-στέλλω 派遣す
ἄρχομαι 始める
ἀφ-ίημι 赦す、放す
βάλλω 投げる
βαπτίζω 洗礼す、浸す
βλέπω 見る
γεννάω 生む
γίνομαι 成る
γινώσκω 知る
γράφω 書く
δεῖ …ねばならぬ、筈
δέχομαι 受取る

διδάσκω 教える
δίδωμι 与える
δοκέω 見える、思われる
δοξάζω 栄光を帰す
δύναμαι 能う
ἐγείρω 起す、甦らす
εἶδον 見る
εἰμί ある
εἶπον 云う
εἰς-έρχομαι 入る
ἐκ-βάλλω 投出す
ἐξ-έρχομαι 出る
ἐπ-ερωτάω 問う
ἐρῶ 云う
ἐρχομαι 来る
ἐρωτάω 問う、求める
ἐσθίω 食う
εὐ-αγγελίζω 福音を伝える
εὐρίσκω 見出す
ἔχω 持つ
ζάω 生きる
ζητέω 熱心に求める
θέλω 欲する
θεωρέω 見る
ἵστημι 立つ、立てる
κάθ-ημαι 座る
καλέω 呼ぶ
κατα-βαίνω 下る
κηρύσσω 宣伝える
κράζω 叫ぶ
κρίνω 審く

λαλέω 語る
λαμβάνω 取る、受ける
λέγω 言う、語る
μαρτυρέω 証する
μέλλω 将に…せんとす
μένω 留る、残る
ὄψομαι 見る
ὄρώ 見る
παρα-δίδωμι 付す、裏切る
παρα-καλέω 薦める、慰める
παρα-λαμβάνω 受ける
πείθω 説服する
πέμπω 遣す、送る
περι-πατέω 歩む
πίνω 飲む
πίπτω 落ちる
πιστεύω 信ずる
πληρόω 充す、充つる
ποιέω 為す、造る
πορεύομαι 進む、行く
προσ-έρχομαι 近づく
προσ-εύχομαι 祈る
προσ-κυνέω 躓く
προσ-φέρω ささげる
σπείρω 種をまく
συν-άγω 集める
σώζω 救う
τηρέω 守る
τίθημι 置く
ὕπαγω 行く、去る
ὕπαρχω 持つ、ある
φάγομαι 食う (未来)
φανερόω 顕わす
φέρω 持って来る

φημί 云う
φοβέομαι 恐れる
χαίρω 喜ぶ

十回及至五十回
用いられる動詞

ἀγαλλιάω 大いに喜ぶ
ἀγιάζω 聖める
ἀγνοέω 知らない
ἀγοράζω 買う
ἀδικέω 害する
ἀθετέω 拒む、捨てる
ἀμαρτάνω 罪を犯す
ἀνα-βλέπω 見上げる、視力を得る
ἀν-αγγέλλω 宣言する
ἀνα-γινώσκω 読む
ἀν-άγω 導き来る、出帆する
ἀναιρέω 殺す
ἀνά-κειμαι 食卓に坐する、客となる
ἀνα-κρίνω 審く、訊す
ἀνα-λαμβάνω 取上げる
ἀνα-παύω 休める
ἀνα-πίπτω 坐る
ἀνα-στρέφω 復帰する、振舞う
ἀνα-χωρέω 退く
ἀν-έχομαι 忍耐する
ἀνθ-ίστημι 拒む
ἀπ-αγγέλλω 告げる
ἀπ-άγω 導き去る
ἀπ-αρνέομαι 否定する

ἀ-πειθέω 反抗する、不従順である
ἀπ-έχω 持つ、受ける
ἀπο-δίδομι 償う
ἀπο-καλύπτω 啓示する
ἀπο-λαμβάνω 受取る
ἄπτω ともす、触る (中)
ἀρέσχω 喜ばす
ἀρνέομαι 否む
ἀρπάζω 奪い取る
ἀσθενέω 病む
ἀσπάζομαι 挨拶する
ἀτενίζω 熟視する
αὐξάνω 成長する、増加する
ἀφ-ίστημι 離れる
βασανίζω 苦しめる
βασιλεύω 支配する
βαστάζω 負う
βλασφημέω 冒瀆する
βούλομαι 欲する
γαμέω 結婚する
γέμω 満つる
γεύομαι 味わう
γνωρίζω 知らせる
γρηγορέω 目を覚ましておる
δαιμονίζομαι 悪鬼に憑かれる
δείκνυμι 示す
δέομαι 祈る、求める
δέρω 打つ
δέω 結ぶ
διακονέω 仕える
δια-κρίνω 分別する、疑う
δια-λέγομαι 論議する
δια-λογίζομαι 考慮する、対話する
δια-μαρτύρομαι 証す

δια-μερίζω 分れる
δια-τάσσω 命令する
δια-φέρω 優る、異る
δι-έρχομαι 通過する
δικαιόω 義とする
διψάω 渴く
διώκω 迫害する
δοκιμάζω 験す
δουλεύω 仕える
ἐάω 放任する
ἐγγίζω 近づく
εἰσ-άγω 導き入れる
εἰσ-πορεύομαι 入る
ἐκ-κόπτω 切捨てる
ἐκ-λέγομαι 選ぶ
ἐκ-πίπτω 落ちる
ἐκ-πλήσσω 驚かす
ἐκ-πορεύομαι 出る
ἐκ-τείνω 伸ばす
ἐκ-χέω 注ぎ出す
ἐκ-χύνομαι 注ぎ出される
ἐλέγχω 叱責する
ἐλεέω 憐れむ
ἐλπίζω 望む
ἐμ-βαίνω 入る (船)
ἐμ-βλέπω 見る
ἐμ-παίζω 嘲弄する
ἐν-δείκνυμι 示す
ἐν-εργέω 働く
ἐν-τέλλομαι 命令する
ἐξ-άγω 導き出す
ἐξ-απο-στέλλω 遣す
ἐξεστι 正当である
ἐξ-ίστημι 驚く、狂喜する

ἐξ-ομολογέω 告白する
ἐξ-ουθενέω 軽蔑する
ἐπ-αγγέλλομαι 約束する
ἐπ-αίρω 揚げる
ἐπ-αισχύνομαι 恥づる
ἐπι-βάλλω 置く (上に)
ἐπι-γινώσκω 知る
ἐπι-δίδωμι 与える
ἐπι-ζητέω 求める
ἐπι-θυμέω 欲求する、貪る
ἐπι-καλέω 呼びかける
ἐπι-λαμβάνω 掴む
ἐπι-μένω 継げる
ἐπι-πίπτω 落ちかかる
ἐπί-σταμαι 理解する
ἐπι-στρέφω 向きかえる
ἐπι-τίθημι 上に置く
ἐπι-τιμάω 叱る
ἐπι-τρέπω 許す
ἐργάζομαι 働く
ἐτοιμάζω 準備する
εὐ-δοκέω 悦ぶ
εὐ-λογέω 祝福する
εὐ-φραίνομαι 楽しむ
εὐ-χαριστέω 感謝する
ἐφ-ίστημι 側に立つ
ζηλώω 熱求する
ζωο-ποιέω 生かす
ἡγέομαι 首長となる、考える、思う
ἦκω 来る
θανατόω 殺す
θάπτω 葬る
θαυμάζω 驚く、怪しむ
θεάομαι 見る

θεραπεύω 治療する
θερίζω 刈る
θνήσκω 死ぬ
θύω 屠る
ιάομαι 癒す
ισχύω 能う、力あり
καθαρίζω 潔める
καθ-εὐδω 眠る
καθίζω 坐する
καθ-ίστημι 置く
καίω 燃やす
κατ-αγγέλλω 宣言する
κατ-άγω 導き下る
κατ-αισχύνω 辱しめる
κατα-καίω 焼き尽くす
κατά-κειμαι 食卓に坐す、臥す
κατα-κρίνω 罪に定める
κατα-λαμβάνω 取る、掴む
κατα-λείπω 残す
κατα-λύω 崩壊する
κατα-νοέω 考える、見る
κατ-αντάω 達する、到着する
κατ-αργέω 無効にする
κατ-αρτίζω 修繕する、完全に
κατα-σκευάζω 準備する、建てる
κατ-εργάζομαι 働く、為す
κατ-έρχομαι 下り来る
κατ-έχω 掴む
κατ-ηγορέω 訴える
κατ-οικέω 住む
καυχάομαι ほめる、誇る
κεῖμαι 横たわる
κελεύω 命令する

κερδαίνω 得する
κλαίω 泣く
κλάω 裂く (パン)
κλείω 閉づる
κλέπτω 盗む
κληρονομέω 嗣ぐ
κοιμάομαι 眠る、熟睡する
κοινόω 汚す
κολλάομαι 付着する
κομίζω 受ける
κοπιάω 労苦する
κρατέω 掴む
κρύπτω 隠す
κτίζω 創造する
κωλύω 禁ずる
λατρεύω 仕える、拝する
λογίζομαι 思う、認む
λυπέω 悲します
λύω 解く
μανθάνω 学ぶ
μερίζω 別つ
μεριμνάω 思い煩う
μετα-βαίνω 去る
μετα-νοέω 悔改める
μιμνήσκω 思い出さす
μισέω 憎む
μνημονεύω 記憶する
μοιχεύω 姦淫する
νηστεύω 断食する
νικάω 打勝つ
νίπτω 洗う
νοέω 理解する、思う
νομίεω 思う
ξενίζω 宿す、接待する

ξηραίνω しぼむ、枯れる
οίκο-δομέω 建てる、徳を建てる
ὄμνυμι 誓う
ὁμοιόω 似せる
ὁμο-λογέω 告白する
ὀφείλω 負う
παιδεύω 教える、叱責する
παρ-αγγέλλω 命ずる
παρ-γίνομαι 来る
παρ-αιτέομαι 言い訳をする、拒む
παρ-τίθημι 前に置く、任せる
πάρ-εμι 現存する
παρ-έρχομαι 過ぎ去る
παρ-έχω 与える、示す
παρ-ίστημι 側に立つ
πάσχω 苦しむ
παύομαι やめる
πεινάω 飢える
πειράζω 誘う、試みる
περι-βάλλω 着せる
περι-σσεύω 優る、豊かである
περι-τέμνω 割礼を施す
πιάζω 捕える
πλανάω 迷わす、欺く
πληθύνω 数倍する
πλήθω, πίμπλημι 充す
πλουτέω 富む
ποιμαίνω 牧する
ποτίζω 飲ませる
πράσσω 行う、為す
προ-άγω 先立ちて行く
προσ-δέχομαι 受取る、歓迎する
προσ-δοκάω 期待する

προσ-έχω 注意する
προσ-καλέομαι 呼びよせる
προσ-λαμβάνομαι 受取る
προσ-τίθημι 加える、増す
προφητεύω 預言する
πυνθάνομαι 問う
πωλέω 売る
ρύομαι 救う
σαλεύω 震う
σαλπίζω ラッパを吹く
σιωπάω 黙する
σκανδαλίζω 躓かせる
σπλαγχνίζομαι 同情する
σπουδάζω 努力する
σταυρώω 十字架につける
στηρίζω 堅くする
στρέφω 回す
συλ-λαμβάνω 掴む
συμ-φέρω 有利である
συν-έρχομαι 集まる
συν-έχω 押し寄せる、圧迫する
συν-ίημι 理解する
συν-ίστημι 薦める
σφραγίζω 印する
σχίζω 分裂する
ταπεινώνω 卑下らせる
ταράσσω 騒がす
τελειώνω 完成する
τελευτάω 死ぬ
τελέω 終る、完了する
τίκτω 生む
τιμάω 尊ぶ
τολμάω 敢てする
τρέχω 走る

τυγχάνω 起る
τύπτω 打つ
ύγιαίνω 健全である
ύπακούω 服従する
ύπο-μένω 耐える、留まる
ύπο-στρέφω 帰る
ύπο-τάσσω 服従させる
ύστερέω 欠ける
ύψώω 高める
φαίνω 輝く、現れる
φεύγω 逃げる
φιλέω 愛する、接吻する
φονεύω 殺す
φρονέω 考える
φυλάσσω 守る
φυτεύω 植える
φωνέω 叫ぶ
φωτίζω 照す、輝かす
χαρίζομαι 赦す、惜みなく与える
χορτάζω 飽かす
χράομαι 用いる
χωρίζω 離す、分かつ
ψεύδομαι 偽る
ώφελέω 益する

**五十回以上用いらるる
名詞、形容詞、副詞其他**

άγαθός 善き
άγάπη, ή 愛
άγαπητός 愛せらるる者
άγγελος, ό 天使、使い
άγιος 聖なる
άδελφός, ό 兄弟
αίμα, τό 血

αἰών, ὁ 代、世
αἰώνιος 永遠の
ἀλήθεια, ἡ 真理
ἀλλά しかしながら
ἀλλήλων 互いに
ἄλλος 他の
ἁμαρτία, ἡ 罪
ἀμήν アーメン、誠に
ἄνηρ, ὁ 男、夫
ἄνθρωπος, ὁ 人間
ἀπόστολος, ὁ 使徒
ἄρτος, ὁ パン
ἀρχή, ἡ 始め、支配者
ἀρχιερεύς, ὁ 祭司長
αὐτός 彼自身、同一の
αὐτοῦ 彼自身の
βασιλεία, ἡ 王国
βασιλεύς, ὁ 王
γῆ, ἡ 土地、地球
γλῶσσα, ἡ 舌、国語
γραμματεὺς, ὁ 学者
γραφὴ, ἡ 書物、聖書
γυνή, ἡ 女、妻
δαιμόνιον, τό 悪魔
δεξιός 右
διδάσκαλος, ὁ 先生
δίκαιος 義しき
δικαιοσύνη, ἡ 正義
δόξα, ἡ 栄光
δοῦλος, ὁ 奴隸、僕
δύναμις, ἡ 能力、力
δύο 二つ
δώδεκα 十二
ἐαυτοῦ 彼自身の
ἐγώ 私、我

ἔθνος, τό 国民、異邦人 (複)
εἰρήνη, ἡ 平和、平安
εἷς, μία, ἓν 一つ
ἕκαστος 各々
ἐκεῖ 其処に
ἐκεῖνος それ、そのもの
ἐκκλησία, ἡ 教会
ἐλπίς, ἡ 希望
ἐμός 私のもの
ἐμπροσθεν 前に
ἐντολή, ἡ 命令
ἐνώπιον 面前に
ἐξουσία 権威
ἐξω 外に
ἐπ-αγγελία, ἡ 約束
ἐπτά 七
ἔργον, τό 行為、働き
ἔσχατος 最後の
ἕτερος 他の
ἔτι 尚、これ以上
ἔτος, τό 年
εὐ-αγγέλιον, τό 福音
εὐθύς 直ちに
ἕως 迄
ζωή, ἡ 生命
ἤδη 既に、今
ἡμέρα, ἡ 日
θάλασσα, ἡ 海
θάνατος, ὁ 死
θέλημα, τό 意思
θεός, ὁ 神
θρόνος, ὁ 王位
ἴδιος 自身の
ιδού 見よ
ιερόν, τό 寺、宮

ἱμάτιον, τό 衣物
ἵνα …せん為に
καθ-ώς …のように
καί 及び、而して
καιρός, ὁ 時
καλός 善き
καρδία, ἡ 心、心情
καρπός, ὁ 果実
κατά 下つて、従つて、逆つて
κεφαλή, ἡ 頭
κόσμος, ὁ 宇宙、世界
Κύριος, ὁ 主
λαός, ὁ 民
λίθος, ὁ 石
λόγος, ὁ 言
μαθητής, ὁ 弟子
μαῖλλον 寧ろ
μέγας 大なる
μέν 実に、一方に
μέσος 中に
μετά 共に、後に
μή (否定の辞)
μηδέ 又…でない
μηδεῖς 一人も…せぬ
μηδέν 一つも…せぬ
μήτηρ 母
μόνον 唯
νεκρός 死にたる
νόμος, ὁ 律法
νῦν 今
νύξ, ἡ 夜
ὁ, ἡ, τό (冠詞)
ὁδός, ἡ 途
οἰκία, ἡ 家、家族
οἶκος, ὁ 家

ὅλος 凡ての、全体の
ὄνομα, τό 名
ὄπου どこに
ὄπως …せんが為に
ὄρος, τό 山
ὄς, ἡ, ὅ (関係代名詞)
ὅσος 如何に大なる
ὅστις, ἤτις, ὅτι 誰でも、何でも
ὅταν 時に、何時でも
ὅτε 時に
ὅτι 何となれば、…なる事を
οὐ, οὐχ, οὐκ (否定)
οὐδέ 又…もなし
οὐδεῖς 誰も…なし
οὐκ-έτι 最早や…なし
οὖν それ故に
οὐρανός, ὁ 天
οὔτε 又…もなし
οὗτος, αὐτή, τοῦτο 之れ
οὔτω, οὔτως 斯く
οὐχί ナイ
ὄφθαλμός, ὁ 目
ὄχλος, ὁ 群衆
παιδίον, τό 小兒
πάλιν 再び
παρά から、共に、反対して
πᾶς, πᾶσα, πᾶν 凡て、皆
πατήρ, ὁ 父
περί 就て、関して
πίστις, ἡ 信仰
πιστός 誠なる
πλείων ἄλλων ヨリ多く、ヨリ大なる
πλοῖον, τό 小舟、船
πνεῦμα, τό 霊、風

πόλις, ἡ 町、市
πολύς, πολλή, πολὺ 多くの、大なる
πονηρός 悪しき
πούς, ὁ 足
πρεσβύτερος ὁ 長老、老人
πρός 方に、共に、対して
πρόσωπον, τό 顔
προ-φήτης, ὁ 預言者
πρῶτος 第一の
πρῶτον 第一に
πῦρ, τό 火
πῶς 如何にして
ῥῆμα, τό 言葉
σάββατον, τό 安息日
σάρξ, ἡ 肉
σημεῖον, τὸ 徴
σοφία, ἡ 知恵
στόμα, τό 口
σύ 汝
σύν 共に
συναγωγή, ἡ 会堂
σῶμα, τό 体
τέ 及び
τέκνον, τό 小児
τιμῆ, ἡ 栄誉、価
τις, τί ある人、ある物
τίς, τί 何人? 何者?
τοιούτος かくの如き
τόπος, ὁ 場所
τότε その時に
τρεῖς, τρία 三
τρίτος 第三
τυφλός 盲なる
ὔδωρ τό 水

υἱός, ὁ 子
ύμεῖς 汝ら
ὑπέρ 為に、上に
ὑπό 下に、によりて
φόβος, ὁ 恐れ
φωνή, ἡ 声
φῶς, τό 光
χαρά, ἡ 喜び
χάρις, ἡ 恩恵
χεῖρ, ἡ 手
χρόνος, ὁ 時
ψυχή, ἡ 生命
ᾧδε ここに、こちらに
ῶρα, ἡ 時
ὡς 如く、時に
ᾧστε それ故に、…したれば

十回及至五十回用いらるる
名詞、形容詞、副詞其他

ἀγιασμός, ὁ 聖化
ἀγορά, ἡ 市場
ἀγρός, ὁ 畑、田舎
ἀδελφή, ἡ 姉妹
ἄδης, ὁ 地獄
ἀδικία, ἡ 不義、不正
ἄδικος 不義なる
ἀδύνατος 不可能なる
αἰτία, ἡ 訴え
ἀκαθαρσία, ἡ 汚穢 (おわい)
ἀκάθαρτος 汚れたる
ἄκανθα, ἡ 茨
ἀκοή, ἡ 宣伝、聞く事
ἀκροβυστία, ἡ 無割礼

ἀλέκτωρ, ὁ 雄鷄
ἀληθής 真なる
ἀληθινός 真正なる
ἀληθῶς 真実に
ἀλλότριος 他人の
ἀμαρτωλός, ὁ 罪人
ἀμπελών, ὁ 葡萄園
ἀμφοτέροι 双方の
ἀνάγκη, ἡ 必要、艱難
ἀνα-στασις, ἡ 復活
ἀνα-στροφή, ἡ 振舞い
ἀνατολή, ἡ 東
ἄνεμος, ὁ 風
ἀνομία, ἡ 不正、律法違反
ἄξιος 値している
ἅπαξ 一度
ἅπας 凡て
ἀπιστία, ἡ 不信仰
ἄπιστος 不信仰なる
ἀπο-κάλυψις, ἡ 黙示
ἀπώλεια, ἡ 破滅
ἄργύριον, τό 銀、貨幣
ἀριθμός, ὁ 数
ἀρνίον, τό 小羊
ἀρχαῖος 古き
ἄρχων, ὁ 支配者、君
ἀσθένεια, ἡ 病、弱さ
ἀσθενής 病める、弱き
ἀσκός, ὁ 皮袋
ἀστήρ, ὁ 星
αὐλή, ἡ 庭、中庭
αὔριον 明日
ἄφεσις, ἡ 赦し
ἄφρων 愚なる
βάπτισμα, τό 洗礼

βαπτιστής, ὁ 洗礼者
βῆμα, τό 審判の座、王座
βιβλίον, τό 本、巻物
βίβλος, ἡ 同上
βίος, ὁ 生命、生活
βλασφημία, ἡ 冒瀆
βουλή, ἡ 商議、意見
βροντή, ἡ 雷
βρῶμα, τό 食物
βρῶσις, ἡ 食う物、食物
γάμος, ὁ 婚姻
γένενα, ἡ ゲヘナ
γενεά, ἡ 代
γένος, τό 種類、族
γεωργός, ὁ 農夫
γνώσις, ἡ 知識
γνωστός 知られたる、知人
γονεύς, ὁ 両親
γόνυ, τό 膝
γράμμα, τό 文字
γυμνός 裸なる
δάκρυ, τό 涙
δέησις, ἡ 懇願
δεῖπνον, τό 夕食
δέκα 十
δένδρον, τό 木
δέσμιος, ὁ 囚人
δεσμός, ὁ 捕囚
δεῦτε 来たれ
δεύτερος 第二の
δηνάριον, τό デナリ
διάβολος, ὁ 悪魔
διαθήκη, ἡ 契約、遺言
διακονία, ἡ 奉仕
διάκονος, ὁ 僕、執事

διαλογισμός, ὁ 思い
διάνοια, ἡ 理解
διδασκαλία, ἡ 教理
διδασχί, ἡ 教え
δίκτηνον, τό 網
δόλος, ὁ 詭計
δράκων, ὁ 龍
δυνατός, 力ある
δωρεά, ἡ 賜物
δῶρον, τό 賜物
ἐγγύς 近く
ἔθος, τό 習慣
εἰδωλον, τό 偶像
εἴκοσι 二十
εἰκών, ἡ 像
ἐκατόν 百
ἐκατοντάρχη, ὁ 百卒長
ἐκεῖθεν 其処から
ἐκλεκτός 選ばれたる
ἕκτος 第六の
ἐλαία, ἡ オリーブの木
ἔλαιον, τό 油
ἐλάχιστος 最小なる
ἐλεημοσύνη, ἡ 施し、慈悲
ἔλεος, τό 憐憫
ἐλευθερία, ἡ 自由
ἐλεύθερος 自由なる
Ἑλληνας, οἱ ギリシヤ人
ἐμαυτοῦ 私自身の
ἐνεκα …の故に、…の為に
ἐνεκεν (同上)
ἐνιαυτός, ὁ 年
ἐντεῦθεν 此処から
ἕξ 六
ἐξωθεν 外から

ἐορτή, ἡ 祭り
ἔπαινος, ὁ 讃頌
ἐπάνω 上に、その上
ἐπ-αύριον 明日
ἐπεὶ …の故に
ἐπειδὴ …の故に
ἔπειτα 次に
ἐπί-γνωσις, ἡ 知識
ἐπι-θυμία, ἡ 欲望
ἐπι-στολή, ἡ 書簡
ἐπουράνιος 天上の
ἐργάτης, ὁ 働き人
ἔρημος, ἡ 荒野
ἔρημος 荒野の、寂しき
ἔσωθεν 内に、内より
ἔτοιμος 準備したる
εὐ-λογία, ἡ 祝福
εὐ-σέβεια, ἡ 敬虔
εὐ-χαριστία, ἡ 感謝
ἐχθρός, ὁ 敵
ζηλος, ὁ 熱心、嫉妬
ζύμη, ἡ パン種
ζῶον, τό 動物、生物
ἡγεμών, ὁ 支配者
ἥλιος 太陽
θεμέλιος, ὁ 基礎、礎石
θερισμός, ὁ 収穫
θηρίον, τό 野獣
θησαυρός, ὁ 財宝
θλίψις, ἡ 艱難
θρίξ, ἡ 髪の毛
θυγάτηρ, ἡ 娘
θυμός, ὁ 怒り
θύρα, ἡ 戸
θυσία, ἡ 犠牲 (いけにえ)

θυσιαστήριον, τό 祭壇
ἶδε 見よ
ιερεὺς, ὁ 祭司
ικανός 値する
ἵππος, ὁ 馬
ισχυρός 力強き
ισχύς, ἡ 力
ἰχθύς, ὁ 魚
καθ-άπερ …の如く
καινός 新しき
κά-κεῖ 而して其処に
κά-κεῖθεν 而して其処から
κά-κεῖνος 而して彼は
κακία, ἡ 悪
κακός 悪しき
κακῶς 悪しく
κάλαμος, ὁ 葦
καλῶς 善く
κᾶν 而して若し…
καπνός, ὁ 煙
κατα-βολή, ἡ 基礎
καύχημα, τό 誇り
καύχησις, ἡ 誇る事
κενός 空しき
κέρας, τό 角
κλάδος, ὁ 枝
κλέπτης, ὁ 盗人
κληρονομία, ἡ 嗣業
κληρονόμος, ὁ 世嗣
κλήρος, ὁ 分け前、嗣業、籤（くじ）
κλήσις, ἡ 召命
κλητός 召されたる
κοιλία, ἡ 腹、胎
κοινός 共有の、汚れたる
κοινωνία, ἡ 交り、共有

κοινωνός, ὁ 友
κόπος, ὁ 労苦
κράββατος, ὁ 床
κράτος, τό 力、支配
κρείσσων ὄρι善き
κρίμα, τό 審判、断罪
κρίσις, ἡ 審き
κριτής, ὁ 裁判官
κρυπτός 隠れたる
κτίσις, ἡ 創造
κώμη, ἡ 村
κωφός 哑の
λευκός 白き
ληστής, ὁ 強盗
λίαν 非常に
λίμη, ἡ 湖
λιμός, ὁ 飢饉
λοιπόν 今や、最後に
λοιπός 他の
λύπη, ἡ 哀悲
λυχνία, ἡ 燭台
λύχνος, ὁ ランプ
μακάριος 幸福なる
μακρόθεν 遠方から、遠方に
μακρο-θυμία, ἡ 寛容、忍耐
μάλιστα 特に、何よりも
μαρτυρία, ἡ 証し
μαρτύριον, τό 証し
μάρτυς, ὁ 証し人
μάχαιρα, ἡ 劍
μεῖζον ὄρι大なる
μέλος, τό 肢
μέρος, τό 部分
μετά-νοια, ἡ 悔改
μέτρον, τό 量り

μέχρι, μέχρις 迄
μηκέτι 最早…なし
μήν, ό 月
μή-ποτε 恐らく…せん、
…せざらん為
μήπως 決して…せざらん為
μήτε …も…もなし
μικρός 小さき
μισθός, ό 報い、賃金
μνημείον, τό 墓
μόνος 唯一の
μύρον, τό 香油
μυστήριον, τό 奥義、神秘
μωρός 愚なる
ναί 然り
ναός, ό 宮
νέος 新しき
νεφέλη, ή 雲
νεώτερος 若き
νήπιος, ό 嬰兒
νόσο, ή 病
νοῦς, ό 心
νυμφίος, ό 花婿
νυνί 今
ξένος, ό 未知の人
ξύλον, τό 木
ὄδε, ήδε, τόδε これ、あれ
ὀδούς, ό 齒
ὄθεν それより
οἰκο-δεσπότης, ό 家主
οἰκο-δομή, ή 建築、建徳
οἰκουμένη, ή 世界
οἶνος, ό 葡萄酒
οἶος かかる
ὀλίγος 僅かな

ὁμο-θυμαδόν 心を一にして
ὅμοιος 如き、似たる
ὁμοίως 同様に
ὀπίσω 後に
ὄραμα, τό 幻影
ὀργή, ή 怒り
ὄρια, τά 境域
οὔ (where 場所の関係副詞)
οὐαί 禍なるかな
οὐδέ-ποτε 決して…せぬ
οὐ-πω 未だ…せぬ
οὔς, τό 耳
ὄφης, ό 蛇
ὀψία, ή 夕
πάθημα, τό 苦難
παιδίσκη, ή 婢女
παῖς, ό 子供、僕
παλαιός 古き
πάντοτε 常に
παρα-βολή, ή 比喩
παρά-δοσις, ή 伝統
παρά-κλησις, ή 慰め
παρα-λυτικός 中風の者
παράπρωμα 過失
παρα-χρήμα 直ちに
παρ-ουσία, ή 臨在、来臨
παρρησία, ή 大胆、勇敢
πάσχα, τό 過越
πειρασμός, ό 誘惑、試練
πέντε 五
πέραν 向こう側に
περισσότερος 一層豊かなる
περισσοτέρως 一層豊かに
περι-τομή, ή 割礼
πετεινόν, τό 鳥

πέτρα, ἡ 岩
πηγή, ἡ 泉、井戸
πληγή, ἡ 打撃、疫病
πλῆθος, τό 群衆
πλήν しかしながら
πλήρης 充ちたる
πλήρωμα, τό 満盈
πλησίον, ὁ 隣人
πλούσιος 富める
πλοῦτος, ὁ 富
πνευματικός 靈的
πόθεν 何処から
ποικίλος 種々の
ποιμήν, ὁ 牧者
ποῖος 如何なる
πόλεμος, ὁ 戦
πολλάκις しばしば
πορνεία, ἡ 淫行
πόρνη, ἡ 遊女
πόσος 如何に大なる？
如何に多くの？
ποταμός, ὁ 川、洪水
ποτέ 昔、以前に
πότε 何時
ποτήριον, τό 杯
ποῦ 何処に？
πρᾶγμα, τό 事柄、物
πρίν 前に
πρό 前に
πρόβατον, τό 羊
πρό-θεσις, ἡ 目的、企て
προσ-ευχή, ἡ 祈
πρότερον 前に
προ-φητεία, ἡ 預言
πρωί 朝早く

πτωχός 貧しき
πύλη, ἡ 門
πυλών, ὁ 門
πῶλος, ὁ 驢馬の子
πῶς 如何にして
Ῥαββεί ラビ、師
ράβδος, ἡ 杖、笏
ρίζα, ἡ 根
σάλπιγξ, ἡ ラッパ
σεαυτοῦ 汝自身の
σεισμός, ὁ 地震
σήμερον 今日
σίτος, ὁ 麦
σκάνδαλον, τό 躓き物
σκεῦος, τό 道具
σκηνή, ἡ 幕屋
σκοτία, ἡ 暗黒
σκότος, τό 暗黒
σός 汝の
σοφός 賢き
σπέρμα, τό 種子、裔
σπλάγχνα, τά 同情、心
σπουδή ἡ 急ぎ、勤勉
σταυρός, ὁ 十字架
στέφανος, ὁ 冠
στρατιώτης, ὁ 兵士
συγγενής, ὁ 親族
συκῆ, ἡ イチジクの木
συν-έδριον, τό 議會
συν-είδησις, ἡ 良心
συν-εργός, ὁ 同労者
σφόδρα 非常に
σφραγίς, ἡ 封印
σωτήρ, ὁ 救主
σωτηρία, ἡ 救

τάλαντον, τό タラント
ταχύ 速やかに
τέλειος 完全なる
τελώνης, ό 取税人
τέρας, τό 不思議
τεσσαράκοντα 四十
τέσσαρες 四
τίμος 貴き
τοσοῦτος かく大なる
τράπεζα, ή 食卓
τριάκοντα 三十
τρίς 三度
τρόπος, ό 有様
τροφή, ή 食物
τύπος, ό 型
ύγιής 健全なる
ύπακοή, ή 従順
ύπηρέτης, ό 下僕、下彼
ύπο-κριτής, ό 偽善者
ύπο-μονή, ή 忍耐
ύστερον 後に、最後に
ύψηλός 高き
ύψιστος 最高の
φανερός 明かなる
φιάλη, ή 鉢
φίλος, ό 友
φόνος, ό 殺人
φρόνιμος 賢き
φυλακή, ή 獄、夜番
φυλή, ή 族
φύσις, ή 自然性
χάρισμα, τό 賜物
χείρων ヨリ悪き
χήρα, ή 寡婦
χιλί-αρχος, ό 千卒長

χιλιάς, ή 千
χιλιοι 千の
χιτών, ό 下衣
χοῖρος, ό 豚
χόρτος, ό 草
χρεία, ή 必要
χρυσίον, τό 金
χρυσός, ό 金
χρυσοῦς 金の
χωλός あしなえ
χώρα, ή 国、野、地方
χωρίς …なしに
ψευδο-προφήτης, ό 偽預言者
ψευδος, τό 偽り
ψεύστης, ό 偽者
ᾠ オー
Ώσαννά ホザナ
ώσεί 如く、略
ᾠσπερ 如く

この単語書は Harper and Weidner 著 New Testament Greek Method より転掲せるもので、使用度数は Nestle の Text による場合と若干の相異あり。Nestle による使用度数は拙書**新約聖書語句索引・希和**を参照せられたし。尚、上掲訳語は簡単に過ぎる故詳細は辞書を用いる事が必要である。希和辞典の適当なものがないので当分上記希和語句索引に因る事をおすすめる。

索引

数字は頁を、() 内は§を、[] は変化表を示す

発音 Pronunciation

アルファベット Alphabet (1) 5

母音 Vowels の発音 (2) 6

(a)短母音(b)重母音 Diphthong

イオタ添加母音 Iota Subscript

母音の収縮 Contraction [表] . . . (29) 3 1

子音 Consonants の発音 (3) 7

子音の分類 (33) 3 7

- 1. 吃音 Sibilants 2. 続音 Liquids
- 3. 断音 Mutes 4. 複子音 Double Consonants

子音の音便 (39) 3 7

音の硬軟 Breathings of Vowels (4) 8

(´) 軟音 Soft Breathing

(´) 硬音 Rough Breathing

音節の性質 (5) 8

アクセントの種類及び用法 (6) 9

従尾語 Enclitics と先駆語 Proclitics . . (7) 10

名詞 Nouns

性 Gender、数 Number、格 Case (8) 1 2

語尾の変化の通則 (10) 1 3

変化の三種類 (11) 1 3

ειμί の変化 (13) 1 5

第一変化 (A 変化) First or A Declension

. (16) 1 9

第一変化の女性名詞 (17) 1 9

[γραφῆ, δόξα, ἡμέρα, οἰκία]

第一変化の男性名詞 (18) 2 1

[νεανίας, προφήτης]

第一変化の名詞の収縮 (31) 3 2

第二変化 (O 変化) Second or O Declension

[λόγος, ὁδός, δῶρον] (12) 1 4

第二変化の収縮 (31) 3 2

第三変化又は子音変化 Third or Consonant

Declension (40) 3 9

語根を見出す法 (41) 3 9

第三変化の語尾 (42) 3 9

[αἰών, σῶμα]

語尾変化の規則 (42) 3 9

語根が続音 Liquids に終る名詞の変化

[ποιμήν, ἡγεμών, ῥήτωρ, πατήρ]

. (43) 4 0

語根が唇音 Labials 又は口蓋音 Palatals に終

る名詞の変化 (44) 4 1

[Ἄραψ, σάρξ]

語根が舌音 Linguals に終る名詞の変化

[ἐλπῖς, χάρις, ὄνομα] (45) 4 1

語根が σ (εσ 及び ασ) に終る名詞の変化

[τὸ γένος, τὸ κρέας] (57) 5 5

語根が ι 又は υ に終る名詞の変化

[ἡ πόλις, ὁ ἰχθύς] (58) 5 6

語根が重母音に終る名詞の変化

[ὁ βασιλεύς, ὁ, ἡ βοῦς] (66) 6 5

第三変化に関する不規則名詞・・・(67) 66

不定変化の名詞・・・(68) 66

代名詞 Pronouns

人称代名詞 Personal Pronouns・・・(50) 46

第三人称としての〔αὐτός〕・・・(51) 47

αὐτός とその他の用法・・・(52) 48

反射代名詞 Reflexive Pronouns (121) 107

所有代名詞 Possessive Pronouns (122) 108

指示代名詞 Demonstrative Pronouns

〔οὗτος, ἐκεῖνος〕・・・(53) 48

用法及び注意

質、量、数を示す指示代名詞

〔τοιοῦτος, τοσοῦτος, τοσοῦτοι〕・・・(123) 103

関係代名詞 Relative Pronouns・・・(56) 52

〔ὅς, ἥ, ὅ〕

用法及び冠詞との差別

不定関係代名詞 Indefinite Relative Pronouns

〔ὅστις, ἥτις, ὅ, τι〕・・・(124) 109

質、量、数を示す関係代名詞

〔οἷος, ὅσος, ὅσοι〕・・・(125) 109

疑問代名詞 Interrogative Pronouns 及び不定代名

詞 Indeifinite Pronouns・・・(126) 109

〔τίς, τίς〕

質、量、数を示す疑問代名詞

〔ποῖος, πόσος, πόσοι〕・・・(127) 110

複合代名詞 Compound Pronouns

〔οὐδέεις〕・・・(100) 90

冠詞 Articles

定冠詞 Definite Articles の性、数、格

〔ὁ, ἡ, τό〕・・・(8) 12

性、数、格による変化・・・(9) 13

形容詞 Adjectives

形容詞の性質・・・(25) 27

変化の三種類・・・(26) 28

母音変化 Vowel Declension・・・(27) 28

〔ἄγιος, μικρός, σοφός〕

同上に関する注意・・・(28) 29

ος, ος, ον の語尾を有する形容詞――

定冠詞と共に用いられる場合

母音変化の形容詞の収縮・・・(32) 33

〔χρυσοῦς〕

子音変化 Consonant Declension・・・(59) 59

〔ἀληθής, σώφρων〕

混合変化 Mixed Declension・・・(60) 59

〔ὀξύς〕

〔ᾠὰς〕・・・(61) 60

不規則変化 Irregular Declension・・・(62) 60

〔πολύς, μέγας〕

比較 Comparison・・・(90) 83

-τερος, -τοτος の変化

語尾の変化に就きての註

-ίων, -ιστος の変化・・・(91) 85

比較級 Comparative Dgree が -ων に終る形容

詞の変化〔μειζων〕・・・(92) 85

不規則の比較・・・(93) 86

不完全の比較・・・(94) 86

比較級の用法・・・(95) 86

形容詞として用いられる分詞・・・(89) 81

数詞 Numerals

〔εἶς〕 の変化・・・(65) 63

基数 Cardinal Numbers、序数 Ordinal Numbers

及び数的副詞・・・(96) 88

〔τρεῖς, τέσσαρες〕の変化・・・(97) 89

其外の数詞の変化・・・(98) 90

数の数え方・・・(99) 90

動詞 Verbs **動詞**

動詞の変化 Conjugation の概論・・・(14) 17

人称 Person, 数 Number, 態 Voice, 法 Mood,
時称 Tense

動詞のアクセント・・・(24) 26

【直説法】 Indicative Mood

現在 Present Tense

能動態 Active Voice [λύω]・・・(15) 17

母音の収縮 Contraction・・・(33) 33

〔τιμάω, φιλέω, δουλόω〕

受動態及び中動態 Present Passive and Middle
・・・(34) 35

〔第一時称 Primary Tense の受動態の語尾〕
[λύω]・・・(35) 35

受動態の文章の構造・・・(36) 36

受動態の母音の収縮・・・(37) 36

〔εἶμι〕の現在及び過去・・・(13) 15

混動態動詞 Deponent Verbs・・・(54) 51

〔ἔρχομαι〕の現在及び未完了過去

〔οἶδα〕の現在・・・(55) 51

未完了過去 Imperfect Tense

意義及び用法・・・(19) 24

能動態 Imperfect Active [λύω]・・・(20) 24

第一時称 Primary Tense と第二時称 Secondary
Tense・・・(21) 24

〔第二時称の人称語尾〕・・・(23) 25

アウグメント Augment の規則・・・(22) 25

複合動詞 Compound Verbs の未完了過去の
場合・・・(23) 25

母音の収縮・・・(33) 33

受動態及び中態 Imperfect Passive and Middle
・・・(46) 42

〔第二時称の受動態の語尾〕 [λύω]
・・・(47) 43

受動態の母音の収縮・・・(48) 43

〔τιμάω, φιλέω, δουλόω〕

未来 Future Tense

能動態及び中態 Future Active and Middle [λύω]
・・・(63) 61

語尾の変化及び音便

受動態 Future Passive [λύω]・・・(75) 74

語尾変化の規則・・・(63) 62

同上の不規則形・・・(77) 76

〔εἶμι〕の未来・・・(64) 63

未来時称の命令的用法・・・(109) 101

不定過去 Aorist Tense

◎第一不定過去 First Aorist Tense

能動態及び中態 1st Aorist Active and Middle
・・・(69) 67

不定過去の性質
[λύω]・・・(70) 68

音便とアウグメント Augment・・・(71) 68

受動態 1st Aorist Passive [λύω]・・・(75) 74

語尾変化の規則
同上の不規則形・・・(77) 76

混動態動詞 Deponent Verbs の不定過去
・・・(78) 76

◎第二不定過去 Second Aorist Tense

能動態及び中態 2nd Aorist Active and Middle
・・・(72) 71

現在語根 Present Stem と動詞語根 Verbal
Stem [βάλλω]

第二不定過去動詞の主なるもの・・・(73) 71

同上の不規則形・・・・(74) 72
受動態 2nd Aorist Passive・・・・(76) 75

〔φαίνω〕その他の例

完了現在 Perfect Tense

未完了過去、不定過去との差別・(128) 112
能動態、中態、受動態 Perfect Active, Middle and
Passive〔λύω〕・・・・(129) 112
語頭重複 Reduplication 及び語尾変化の規則
・・・・(130) 113

第二完了現在 Second Perfect・(133) 115

完了過去 Pluperfect Tense

能動態、中態、受動態 Pluperfect Active, Middle
and Passive〔λύω〕・・・・(134) 115

【接続法】Subjunctive Mood

性質、時称及び態・・・・(101) 92
用法・・・・(105) 92
1. 目的又は計画、2. 仮定、3. -ever の如
き意味の仮定、4. 独立句(勸告命令、禁止
命令、考慮、否定)

現在及び第一第二不定過去時称 Sub. Present and 1st and 2nd Aorist

能動態〔λύω, βάλλω〕・・・・(102) 93
〔εἰμί〕の接続法現在・・・・(103) 93
中態及び受動態
〔λύω, βάλλω〕・・・・(104) 94

完了現在時称 Perfect Subjunctive

能動態、中態、受動態〔λύω〕・(131) 114

【祈願法】Optative Mood

変化〔λύω〕・・・・(139) 121
〔εἰμί〕の祈願法現在・・・・(140) 122
用法・・・・(141) 122

【命令法】Imperative Mood

〔語尾変化〕・・・・(106) 98
変化〔λύω〕・・・・(107) 99

用法及び意味・・・・(108) 100
未来直説法の命令的用法・・・・(109) 101
接続法の命令的用法・・・・(105) 94
〔εἰμί〕の現在命令形・・・・(111) 101

【不定詞】Infinitives

性質・・・・(112) 102
〔語尾変化〕・・・・(113) 102
主語としての不定詞・・・・(115) 103
目的語としての不定詞・・・・(118) 104
不定詞の主語・・・・(116) 103
不定詞の冠詞・・・・(117) 103
形容詞又は副詞としての不定詞・(119) 104
不定詞の時称・・・・(120) 105
〔εἰμί〕の現在及び未来不定詞(114) 103

【分詞】Participles

性質・・・・(79) 78
〔語尾変化〕・・・・(81) 79
能動態現在〔λύω〕・・・・(82) 79
能動態未来・・・・(83) 80
能動態第一不定過去・・・・(84) 80
能動態完了現在・・・・(85) 80
中態及び受動態(第一不定過去を除く)の変化
・・・・(86) 80
受動態第一不定過去〔λύω〕・・・・(87) 80
第二不定過去・・・・(88) 80
分詞の用法・・・・(89) 81

1. 形容詞として用いられる例

2. 副詞として用いられる例

〔εἰμί〕の現在分詞

【続音動詞の変化】Liquid Verbs

未来及び第一不定過去

直説法〔μένω〕・・・・(135) 117
その他の主なる動詞の例
変化の規則・・・・(136) 119

命令法、不定詞、分詞の場合 (138) 119

完了現在 (137) 119

【収縮動詞】 Contracted Verbs

[τιμάω, φιλέω, δουλόω]

直説法

[能動態、現在及び未完了過去] (33) 33

[中態、受動態現在] (142) (1) 123

[同上、未完了過去] (142) (2) 123

接続法 [能動態、中態、受動態、現在]

. (142) (3) 123

命令法、現在 (142) (4) 124

不定詞、現在 (142) (5) 124

分詞、現在 (142) (6) 124

祈願法、現在 (142) (7) 124

μι 動詞

性質 (143) 126

現在及び未完了過去 の変化 . . (144) 127

能動態 [δίδωμι, τίθημι, ἵστημι]

中態及び受動態 [同上] . . (149) 132

変化の特徴 (145) 128

その他の時称 (146) 129

第二不定過去 の変化 (147) 130

能動態

[δίδωμι, τίθημι, ἵστημι]

δίδωμι, τίθημι の第二不定過去形に関する

諸注意 (148) 131

中態 [同上] (150) 133

その他の時称 (151) 134

ἵστημι の時称による意味の変化 . . (152) 134

-νυμι 動詞 (153) 136

[δείκνυμι, ζώννυμι] (154) 136

μι 動詞の変化に属する動詞 . (155) 137

1. ἵστημι に類するもの 137

2. τίθημι に類するもの 137

3. δείκνυμι に類するもの 137

4. ζώννυμι に類するもの 137

δύναμαι の重なる変化 (156) 138

ἀφίημι の重なる変化 (157) 138

副詞 Adverbs

形容詞又は分詞より来る副詞 . (158) 139

副詞の比較 Comparison . . . (159) 139

不規則変化の比較

その他の副詞 (160) 140

名詞、形容詞より来れるもの . . . (160)(1)140

代名詞より来れるもの (160)(2)140

数詞より来れるもの (160)(3)141

動詞より来れるもの (160)(4)141

前置詞より来れるもの (160)(5)141

前置詞の如くに用いらるる場合 . (160)(6)142

否定副詞 (οὐ と μή) (160)(7)142

οὐ, οὐκ, οὐχ (49) (5) 44

前置詞 Prepositions

本質 (161) 144

格による分類 (162) 144

第二格のみを支配するもの . (163) 144

ἀντί (163) (1) 145

ἀπό (163) (2) 145

ἐκ (163) (3) 145

πρό (163) (4) 145

第三格のみを支配するもの . (161) 147

ἐν (161) (1) 147

σύν (161) (2) 148

第四格のみを支配するもの . (165) 149

ἀνά (165) (1) 149

εἰ (165) (2) 149

第二格と第四格とを支配するもの(166) 151

διά・・・・(165) (1) 151

κατά・・・・(165) (2) 152

μετά・・・・(165) (3) 153

περί・・・・(165) (4) 154

ὕπερ・・・・(165) (5) 154

ὕπό・・・・(165) (6) 155

第二、第三、第四格を支配するもの・・・(167)156

ἐπί・・・・(167) (1) 156

παρά・・・・(167) (2) 158

πρός・・・・(167) (3) 159

接続詞 Conjunctions

用法・・・・(168) 160

(1) 結合 (2) 比較 (3) 分離・・・・160

(4) 反対 (5) 条件 (6) 理由

(7) 推論 (8) 結果、目的・・・・161

δέ, ἀλλά, γάρ, ὅτι, οὐ, οὐκ, οὐχ・・・・(49) 43

強意的不変化語 Particles・・・・(170) 162

間投詞 Interjection・・・・(169) 161

文章論

Syntax

第一、一致法 Concords

主語と述語との一致・・・・(171) 165

主語と動詞との一致・・・・(172) 165

形容詞、代名詞、分詞とこれと関係ある名詞

の一致・・・・(173) 167

関係代名詞と先行詞との一致・(174) 167

第二、冠詞

性質・・・・(175) 169

意味・・・・(176) 170

位置及びその省略・・・・(177) 171

第三、名詞の格

第一格の用法・・・・(178) 172

第二格の用法・・・・(179) 174

1. 起源又は原因・・・・174

2. 分離又は除去・・・・176

3. 所有・・・・177

4. 部分・・・・178

5. 目的・・・・180

6. 関係・・・・181

7. 絶対二格・・・・181

第三格の用法・・・・(180) 182

1. 関連・・・・182

2. 伝達・・・・183

3. 関係・・・・184

4. その他・・・・184

第四格の用法・・・・(180) 186

運動の進む方向を示す

第四、条件文・・・・(182) 189

動詞の種類別変化表・・・・191-195

同上の索引・・・・196

ω 動詞の変化表・・・・197-199

μ 動詞の変化表・・・・200-201

主要単語集・・・・202-216

1932（昭和7）年12月30日	第一版
1942（昭和17）年3月10日	第二版
1942年（昭和17）年12月30日	第三版
1958年（昭和33）年3月30日	第四版



神戸市東灘区本山町北畑 505

著者並に

発行者 黒崎幸吉

大阪市浪速区西関谷町2丁目31番地

印刷者 大丸印刷株式会社

神戸市東灘区本山町北畑 505

発行所 永遠の生命社

定価 530円